未来からのメッセージ

2021 年版

廣田和夫

はじめに

近未来ではなく、百年以上先の未来の社会の姿がどのようなものになっているか興味ありませんか？

現在の社会をどうにかしてほしいのに、自分が生きてはいない社会の姿などどうでもよいと考える人もいるかもしれません。しかし、思い描いた未来の社会の姿から、現在の社会を改造していく道筋が明らかになってくることもあるのではないでしょうか？

未来は非常に科学技術が進歩していることは間違いないでしょう。だが、それだけでは決してないはずです。封建制社会に生きた人々は現在のような社会の姿を想像できたでしょうか。同様に、百年以上先の未来の世界では人間の寿命が大幅に延びているでしょう。そして、経済や政治の仕組みや世界の仕組みが根本的に異なったものになっているだけでなく、ものの考え方、つまり価値観や社会規範といったものが劇的に変化し、家族関係、会社組織、宗教すらも変貌を遂げている筈です。

ここに描いたのはそのような世界です。小難しい未来社会論としてではなく、物語をとおしてこのような未来社会の姿を紹介したいと考えてこの小説を初めて本にしたのは二〇〇五年です。その後少なからず書き足し、タイトルなども変えて今日に至っています。

二〇一八年版では主人公を高校三年生に改め、「アンドロイドの神」に宇宙生命に関する話などを盛り込みました。

二〇二一年版では新たに「安全な原子炉」の話を盛り込み、地球温暖化問題をこれに取り込みました。

二〇二一年三月

廣田和夫

目次

はじめに ・・・

談話室　配当というお金・・・

プロローグ

それはカズマにとって高校時代最後の夏のことであった。

ゆーらり、ゆーらり……。

重いゼリーのような波がカズマの身体を揺らしている。

カズマは、両親に――岬の岩場まで泳いで行って、遊んでくるから2時間ほど戻らないかもしれない――といい残してきた。

ゆーらり、ゆーらり、ゆーらり、ゆーらり。

さっきまでの強い日差しが弱まった気がして、空を見ると、うすい雲が万遍なく広がってきて、大きなビニールの膜を張ったようだ。まるでカズマの心みたいに、もやもやした、憂鬱な光があたりを包んでいる。海の色はというと、白と青の絵の具をまぜて水色を作ろうとしたのにパレットが汚れていて濁った時のようだ。

水も、頬に当たる空気も、ひんやりとした感触がする。

立ち泳ぎのまま痩せた手足を動かして、砂浜の方を見る。

――ずいぶん、遠くまで来ちゃったな――

遥か彼方、波の切れ目に白い砂の帯が、細長く延びている。その中を蟻のようにちっちゃ

な人々が動きまわり、ぽつぽつと、赤・青・黄色…そのほかいろんな色のビーチパラソルの点々が見える。

海の家のわき、貸ボートが並んでいるあたりには、深みどり色のカズマの家族のパラソルがあるはずだった。でも、ハッキリとは見えない。ひょっとしたら、ほかのパラソルと重なってしまっているのかも知れない。すぐ隣には、ピンク色の望月部長さんの家族のパラソルが立っているはずだが、それも見えなかった。

見えなくても、2本のパラソルの下がどんな様子なのかは想像がつく。

カズマと同じくひょろっとした身体に紺色の海パンをはいたお父さんは、ビーチマットに体育座りをして、にこにこしながら望月部長さんの話を聞いている。それは『株』とか『外国製品』とか『労働力』とかについての部長さんの『自説』だ。自説というからには、自分で考えた意見じゃないとおかしいのだが、行きがけの車の中でお父さんが言っていた。

「あの人のいうことって、ぜんぶ『エグゼクティブ・マガジン』の受け売りなんだよな」

それは、お父さんや部長さんのように『商社』というところで働いている人が、かならず読む雑誌らしい。

――だとしたら、あの部長さん、見栄っ張りの自慢屋だ。受け売りやパクリって、バレないわけないだろうに――

だが部長さんはいかにも自慢げに話すのだ。ゴワゴワの毛に覆われたあさ黒い太った身体を、愉快そうに揺さぶりながら。そしてアイスボックスから取り出した缶ビールの蓋をプシ

ュッと開けると、泡がふき出して、全然似合わない赤と白のしましまパンツの上にこぼれるのだ。

「チベテ！……ぎゃはははは！」

何がそんなにおかしいのか大声で笑い出し、その笑顔をカズマのお父さんの方に向ける。ぶあついレンズの眼鏡の奥で、目が――さあ、君も笑いなさい――と命令している。お父さんもしかたなく、愉快そうな表情を作って笑う。

だがそれは、カズマの知っている中でいちばんカッコ悪いお父さんの顔だ。

お母さんはというと、部長さんの奥さんと女子大生の娘のイクエさんの話すファッションやテレビやアイドルの話題に作り笑顔でうなずいている。この二人がまた小太りで、しかもそろって似合わない派手な赤い水着なんか着てて、ダセエんだ。

奥さんの水着はセパレーツで、表面がキラキラしていて下品っぽい。イクエさんはビキニなんだけど、金に近いチャパツと相俟って行儀の悪い女子大ギャルって感じ。このヒト、いつもバカにした目つきで、「彼女できたのぉ～？」なんて語尾をのばして訊いたりするから嫌いだ。

それに較べるとお母さんはちょっぴり太っているけど、青い地味めのワンピースの水着が似合っているし、オバサンのわりにはどっちかというと静かな聞き上手タイプだから、まだイイんじゃないかと思う。

そんなお母さんは、奥さんやイクエさんのような、ハデでお喋りで自慢ったらしい、女の

ヒトたちが苦手なはずなんだ。

部長さん一家と離れ、ホテルの部屋に帰って最初に溜息をつくのはお母さんだ。つられてカズマも溜息をつく。お父さんは、そんな様子に気づかないフリをして、部屋にそなえつけの面白くもない観光案内パンフレットを読んでいる。重〜い、空気が流れる。

――こうなることは、分かってたんだよな――

毎年、同じなのだ。ぜんぜん楽しくない海水浴なんだ。一泊して明日、お父さんは望月部長とゴルフ、ぼくはお母さんと観光ツアーだからまだ救われるけど。望月部長一家とはできるだけ離れた場所にいたいよな。

でも、カズマは、「ぼく、あんまり行きたくないよ」とはいえなかった。

お父さんが望月部長さん一家に気をつかうように、カズマもお父さんに気をつかっていた。

――ぼくが辛いってことを、いっちゃダメなんだ。お父さんだって、好きで毎年毎年、来ているわけじゃないんだ――

お父さんはサラリーマン。そしてカズマはサラリーマンの息子。せっかくの上司のお誘いを断るわけにはいかないのだ。

お父さんが望月部長さんに気に入られたら、部長さんが今よりもっと偉くなったときに部長にしてくれるかもしれない。そうしたらカズマの家ももう少しお金に余裕ができて、お母さんも毎月パソコンの家計簿ソフトの画面に向かって何時間も悩まなくてもすむし、カズマも今よりは好きなものを自由に買ってもらえるようになる。最新のゲームやパソコンも手に

入りやすくなるかも知れない。
それが家族の幸せなのだ！
――我慢しなきゃいけない。分かってんだけど……――
「つまんないの！」と一声、大きく叫ぶと、ざぶりと海の中に潜る。
ぶくぶくと泡が立つと同時に重い水に包まれて、音は消え、あたりは薄暗い青の世界になった。ここには何もない。お父さんが縛られている会社も、カズマの学校も、家族さえも。
スイミングスクールに通っているくらいだから水泳は得意だ。クロールで泳いでいく。ゆったりしたフォームだけれど意外に速い。目を凝らすと、針のような小魚の群れが横切るのが見える。
何だか不思議だ、地球はカズマの住む陸地の世界より、海の方がずっと広いんだ。
ぐぐっと息を止める。水の中でも波の強さが感じられる。そいつは、ズーン、ズーンと、一定の間隔で、身体を押しては引き戻す。潜っているわずかな時間のうちに、急に強さが増してきた。
――海の中の動きが何だか妙だな――
カズマはざんぶりと波間に顔を出した。
「岩場のあたりで2時間ほど遊んで、昼頃には戻るから」と言ってはきたけれど、波の動きも怪しいし……戻った方がいいかな――とカズマは考えた。
砂浜に向かって、今度は平泳ぎに切り替える。

見馴れない白い大きな鳥が、さっきからカズマの上をゆっくりと舞っている。
すると、目の前の海面の下に何か大きなものが浮上してくるのが見えた。
――鯨？　潜水艦？……まさかこんなところに？――
鯨や潜水艦ならば黒く見えるはずなのに、その大きなものは透明感があった。
カズマは――なんにしても、ヤバイ――と思い、この何かを避けようと方向転換しようとした。
すると突然、元いた場所の海面の一部が陥没するように、海水が円形になって滝のように海の底に向って落ち込んでいった。
このままだと、吸い込まれる！　う、うそだろう！――とカズマは思いながら、流れ落ちる海面を背にして、必死なって逃れようともがいた。
もがいても、もがいても押し戻される。
と思う間もなく、一挙に吸い込まれていって、足の先から滝つぼに墜落するように、海水と一緒にドドドーッと落下していく。
落下したと思ったら、今度は海水にもまれながら急浮上した。滝つぼのように泡だって海水が回転していた。頭を上に向けると、なおも海面から海水が流れ落ちている。鼻から海水が入って頭がキーン、キーンと鳴っている。
――溺れる！――
すると、海水が流れ落ちてくる円形の天井が閉まり出した。天井の真ん中には空が覗いて

いる。

カズマは何かの中にいることを知って――閉じ込められた！　もうだめだ！――と思った。

残り少ない水面の上の空気に辛うじて顔を出すと、すっかり天井の蓋が閉ざされてしまった。

まわりは相変わらず泡だらけであったが、大きなガラス球のようなものの中に閉じ込められていることが分った。

――何なんだ、これは……この世に、こんなおかしなことがあっていいのか？――

水に浮かんだままガラス球の壁にへばりつき、外側を泳ぐ魚たちを眺め廻していると、下の方からチューブのようなものが海面に向かって上がっていった。チューブは海中で波に揺らいでいる。

すると、ガラス球の中の水位が徐々に下がっていった。チューブはガラス球の中に、空気を取り入れるためのものらしい。やがて、カズマの足もガラス球の床に届いた。中からすっかり海水がなくなると、チューブは吸い込まれるように元来たガラス球の底に消えてなくなった。

――丸い潜水艦のようなものかな？　一体、何でここにこんなものが？――

壁面を見回すと、電光板の表示パネルのような装置があり、表示パネルには『０００００２』の数字が並んでいる。

すると今度は、床の真ん中から椅子が、表示パネルの前の床からは小さな鉄棒のようなも

のが競り上がってきた。

椅子は、「ここに座れ」とでも言っているかのようである。

カズマが仕方なしに椅子に座ると、またまたガラス球の天井が開き出し、空の雲が覗いて見えた。ジャンプしても天井に届くような高さではない。再び海水が落ち込んでくるのかなと思ったら、波頭の飛沫程度の海水が落ちてきただけであった。

今度は何が起きるんだろうかと見上げていると、一羽の白い大型の鳥がわずかに開いた天井の丸い穴から飛び込んできた。

鳥はガラス球の中でバタバタと羽ばたいている。

――さっき泳ぎながら見かけた大きな白い鳥に違いない――

よく見ると、驚いたことに、海鳥ではなくふくろうであった。

天井の蓋は既に閉じている。

ふくろうはカズマの目の前の鉄棒のような棒を掴んでとまった。

羽根に被われた大きな卵のような身体に、角のまるい台形の顔があり、ペン先のように見える小さな細い嘴がある。まん丸い目の上にはつりあがった眉のような毛があって、顔全体でVの字を描いているような印象であった。大きな翼をファサファサと動かして、ゆったりバランスをとっている。

ふくろうは、ここが自分の根城だとでもいうように「ホーウ！　ホーウ！」と鳴きながらカズマと向かい合った。

そして、ふくろうは食い入るようにカズマじっと見据えた。
カズマがふくろうの後ろの表示パネルに目をやると、数字がどんどん大きくなっている。ガラス球の外に眼をやると、泳いでいる魚たちが勢いよく上に移動していき、ガラス球が海の底に沈んでいくのが分った。
すべてのことがあっという間の出来事であり、カズマには不可解なことだらけであった。

フーパ

――どこに行くんだろう？　こんなガラス球に閉じ込められて……お母さんやお父さんが心配するだろうな――

すると、ふくろうが「ホウ、ホホーウ！　心配することはないよ」と言った。

カズマは驚いた。ふくろうが言葉を、それも日本語を話した。

「ふくろうが喋るなんて！」

「ホーウ！　そう、君は狙われて、誘拐されたんだ。君の名はカズマだろう」

「そうだけど……そうか、ぼくのことは調べてあるんだな。それより、おまえは何者なんだ！　ギャングの一味？」

「ホウ、ホホーウ！　ギャングとは恐れ入ったな。でもそういわれてもしかたないな。誘拐犯の首謀者だから」

「首謀者？　ふくろうが！」

「ホーウ！　でも、君に危害を加えることはないし、たぶん、夕方にはご両親の所に戻ってもらう手筈になっているんだ」

「ぼくをさらってどうするつもりだよ。お父さんはひらのサラリーマンだから大金なんて

もっていない。望月部長の娘のイクエさんを誘拐するならともかく」
「ホウ、ホホーウ！　残念だけど、彼女には誘拐される資格がないんだ」
「イクエさんのことも調べてあるのか」
「ホーウ！　彼女の衣装、表情、会話の内容から調べなくても分かるんだ」
「何が分るの？　少なくとも、ぼくの家よりもよっぽど金持ちだから、ぼくよりよっぽど資格がありそうなのに」
「ホホーウ！　誘拐犯だけど、金が目当てのギャングやひとさらいではないんだ」
「金が目当てではないとすると、何のためにぼくを誘拐したの？　誘拐される資格って？」
「ホウ、ホホーウ！　その説明をする前に自己紹介をしておこうか。我輩の名はフーパ。実はロボットなんだ」
「ロボット？　とてもロボットには見えないけど」
ふくろうの目は、今も生き物さながらに瞬きしている。
「ホホーウ！　人間とそっくりのロボットをアンドロイドというだろう」
――そういえば聞いたことあるな、ＳＦ映画にアンドロイドというのが出てきたっけ――
カズマの納得したらしい様子を見てとると、フーパは話を続けた。
「ホーウ！　そう、我輩はアンドロイド型の海ふくろうなんだ。このガラス球もロボットさ」
「深海探査船のように見えるけど、ロボットなの？」

「ホーウ！　そう、我輩の命令で動くロボットさ！」
「ロボットがロボットに命令しているんだ。誰が、こんなものをつくったんだろう？　見たことも聞いたこともないけれど」
「ホホーウ！　そう、カズマの世界にはないものだよ」
「ぼくの世界にはないもの、宇宙人とかＵＦＯとか？　じゃあ、フーパは宇宙人の仲間？　宇宙人って本当に地球に来ているのか」
「ホーウ！　宇宙人ではあるかもしれないな」
「宇宙人…」
「ホッ、ホッ！　そうではないんだ。他の星の生物から見たら人間だって宇宙人だからね」
フーパは肩の羽をふるわせて笑った。
「だったらやっぱり地球人、どこの国の？」
「ホーウ！　いまのところは、未知の世界の人間とでも言っておこうかね」
カズマは外の景色がすっかり暗くなっていることに気づいた。ガラス球は外洋に出ているようであった。カズマが眼を表示パネルに向けると、数字は一〇〇〇を超えている。
「ホーウ！　海面からの距離だよ。水深一〇〇〇メートル以上になっているな」
「こんな深くに潜って、水圧でガラス球は破裂しないの？　破裂したら一巻の終わりだよね」
「ホホーウ！　ガラスではないよ、透き通っているけど超合金なんだ！　マリンキャップ

という名前の乗り物で、海底一万メートルの水圧にも耐えられるようになっているから、心配には及ばない」

「ふーん！　見るからに薄いのに、一万メートルにも耐えられるのか」

頑健であるだけでなく、マリンキャップのスピードは並外れているようであった。窓の外の生物があっという間に通り過ぎて行く。

外の世界はどんどん暗くなり、マリンキャップは海溝の縁にそって急降下しているとのことだった。見たことの無い蛇や紐のように見える細長い魚が、マリンキャップの光に照らされて泳いでいるのが見えた。やがて泳いでいる魚の姿もすっかり見えない暗闇の世界になっていた。ガラスの外ではかすかに雪のようにみえるものが流れている。

「それで、さっきの質問だけど、誘拐される資格とか、目的とか、これからどこに行こうとしているかってことなんだけど」

「ホウ、ホホーウ！　誘拐される資格というのは、『高校生くらいの年齢であること、素直な性格であること、凝り固まった価値観のようなものを持っていないこと、柔軟な頭の持ち主であること、世の中のおかしなことはだれが何といおうと『おかしいんじゃない』と思えること、自分の意見をはっきりいえること、ちょっとませていて捻くれたところがあること』なんだ」

「そんな、ありきたりのことが資格なの？　誰でもよさそうな資格に思えるな。それにちょっと気になるんだけど、『素直なこと』と『捻くれたところがあること』って、矛盾するん

じゃないの？」

「ホーウ！　先生や親のいうことならば、間違っていそうなことでも『はい』と言うようなＹＥＳマンではないということさ。自分なりに判断して納得しないと、『はい』とは言わないような性格で、普通の人は捻くれていると思うからね。ところが、こういう条件の整った高校生くらい子というのは、意外にいそうでいないんだ。吾輩達の求める汚染されてない脳みそということだな」

「ふーん！　そんなものかなぁ」

「ホーウ！　それともうひとつ重要な条件がある」

「そうでしょう。そうでなければ、僕が選ばれるわけがないもの」

「ホーウ！　この年代にしては社会や政治のことなどに特別な関心をもっていて、テレビのニュースを見たり新聞を読んだり、インターネットで調べたりしていることなんだけど」

「確かに、その点は友達とは違っているかもしれないな。いつもお父さんがテレビや新聞を見ながら、お母さんと話をしたり、僕に解説してくれたりするから自然に関心を持つようになったけど。お父さんが話していたようなことを友達に言っても『今は受験勉強さえやってりゃいいんだ。そんな難しいことおまえが考えることないだろう』とか言われて、全然のってくれないからな」

「ホホーウ！　そういうことで、きみはこの年代としては特別なんだ。社会、経済や政治などの問題に極めて関心が強く、理解力もある脳みそというのがもうひとつの条件なんだ」

「じゃあ、誘拐の目的は？」
「ホホーウ！　エポカの世界からのメッセージを伝えることだよ」
「エポカって？」
「ホホーウ！　我輩達の造物主の世界のことさ」
「エポカの世界からのメッセージって？　伝言ならば、わざわざ海の底なんかに連れて行く必要なんか無いんじゃない」
「ホウ、ホーウ！　正確にいえば、メッセージというのはエポカの世界を観てもらうことなんだ。実際にはエポカの世界そのものではなく、四次元映像の世界だけどね」
「その四次元映像ってものを観るだけでいいの？」
「ホーウ！　そう、観るだけでいいんだ」
「こんな大仕掛けの誘拐をしておいて、観るだけで帰れるの？　観たからには、何かをして欲しいとか…交換条件のようなものがあったりして」
「ホホーウ！　けっこう疑り深いねぇ。交換条件など何もないよ。ただ観て、感じて、理解しようと考えてもらえればいいんだ。それが我輩の造物主達の目的さ」
カズマの感情からは誘拐犯に対する怒りがすっかり消えていた。
「ふーん、よく分らないけど、いいってことにしておくか！　だって誘拐犯だけど、悪者達ではなさそうだもの」カズマは屈託のない笑顔を浮かべた。
「ホーウ！　さあ、どうだろうか。良いこと、悪いことは人によって考えが違うからね。

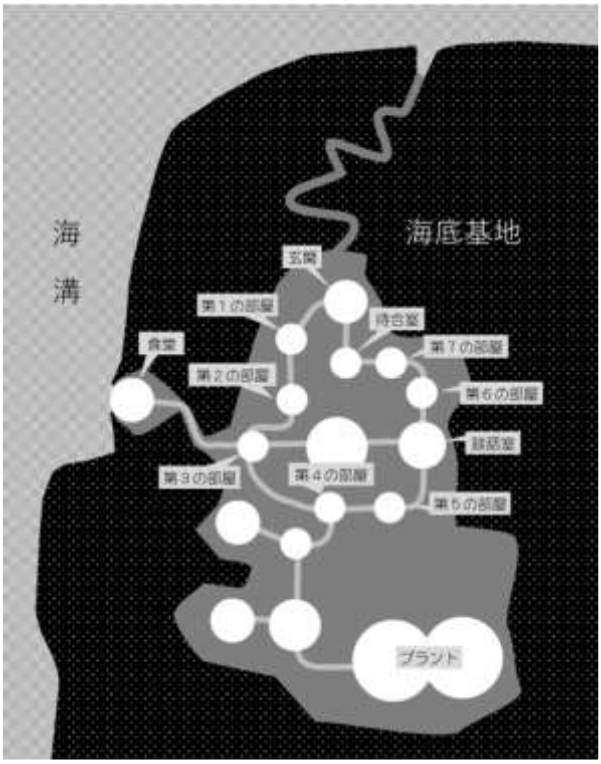
カズマの世界のためだと思っていても、人によっては有難迷惑なんてこともあるからね」
「ぼくらの世界のためになるかもしれない…それでこんな大仕掛けのことをしているんだ」
「ホホーウ！　まあ、そんなところかな」
「それで、どこに行こうとしているのかな」
「ホウ、ホホーウ！　海底基地さ！　深海の底ならば、人に発見されることもないからね」
「でも、ぼくが戻ってバラしたら」
「ホホーウ！　カズマが戻って、見たり聞いたりしたことを人に話しても、誰も本当のことは信じてくれないだろうね。戻ったあとで、カズマの心の中にエポカの世界が生き続けてくれればそれいいんだよ」

エポカ

海溝の崖に沿ってマリンキャップが急降下していくと、マリンキャップの放つ光に照らされて大きな横穴が見えてきた。

その横穴に入り込み、曲がりくねりながらずんずん進んでいくと、突然、ぼんやりと巨大な空間のある場所が見えてきた。それは鍾乳洞内の巨大な空間とでもいうような場所であった。その空間の中には、二十ほどの円形のドームが内部の照明によって浮かんで見えた。

「ホウ、ホホーウ！　海底基地が見えてきたよ」



――確かに、こんなところにあるんじゃ百年経っても見つからないな――

一番手前のドームに接近し、ドームのゲートのようなところを潜り抜けると、マリンキャップは回転しながらゆっくりと静止した。ゲートが閉まると、そこが密閉された部屋になっていることが分った。しばらくすると、その部屋に充満していた海水が吐き出され、部屋の水位が徐々に下がっていって空気と置き換わった。すっかり海水が無くなると、マリンキャップの天井が再び開き、カズマが座っていた椅子がエレベーターのように上昇し、玄関の天井を突き抜けて、上の部屋まで持ち上げられた。

玄関の上の部屋に降り立って、窓からゲートと反対の方向を見渡すと、カズマがいるドームと同じような幾つものドームが、透明なチューブ型の通路でネットワークのようにつながっているのが見えた。最初の入り口のドームには二つのチューブの連絡通路がある。

「ホーウ！　こちらの部屋に来てもらいたいんだけど」とフーパは言って、カズマを隣の部屋に案内した。

「ホ、ホーウ！　ボディチェックを受けてもらいたんだ」

「何をしたらいいの」

「ホーウ！　これ、４Ｄボックスっていうんだけれど、海水パンツを脱いでこの中に入って、スピーカの質問に答えるだけでいいよ。すぐ終わるから」

ごく月並みな両親や自分自身のことに関する質問に答えて、ボックスを出るとパジャマ風の服が用意してあった。

「ホーウ！　着替えるといいよ」

着替えをして頭を上げると、目の前にもうひとりの男の子の姿が見えた。自分自身――カズマだった。カズマは鏡に写った自分自身と思ったが、目の前のカズマはスッポンポンで、カズマが脱ぎ捨てたパンツを手に持って身につけた。

「えーーっ！」カズマは仰天した。

「ホッ、ホッ！　君がここにいる間の代役だよ。アンドロイドなんだ」

「アンドロイド！　ぼくの代役？」カズマは眼を白黒させた。

「ホーウ！　ご両親を心配させるとまずいだろう。さっきのボディチェックは、身代わりのアンドロイドをカズマに似せるためのものだったんだ。体型と話し方や声をコピーしたのさ」

「ホーウ！　時間が無いから、さっさと出発した方がいいよ」フーパはカズマの身代わりに言った。

もうひとりのカズマはフーパに、「それでは行ってきます」と言って出ていった。

――用意周到だな、確かにこれではぼくが戻っても、誰もぼくの話を信用してくれるわけないな――

「ホホーウ！　この海底基地には大小二十ほどのドームがあるんだけど、カズマにここで観てもらおうと思っているのは、そのうち九つのドーム内の部屋にあるホログラフィなんだ、このほかにも観てもらうものが出てくるかもしれないけれどね」

「ホログラフィって？」
「ホーウ！　さっき、マリンキャップの中で説明した四次元映像だよ。実際にあったことを忠実に再現したものなんだけど、全部観て回ると十時間以上かかるかな」
「えぇー！　それでは、夕方ではなくて、夜になっちゃうけど」
「ホーウ！　心配ないよ。普通に観れば十時間以上だけど、カズマには五時間くらいで済むようにするよ」
「ＳＦによく出てくるような『時間を戻す』とか？」
「ホーウ！　時間を飛び越したり、元の時間に戻ったりなんてことは、ＳＦやファンタジーの世界だけの話しさ」
「では、どうするの？」
「あのヘルメットを被って欲しいんだ」
フーパは棚に置いてあるアメフトのヘルメットのようなもののところに飛んで行って、羽をバタバタさせた。
「ホーウ！　これを被って、ホログラフィを観ると、早送りのホログラフィを普通の速度で観ているような感覚になるんだ。但し、カズマが話しだすと、ホログラフィは普通の速度に戻り、感覚も元に戻るんだけどね」
「ふーん！　便利なものがあるんだねぇ」
「ホーウ！　脳の処理速度をアップすると、同じ時間でも長く感じるようになる。子供の

時の一日は長く感じるけれど、年をとってからの一日はあっという間に過ぎてしまうように感じられるのもこのためだ。けれど、脳の処理速度を上げるといつもより脳味噌が疲れるから、あとで十分睡眠時間をとる必要があるけれどね」

「この海底基地には、フーパの造物主たちも住んでいるのかな」

「ホウ、ホホーウ！　誰もいないよ。いるのはアンドロイドとロボットだけだよ」

「ところで、こんな基地が、人をさらってきて、映画のようなものを見せて帰すだけのためにあるとは思えないんだけど」

「ホホーウ！　カズマのいうように、それだけではもちろんないよ。誘拐は大きな目的のひとつではあるけれど……」

「大きな目的って？」

「ホホーウ！　この星を守ることだよ」

「宇宙の侵略者から」

「ホーウ！　そうではないよ。人間からだよ」

「人間から？　もしかして、人間が環境を破壊しているから？　人間から守るって、そういうこと？」

「ホホーウ！　環境問題というよりも環境を含む資源問題ということになるかな。生命に満ち溢れた貴重なこの星を守ることなんだけどね。人間は自分ことを知的生命などといっているけれど、地球環境や他の生物にとって人間はこれまでのところ病原菌のようなものなん

だ。癌細胞のようなものと言ってもよいかもしれない。爆発的に繁殖して、多くの生物種を絶滅の危機に追いやり、地球の資源を食い荒らしているからね。そのことで人間自身の危機も招いている。今日の地球は、歴史上何回かあった生物種の大量絶滅に匹敵する大量絶滅の時代になっている」

「そうなんですか。人間が黴菌や癌細胞のようなものとは思わなかったな。でも、そのこととぼくを誘拐したことはどう関係あるの？」

「ホウ、ホホーウ！　地球の資源保存や環境を守るには、なによりも人類が平和に生活できる社会の仕組みが必要なんだ」

フーパの答えが理解できなかったので、カズマは訊き返した。

「地球の資源と環境問題の原因は、人間社会の仕組みにあるということなんですか？」

「ホーウ！　国という縄張りがあることや利益を優先せざるをえない社会や経済の仕組みが資源と環境問題、戦争や犯罪の根本原因ではないかな。非人間的な社会の仕組みは資源と環境破壊の仕組みでもある。だから、人間的な社会の仕組みを実現することが、人間が地球環境と調和することになる。けれど、我輩達は造物主から直接人間の活動に関わることは禁じられているんだ。そのため人間自身の手で、自らの問題を解決してもらうしかないのさ。子供の誘拐は、未来社会のための種まきのようなものだね」

「だんだんわかってきたよ。ぼくがここにさらわれてきたわけも、あんたがエポカって世界をぼくに見せたがっているわけも」

「ホッホッ！　そんなわけで、子供たちの誘拐とその子供たちの面倒をみるのが我輩の役目で、他にもいろいろな役目をもったロボットやアンドロイドがいるよ」
「たとえば、どんな活動しているのかな」
「ホーウ！　この基地の維持や管理とか、情報収集活動とか、収集した情報の整理や造物主への送信とか…いろいろあるさ」
「エポカの世界って、どんな社会なのかな？」
「ホウ、ホホーウ！　とても平和で豊かな文化をもつ社会だよ」
「高度な文明社会とは違うの？」
「文明というのであれば、カズマの世界も高度な科学技術をもつ文明社会といえる。文明のレベルと平和や文化のレベルとは必ずしも比例しないどころか、社会の仕組みが非人間的なものであれば、高度な文明は平和や文化を悲劇的状態にしてしまう。
　社会の仕組みのレベルが低い段階でレベルの高い科学技術を持つようになれば小さな紛争は大きな戦争になったり、貧困や差別も大規模なものになったりする。富や権力が一部の人々に集中したり、地球規模の資源と環境問題が起きたりするようにもなる。テロの頻発、核兵器の拡散や原子力発電所の事故なども同じような流れの中にあると言える。科学技術の発達はそれに対応したレベルの高い人間的な社会の仕組みがなければ災いの元になるんだ。
　貨幣がモノや人間を支配しているような世界から早く抜け出さなければならない。国境に限らず人間を相互に隔てる様々な境界を廃止しなければならない。科学技術の進歩は利潤追

求動機で加速度がついているけれど、社会の仕組みの変化は人々の利害打算がはたらいて亀のような歩みしかしていないし、時には後戻りさえしている。このギャップを早く埋めないと高度な文明も崩壊しかねない。それで吾輩達は焦っているわけさ。社会の変化にもなんとか加速度を持たせたい…とね。」

「なんかとてつもない期待をこのちっぽけな僕にしてませんか？　ペシャンコになりますよ」

「ホーウウウウウウ！　少々先走りし過ぎたかな」

「未来の世界は高度な文明社会である以上に人間的な仕組みの世界でなければならないってことか、当然といえば当然だよね。ＳＦの世界で宇宙から異星人の侵略者が攻めて来るとか、未来社会でも科学兵器を使って世界の覇権をかけて正義と悪が戦うとかいうのはおかしいよね」

「ホホーウ！　そういうのはマンガや映画の話だね。ＵＦＯのようなものを送り出せる能力を持つ宇宙人は、長い試行錯誤を経て高度な科学技術と平和で豊かな文化をもつ社会組織を獲得した筈だ。このような宇宙人は他の星の生命をも慈しむので、侵略者なんかでは決してない。それと、何百万光年もの彼方から地球に来るＵＦＯの乗組員は宇宙人ではなく宇宙アンドロイドのようなもの以外に考えられないけどね。

人間の近代文明なんてものは高々百年か二百年くらいの歴史しかないけれど、地球に来られるような宇宙人は何万年、何十万年或いは何百万年もの科学技術文明の歴史を築いている

はずだ。地球人などとは比較にもならない。そんなわけで、高度な科学技術と封建的な社会組織や支配者の類とは両立しなくなるものなんだ」

「地球の世界はあと何年くらいしたらエポカのような世界になるの？」

「ホウ、ホホーウ！　百年以上先になるかな。なにせ、社会の仕組みを替えるというのは、先ほど言ったようにとてもとても愚かしいほどにもどかしいことだから……。でも、ホログラフィを観たあとのカズマのような人間がどんどん増えてくれば、もっと近い将来になるかもしれないけれど」

――百年以上先の世界かぁ！――

「ホーウ！　では、そろそろ最初のドームの部屋にいこうかね」

第一の部屋　親の勘当

最初のドームから右側のチューブの回廊を渡って次のドームの部屋に入ると、フーパがホログラフィと呼んでいるものが背後に山並みの連なる山村のような景色を映している。

夏の青空に綿菓子のような雲が浮かび、丸くて低い山々が鮮やかな緑に包まれている。

鳥の声、セミの声が聞こえる。

そのうち、耳慣れぬウィィーーー……ンという風を切る響きが近づいてきた。

あちこちから水色のキラキラ光る玉のようなものが、ひとつの山に迫ってくる。その数は十個や二十個ではない。カズマがこの海底基地に誘拐されてきた時に乗っていたガラス球に似ていたが、それよりもずっと小さなものだった。

「ＵＦＯ？」

「ホ、ホーウ！　あれは、子供達が通学に使う乗り物なんだ。ミニスカイキャップっていうんだけどね」

「どこでも通学に、このような乗物が使われるの？」

「ホーウ！　そうとは限らないよ。ここは山間部にある学校だからなんだ」

それらの玉は、山の中腹にある、これも水色の円筒形の建物に迫っていく。

「ホホーウ！　あれが学校だよ」
「あ、危ない！　玉どうしが、ぶつかりそう！」
だが、すうーっとすれ違ってよけた。
「ホーウ！　ミニスカイキャップはぶつからないように自動制御されているんだ。子供達はあらかじめ登録しておいた目的地を選択することで、自動操縦で直行できるようになっているのさ」
先程まで閉じていた建物の屋根がいつの間にか真ん中から左右に割れて開いていた。
すると、玉が次々と速度を落として、まるで玉入れの玉のようにふんわりと中に入っていく。
カズマはこの不思議なエポカの通学風景にしばし見入っていた。

×　×　×

ホログラフィの映像は部屋の中に移動している。
ひゅるる、ひゅるる……という細かな音の揺れが心地よく響いている。はっきりしたメロディもリズムもないが、明らかに音楽である。
天井も壁も床も水色の教室に、三十～四十人の子供達がそれぞれ、グループで、あるいはひとりで、別々のことをやっている。
見慣れない、妙な彫刻のような物体やガラス製のような器具、金糸銀糸で編まれた布地……。そのいくつかはテーブルに、いくつかは床に置かれ、宙に浮いているものもある。

それぞれに子供たちが向かっている。まず目につくのは、赤・緑・金色・黒と、カラフルな髪の毛だった。

顔つきも、カズマと同じようなすっきりした東洋人顔もいれば、白い肌に透き通るような青い目も、健康的な茶色い顔の子もいる。

服装も色々だった。一番多いのが、パステルカラー一色にそまった袖なしのシャツだが、裾を短く切り詰めた着物のようなもの、医者や牧師のような格好のもの、顔と手が出せる一枚の布地みたいなのもある。ズボンよりも薄手のタイツが目立ち、少ないがスカートの子供もいる。スカートは女の子とは限らない。

カズマぐらいの年頃の子供が多いが、六歳ぐらいの子や高校生ぐらいに見える男女も混じっていた。男女の割合は同じくらいだろう。

「ホホーウ！　カズマの世界でも、僻地のような生徒数の少ない学校では、皆一緒に同じ部屋で勉強することもあるよね。けれど、人数のせいでまちまちの年齢の子供が一緒になった授業が行われているわけではなく、年齢に関係なく興味のある生徒が集まっているんだ」

皆、他のグループの邪魔にならないよう、声をひそめてひそひそ話しあっている。

よく聞くと、「ニューターをここでループさせれば安定するんじゃない」とか、「惑星間ルールはシラフォの交換で決議されたんだ」とか、わけの分からないことばかりだった。けれども、それぞれ何かの勉強であることは分かるし、驚いたことにすべて日本語であった。

「ホ、ホーウ！　聞こえる言葉は、本当にエポカで使われている言葉ではないんだ。ホロ

グラフィには見ている人の言葉に吹き替える機能がついているのさ。ただし、エポカの標準語はただひとつで、国なんてものもないんだけどね」

「国がない！　そういえばさっきフーパが国境などの境界を無くさなければならない…とか言ってたけっけ」

――だとしたら、いろんな人種の子供達がいるのも納得できる――

今も昔も世界のあちこちで戦争や内紛が起き、たとえ戦争がなくても、国の中でテロや弾圧が行われたりしている。カズマは日頃からお父さんと一緒にテレビを見ながら、人間というものの愚かしさを子供ながらに嘆くことがあった。

「なんで世界はひとつにならないのかな？」とお父さんに訊ねたこともあった。

「経済的利害とか、人種や宗教の違いとか、いろいろあるんだ」お父さんの答えはそれだけだった。

カズマには、国のない『ひとつの世界』に生きるエポカの子供達が羨ましく思えた。

ひゅるる、ひゅるる……さっきから流れている音楽は、片隅に立った三人組が演奏しているものだった。宙に浮いた光の玉を囲むようにして、リズムをとるように身体のあちらこちらを動かしている。

「ホーウ！　あれは、カズマの世界にもあるテルミンのような楽器だよ」

「テルミン？」

「ホ、ホーウ！　テルミンというのはロシアで生まれた、カズマの世界で最初の電子楽器

だよ。アンテナに手を近づけたり遠ざけたりして、音程や音量を調整する楽器だけどね。ただし、あの三人が演奏している楽器は、身体のさまざまな動作を読みとって音にしてくれるんだ」

見ると、三人に近い場所で赤毛の女の子が耳を傾けながら、ときどき紙に鉛筆で何かを書きとめている。

「ホーウ！　あれはね、音楽の印象を詩に書きとめているんだ。エポカの授業では、全然違う種類の勉強が結びつくこともあるんだ」

別の場所では男三人、女二人（うちひとりは高校生ぐらいに見える女生徒）で、何やら話しながらモニターのようなものを使って、モニターの中にキャラメルぐらいの大きさの赤と白の積み木を重ねたり、つなぎ合わせたりしている。

カズマにはテレビで以前見たことのあるコンピュータグラフィックスのようなものに思えたが、つくられているものは芸術的な代物とは思えなかった。

「ホホーウ！　あれはプログラミングなんだ。カズマの世界でいえば、パソコンでメールを書いたり計算したり、お絵描きをしたりするための道具を作る技術かな」

別の机で箱と細いガラス棒のようなものを組み合わせているのは、エポカ世界の仕組みの勉強で、何やら体操めいたことをしている子供たちは、人間が身体全体で呼吸する仕組みを学んでいるらしい。

「ホ、ホーウ！　エポカではひとりひとりが小さい頃から自分に合った勉強をすることが

できるのさ。でも、そのうちに他の勉強にも興味をもち始めるかも知れない。皆が一緒の部屋でやっていると色々な創造力が啓発されるんだよ」

フーパは皆の様子を見て回り、勉強の内容を解説した。そして、ときどき笑顔で声をかけている男の人が担任のソランジュ先生だということを教えてくれた。

ソランジュ先生は銀色の髪の毛、白い肌に水色の瞳、歳は三十歳くらいだろうか。瞳と同じ水色のピッタリしたシャツを着て、時おり手にした葉書ぐらいの大きさの透明な板に指先で何かを書いている。フーパによると、メモでもあり、学校内の別の部屋への連絡装置でもあるらしい。

「先生は難しそうな科目を全部マスターしているの？」

「ホ、ホーウ！　ひととおり、基本的なことは知っているけど。でも、専門的なことになると先生よりずっと分っている生徒もいるよ。先生の仕事は、生徒同士が教え合うのを助けたり、あとは褒めたり励ましたりすることなんだ」

「褒める？」

「ホウ！　子供たちのやってることに意味を見つけて、褒めて、元気づける。それをうまくやることが、教師としての能力なんだ。カズマの世界に当てはめて考えてみると、授業中に生徒が勝手にマンガを描き始めた。でもそのマンガに輝くものがあれば、それを見つけて褒めたりすることもあるわけさ！　勉強として、認めてやるんだ」

「へええ！　ぼくらの場合には、ノートを取り上げられるか、教室の後に立たされるのが

オチだけれどね。怒られることはないのかな？」
「ホーウ！　もちろんあるさ！　エポカでは子供と大人を区分したり、保護という名目で差別したりすることはないから、悪いことをした生徒は相応に怒られたり、処罰されたりするんだよ」
「子供と大人の区分が無いって？」
「ホ、ホホーウ！　この話をすると長くなるから、またあとで詳しく話すことにするよ」

ソランジュ先生はひとりで粘土とゼリーの中間のようなものをこねている八歳ぐらいの女の子に、さかんに笑顔で話しかけていた。
「面白そうだね！　それは何になるのかな？」
「分かりません。ただ、見ているうちに、何かカタチが生まれそうな気がしてきたんです。この中から何かが『生まれたい！』という声を上げているような」
「いいね！　その声を聞けたというのが、君の力だよ。頑張って作ってごらん！」
「はい！」女の子はあさ黒い顔を輝かせた。
その時だった。
「だから、何で分からないかな！」
ハッとしてソランジュ先生が振り返る。
声をあげたのは、積み木のようなもので『プログラミング』しているグループの赤毛の男

の子だ。年の頃は、カズマと同じぐらいだろうか。
「ムッチェは箱のようなものだろ？　その中にはニューターの第二階層に渡す数値データが入っている。でもムッチェの中身はすぐ変わるから、それをマッチェに監視させて、マッチェの場所はピッチェに覚えさせておけばいいじゃんか！」と赤毛の子が言った。
「なんで覚えさせなきゃいけないの？」
高校生くらいのやせた東洋風の顔をした女生徒――頭はつるっぱげだけど、妙に似合っている――が、困ったような顔をした。
「そんなことしなくても、ムッチェをいつも目に見えるトップに置けば……」東洋人顔の女の子が銀色の積み木をいちばん上に置こうと操作する。
「だめだめ！」赤毛の子は乱暴に積み木を取り去る操作を行った。
「前と同じ失敗を繰り返すだけだよ！」
「アウルくん！」と、ソランジュ先生がたしなめる。
赤毛のアウルは、驚いたように3次元モニター内の積み木を掴んだまま固まった。
「君はグループのリーダーなんだから。もう少し分かりやすい言葉で、優しく教えられないかな？」
「でも……」
「たとえば君が、まだステルノ理論を知る前の頃、今の君の説明で呑み込めたと思うかい？」
アウルが言葉に詰まって年長の女生徒の方を見ると、恨みがましい、ちょっと泣きそうな

顔をしている。

「アウルくんがこの分野のスペシャリストを目指すなら、考えていることを自分以外のレベルのひとに伝える努力が必要なのは、分るよね？」

「……はい」

「作業の最終段階では、シータの……」と、ソランジュ先生は年長の女生徒の肩に手をかけた。

「デザイン・センスも必要になる。そのときは彼女が教える役目だ。今、君がよい教え方をしておくと、いい形で返ってくると思うけどね」

「分かりました。ごめんね、シータ」

つるっぱげのシータは、「いいのよ」という風に笑顔で首を縦に振った。

アウルは、銀の積み木を元の場所に戻しながら、「そもそもムッチェの役割は……」と分かりやすそうな言葉で――と言っても、カズマにはちんぷんかんぷんだったが――説明を始めた。

「ホ、ホーウ、エポカでは、自分の学んだことを人に教えることも大事なことなんだ」

カズマは中学の頃、担任の丸顔の浜村先生が『先生月間』というのをやったのを思い出した。その月の社会科は、班ごとに好きな課題を決めて『先生』として『授業』するというものだった。

最初の授業では、マッキーこと牧原ノリオくんが班の代表になって『目黒のサンマ』という落語を、江戸時代の暮らしの解説を折り混ぜながら演じた。次はカズマの仲良しのダイスケの班が『総理大臣の一日』という寸劇をした。

どっちも面白かったが、特にダイスケの総理大臣のモノマネは思い出すたびに吹き出しそうになる。

カズマの班は次の次に予定されていて、原始時代の生活を再現したビデオ映画を撮ろうと盛り上がっていたのだが……中止になってしまった。

何人かの母親たちが、「高校受験を控えている子もいる大切な時期に、遊びみたいな授業をするなんて！」と抗議したようだった。「教えるのは先生の役目でしょう？　それを子供にさせるなんて！」とも言ったらしい。

「でも、おかしいわよね。子供たちに授業を任せることだって、立派な『勉強』だと思うわよ」とカズマのお母さんは言っていたけど、学校での新しい試みというのはひとりでも抗議する人がいれば潰されてしまうことがほとんどらしい。

カズマはこのことをフーパにかいつまんで話してみた。

「ホホーウ！　カズマの社会での教育は、子供の個性や興味以上に進学や就職に有利になるようにといった社会的要請に基づいているからね。社会的要請というのは資本主義という社会システムの要請なんだけど。つまり、『稼がなければ生きていけない』社会だから、仕方ないかな。大部分の人にとって教育は目的であるよりも手段だからね。このため、いきおい

子供の個性を無視した点数評価の受動的な教育になってしまって、生徒にとっては退屈な授業が多くなる。教育を手段と割り切って、これに耐えることのできる生徒が優秀な生徒であるということになる。おもしろおかしい授業や創造性の涵養を試みる先生は、受験競争と両立しないため学校を辞めざるをえなくなったりもする。受験競争で負け組みになった子供は、楽しさや創造性に欠けた教育への反動もあって、ゲームに熱中したり、非行に走ったりするようなことになる。

　未来社会においては、『稼がなければ生きていけない』ことから解放されているので、教育も『稼ぐための手段』から解放されるんだ。大部分の人にとって、人生の目的は『人々に喜びを与え感謝されることや自身も楽しむこと』に置き換わっているから、教育も手段ではなく目的になるのさ」

「『稼がなければ生きていけない』社会ではなくなるの？」

「ホーウ！　そうだよ。『社会の仕組み』が全然違うからね。『選択の自由』が制限されていることも関係あるな」

「『選択の自由』って？」

「ホ、ホーウ！　カズマの世界の義務教育では、最近は公立の学校であっても『学校を選べる』ようになったりしているよね。エポカの世界では、個人教育や集団教育といった『教育の方式』、『学校』、『先生』や『受けたい教育内容』も個人の選択の自由に任されているんだ」

『社会の仕組み』と教育はどう関係しているのかな」

「ホ、ホーウ！　社会が機能するには『仕組み』が必要だけれど、エポカの世界では皆が『仕組みを守ること』だけではなく、絶えず世界の望ましい姿を思い描きながら、現在の『仕組み』の意味や改良を考えているんだ。エポカ世界の『仕組み』がどうなっているかについては、いろんなホログラフィを見てもらえれば徐々に分かってくると思うけど」

フーパの説明が抽象的に思えたのかカズマは首をかしげた。

「ホーウ！　たとえばね、カズマの世界では誰もが学校に行く。そのわけなんてものは普通は考えない。『仕組み』は無条件にあるものとされている。だけどエポカの世界では、親と子供、先生と生徒が『学校に行くことの意味』を話し合う。そして、どうしても納得できない場合は学校に行かない場合もあるわけさ。学校教育が教育の全てではないからね」

「へえ！　でも、そういうことって、子供に自分で自分のことを決める力がないと……」

「ホ、ホーウ！　その通り！　エポカでは、子供にそういう力があれば、カズマの世界では考えられないようなこともできるのさ。それが、今から分かるよ！」

「考えられないこと……って？」

「ホーウ！　『勘当』って言葉を知っていると思うけど」

「知っているけど？」

テレビの時代劇で、大きなお店のご主人が放蕩息子に「カンドウだ！」といい渡していた場面をカズマは思い浮かべた。

「ホウ、ホーウ！　親子の縁を切ることだよね。『お前なんて、もう子供とは認めん！』というわけさ。江戸時代には二種類あってね、正式の勘当とそうじゃないのがあったそうなんだ。正式なのは、お役所の勘当帳というのに記録してもらって、本当に何から何まで親子じゃなくなる。でも、ほとんどは家族の中で決めるだけの勘当だったみたいだよ。とりあえず、子供を家から追い払うだけ」

×　×　×

いつの間にか、ホログラフィのシーンが替わっている。

さっきより狭い水色の部屋、狭いと言ってもカズマの家でいちばん広い茶の間の二倍ぐらいはあった。

薄い緑の机の前で、同じ色の椅子に座ったソランジュ先生と赤毛のアウルが向かい合って座っていた。

さっきのことでまだ怒られているのだろうか？

「ホーウ！　これは、アウルが先生に相談事のために来たんだよ」

部屋の床はカマボコの断面のような半円形で、半円形の側に大きな窓があり、山の景色が見えている。通学風景のときに観た学校には窓が見えなかったのだが、フーパの説明によれば、この校舎の建物には『外からは見えない窓』が使われているらしい。

机は窓のそばにあり、何冊かの本と教室で先生が持っていたような透明な板の様々な大きさのものが積み重ねられている。

「ホーウ！　いろんなものが映るし、自分で書き込むこともできるカズマの世界でいうパソコン、テレビや新聞の代わりなんだよ」

平面の壁の側にはドアや本棚があり、壁には下敷きぐらいの大きさの絵がたくさん飾られていた。いろんな色のセロハンを重ねたような絵やごく普通の肖像画もある。中には、木に花が咲いて散って……という風に変化していく立体的なものもあった。

「ちょっと眩しいな」

そういうと先生は、窓に手をかざしてスッスッと十字を描くように動かした。

窓全体が少し曇って、アウルの赤毛を輝かせていた光が薄らぐ。

「さて、アウルくん」

「はい」

「子供が親を勘当できる。これはエポカの世界ではかなり前から行われていることだけれど……君は両親からひどい仕打ちをされているわけでも、愛されていないわけでもないよね」

先生はそこで言葉を区切ってアウルの顔をじっと見た。

「エポカでは子供が親を勘当できるの？」カズマは頓狂な声を上げた。

「ホウ、ホホーウ！　子供は産み親を選ぶことはできないから、育ての親を選ぶことができるようになっているんだ。親による子供の虐待などを防ぐ手立てなんだけれどね。子供の

申し立てによって、子供が親を勘当することができるんだ」

「……問題は、まず、両親が君にひどい仕打ちをしているとか、君の選択の自由を奪っているとかだけど」

「そのようなものです」

「それが勘当するに充分な理由で、判断も間違っていないと思うのかね？」

アウルは唇を噛んだ。

「間違っていない……と思います」

「思うことと実際にやることは、別だよ」

「それは分かっています。でも……」

アウルは慎重に言葉を探している。

「このままじゃ良くないのは、確かです」

「ホーウ！　アウルの両親はエポカ世界のちょっとした有名人なんだ。父親はファッション・デザイナーで、誰でも着られるようなシンプルなシャツから、飛び切りの奇抜なドレスまで、何でもデザインする人なのさ。歴史にも詳しいから、昔の話を扱ったホログラフィ・ドラマの衣装デザインを任せられることもある。そんな縁で知り合ったアウルの母親は女優でね、気品があって歌も上手で……とにかくパーフェクトなスターのように言われているね。

だから、二人とも皆の尊敬を集めている。エポカの世界じゃ、政治家よりも何よりも、彼らのようなアーティストの方が評価されるからね」

――そんなに立派な両親をアウルはなぜ勘当したいのだろう――

「まず、ぼくには二人が一緒に暮らし続けている理由が分かりません……互いに愛し合っていないのは、明白ですから」

「ふむ……」と言って、先生は机にあった板を一枚取り上げた。

その表面をなにやら指でなぞると、板の表面に、緑に包まれた広い庭園のようなところで着飾った大人たちが歩き回ったり、お喋りしたりしている場面が映った。

「ホーウ！　映っているのは、エポカのニュースのようなものだよ。カズマの世界でいうマスコミの人達が集まった大きなパーティを伝えているんだ」

先生が板の一点を押すと、動きが止まってその部分が拡大された。

銀色のドレスを着た、抜けるように白い肌の美しい女性と赤毛の男性が、腕を組んで微笑みながら誰かと話している様子だ。男性は髪だけでなく全体の顔立ちもアウルによく似ていた。

これがアウルの両親らしい。

「ロビンとマリーが映っているけれど、君の話しからは……とても考えられない光景だね」
アウルの父親の名はロビン、母親の名はマリーというらしい。
「見栄っ張りなんです、父も母も。自分たちが幸せであるように見せたいんです。そんなところも偽善的で……とても嫌です」
「この世界じゃ幸せであることが最高の価値だからねえ」
「最近じゃ、父が家に帰ってくるのは週に一回……それでも帰ってくるのは、ぼくと妹のアニーの顔が見たいからかな？　父と母は、お互いに顔を合わせるのも嫌みたいです」
「でも、別れない」
「見栄っ張りですからね」アウルは例の板を指した。
「別れは不幸なことでしょう？　世間の尊敬を集めている自分たちが、不幸だと思われたくない。あらゆる意味でパーフェクトでありたいんです」
「パーフェクト？」
「それは、母の口癖でもあります」
「よく思われたい、評価されたい。これだけはどんなに世の中が進歩しても、変わらない欲望だね。前世では、お金を持っていることが社会的ステイタスであったりしたが」
「らしいですね」
「ああ！　それに比べると、その人の生き方そのものが評価されるようになったエポカは、よい社会だと思う。あの記念すべき日以来……」

「そういえば、来月はエポカの記念日ですね。楽しみだな」

「記念すべき日って、何の日なんですか？」

「ホホーウ！　エポカ世界の誕生日で、世界中でイベントが行われるんだ」

「革命記念日とか？」

「ホーウ！　革命といえば、世界同時革命みたいなものだね。歴史上これ以上の革命はなかったろうね。けれど、血は一滴も流れたりしていないよ」

「では、何があった日なんですか？　世界がひとつになった日とか」

「ホーウ！　エポカの誕生日よりずっと前に、世界はひとつになってきていたね。財産の相続制度が無くなったり、お金が『配当』というものに置き換わったり、借金というものが全て無くなることになったり……エポカの理念に基づいて、社会や経済の仕組みが一夜にして切り替わった日なんだ」

「世界がひとつになった日よりも歴史的な意味がある日なのかな。どのようにしてそうなったのか詳しく話してくれない」

「ホーウ、ホウ！　詳しくという訳にはいかないけれど、あとで、録画が観られるよ」

「楽しみだな」

「ホホーウ！　ということで、エポカの人達はこの日以前を前の世界、つまり『前世』と呼んでいるんだ」

「まるで、ぼくらが住んでいる世界が『あの世』であるかのようですね」

「ぼくは、父と母が別れたところで、才能と実績への評価は変わらないから構わないと思うんですけど」

「ほとんどの人はそう思うよね。思わないのは……」

「父、母、自身です」

「古いんだよね。どだい、パーフェクトなどということがあるって考えていること時点で、古い」

「はい！」

――先生が、生徒の親を批判している。事実と思えることは、相手の立場も考えずに、何事にもハッキリいうのがエポカ流なのだろうか――

「母には妙に夢見がちなところがあって……前世のエライ女の人を演じるのが得意でしょう？」

「ああ！　『歌手マリア・メイの生涯』は、先生も楽しんで見せて貰ったよ」

「そうすると、なりきっちゃって。昔の人の価値観みたいなのが、身についちゃったんです。『パーフェクトな女性』という価値観が流行っていた時代の……」

「お金と肩書きで評価する前世への回帰願望かね」
「『血のつながりがなによりも大事』……とか」
「今でもそういう価値観で生きているコミューンの人々もいるよ」
「なぜでしょう？　自由に、何でも自分で決められる世の中なのに」
「それが重荷に感じる人には、お決まりの価値観の方がいいんだよ」
「母は女優です。何かを与えられて、演じるのが好きな人だから……」
「私生活でも、パーフェクトを演じようとしているのかも知れないね」
「それを、父やぼくやアニーにまで、押しつけようとするんです。最初にうんざりしたのは……父でした」
　アウルは曇った窓の外、ぼんやりした緑が揺らめくのに目をやりながら、言葉を選んで言った。
「もの心ついた頃、印象に深いのは二人が口論している姿でした。今になって思うと、母は絶えず父に言葉の洪水を浴びせて、自分の理想の姿にしようとしていたんです。……それはやがて、ぼくの方に来ましたからね。彼女の見えないところで何をしていたか、今何を考えているか、これから何をやろうとしているか……そんなことを絶えず訊いてくるんです。そしていつも、必ず『あなたはこうした方がいい』というアドバイスがあって、次にはそれを守っているかどうか問い詰めるんです」
「型にはめようとしていたわけだね。どっからそんな『型』を見つけてくるんだろう？」

「尊敬する歴史上の人物ですね。たとえば『歌手マリア・メイの生涯』でいうと、マネージャーとしても作曲家としてもマリアを支え続けたハワード・メイです。そして、二人の息子で世界的な……何だっけ、昔の楽器……白い歯と黒い歯が……」

「ピアノ」

「そう、ピアニストになったマイルス・ケイ。この三人の写真は、家のあちこちに飾られているんです。母の部屋だけじゃなく、あちこちに、ですよ！」アウルは苦々しげに言った。

「先生も知っているよ。とても気品のある、美しい顔の家族写真だ」

「昔風の言葉や、今では全く意味のなくなったテーブルマナー？……ですか。それを、自分だけじゃなく、父やぼくに押しつけようとしました。それどころじゃない、ネクタイなんてバカバカしいものを締めさせようとしたんですよ！」

「ネクタイを？　へぇー！」

その驚き方を見て、カズマは言った。

「自分たちでいえばチョンマゲを結わせようとしているぐらいおかしなことなんですかね」

「ホ、ホウ！　でも、なぜカズマの世界ではチョンマゲはおかしくて、ネクタイはおかしくないのかな？」

「そんなこと……考えたこともなかったけど」

「ホウ！　大人の男の人が、皆していることだから……？」

カズマは、ある蒸し暑い朝、出かける前のお父さんが言っていたのを思い出した。
「こう暑いと……これがホント、苦しいんだよな」
そう言って、ネクタイを締めていた。
「ホウ！　皆しているから……仕方なしに……かな。でも、分かるだろう？　エポカじゃ『皆しているから』なんてことは、理由にならないんだ！　虚礼のようなものや意味不明に思えるしきたりや慣習なんてものは、自分には用がないと思ったらやらないんだ」

先生とアウルの会話が続いた。
そうこうするうちに、アウルの父はついにキレてしまって、外に恋人を作り、家に帰らなくなった。たまに帰っても、アウルの母を避ける。何ともいえず冷たい空気が流れる。アウルは自分自身もたまらないし、それ以上にアニーが可哀想に思った――とのことであった。
「いちばん辛いのは……」アウルは顔を歪めた。
「母の悪口を、ぼくやアニーにぶつけるんです。『やめて』と言っても、通じないんです。『そんなにイヤなら、別れれば！』と言ったら、『お前が決めることじゃない！』って、怒鳴るんです」
「うーん……」と先生は、腕組みをした。
「どうでしょう？　勘当するのに、充分じゃないですか？」
「そうだね、君が両親の冷え切った関係に嫌気がさしたり、対面を取り繕う姿に憤慨して

いることは別としても、理性的に考えれば……子供達の意に沿わない価値観を押しつけたり、選択の自由に制限を加えたりしている……と解釈できる」

先生は立ち上がり、ゆっくり歩きながら話し続けた。

「君の今後のためにも、そして妹さんのためにも、その方がよいように思える」

「ですよね」

「しかし……」と先生はつぶやき、壁の絵――色セロハンを重ねたようなやつだ――の前で立ち止まり、アウルの方を振り返った。

「このエポカの世界にも、理性では片づけられないものがある」

「というと？」

「君はお母さんや……お父さんを、見限ることができないと思う……愛しているんだ」

アウルは胸を衝かれた様子で、唇を噛み、目を伏せた。

いつの間にか、窓からの光が夕焼け色に染まってきている。

「ご両親について話している様子から分かるよ。お母さんの悪口が耐えられないのも、愛しているからだ」

「そんなことないです！　父が母を罵るのも、醜いと思うから……」

「違うと思うけど」先生は、静かに断言した。

赤い光を受けた顔は、どことなく厳かに見える。

「ぼくは親を勘当したある子供を知っている。その子はもっと、親に対して冷たかった。

今のアウルくんのように、愛情をこめて親のことを語ることはしていなかったと思う」

「愛情をこめて？　ぼくが？」

「その子は母親と弟と三人住まいだった。母親はその子の中に自分を裏切った男の面影を見つけ、憎んでいた。成長するにつれ、その子が父親と同じように数学と美術に関心を持つようになったことを呪わしく思った。その子が勉強しようとするのを邪魔した。そしてついに、その子が何カ月もかけて完成させたオブジェをメチャメチャに破壊した。それはその子にとって、自分自身が暴力を受ける以上の苦痛だった」

そう語るとき、先生の顔が苦痛に歪んでいるように見えた。

「その子はオブジェの残骸を貼り合わせて、一枚の抽象画を作った。その絵を、『旅立ち』と名づけた」

もう一度、壁の絵の方を見る。

――すると、色セロハンのように見えたのは、オブジェの残骸だったのか！――

「旅立つために、彼は母親を勘当した」

アウルも立ち上がり、絵の方に近づいた。

「分かるかい？　この絵に込められた気持ちが」

「抽象画は……どうも……」

「彼はその絵を作っている時、徹底的に『ひとり』だった。ひとりであることと向かい合えないと勘当も独立もできない」

「その子は、それからどうしたんですか？」

「コミュニティ・スクールで暮らしながら勉強を重ね、教師になったよ。今もひとり住まいだ」

――やっぱり、きっとソランジュ先生は自分のことを話しているんだ――

「彼は、今でも正しいと思っているんでしょうか？　勘当したことを」

「ああ！　でも、君は自信がないんじゃないか？　つまり、『後悔するかしれない』と迷っているんだろう？」

「……彼の弟は、どうなりました？」アウルは質問には答えないまま訊ねた。

「しばらく母親と暮らしていたが、十五歳のときに独立して、今ではスポーツ施設の運営に関わっている。そこで知り合った女性と暮らし、子供もいる。幸せそうだよ」

「そうですか」アウルは考え込んだ。

勘当の後に心配なのは、アウル自身よりも妹なのかも知れないな――とカズマは思った。カズマの親友のダイスケも妹をすごく可愛がっている。

「もうひとつ、訊かないのかい？」
「えっ？」
「その子の、母親のことだよ」
「あ！　はい……」
「彼女は弟が独立してから半年ほどして精神を病み、入院したんだ」
アウルは衝撃を受けたようだった。
「だが、そこでの一年の生活で得た友人と緑の保護のためのサークルを作り、その活動に生き甲斐を見出して、今は元気にしているようだよ」
「よかった」
先生は窓に近づき、手で胸元から左右に開く動作をしたあとで指をパチンと鳴らした。
すると窓がスゥーッと白くなり、巨大なスクリーンのようになった。
今度は指先を何か文字を書くように、複雑に動かした。
すると、部屋の灯りが消え、さっき教室で演奏されていたようなフワフワした音楽とともに、スクリーン一杯に星が映し出された。
「大人になった彼には、母親からときどきメールが送られてくるようになった。そのうちの一通だよ」
先生がいうと、エコーのかかった落ち着いた女性の声が部屋に響いた。

×　×　×

「私の息子――そう呼びかけることが許してもらえるなら。

この前の手紙で伝えたように、私はあなたを恨んでいた自分を恥じるようになりました。それは私自身の成長の証しかと思います。私はあなたから勘当を受けることで、自分を振り返るチャンスを得られたのです。その点では、大いに感謝しています。

この頃は、過去の自分の反省が心の大きな部分を占めるようになりました。少し、涙もろくなったようにも思います。私が度々溜息をついていると、友達のロージーが――彼女のことは、書きましたよね？――相談にのってくれました。

私は全てを語りました。自分がどんなにひどい母親だったか。どんなにか過去の失敗を悔やみ、取り戻せないことを苦しく思っているか……。時間を逆戻りさせることができたら！何度もそう言って私は彼女の前で泣きました。

ロージーはいつも私を優しく慰めてくれます。そして、今回は考えられないような素敵なプレゼントをくれました。ロージーは、夢を買うんだということで、いろんな籤を買っていますが、信じられないことにペアの惑星間旅行に当籤したんです。そして、チケットの一枚を私にくれました。今の私には、宇宙に出てみることが一番よいと。

そしてこの手紙は、スペースシップの中で書き綴っています。ロージーは私の隣にいてこの素晴らしい夢を楽しんでいます」

「籤なんて賭け事みたいなものが、エポカにあってもいいんですか？」

「ホーウ！　お金を掛けるような籤はないけれど、宇宙旅行のような費用のかかる楽しみについては、希望者に対して機会均等にするためこういった籤引きが行われているんだ」

「私たちの星の美しさは、実際に見てみると息を呑むほどのものです。ですが、もっと心を動かしたのはそれが遠ざかる時――宇宙のかけらのひとつに過ぎないという事実でした。あふれるほどの星々の中のひとつ。その中の、ほんの小さな存在である私。そう思っただけで、過去の失敗にくよくよするのが馬鹿らしくなってきました。この神秘あふれる宇宙の中で、今を生かせてもらっていることを、ありのままに受け入れよう……そんな気持ちになりました。

そして、ツアーのオプションで上映されたホログラフィを見ました。

五十億年の寿命をもつ太陽の誕生。それは最初、宇宙を漂う水素ガスに過ぎなかったのです。そのガスとガスが引き合い、やがて巨大な固まりになって――水素どうしの核融合反応で燃え上がり、恒星となるときの目も眩む美しさ！

できあがった太陽に、引き寄せられながらも、呑み込まれず、惑星となった宇宙のかけらたちがそれぞれの個性的な姿に変貌していく面白さ。太陽からの距離と惑星自身の大きさのせいで、ガスに蔽われた星になったり、水を湛えた青い命の星になったりして行くのです。そして、幾多の天変地異を経て、人類が登場した。それはもちろん、作られたショーでした

けど。宇宙で観るとき、何ともいえぬ説得力を持って迫ってきました。
私の命、その存在は私自身にとってはかけがえのないものですが……。この大宇宙の変化の相の中の奇跡とも言える偶然に過ぎません。
こだわりを捨てよう。ありのままの自分を生きよう……そんな気持ちが昔の私にもあればよかったのかも知れませんね。
この旅は、あと三ヶ月続きます。また、何か発見があればお手紙を出しますね」

×　×　×

スクリーンに映された星々は消え、音楽が止み、灯りがついた。
アウルはひどく心を動かされた様子で、立ちつくしていた。
「昔の彼女なら、考えられなかったような手紙だよ」
「そうなんでしょうね……」
そして、アウルは先生に一礼した。
「今日はありがとうございました」
「何か考えができたようだね？」
「はい。とりあえず、勘当する前にやってみます。宇宙旅行というわけにはいきませんけれど」
「来月はエポカの日が来るからね。いい機会だと思うよ。この日だけは、皆、嫌なことを忘れるからね」

「それなんです！　エポカ誕生の録画を皆で観てみようと思うんです。あの感激を思い起こしてもらえれば……」

「いいかも知れないね。エポカ誕生のいきさつを考えてもらえれば、いろんなこだわりから解放されるかもしれないね」

「そうですね。ありがとうございます」とアウルはドアに手をかけてから、もう一度、先生に振り返った。

「訊いていいですか？」

「何だね？」

「その子……その人は、考えているでしょうか？　母親の勘当を解くことを」

「たぶんね。宇宙旅行の話も詳しく聞きたいしね」

アウルは心底嬉しそうに笑うと、もう一度「失礼します！」と言って出ていった。

×　×　×

「ホーウ！　エポカでは『親を勘当する』というのは、養育者としての親を拒否するということなので、自立した大人になれば、親を勘当しておく必要もなくなるんだけど……」

「ソランジュ先生の『たぶんね』の意味は、心の中で母親を許すということですよね」

ホログラフィは、エポカの日の前日の夜、アウルの家の居間風の部屋を映している。

デザイナーと女優の家らしく、部屋、家具・調度品はとびきりシックで品を感じさせるも

のであった。久々に家族四人が集まっていて、居間のスクリーンにはエポカ誕生の録画が映っている。

エポカ誕生に至る経緯というのは、およそ次のようなものであった。

- 初めに、戦争、テロ、独裁と弾圧、排他的な愛国主義や宗教、飢餓と貧困、資源と環境破壊、権威主義や驕り、利害と打算、人間性を無視した競争、失業、嘘や詐欺、憎悪、虚飾や虚礼に満ちた世界の姿が紹介された。
- インターネットのようなものや衛星放送などによる情報通信がグローバル化していく。
- 世界資本の商品という弾丸が、民族的対立や宗教間の戦いの様相を孕んで、国の壁を強引に突き崩し、従来の社会の仕組みを破壊して改変し、経済格差を拡大しつつ地球の隅々まで資本主義市場に取り込んでいく。
- 世界的な高齢化社会の進展にともなって年金や医療を含む社会保障システムのあり方が税制と共に問題とされるようになる。
- 繰り返される世界的な金融不安、国々の財政破綻の危機から金融システムや国家の財政システムが問題視されるようになる。
- 人間的な社会福祉制度を維持するには税金を財源とする租税国家では国家財政を賄えないことが明らかになっていく。
- 国債の中央銀行による直接引き受けや政府貨幣を発行する国が現れるようになる。

これによって経済システムが国家による需要コントロール型に変貌していく。

●必要性に基づく医療や教育などの無料現物給付と最低限所得保障としての現金給付制度の導入が一般的になる。これらによって、育児、教育、雇用、医療、年金などの様々な社会保障が統合されてシンプルになる。人々は稼がなければ生きていけないことから解放されるので、資本が要求する利潤追求動機が薄れていき、生き甲斐やボランティア活動を含め人に役立つことに活動動機がシフトするようになる。

●このような社会保障制度の導入が様々な国で採用されるようになる。これによって私有財産を後生大事にすることの意味も薄れていく。逆に、生れながらの貧富の差や機会不均等が、大きな社会問題とされるようになる。

●様々な社会的差別の解消を目指して、身障者と同じ状態で生活をしてみるといったような『立場置換トレーニング』と呼ばれる社会教育が幾つかの国で導入されるようになる。

●長寿薬の普及や医療技術の高度化などによって人間の平均寿命が遂に百歳を超え、いずれ二百歳になるのではないかと予想されるようになる。発展途上国の人口増大傾向は鈍化したが、経済先進国の人口が長寿化のために減少から増大に転じるようになる。

●社会システムはすっかり人間的になったが、経済システムが未だに資本主義に基づいていることが問題とされる。様々な争い、犯罪などの社会悪、自殺などの悲劇、

人間性を無視した過度の企業間競争、企業組織の封建制など社会的問題の大部分は、利子貨幣の使用に基づく『拝金社会』であることに原因があり、資本主義経済システムを廃棄する必要があるとの声が世界的に高まっていく。

● すべての国で銀行の通貨発行権が没収され政府のみが通貨を発行するようになる。

● 国境の垣根が充分に低くなり、複数の国に跨る連邦政府や世界政府の準備段階のようなものができてくる。

● 連邦制をとる国の間で『無境界選挙方式』と呼ばれる選挙制度が導入されるようになる。

● 国際的金融取引の決済通貨が特定の国の通貨ではなく、国際機関の発行する世界通貨に切り替わる。同時に、国家間の経済格差や貧富の差をなくすため、この国際機関が、各国に対して国の場合の地方交付金に相当する財源配分を行うようになる。

● 人種間交流が進み、地域的な多様性を保持しつつも排他性や宗教などに見られる非合理な因習が薄れていく。

● 資産や遺産を自主的に世界政府に寄贈する風潮が出てくる。

● 寄贈されたお金や資産は、社会に役立つ活動に投資してもらうためのものとして、人々に配分されるようになる。

● 無料の現物給付と最低限生活保障としての現金給付は『基本配当』に改名される。寄贈されたお金や資産は『投資配当』の財源として制度化されていく。従来の銀行

はこの『投資配当』の代理運用機関となる。

● 同時に各国がそれぞれの国で配分していた『基本配当』や『投資配当』の管理は世界政府が一元的に行うようになる。

● これによって、『お金を稼がなければならない世界』から『お金が予め配分され、人の幸福のための活動に役立てる世界』に完全に転換する。配分される『配当』は定率で回収されるため、減価貨幣と同じようなものになる。減価する『配当』（貨幣）は貯蓄手段から解放され、価値尺度の機能と交換手段の機能しか持たなくなる。

● ● 『無境界選挙方式』が世界の標準的な選挙制度として確立する。

● 全ての条件が成熟した段階で、世界政府は新世界秩序のためのルールについて検討し、相続制度の廃止を提起する。世界の人々の圧倒的多数の賛成によって新世界秩序のルールが決定される。

● 相続制度・資本主義経済を新しい社会・経済システムに組みかえるための情報処理作業が行われる。

● 世界政府の議長が、高らかに新世界（エポカ）の誕生を告げる。

「うわー！　難しくって全然ついていけないな。『ムキョーカイセンキョ』とか知らない言葉もでてくるし……、それと『キホンハイトー』や『トウシハイトー』っていうのもよく分からないな」

「ホーウ！　無境界選挙というのは地域や国に跨る選挙の仕組みだけれど後で話に出てくるよ。配当というのはお金のようなものだけど。いまはいろいろ理解できなくても後で、詳しく説明するから、だんだんわかるようになると思うよ」

「こんな難しい録画見て、アウルやアニーは理解できているのかな？」

「ホーウ！　まだアニーにはちょっと無理かもしれないけど、アウルくらいの歳になれば分かると思うよ。社会や経済の仕組み次第で世界の人々の多くが幸福にも不幸にもなる。平和にも戦争にもなる。社会や経済の仕組みがどうあるべきかというのはとても大切なことなので、幼い頃から学ぶようになっているのさ」

「へーぇ！　そうなんだ……よく理解はできなかったけど、お金が配当というものに置き換わったり、資本主義社会ではなくなったり、相続制度が廃止されたり、世界政府ができたり…凄いことが次々におきたんだね。エポカというのは人類が全く新しい時代に移行したことを意味しているのか」

「ホーウ！　ところでこの話の筋とは直接関係ないんだけれど、エポカの社会では殆どの場合一人っ子で、本当はアウルも一人っ子なんだ。アニーは実の妹ではなく、事故死したマリーの妹の娘をロビンとマリーが引き取って、アウルの妹として育てているのさ」

「殆どの場合、一人っ子って、どうしてなんですか？」

「ホホーウ！　人間の寿命が二百歳ちかくになったことと関連しているんだけれど、この説明は話が長くなるので、後でゆっくり説明するよ」

録画を観終わるとアウルが言った。
「録画を一緒に観てくれてありがとう」
「久々にこの録画を観たけれど、何時観ても感動するな！」ロビンが言った。
「そうねぇ～、前世はずいぶん酷い世界だったようね」とマリーが相槌を打った。
「でもお母さんは、そんな前世の真似ごとを僕らに押しつけているけれど」
一瞬、マリーは真顔になった。
すると、アウルが立ち上がり、緊張した面持ちで言った。
「今日は、お父さんとお母さんに話があるんです。そのために、録画を観てもらったんです」
アニーは、何時に無い兄の様子にびっくりした様子で、眼を白黒させた。
「エポカの理念、覚えていますよね？」

「さっきも『理念』という言葉がでてきたけど、『エポカの理念』って何のこと？」
「ホ、ホホウ！　エポカの世界のありかた、つまり基本的な考え方のことで、カズマの世界での憲法のようなものと考えてもらえればいいと思うよ」

「諳んじているくらい、よく覚えていますよ」

「だとしたら、今の家族のぎくしゃくした関係を直す努力をしてもらいたいんですけど」

両親とも言葉に詰まった様子であった。

アウルの方は、母や父からどのような言葉が発せられるかを身構えている様子であった。しかし、大晦日やクリスマスイブのような特別な日だったので、声を荒げるようことを憚ったのか、マリーとロビンはアウルの話を一応は聞いてみようといった風であった。

「この前、ソランジュ先生とも相談しました。先生は『理性的に考えれば、親を勘当するのに充分な理由がある』とおっしゃっていました」

『勘当』という言葉を聞いて、両親ともうろたえた表情に変わった。

「それで、もう一度、お父さんとお母さんによーく考えてもらいたいんです」

そう言ったなり、アウルは自分の部屋に閉じこもってしまった。アウルの妹のアニーも険悪な雰囲気を察してか、自分の部屋にすごすごと戻っていった。

その夜、アウルの父と母は、一晩中話をしていたようであった。

×　×　×

明けて翌日は、エポカの日であった。昨夜は、アウルもほとんど眠ることができなかった。

アウルは――父と母の話し合いの結論は出たんだろうか？　離婚することになるんだろうか？　人の気持ちや考え方なんてものは、ちょっとやそっとで変わるものではないからな。それに二人とも頑固だから。僕の方は育ての親を探すことになるとしても、アニーがどうなるか心配だ。それでも勘当するしかない。せっかくのエポカの日がメチャクチャになってし

まうな――と、自分の賭けの結果を予想して恐れていた。
アウルが寝ぼけ眼でトイレに行って用を足し、洗面所で顔を洗っていると、背中越しに、ロビンが声をかけてきた。
「エポカの誕生日おめでとう！　それと、昨日はありがとう。随分思いつめていたようだね。マリーが『たまには、親子四人で街のパレードを見物にいきましょうか』と言っていたよ」
ロビンの声は明るかった。
ここで、ホログラフィは終わっていた。

×　×　×

「ホーウ！　どうだったかな？」
フーパの声に、カズマはハッと我に返った。
相変わらず水に包まれた青一色の世界、白い海ふくろうのフーパが翼をファサファサさせながらカズマの目の前に漂っている。
「ぼくにはとても考えられない。子供が両親を勘当するなんて！」
「ホウ、ホホーウ！　子供は産みの親は選べない。けれども、産みの親が育ての親としての資格が無い場合もある。こういう場合の解決策として、『親の勘当』や『育ての親の紹介や選択』のシステムがあるのは合理的かも知れないよ」
「うーん……すごく不幸な子供にはそうかも知れないけれど……。自分の意見もいえない

ような幼児の場合はどうなるの？」

「ホウ、ホホーウ！　いい質問だね。エポカの世界では、『子供を養育するのは産みの親』と決まっているわけではないんだ。産みの親が養育者である場合がほとんどであるのはもちろんだけどね。この問題は、エポカ世界のGバンクという銀行が子供に支給する『基本配当』というお金のようなポイントを、誰が管理するかという問題とも絡んでいるんだ」

「えぇ～！　働いていない子供にもお金みたいなものが与えられの？」

「ホーウ！　生存権のようなものなんだ」

「でも赤ん坊の場合には、自分のお金を自分では使えないけれど？」

「ホウ、ホホーウ！　それで、乳幼児などの場合、養育者でもある親が乳幼児に代わってこのポイントを管理していて、自分自身にポイントを払うことになるんだけれど、この基本配当が適切に管理され使用されているか否かをチェックする人がいるんだ」

「ふーん」

「ホーウ！　ということで、チェックする人が、産みの親でも育ての親として適当でないと判断した場合には、本人になりかわって法廷に持ち込み、親を勘当したり、養育者を取り替えたりすることになるのさ」

「それと、エポカ世界の誕生までの録画だけど、僕の頭では理解できないことが多かったな」

「ホーウ！　そうだな。ちょっと難しかったかもしれないね。いろんなホログラフィを観

てもらえれば、少しずつ分るようになると思うけど」

第二の部屋　発明家

次のドームに移動し、部屋のドアの前に立ったとき、フーパが言った。
「ホホウ！　今度は、もうちょっと気楽に観れるかも知れないよ」
「と言うと？」
「ホーウ！　さっきのホログラフィは、子供のカズマにはちょっとヘビーな『悩み』の話だったかもしれないけれど、今度はエポカの世界で毎日を楽しんでいる人の話なんだ」
「毎日、遊んでいるの？」
「ホーウ！　全く逆さ。仕事を楽しんでいるのさ」
「仕事が？　楽しい？」
カズマは、しょっちゅう憂鬱そうな顔で帰ってくるお父さんのことを思いだした。訊かなくても――会社で嫌なことがあったんだな――と分かる。
――そりゃ、毎日、望月部長さんみたいな人に命令されていたら！　たま～に、年に数回、契約というのが、うまくいって、笑いが止まらないようなときもあるのだが……大部分は辛いことばかりなのだ――
「ホウ！」急にフーパが思い直したように声を出した。

「ホホーウ！　『遊んでいる』ってのも、当たっているね」
「えっ！　どっちなの？」
「ホーウ！　それは、観てのお楽しみだよ」
カズマはうなずくと、もう一度ドアを見た。ドアの白い表面が透明なドームの周囲の青に薄っすらと染まっている。
「ホホーウ！　じゃ、開けるね」
丸い金色のノブを回して、ゆっくりと引っ張る。

×　　×　　×

ホログラフィが映しているのは、まったくおかしな部屋だった。
左右の棚のいたるところにいろんながらくたのようなものが置かれている様子は、百円ショップとおもちゃ屋をごっちゃにしたようだった。印象として一番近いのは、学校近くの商店街の『珍品堂』という古道具屋だった。
いかがわしさと人なつっこさの両方を感じさせるようなものばかり置いてあるのだ。
たとえば、鳥や虫の彫刻がほどこされたヘルメットのようなもの。たとえば、はでな原色に塗られたゴム製のブーツのようなもの。たとえば、ガラス瓶の中で浮いている金銀のマリモのようなもの。たとえば、三味線とギターを足して二で割った楽器のようなもの。たとえば金属の鉢に植えられた色ガラス製の盆栽のようなもの……。
それらがまるで、今にも生き物のように喋り出しそうなのだ。

部屋の四隅には骸骨と、茶色いシャツを着た首のないマネキンと、『オズの魔法使い』に出てくるブリキの木こりみたいなものと、昔のヨーロッパの鎧武者みたいなものが頼りない守り神たちのように立っている。

奥の壁には端から端まで細長いテーブルがくっついていた。そこには、ぶくぶくと泡だった液体の入ったビーカーや口から細長いガラス管が伸びたフラスコなどの実験器具が置いてあったり、分厚い本やソランジュ先生の部屋にもあった透明な板が積み重なっていたり、食べかけのパンや紅茶のポットのようなごく普通の生活の匂いのするものが置いてあったりした。

窓はなかった。

そして、クリーム色の床の真ん中には、白髪混じりのボサボサ頭に医者のような膝まで白衣といういでたちの小柄なおじさんが、背をかがめてセカセカと動き回りながら、

「そこだ！　いけ！」などと怒鳴っていた。

おじさんのギョロリとした目は、床にくっついた犬小屋ぐらいの大きさのガラスのドームのようなものに熱心に注がれていて、動き回っているのはそれをいろんな角度から見たいからなのだ。

「おおぉ！」と叫ぶや、腰を落としてドームを真横から見ると、数秒後には、

「やったーーーー！」と飛び上がった。

ドームの中には金色と赤の服を着た人間たちがフワフワ浮いていて、金色側は抱き合った

りバンザイしたりして喜び、赤の側は一様に肩を落としていた。

「なんだろう？　あの小人たちは？」

「ホホホーウ！　小人じゃないよ！　あれは、立体テレビなのさ」

「立体テレビ？」

「ホウ！　宇宙ステーションの中で、一年がかりで開かれる『スペース・ラグビー』トーナメントの中継なのさ。無重力状態で浮かびながらのラグビーで、壁面を蹴ってビリヤードの球みたいに選手が動くんだけど、かなり体力が要るし、ボールを追いかけるための動きが独特で、いろんなワザもあったりして、ファンには凄く面白いんだよ」

「へーえ！」

カズマは立体テレビというのを何かのマンガで見たことがあったが、それは四角い画面から絵が飛び出しているようなイメージだった。こんな風に、そのまま小さく再現されるものとは思ってもみなかった。

フーパによると、エポカの世界でもスポーツ中継は人気があるらしい。現代世界ではオリンピックのようなものは平和の祭典ということになっているけれど、実際には国威発揚、民族主義の涵養のようなものになっている。学問的には――ヒトは他の動物と違って本能を必要としなくなった生物である――とのことあるが、勝負に勝つことが栄誉であるということになれば、エポカの世界でも、必要のなくなったはずの『闘争本能』なるものが復活するも

のらしい。

エポカの世界には『プロ』や『アマチュア』といった区分はないようで、毎年世界中で様々なリーグ戦やトーナメント戦があって、絶えずオリンピックが開かれているようなものらしい。もちろん『国』はないから、代表は地域や組織で選ばれる。ファンの贔屓は、当然ながら自分と同じ地域や自分の所属する組織のチームになることが多いとのことだった。

ドームの中で戦っている選手たちは、どちらのチームでもいろんな体格の人が混ざっていた。エポカでは、体格の違いが勝敗に大きく影響する個人競技の場合、体格差に基づくランクがある点に変わりないが、集団競技の場合にはこのようなランクを設けることができないため、チーム全体の『体格値』の合計が一定値以下になるように定められている競技があるとのことで、そのスポーツで有利となる肉体的条件――例えばバレーボールなら背の高さ、ラグビーならば体重――を考慮しているということであった。

「ホホーウ！　分かりやすくいうとね、がっちりした大きな人を入れたら、やせた人、小さな人も入れないと少ない人数で闘わなければならなくなる計算になるのさ」

そういえば、さっきから白衣のおじさんは、金色のチームの中でも、特に自分と同じような小柄な選手たちを応援していた。

「行け、サムス！　チャンスだ、クーボ！」

クーボらしき選手がふわりと一回転して、白く光るボールをキャッチした。

「よし！」とおじさんが拳を固める。
突然、ピコン！　と音がして、ドームに白い半透明の１０という文字が浮かび上がった。
９・８……と、カウントダウンされていく。
制限時間が迫っているのだ。
おじさんは、ドームに顔をくっつけんばかりにしていた。クーボがボールを持ったまま、赤い選手たちの間を魔法のようにすり抜けていく。
５・４・３・２……１！
ボールを、一箇所に浮いたままになっている水玉の中に突っ込んだ！　これが、スペース・ラグビーのトライなのだ！
ピィィイイ！　と笛が響き渡る。
「うぉおおお

「失礼します。お約束していた『プリモス』の者ですが」と挨拶した。
「おお、今、終わったところです！」
「？？？……何がですか？」
「いや、あの……いま、開けましょう」
そして、鎧の肩のところを軽く押した。これで玄関のドアが開くようだ。

「とすると、さっきのファンファーレは呼び鈴の代わりなのか」
「ホッ、ホッ！　それがエポカ流ってわけじゃないんだよ。ハーマン博士が、好きでやっていることさ」
　この風変わりなおじさんは、ハーマン博士というらしい。見た目には七十歳位に見えるが肌の色つやは若々しい。フーパの話によると年齢は百五十歳を超えているとのことである。

「自由に上がってきてくだされ。一階の一番突き当たりの部屋です」
「では、遠慮なく」
向こうの２人が前の方に歩いて来てモニターから消えた。
博士はせかせかとドーム型立体テレビに駆け寄り、表面を二度撫でた。
「ピコン！」と軽い音がして、それは水槽に早変わりする。青い光の中、カズマの世界でもおなじみのネオンテトラたちが泳いでいる。

「あの魚たちもホログラフィなの？」
「ホウホウ！　ところが、ホンモノの魚なのさ。博士の発明した『テレビモニターとしても利用できる水槽』なんだ。彼の唯一の、ヒット製品だね」
「唯一の？」
「ホウ！　ホントに、ちょびっとしたヒットなんだけどね」

そのとき、ノックの音がした。
「どうぞ！」
「失礼します」
さっきの２人が入ってくる。

シャツが黒く見えたのは白黒のせいで、よく見れば濃い紫色だった。先に入ってきた方はがっしりした体格で、四角くあさ黒い顔、芝生のように刈り込んだ緑の髪の毛の人であった。見た感じは四十になるかならないかというところで、もうひとりは背が低くぽっちゃりしていて、肩までの黒い髪、鼻も顎も頬も丸くて、透き通るほどの白い肌の人であった。こちらはもう少し若そうだ。
そろって、博士のギョロ目と対照的な細い穏やかそうなタレ目だった。

「はじめまして！　私はプリモス開発課のイリュージーです。こちらは、投資配当管理部のモアレです」とがっしりした方が柔らかく低い声で挨拶する。
「よろしく」イリュージーに続いて握手したモアレの声は、明るい響きだ。
「ハーマンです……とりあえず、お掛け下さい」
博士にいわれて、イリュージーもモアレも困ったように顔を見合わせた。
無理もない、どこにも椅子が見あたらないのだ。
「おやおや！　こりゃ、うっかりしてましたな」
そう言うや、博士は白衣の胸ポケットから小さなサイコロのようなものをふたつ取り出し、床に放り投げた。
するとどうだろう、ポンっという音とともに、白い半透明のふかふか椅子に変わったではないか！
「圧縮家具ですな」
イリュージーはにっこり笑うとモアレとともに腰掛けた。
「しかし、これはあなたの発明ではない」
「もちろんです」博士は苦笑した。
「三十年以上も前に偉大なレゴ博士が作ったものを、私なりに再現しただけですよ」
「なつかしいな！　この座り心地」

モアレが嬉しそうに身体を揺さぶった。

三人が暫し出会いがしらの雑談をしている間、フーパは今の状況について説明してくれた。博士はいわゆる発明家だった。カズマの知っているところではエジソンのようなものだ。ひとりでふたつ以上の仕事を持っているのが普通であるエポカにおいて、この人のように発明一筋というのは珍しいらしい。

イリュージーとモアレはプリモスという組織の役員であった。この組織は、毎日の生活に必要なモノを作っている。製造品目は、日用雑貨から文房具、家具、服、電化製品などなど、多種多様である。プリモスの製造品を並べるだけで、ちょっとしたデパートができてしまうらしい。ちなみにこの二人はエポカの普通の人らしく、別の仕事も持っていた。イリュージーは昆虫学者で『匂い』の研究家、モアレは歌手なのだが、とりあえずこの物語とは関係ない。

今日は博士の『売り込み』の日なのだ。発明品が二人に認められ、プリモスで作られることになると、博士には『ポイント』が与えられる。難しい言葉では『授権配当』というらしいが、要するにお金の代わりらしい。ただし、このお金は目に見える形はないとのことだった。「誰それはこれだけのポイントを持っていて、これだけ使いました」というデータをエポカのGバンクという世界銀行が一括管理している。データ内容は『Gネット』というインターネットのようなもので分かるということだった。

インターネットを使ったお金の代わりというと、カズマにも思い当たることがある。家で友達とカラオケごっこをするとき、パソコンにマイクをつないで歌うのだが、伴奏トラックはお父さんがダウンロードしてくれたものだった。カラオケ会社とのおつきあいで、お父さんの会社の社員には十曲分の『ポイント』がプレゼントされたとのことであった。曲を手に入れるときには、専用のホームページに行ってパスワードを入力する。すると直ちに、現在のポイント数と入手可能な曲数が表示されるのだ。

「一種の電子マネーだね」とお父さんはよく分からない説明をしてくれた。

今はもう十曲分取り込んでしまったから、幾ら入力しても「ポイントがありません」と出るのだが。追加したい場合は近くのコンビニに行って、千二百円で四曲分のポイントを買わなければならない。

「こういうポイントとエポカの世界のポイントとは違いがあるの？」

「ホウ、ホホーウ！　同じポイントでも、カズマのいうポイントは結局お金で売り買いするものだよ。だから世界で一番エライものは『お金』ということになる。ところが、エポカの世界の『配当』というポイントはお金以上のものなんだ。電子マネーやＮＰＯが用いている地域通貨とかいったようなものを全て包含したようなもので……エポカ世界の経済や社会システムの土台になっているものなんだけど……話が長くなるから、改めて詳しく話すことにするよ」

カズマは説明をまたお預けにされてしまった。

「では、まずこいつを見て頂きましょうか」と言って、博士が取り出したのは1本の万年筆だった。
カズマのお父さんが大事に使っているような、つやつやした紺色に、金のクリップのついたものだ。
「何だと思いますかな？」
イリュージーは受け取ると、キャップを外したり、ペン先を見つめたりした。
「いや、何とも……ごく普通の……ねえ？」と言って、モアレに渡す。
「うむ。万年筆ですな」
うなずいたモアレを見て、博士は「してやったり」という笑みを浮かべた。
「ではでは……」
博士はモアレにＡ４ノートぐらいの大きさの板に数枚の紙が挟まったものを渡した。回覧板のようなものだ。
「書いてみて宜しいですか？」
「どうぞ」
「……おや、書けませんよ。インクがないのかな？」
博士はコホンと咳払いした。
「それは普通の万年筆のように使うのではないのです。モアレさん」

「はい？」
「あなたのお好きな小説は？」
「そうですね……『地球最初の猫』ですかな」
「では、キャップに口を近づけて『フリッツ・フェリックス著、地球最初の猫』と一言一言、はっきり言ってみて下さい」
「では……」とモアレはいわれたとおりにしたが、そのときの発音が朗々としてキレイなのはいかにも歌手らしかった。
一瞬の間をおいて、キャップの頭がピカッと光る。
「データ受信完了です。さ、ペン先を紙に当てて」
「はい……あ！」
モアレは目を丸くした。どうやら彼の意志とは別に、文章がスラスラ書かれていくようなのだ。
「これは……『チューブから直接、油絵具をキャンバスに塗りたくったような分厚い緑の支配する森、彼の目は燐光のように輝いている。この不自然なまでの静けさを破るのは誰か……』」モアレが走るペン先のあとを追う。
「『地球最初の猫』の冒頭ですな」モアレの手元を見ながら、イリュージーが言った。
「そう」博士は満足げにうなずいた。
「これはペンというより本なのです。音声入力をもとに、エポカ大図書館のデータベース

から検索し、結果を自ら書き綴る」

「あ、あれ？　止まらない？」

モアレの丸顔から汗が吹き出した。紙から万年筆を離そうとしても、下敷きになっている板ごとくっついたままなのだ。手も万年筆から離れないらしく、文章は書き続けられている。まるで、暴走する自分の手を相手に悪戦苦闘しているようだ。

「あ、キャップの頭を叩いて」

モアレがもう一方の手で博士にいわれた通りにすると、離れた板が音を立てて床に落ちた。博士は板を拾い上げながら、「ふむ、少々改良の余地があるかな……」とつぶやき、モアレに笑顔を向けた。

「いかがでした？」

「いやはや……」

モアレはハンケチで額の汗をぬぐった。

「面食らいましたよ」

「まあ、最初はそうかも知れません。しかし、私の狙いは、読者が作家の気持ちで読めるということなのです。大好きな作家が書いているときの様子を疑似体験しながら、同時に、読書の楽しみも味わえる。素晴らしいと思いませんか？」

「はぁ……」

モアレは困ったようにイリュージーを見る。

「たいへん興味深いものです……」イリュージーは指先で顎をさすりながら言った。
「ただ、この機能を望む人がいるかどうかは……まあ、帰ったら他のスタッフとも相談してみますが。とりあえず、他の発明品を見せてもらえますか？」
「うむ」
どうやら自信作だったらしい――万年筆のようなもの――の反応がイマイチだったのに、やや渋い顔をしたが。次の瞬間には、パッと顔を輝かせた。
「これこれ！　こいつは、役に立ちますよ！」
せかせかした足取りで、部屋の隅、ブリキのロボットの足もとに置いてあった円筒形の銀色のゴミ箱を持ってきた。
「ご覧あれ」
そいつを床に置くと、
「いいですか？　うっかりしていて、けつまずいたとする。こんな風に……」というや、とてもうっかりとは見えないワザとらしさで、ゴミ箱を蹴飛ばす。たちまち、紙くずや菓子の袋、リンゴの芯、落花生の皮などが散乱した。
「汚くって失礼！」と言い終わらないうちに、なんと！　ゴミ箱がさかさまになって、床上二十センチぐらいに浮かび上がった。そのまま、ゴォォ……と、音を立てて、ゴミを吸い込み始める。
一分も経たないうちに元通りに、ゴミ箱はクルンと口を上にして、着地した。

「いかがですかな？」
「つまり、ゴミ箱兼掃除機……と。そういうのって、あったんじゃないかなあ」と考え込むようなモアレに、
「いやいやいや」と博士は人差し指を振ってみせる。
「ゴミ箱に入っていたものだけを回収するのです。中に捨てられたゴミの形状、材質などを覚えているわけです。ですから、たとえば大事な指輪を床に落とした。その直後に、間違ってゴミ箱をひっくり返してしまった。そんな場合でも……お分かりですね？　吸い取られるのはゴミだけ。指輪は残っているのです」
「ほう」
一瞬、感心したようなモアレの横でイリュージーが静かに言った。
「しかし、機能が生かされる機会は……あまり無いようにも思えるのですが？」
「あります！」
博士は自信ありげだ。
「以前、私が苦心に苦心を重ねて、直径一ミリほどのシジフォス合金の球を生成していた時、ファンス濾紙やメグネの砂カスを捨てるために、ゴミ箱を足もとに寄せていたのです。そして、フラスコの底にできあがった球をピンセットでつまみあげた、その瞬間！」
言葉を句切って、二人をじっと見た。
「ゴミ箱に蹴つまずくと同時に、シジフォス球も落としたのです」

「なるほど」イリュージーがうなずく。
博士は、指を四本立ててみせる。
「四時間！……四時間、かかったのですよ？　球を見つけだすのに。そのとき、私はこの発明のアイデアを思いついたのです。ですからこれは、必要なものなのです！」
「なるほど」イリュージーは繰り返した。
「で、発明されてから。そのようなことはありましたか？」
「ん、……い、いや。まだ、ありません。でも、近い将来、あるような気がします」
「うーん……」イリュージーはまたも指先で顎をさすった。イリュージーの癖らしい。
「あのですね」モアレが言った。
「私など、そそっかしいから、ゴミじゃないものを間違って捨てることの方が多いんですよ。そんなとき、そのゴミ箱は、中に落ちたとたんゴミだと認識しちゃうわけですよね？」
「ええ」
「だったら、拾い上げても。また、吸い取りに来ちゃうんじゃないですか？」
「その場合は、ほら――」と博士はゴミ箱を持ち上げて、底を見せる。
中央に黒い小さな丸があった。
「ここを指で触れてやれば、機能は停止しますよ」
「ははあ……」
ちょっとの間、会話が途絶える。

結局、面倒なだけだ――とカズマは思った。イリュージーとモアレも、同じように感じているらしい。

そして博士も二人の反応が良くないのに気づき始めた様子だ。ゴミ箱を元の位置に戻しながら、

「で、では、お次は……そうそう！　何もお出ししていませんでしたな」

「いえ、お気づかいなく」とモアレが腰を浮かす。

「やや、汚いゴミなどお見せした気分直しに……プラーグ！」

博士が呼びかけると、首のないマネキンが動き出した。

「何でしょう、博士？」

その声は、胸のあたりから響いている。

博士は、ギョッとした顔のイリュージーとモアレに笑顔を見せて、

「うちの使用人ロボットです。これでなかなか気の利く奴でしてな……お二人に、ジュースをお出ししなさい！」

「はい、博士の分もですね？」

「当然だ」

プラーグと呼ばれたマネキンはキュッキュと妙な音を立てて動くと、棚の一部をドアのように横にスライドした。

中に手を突っ込んで、白いワゴンを引っ張り出してくる。ワゴンの上には、カズマの世界

でも見るような――むしろ古めかしいデザインの――ミキサーと大皿に乗った果物、その他、大口のガラス瓶に入れられた食材類が置かれている。果物はカズマも見たことのあるようなグレープフルーツ、バナナ、キウイ、苺などである。よく見たら、ピーマンや胡瓜などの野菜も混じっている。

プラーグは自分の胸を開いて金属製のチューブを取り出すと、ミキサーの上蓋を外して突っ込み、水を三分の一ほど注ぎ込んだ。

「水タンクにもなっとるんです。こいつは」博士が自慢げに説明する。

「なるほど、よくできたロボットのようですがデザイン以外の新鮮味は……」と言いかけたモアレに対し、

「いや！　発明品は、彼ではないのです！」

「と、いいますと……あ！」

モアレが声をあげたのは、プラーグのやっていることに気づいたからだ。バナナなどの果物だけではなく、納豆のようなのものや刺身、緑色のぐちゃぐちゃした草などを手当たり次第にミキサーに放り込んでいる。

「ちょ、ちょっと……」モアレが声を掛けた。

「うむ、なかなか栄養のバランスを考えてますな」博士はニコニコしている。

イリュージーとモアレは言葉を失い、互いに顔を見合わせた。

ミキサーが回り始めた！　中では濃い黄土色の、何とも形容しがたい液体が泡を立てて作

られていく。
　モアレの丸顔は、額ばかりではなく、頬も、鼻の頭も、顎も、汗をかき始めた。イリュージーは指先で顎を、震えるように叩き始めている。
　カズマは前に、テレビのバラエティ番組でゲームに負けたお笑いタレントが、ウイスキーと酢と青汁のミックスを飲まされるのを観たことがある。いまの二人の気持ちは、ひょっとしたらあのタレントよりヘビーかも知れない。
　ミキサーが止まった。プラーグはワゴンの横の引き出しを開けて、大きめのコップを三つ用意する。とろりとした、黄土色の泥水としかいいようがないモノが、均等に注がれた。
「あの！」と腰を浮かしかけたモアレだが、次の瞬間、完全に固まってしまった。
　博士が自分でコップを取ると、半分ほどの量を一気に飲み干したからだ。
「うむ、いける！」
「ありがとうございます」とプラーグは答えて、残ったふたつのコップを持ってイリュージーとモアレの前に立った。
「どうぞ」
　二人の目はその異様な液体に釘づけになる。
――ぼくなら、絶対に飲めないな――

「ささ、遠慮なさらず」
博士は微笑むと、残った半分を飲み干した。
「美味しいですよ」
「では」イリュージーが、コップを受け取った。
「ちょっと！」モアレは信じられないという顔をしている。
「いい匂いだからね」
イリュージーが目を閉じて、ほんの少しすすってみる。
「ん……」イリュージーはうなずくと、グイッと飲んで、モアレに
「新鮮なオレンジジュースの味だよ」と言った。
「まさか……」
モアレはまだ信じられない様子だったが、イリュージーが飲み続けるのを見て、
「……よし！　何事も経験！」とコップを受け取ると、大汗をかきながら、一気に飲んだ。
「ああ！」
モアレは目を見張った。
「本当だ」
「そう、このミキサーこそ、発明品なのです」博士はお代わりを注ぎながら言った。
「必ずオレンジジュースの味にしてくれる。ですから、このように味覚的にはひどい組み合わせでも、栄養バランスは抜群なものを美味しく頂ける。実際、このジュース二杯で充分

な朝食代わりになりますよ。オレンジジュースが好みでない場合には、グレープでもアップルでも……上等な冷やしコンソメの味でも、自由に設定可能です！」

「なるほど」イリュージーは飲み干したコップをプラーグに返す。

「もう一杯、いかがですか？」

「いや、もう結構です」とイリュージーは断ると、博士に言った。

「面白い！　これも、たいへん興味深い発明です。ですが……」

「ん？」博士の顔が少し曇った。

「やっぱり人は、本物のオレンジジュースを飲みたがりますよ。それに、本来の味というのは大事です。それによって、食べ物が腐っているかどうかも判断できますし……」

「うーん……」

腕組みをする博士にモアレがフォローした。

「でも、面白い！　面白いですよ！　確かに日常的に飲みたいシロモノじゃないですけど、今日、飲んだのはいい話のネタになります」

悩む博士とは対照的に、イリュージーとモアレはなんだか嬉しそうだった。博士の珍発明の数々に対して、製品になるかどうかを評価することよりも、自分たちで楽しみ始めた様子なのだ。

「では、次の発明を見て頂きましょう……」

×　×　×

こうしてハーマン博士は次々と発明を紹介したが、どれもこれもいまひとつ実用性に欠けるものばかりだった。

臭い足ではこうとすると逃げ出す靴、自動的に折れる折り紙、雪合戦用の雪玉が作りやすい手袋、桜の木しか削れないナイフ、ペット用飛行機……。

イリュージーとモアレはすっかりリラックスした様子で、時には声を出して笑い、手を叩いたりもしたが、製品化というと、「たいへん興味深いですね……しかし……」と博士を落ち込ませるのだった。

二人の気持ちはカズマにもよく分かる。見ている分には、とっても楽しい。でも、普段使ってみたいかというと……考えてしまう。

「とりあえず、こんなところです」

最後の「耳栓にもなるコンタクトレンズ」の紹介を終えると、博士はすっかり自信を失ったような様子だった。

「……如何でしょうか？」

「いやはや、どれもこれも、たいへん興味深い……」イリュージーはモアレと一緒に椅子から立ち上がりながら、何度も繰り返した感想を述べる。

「しかし、製品化となるとなかなか難しいですね」

「やはり……」博士はがっくり、肩を落とす。

「とはいえ――」

イリュージーは、にっこり笑ってモアレを見る。
「ねえ？」
「うむ」モアレもうなずき、笑顔を博士に向けた。
「プリモスは、博士にそれなりのポイントを支払わせて頂きます」
「はあ……製品にしないのに……ですか？」
「する、しないに、関わらず……です」
「……またか」博士は、ぼそっとつぶやいた。
「何がですか？」
イリュージーが訊くと、博士は答えた。
「いや、いっつもなのです。皆さん、私の発明品をご覧になって、興味は示してくださるんですが、買い取りにまで至らない。それなのに！　必ず投資して下さるんです。おかげで、開発には困らずやってこれているんですが……」
モアレがパンッと軽く手をたたいて答える。
「そりゃ皆、博士の発明が好きだからですよ！」
「はあ……有り難いけど、好きならなぜ製品化されないんでしょう。役に立つものばかりだと思うのですがねえ……」
「まあ、一応、他の者とも話し合ってみますよ」
イリュージーは例によって顎をさすると、モアレとともに短い挨拶をして立ち去った。

「ふぅ……」ひとりになった博士は溜息をつくと、首なしマネキンに歩み寄る。
「プラーグよ！　今回は自信あったのだがなぁ～」

×　×　×

続いてカズマは、その日の夜の博士の様子を見た。
しゃがみこんで、ドーム型立体テレビの中に立っている人と向き合っている。
それは――もしカズマの世界に現れたなら――とびきり個性的な女性だった。腰までの長い髪を虹色に染め、額にはトランプのクローバーを逆さにしたようなマークがあった。細長く白い顔全体にきらきら光るラメのようなものを塗っている。上半身は緑色のぴっちりした長袖シャツであるが、半透明なので肌が透けて見えている。青いズボンは片方だけ短くて、スラリと長い脚が見えている。その脚には蔦の模様が描かれていて、葉が点滅していた。
立体テレビでは小さく見えるが、おそらく痩せて、背の高い人だろう。年齢はちょっと分かりにくいが、三十歳前後に見えた。喋り出すと、その声はちょっと鼻にかかった高音だった。

「はじめまして。アーティスト・ギルドのシェルと申します」
「ハーマンです」
どうやらドームが、今度は立体テレビ電話として機能しているようだった。
「私どもの組織については、お聞きおよびでしょうか？」

「名前ぐらいは……しかし、芸術方面はまったく専門外でしてな」
シェルと名乗った女性は、クスリと笑った。
「そうとも思えませんが？」
「はっ？」

例によって、フーパが説明を加えてくれた。
「ホウ！　アーティスト・ギルドというのは、エポカで活躍する詩人、画家、彫刻家、音楽家、陶芸家、舞台演出家……その他、ありとあらゆる芸術家を支援し、ポイントの支給や作品公開、権利の保護などを行っている団体なのさ。運営しているのも、芸術家達なんだ。たとえばこのシェルという人は、有名な建築デザイナーなんだよ。博士は知らないようだけどね……」

「……なぜ、そうおっしゃるのです？」
「専門外どころか、私どもは博士を芸術家と解釈しております」
「芸術家？　私が？」
「ええ。博士の発明がGネットで公開されたり、実際に見たり触ったりした人の話を聞くたびに、私も、他のギルドのメンバーも深い感銘を受けるのです。発想の妙といい、実際に作ってしまう技術やバイタリティといい……素晴らしいし、見た目も非常に面白いです。ど

れをとっても芸術の名に恥じません」

話に熱が入ってくると、シェルは両腕を指揮者のように動かす。

「うーむ……しかし……」と博士は腕組みをした。

「ご自分では、そのような意識はないのかも知れません。しかし私たちは、個性的であって、人の心を刺激し豊かにする創造物を、芸術と呼びたいのです。間違いありません、博士はエポカでもトップクラスの芸術家のひとりです！」シェルが自信に満ちた口調でいい切った。

博士はうつむき気味に目をそらすと、弱ったように頭をかいた。

「まあ、あなた方がそのように考えられるのは、ご勝手ですが……」

「あなた自身にも、認めていただきたいのです」

「というと？」

「発明家なだけではなく、芸術家でもある自分を！」

博士は、ポカンと口を開いた。

「ギルドは博士を歓迎いたします。特別会員として、迎え入れますよ！　お好きなときに個展を開くことができます。会場も、宣伝も、スタッフ用ロボット集めもすべて請け負います。全作品の目録もお作りしましょう。もちろん、今後の制作も援助いたします」

「……いや、これはどう答えたらよいものか」

「加入することを、了承して頂くだけでよろしいのです」

「あなた方は私のことをずいぶんよく思ってくださるようだ」
「はい！」シェルは力強くうなずいた。
「個展というのはわけが分からないが、とにかく私の作ったものを世に知らしめたいと…有り難い話です。それ以上に、開発の援助は幾らでも大歓迎です。足りるということは、ありませんからな」
「では、アーティスト・ギルドに……」
博士は眉間にしわを寄せると、いえいえ、という風に手を振った。
「お断りしますよ。お申し出は感謝いたしましょう。しかし私は発明家、実用品を作っております。それが、私の信念だ。自分に嘘はつけません」
「し、しかし、博士の作品は、実用には……」
「シェルさん！」博士はシェルをグッとにらんだ。
「はい！」
『作品』ではなく、『発明品』です」博士が強い口調で言った。
「……」
「芸術？……見当違いですぞ」
シェルは、まずいことを言いそうになった反省も含めて、しばし困り果てた様子だった。
だが、すぐに目もとに笑みが浮かぶ。
「……そうね、そういうことよね」シェルは自分に言い聞かせているようだった。

「博士！　おっしゃる通りです。見当違いだったのかも、知れません」
「でしょう」
「というか、確かに博士は、アーティスト・ギルドに入らない方がよろしいんでしょうね。ご自分で、芸術と思ってらっしゃらないからこそ、あれほど魅力的な作――発明品が、生まれるのでしょうし」
「ううむ……」博士にはいまひとつ納得しにくいようだ。
シェルは構わず続けた。
「ただし！　博士に投資はさせて頂けるでしょうか？」
「は？」
「今後の活動をお助けするためのポイント支給です」
「……いや、それは有り難いですが。芸術作品など作る気はさらさらありませんよ？」
「構いません。その方がいいのです」
「へっ？」
「博士は今のままでよろしいのですわ。今の博士に、投資をお約束します。よろしいですね？」
「まあ、それは有り難いですが……」どうも、腑に落ちないといった様子である。
「では、ポイント数の検討をいたしますので、失礼します。もしご無礼があったら、申しわけありませんでした」

「いえいえ。こちらこそ、期待にそえなくて……」
「それでは」
シェルがかき消えると、ドームは例によってネオンテトラの泳ぐ水槽に早変わりした。博士は、しばらくぼんやりとしゃがみ込んでいたが、
「ま、いいか！　ラッキーだと思えば！」と弾けるようにシャキッと立ち上がった。
その場でくるりと回ると、ドンドンと、床を二回踏みならし、部屋の隅のブリキのロボットに命令した。
「ミュージック、スタート！」
ポッポー！
ロボットの頭から煙が吹き出し、ガチャコンガチャコン、おもちゃのタイコのようなリズムを奏でながら、首が伸び縮みする。それに反応して、反対側の隅に立っていた骸骨が、自分の手で自分のアバラ骨を、チャッチャカ、チャッチャカ、鳴らし始めた。
ブンブン、ブンブン、ベースの音がする。転がるようなピアノの響きがする。目に見えない楽器が四方の壁から鳴り響く。
博士は、肩をゆすって大股で歩き回りながら、大声で歌い出した。
役に立つのが発明品！
そいつがわしの生きがいじゃ！
芸術なんかじゃ、ありゃしない！

作品なんかじゃ、ありゃしない！
まるで調子っぱずれの、思いつきのメロディだ。ちょうどカズマがちっちゃい頃に、
♪買って買って買ってぇ～、おもちゃ、買ってぇ～
と、デタラメに歌い散らしたときのように。
製品でなければ、意味が無い！
発明品にカンパイだ！
実用品にカンパイだ！
不思議に耳に心地よい。伴奏が、デタラメにうまく合わせているからだ。

「ホウ！　もちろんこれも、発明品。『何でもぴったりカラオケ』さ！」

博士は調子が出てきたようで、踊るようにジャンプしたり、手を叩いたりしている。歌声が、一段と大きくなった。
知恵を絞ってさあつくれ！
きっと誰かの役に立つ！
『誰か』は誰でもいいんじゃないか！
お役に立てば、幸いだ！
そんな様子が、だんだん霞んできて……ホログラフィが終了した。

×　　×　　×

「ホーウ！　どうだった？　発明家さんの部屋は」
閉じられたドアの向こうからは、今もかすかに博士の歌声が聞こえてくる……ような気がする。
「うん！　なんかおかしくて、面白かった！」
「ホーウ！」
フーパは嬉しそうにひと鳴きすると、ふわりと回れ右して次のドアに向かってゆっくり進み始める。カズマは、あとをついていった。
「でも、役に立つことに拘っているわりには、役に立たない発明ばかりだったですね」
「ホホーウ！　でも、皆投資する」
「面白いから？」
「ホホーウ！　もちろんそうだけど、エポカの世界の人たちは、たとえ誰かが『見当外れ』であっても、面白ければ、認めてあげるんだよ。面白いということは、それだけで人を幸せな気分にしてくれるからね」
「ふーん……」
「ホーウ！　たとえば、テストで間違っても、その間違い方が面白ければ、評価してくれるような世界なんだ」
「でも、気がつかないのかなぁ！　自分が作っているのは、『役に立つ』発明品なんかじゃ

なく、人を楽しませる……そう……あの女の人が言っているような、芸術だってことに！」

「ホウ！　『芸術の定義』が全然違うのかもしれないよ。多分、博士がイメージしている芸術品は、古典的な芸術品みたいなものではないのかな。だから、自分には芸術的な才能なんてないと思っていて、芸術品をつくってくれと頼まれたら何をしたらいいのか分らなくなってしまうんだと思うよ」

第三の部屋　いじめ

「ホホウ！　今度の話は、カズマにとっても身近な問題かもしれないよ。というのもいじめに関する話なんだ。いじめはどんな世界にもあるようだね」

次のドームの中の部屋を開けると、ホログラフィは再び子供たちがいる教室らしい場所を映している。

「ホ、ホーウ！　ここは集団教育の学校だよ。とは言っても、カズマの世界の小学校、中学校、高校、大学などのように、年齢で学校が決まっているわけではないんだ。教育は必要に応じて誰でも、いつでも希望するものが受けられる。けれど、ここでの教育内容との関連でいうと、カズマの社会でいう中学生くらいの年齢の子供たちがこの学校で学んでいるかな」

フーミンという名の女性の先生が、二十人ほどの生徒を前に『人との接しかたと会話の方法』というテーマの授業を行っている。

「ぼくらの学校には、こんな内容の授業はないけどね」

「ホーウ！　エポカの世界での教育は『心の教育』、『知育』、『実学』の三本柱になってい

るのさ。このうちの『心の教育』は、倫理や道徳ではなく、心理学や実践トレーニングをベースとした教育で、人生の節目に学ぶことが多いんだ」

カズマが教室を見回すと、部屋の片隅の少年が顎に手を当てて、見るからに先生の話はうわのそらといった様子で憂鬱そうな顔をして座っていた。

「あの生徒、まるで話を聞いてないみたいだね」

「ホウ、ホホーウ！　あの生徒はムサダというんだ。ムサダは、執拗ないじめにあっている最中なのさ。このムサダの父親はラムダという名で、粗暴な男なんだけど、もともと粗暴であったわけではないそうだ。ムサダの母親はムサダが幼い時に病死しているんだけれど、ムサダにとってはとても優しい母親だったようで、幼い頃には母親のことを思い出すたびに涙していたようだよ。

ラムダもかつては優しい父親であったようだけれど、最愛の妻を亡くして後、自暴自棄になり、酒に溺れ、活動――カズマの世界で仕事と言っているもの――らしいことは何もせずに、周囲の人に暴力をふるうようになったようだ。ラムダは息子の目の中に『自分に対する非難めいたもの』があると思っていて、ムサダにもしばしば暴力をふるっているんだ」

教室では、フーミン先生が気づかいや思いやりについて講義を続けている。

「気づかいや思いやりには主観的要素があります。思いやる側の意に反して、ありがた迷惑もあるし、人を傷つけたり、恨みを買ったり、不幸な事態を招いてしまうことさえしばし

ばあります。その場では迷惑な行為と思われても、あとになって大いに感謝される行為もあります。最後まで報われない思いやりも当然あります。ということで、思いやりや気づかいをすることが難しい場面が多々あります。たとえば……」

――中学生程度の授業にしては、ずいぶんと難しい問題についての講義だな――

ムダサがもぞもぞしていたと思ったら、突然おずおずと手を上げた。

「何ですか？」

「トイレに行きたいんですが、行ってもいいですか？」

「授業が終わるまで待てないのですか？」

「もれちゃいそうなんです」ムサダは身体をブルブルさせながら言った。

「しょうがないでわねぇ。行ってらっしゃい」

クラスの中でどっと笑い声が起こった。

ムサダがトイレに行くと、レナートという生徒がフーミン先生の目を盗んで、ムサダの席に移動した。ムサダの鞄の中を開けて何かを探している。

レナートは、やがて目的とするものを探し出したようであった。ペンダントのようなものを手にすると、何食わぬ顔で元の自分の席に戻り、隣の席の利発そうな顔立ちのクレオに手渡した。クレオはよくやったといわんばかりに、レナートに笑みを返した。

しばらくすると、すっきりした表情でムサダが教室に戻ってきた。席に着くと、また両手で頬を支え憂鬱そうな面持ちに変わった。

×　×　×

下校時になり、ムサダはこれまた楽しくもない家への帰路についた。ムサダは郊外の小川の土手をとぼとぼと歩いている。季節は春で、小川の土手には野草がそこかしこに花を咲かせている。春の陽光のために、ムサダの表情は返って沈んで見えた。

見ると、ムサダの後ろおよそ三十メートルのところに、ムサダの鞄からペンダントを盗み出したレナートと、もうひとり、ラーケンという生徒があとをつけるように歩いている。

そしてそのまた後ろ三十メートルほどのところを、別の二人の生徒がつかず離れず歩いてくる。

ムサダは小川にかかる橋のところまで来ると、左折して橋を渡り出す。橋の中ほどで、水面に反射する陽光が眩しかったので、ふと顔を上げると、目の前に立ち塞がる者がいた。レナートからペンダントを受け取ったクレオである。ムサダの顔は硬直した。今度はどんな意地悪をされるのかという恐怖の表情に変わった。

「俺には、お前が理解できないなぁ？　あんなどうしようもない親父なんか、さっさと勘当してしまえよ。お前の親父はエポカ世界のクズだが、親が親なら、お前も能なしのクズだ！」

ムサダにとっては父親のこうした悪口を聞くのが一番耐え難いことであったが、それを知っていてクレオは罵ったのである。

ムサダは、浴びせられた言葉に必死に耐えるとともに、何をされるのかと身構えている様子で、無言のまま立ち止まっていた。

ところが、クレオは何かを仕かける様子を見せない。その間に、あとをつけてきたレナートとラーケンが、ひそかにムサダの背後に迫ってきた。ムサダと比較すると、二人とも小柄だったが、次の瞬間、レナートとラーケンは一緒になって、斜め後ろから勢いをつけてムサダを突き飛ばした。ムサダはよろめいて、川に顔を向けて橋の欄干にもたれかかった。レナートとラーケンは、この機会を逃してなるものかとばかりに体当たりした。ムサダはたまらず、川の中ほどに大きな水しぶきを上げて墜落した。鞄の中身もばらけて水面に散乱した。

ずぶ濡れになったムサダが水面から顔を出すと、橋の上ではクレオがにやりと笑った。レナートとラーケンは大成功とばかりに有頂天になり、小躍りしてはしゃいでいる。

ムサダは水をかき分けながら、水面に散乱し、流されていく文房具など追いかけてかき集めると、岸に向かって川の中をゆっくりと移動した。いつの間にか、レナートとラーケンの後ろを歩いていた二人、カサムとイオバ――この二人もムサダのクラスメート――が岸辺に立ち、心配そうに声をかけた。

「大丈夫かい？」

二人が手を貸そうとすると、ムサダが突き放すように言った。

「お前らには関係ない。ほっといてくれ！」

――親切なクラスメートに対して横柄なもののいい方をするものだな――

二人はしばらく様子を見ていたが、しかたなくその場を立ち去った。

岸に上がったムサダは、ずぶ濡れになった衣服から水気を絞っていたが、突然はっとしたように、慌てて鞄の中を調べ出した。

「ない…！」ムサダがつぶやいた。

ムサダはとって返すように川の中に入り、橋から落ちたあたりを何度も潜ってはなくしたものを探しているようであった。探しているのは、他ならぬあのペンダントである。ペンダントは見つからなかった……見つかるはずもなかった。

ムサダにとってあのペンダントには特別な想いがある。というのも、ムサダが幼い頃に誕生日のプレゼントとして母親からもらったもので、今では母の唯一の形見であり、心の支えになっていたもの……だとのことである。

あきらめがつかない様子ではあったが、ムサダは再び岸に上がると、濡れた衣服の水も払わず、肩を落とし、とぼとぼと歩き出した。けれども涙は流してはいなかった。

× × ×

ホログラフィが街中を映している。

クレオに率いられて、レナートとラーケンが商店街を歩いている。クレオ達は大きな古物店を見つけると、中に入っていく。レナートとラーケンは物珍しげに昔の装身具を眺めたり、

手にとってみたりしている。クレオは店の奥に行き、店の主人らしい人を探し出すと、カウンターの前にあの盗んだペンダントを差し出した。そして、何やら交渉を始めた。

交渉は長引いているようである。やがて、店の主人が奥に引っ込んで、しばらくして再び顔を出すと、クレオに向かって手でＯＫのサインを出して見せた。クレオは袋に包まれたものを店の主人から受け取ると、得意満面になって喜んだ。そして、レナートとラーケンを連れて店を出た。

――あのペンダントを売り飛ばしたに違いない――

その後も、クレオ、レナートとラーケンは街中をうろつきまわり、何やら買い物をしている様子だった。

×　　×　　×

翌日の朝、教室のムサダの机の上には、昨日クレオ達が手に入れたと思える尿瓶が置いてあった。尿瓶の下には「おもらししそうな子供には尿瓶が役に立ちます」と書かれた紙が置いてある。

しかし、せっかくの嫌がらせもムサダが出てこないことには意味がない。ムサダは風邪を引いたという理由で、学校には姿を見せなかった。ムサダにとっては、風邪を引いたことは大したことではなかった。ペンダントをなくしてしまったことがショックであった……との

ことである。

×　　×　　×

三日ほどして、風邪が治ってきたのか、気を取り直したのか、ムサダは登校してきた。

教室のムサダの机の上には、相変わらず目的を達していない尿瓶が置かれている。こんな嫌がらせには慣れっこだという風に、ムサダは尿瓶を教室の隅に片づけ、尿瓶の下にあった書き物を丸めて屑篭に投げ入れた。

ムサダが川から這い上がろうとした時、手を貸そうとしたカサムとイオバが、振り返ってムサダの様子をうかがった。

ムサダはいつものように顎に手を当て、いつものような表情に変わった。その様子にむしろ安心したのか、カサムとイオバは向き直った。

午前中は、何事もなく済んだ。

×　　×　　×

「ホウ、ホホーウ！　午後は体育の時間だよ。この時間はタックルボールというボールゲームを行うことになっている。ゲームの先生は、タックルボールの選手をしているマーチという人なんだけれどね。エポカの世界では、学校の運営委員の協議によって誰でも先生になることができるのさ。フーミン先生もこのマーチさんも、こうして先生をしているんだ」

フーパの解説によると、このタックルボールというのは、カズマの世界のアメフトとサッ

カーが合わさったようなゲームであり、ボールを相手のゴールポストに入れれば得点になることはサッカーと同じだった。

クラスの全員がタックルボール専用の衣服に着替えて、校庭に整列していた。衣服はアメフトのような重装備には見えなかったが、フーパの説明では、それでも安全には十分配慮されたものであるという。

クラスの全員が、男女関係なく二組に分けられた。クラス全員は総勢二十人であるから、当然十人ずつのチームに分けられると思っていたら、マーチさんは十一人と九人に分けた。風邪が完全に治っているとは思えなかったが、ムサダも参加していた。

「ぼくらの世界では男女混成のアメフトやサッカーの試合なんて観たこともないよ。それに、先生はなぜ人数を半分ずつに分けないで、わざわざ十一人と九人に分けたんだろう？」

「ホ、ホホーウ！　これも博士の部屋で観た『スペース・ラグビー』と同じ理由だよ。スポーツ競技では性別、体重差、身長差が競技の勝敗に大きく左右する場合には、グループ分けをして対戦させるのが一般的だと思うけれど、これらの差があまり影響しないと考えられる場合にはグループ分けをせずに競技する。バスケットボールやバレーボールでは身長差がものを言う。卓球の試合などでは体格差は関係ない。性別よりも体格差の方が勝敗に影響があるならば、男女の区別はせずに体格が同程度の者同士で対戦する。皆が合意すればチーム編成とか、試合のルールを自由に変えても良いことになっているんだ」

カズマが首をひねっていると、フーパは説明を続けた。
「ホウ！　クラスの人数は二十人しかいないので男女別のグループにするとグループの人数が少なくなってしまう。同人数で二つのチームにするのが望ましいのだけれど、体重の著しく異なる生徒がいるので、今回は性別以上に有意な差のある体重を基準に、両チームの合計体重が同じ位になるように二つのチームをつくることにしたんだ。結果的に十一人と九人に分けることになったということさ」
「ラクビーのようなスポーツって取っ組み合いになるでしょう？　女の子が混ざっているのに大丈夫なの？　その～、試合にかこつけてイヤラシイことする奴なんていないの？」
「ホ、ホホーウ！　それと分かるような行為があった場合は、レフェリーが相手チームにペナルティを科すことになっているよ」
フーパは、何かこれ以上問題でもあるのかとでもいいたげな態度である。
カズマは、新聞やテレビのニュースなどで見聞きして、女性にとってセクシャルハラスメントというのは大罪のはずではなかろうかと思っていたのだが、フーパのあっけらかんとした答えになぜか呆れてそれ以上質問できなかった。
「ホッ、ホー！　『発明家』の部屋でハーマン博士がスペースラグビーを見ながら応援していたクーボという選手も女性だよ」
「え～！　皆小さく映っていたので分らなかったなぁ～」

そうこうするうちに試合が始まっていた。ムサダ、カサムとイオバは右側コートの陣営に属していた。左側コートの陣営には、クレオ、ラーケンとレナートが属していた。

カズマは、女子生徒が男子生徒に混じってどのようなプレーをするかが気になっていたが、プレーが始まると、おしとやかな女子生徒が変貌し、男子生徒に飛びつくやら、引っ張るやら、なぎ倒すやらの大変なものであった。

もちろん、試合中に男子生徒の手が女子生徒の胸を押したり、掴んだり、尻を撫でたりといった類の事態も頻発したが、女子生徒は意に関せずという風であった。そればかりか、男子生徒が女子生徒のキンケリを喰らってしばしうずくまるといった場面さえあった。

カズマは女のすごさを改めて知らされる思いだった。フーパがあっけらかんと言ったことが何となく理解できるような気持ちにもなった。

カズマは、今度はムサダのことが気になって、ムサダの動きを眼で追った。さぞ覇気のない動きをしているんだろうな――と思ったら、意外にも敏捷なのでびっくりした。

試合は一進一退の好ゲームであった。

そうこうするうちにタイムアップが迫ってきたが、事件が起きたのは、この時だった。

カサムとイオバが、ボールを抱えてゴール目指して駆け込んでいくクレオを追っていた。そのすぐ後ろにムサダとラーケンがいた。

カサムがゴール直前の十メートルほど手前で、クレオにタックルした。クレオはもんどり打って倒れこんだ。ボールはクレオの前に転々とする。右脇にいたイオバはすかさずボール

を追って走り去っていった。
　倒れたクレオの胸ポケットから、何か鎖のついたものが飛び出して落ちた。なんと、それはレナートがムサダの鞄から盗み出したあのペンダントであった。

「あれっ！　あのペンダントはクレオが古物店に売り飛ばしたんじゃなかったの？」

　クレオはペンダントを取るために慌てて手を伸ばしたが、カサムが未だ足に絡まっていたので手が届かなかった。すぐ後ろまで迫っていたムサダに、クレオの前に落ちているペンダントが目に入ったようだ。一瞬驚きの表情を見せたかと思うと、ペンダントを取り戻そうと、すぐにも絡まりあったクレオとカサムの前に出ようとする。
　クレオは、ムサダが迫っていることを知るや否や、側にいたラーケンに言った。
「ラーケン！　ペンダントを拾え！」
　ムサダとラーケンは、ともにペンダントを拾い上げようと先を争って滑り込み、手を出した。タッチの差でラーケンがペンダントを先に拾い上げた。そして、ラーケンはペンダントを拾うや否や、あろうことか校舎に向かって思い切り投げつけた。ペンダントは、彗星のように鎖の尾を引いて飛んでいき、校舎の壁に激突して粉々に砕け散った。
　これを見たムサダは、これまでの表情からは考えられないような物すごい形相でラーケンに飛びかかろうとした。起き上がっていたクレオが、とっさにムサダとラーケンの間に割っ

て入った。ムサダの拳はクレオの顔面を捉え、クレオはひっくり返って気絶した。顔面からは鼻血が出ていた。ムサダは怒りをあらわにして肩を震わせ、立ち尽くしていた。

一瞬の間を置いて、ラーケンとレナートは慌てふためいて校舎に駆け込み、教員室に向かった。

「フーミン先生いますかぁぁぁぁぁ～！」と二人は大声で叫んでいた。

この騒動で体育の授業は打ち切りになり、クレオは医務室に担ぎ込まれた。

×　×　×

ややあって、ムサダは執務室でフーミン先生と向かい合って座っていた。フーミン先生はムサダたちのクラスの担任でもあった。

ムサダは、以前のようにうなだれている。

フーミン先生は、ムサダに向かって「暴力はいけません」とか、「あと少しの辛抱だというのに……」と言って、大層な剣幕でムサダを叱りつけていた。

最後に、「ルール違反は厳罰の対象になりますが、今回は大目に見ておきましょう」と言って、ムサダを解放した。

「先生の言っていること、意味が分からないよ。『ルール違反』ってタックルボールのルールなのかな？」

「ホウ！　……後でわかるよ」

この時に限って、フーパは何も答えてくれなかった。

ムサダが教員室から出ていくと、しばらくたってクレオが現れた。そして同じようにフーミン先生の机の前に座った。

フーミン先生は、「大した怪我でなくてよかった」と言ってから、何やらクレオからあれこれ事件に至るまでの事情を聞き出している様子であった。

ひととおり話を聞き終わると、フーミン先生はニッコリ笑って、優しい口調で告げた。

「それでは、あとをよろしくね！　もう帰ってもいいですよ」

――いつの時代にもエコヒイキというのはあるものだな。一番悪い奴はクレオだ。なのにクレオには甘く、ムサダの扱いはあまりにも邪険じゃないか。はじめにフーミン先生を見た時は『思いやりとか気づかい』について、もっともらしい授業をしていると思ったけれど、言うこととやることが真逆じゃないか。学校の先生というものにはしばしばがっかりさせられることがあるけれど、エポカにもこんなことがあるんだ。これではあまりにもムサダが可哀想だ――

案の定、ムサダはまたまたえらく肩を落として家路についた。その30メートルほど後ろをつかず離れずカサムとイオバが歩いている。

×　　×　　×

翌日の朝になった。
昨日の今日だから学校を休むのだろうか――とのカズマの心配をよそに、ムサダが登校してきた。教室にはまだ数人しかいなかった。
教室のドアを開けると、クレオがムサダを待ち構えている。
ムサダが、「待ってくれ」というかいわぬ間に、昨日の借りを返すとばかりにクレオの拳はムサダの顔面を捕らえ、ムサダは仰向けにひっくり返った。倒れたムサダにクレオは何度も足蹴りを喰らわした。

昨日フーミン先生から二人とも注意を受けたばかりだというのに、何ということだろう――カズマは信じられなかった。

クレオの足蹴りが止むと、ムサダが再び口を開いた。
「話がある」
「何だ！　何か用か？」
立ち上がってから、さんざん蹴飛ばされて痛んだ足を抱え込みながら、ムサダは言った。
「用件は今日の放課後に上の公園で話す。あの二人にもそう伝えてくれ！」
あの二人とは、もちろんレナートとラーケンのことだが、二人ともいつのまにかムサダの

後ろにいて事の一部始終を見聞きしていた。
話が終わるや否や、今回殴られたのはムサダだというのに、またまた、なぜかレナートとラーケンは教員室に駆け込んだ。

――告げ口屋の嫌なガキ達だな――

「ところで、上の公園ってどこなの？　『上』というのは変だよね？」

「ホーウ！　別に変なことではないよ。屋上にある公園のことだよ」

午前、午後とも何事もなく終わったが、ムサダとクレオが交わした会話は「ムサダとクレオが放課後、公園で決闘するらしい」といった噂になって、クラス中の誰もが知るところとなっていた。

×　×　×

放課後になった。

校舎の屋上はまるで地上のようであった。というのも、見渡す限りの青空があり、ひとつの建物も見えなかったからである。公園には大きな木こそなかったが、道に沿って緑に覆われた低木や草花が茂り、テニスコートのようなものが近くにある。校舎の屋上は隣の建物と大きな歩道橋でつながれている。遠くの建物まで屋上をつたって行けるようになっているらしかった。近くのベンチで老女が座って春の柔らかな陽を浴びている。テニスコートのような場所では球技にいそしむ子供たちがいる。

学校の屋上の出口近くの公園で、クレオ、レナートとラーケンが待ち構えていた。
やがて、ムサダが現れた。やけに神妙な顔をしている。三人を見つけると、ムサダは近づいてきて、クレオの方ではなく、レナートとラーケンに顔を向けた。

カズマには、レナートとラーケンの表情がこれまでとうって変わって、何故かうろたえているように見えた。
そうだな、ラーケンは昨日、ムサダの大切なペンダントを壊しているからな。ムサダが怒り狂っていると思っているんだろうな――とカズマは自分なりの解釈をしてみた。
――だとしたら、次の瞬間にムサダがラーケンに飛びかかるんだろうか？――
しかし、そのような雰囲気はなく、何か不思議な空気が漂っている。
何か別のことが起きるように思えてきたが、カズマには何が起こるかは想像もつかなかった。

相変わらず、誰も何も喋らない。
春のそよ風が、ムサダのこめかみの髪をなびかせている。
やがてムサダの眼から、大粒の涙が頬を伝って滴り落ちた。

もうこれ以上のいじめは堪忍してくれという、哀願の涙なのだろうか？　でも妙だ。だと

すれば、ムサダはなぜレナートやラーケンのリーダーであるクレオの方を向いていないのか？　そういえば、思い起こすと、妙なことばかりだ。あのペンダントのことも、フーミン先生がムサダに話していたことも、カサムとイオバの挙動もおかしい。そして、クレオが側についているというのに、レナートとラーケンは、なぜこんなにもおどおどする必要があるのだろうか――とカズマは訝しがった。

実に奇妙な静寂がなおも続いた。謎は深まるばかりであった。

ようやくムサダがゆっくりと口を開いた。

「申しわけなかった。自分がしてきたことが、どれほど君たちを苦しめていたか……よく分った……よ……」

カズマは一瞬、自分の耳を疑った。頭の中がパニックになり、真っ白になった。

――いじめにあっていたのは当のムサダ自身ではないか？　言っていることが正反対ではないか？――

カズマは、頭の中が真っ白になって初めて、おぼろげながら事の真相が見えてきたような気がした。でも、だとしたら、そんなことってありえるのだろうか？――カズマが想像したことは、カズマの世界では許されることではないし、ありえないことだった。

そう、ムサダのこの言葉がすべてを物語っていた。

とたんに、レナートとラーケンのこわばった表情は一変した。そしてレナートが言った。

「ぼくたちも、ムサダに謝らなくちゃと思ってる。ぼくらの母さんたちの言葉を、無頓着に友達に喋ったりしたことを後悔しています」

続けてラーケンが言った。

「今回のことで、ムサダがどれほどお父さんや亡くなったお母さんを愛しているかもよく理解できたし、本当にすまないことをしたと反省しています」

フーパの話によると、レナートとラーケンがムサダからの執拗ないじめにあう発端になったのは、このことが原因であった。レナートとラーケンの母親は、現代社会風にいえば民生委員のような活動をしていて、ムサダの家を訪問した際、父親のラムダを責めたことで、ラムダから暴力を振るわれそうになり、ほうほうの体で逃げ帰ったことがある。

レナートやラーケンの母は、このことがあってから家族の者にラムダを「あの野蛮人」とか「人間のクズ」と呼び、「あれでは息子がぐれるのも無理がないわね」などと話したとのことである。

そんなことがあって、レナートやラーケンがムサダと同じクラスになった時、母親が言っているのと同じことを周囲の友達に話したことで、ムサダは怒り狂い、その後何かにつけてレナートやラーケンをいじめるようになったのである。ラムダのことをどうしようもないク

ズのような人間だといわれようとも、ムサダが父親を愛していることに昔も今も変わりはなかったのである。

レナートとラーケンはムサダに近づき、はにかみながら握手を求めた。

「ぼくたち友達になれるよね？」

ムサダは、あふれんばかりの涙で顔をくしゃくしゃにしていた。

クレオがムサダに近づいて、ポケットから何やら取り出した。なんと、あの粉々に砕け散ったはずのペンダントだった。

「騙して悪かった。君のお母さんの形見のペンダントだよ！」

ムサダは、泣いたり、驚いたり、喜んだりで、顔面が完全に壊れていた。

「ラーケンが壁に投げつけて壊したのは、イミテーションだったんだ」

ペンダントを返してもらったムサダは、死んだ母と再び向かい合うことができたかのように笑みを浮かべ、ペンダントをしげしげと眺め、優しくさすった。

「ホウ、ホホーウ！　カズマも、もう分かったと思うけど、クレオが古物店に行ったのは、盗んだペンダントを売り飛ばすためではなく、見た目に同じペンダントを買い求めるためだったのさ」

突然、ベンチに座っていた老女が、丸めていた背筋を真っすぐに伸ばしたかと思うと、杖をベンチに置いたままこちらに向かってきた。見ると変装したフーミン先生であった。

フーミン先生は笑顔を湛えながら言った。

「今回のトレーニングは予定よりも早くエンディングの時を迎えたようですね？　皆さん、長いことお疲れ様でした！」

「ホーウ！　真相は、ムサダがいじめっこで、レナートとラーケンがいじめられっこだったのさ。クレオがレナートやラーケンと一緒にムサダに行っていたいじめは、ムサダがイオバやカサムと一緒になってレナートとラーケンに対して行っていたことと似たり寄ったりだったんだ。カズマは、逆の立場の芝居を観ていたわけさ。今回は、度を越えたいじめをしたリーダーのムサダのみが懲罰的立場置換トレーニングの対象になっていたということなんだ」

先生は、クレオに「ご苦労様でした」と労いの言葉をかけ、「さすがに経験者は違うわねえ」と誉めた。

クレオも元を正せば、いじめっこで、フーミン先生が、クレオの経験を買って、今回のトレーニングを取り仕切ってもらっていた……とのことであった。

フーミン先生は、今度はレナートとラーケンに向かって言った。

「どう、いじめる側の立場に立った感想は？」

「はじめは慣れなかったけど、だんだんいじめをやることの自信がついてきました！」ラーケンが妙な返答をした。

「だめよ、味をしめて今度はいじめっこになったりしては！」

フーミン先生がラーケンをたしなめると、クレオがきっぱりと言った。

「先生、とんでもない！　俺がついていなければ、こいつらいじめっこになんかに到底なれっこありませんよ！　もっともっと鍛えないと」

「とんでもありません。誰も鍛えてやってほしいなどとは頼んでいませんよ！」

レナートとラーケンは苦笑したが、クレオにいわれたことが図星だったので、気をそがれて元のいじめられっこに逆戻りした。

フーミン先生は、今度はムサダの方を向いた。

「ペンダントが戻ってよかったわねぇ！　お母さんのペンダントは、今度もあなたを助けるきっかけになったわね！　大切にしないと罰が当たるわよ」

続いて、フーミン先生は後ろを振り向き、草の茂みに向かって大声で言った。

「イオバ、カサム！　こそこそ隠れていないで出てらっしゃい！」

イオバとカサムが、ばつが悪そうに姿を現すと、ムサダは途端に口調を変えて言った。

「お前らには見てほしくない光景だったよな。情けねえことに、涙なんぞ流す体たらくだ。恥ずかしくって穴があったら入りたいくらいだよ。それでも俺の言葉に二言はない。今後、こいつらを困らせたりするようなことは一切しないことに決めたんだ。お前らも今後、こい

つらに手出しはするな」

「兄貴の決めたことですから、仰せのとおりにします」イオバとカサムも、ムサダと同じようにヤクザ口調で答えた。

イオバとカサムは、かつて上級生からの陰湿ないじめにあっていた時に、何かにつけてムサダにかばってもらったり、助けてもらったりした恩義から、年上のムサダを兄貴として慕うようになったとのことであり、ムサダが懲罰的立場置換トレーニングを受けるはめになってからというもの、ムサダのことが心配で、陰ながら見守っていたというわけである。

「どうだった、今度のトレーニングを見守っていての感想は？」

「兄貴が気の毒で見ていられなかったです。でも兄貴はよく辛抱したと思います」とイオバがいうと、

「俺たちの身代わりになっていると思うと、とても辛かったです」とカサムがつけ加えた。

「ホ、ホ～ウ！　エポカではこのような立場置換トレーニングは、心の基礎体力を身につける一環として、相手の立場に立って考えてみることや人の性格に応じた感じ方の違いなどを学ぶために行われている。つまり、思いやる心の涵養教育として行われているんだ。

たちの悪いいじめなどが行われた場合には、今回のように懲罰を兼ねた体験トレーニングもある。他人の苦しみや悲しみを理解するというのはとても難しいことで、本人に置き換わってみる以外には理解できないものだからね。これは、排他的な考えを持つ人に、考え方を

変えてもらう有効な方策でもある。その意味で、この立場置換トレーニングは抜群の効果があるのさ」

フーパの話によれば、懲罰的でない立場置換トレーニングは人生の折目節目で、つまり青少年の間だけでなく大人になっても行われるとのことであった。

カズマは、ふとかつて自身がいじめにあった悪ガキの顔を思い浮かべて、妙な考えを思い立った。

「立場置換トレーニングを利用して、いじめられた仕返しをしようと企むことだってできるんじゃない？」

「ホ、ホ～ウ！　カズマの疑問はもっともだと思うよ。その辺が難しいところなんだ。このトレーニングを行う場合、初めに互いにしてはいけないことのルールを確認しておくことが大切なのさ。ルールを破る場合には、かなり厳しい懲罰もある。フーミン先生がムサダに『ルール違反』と言っていたのはこのことなんだよ」

「厳しい懲罰って、子供にも刑罰のようなものがあるの？」

「ホ～ウ！　エポカの世界では、子供と大人の世界は連続していて、カズマの世界のように二十歳とか十八歳といった年齢で扱いが分かれるといったことはないのさ。そもそも、未成年などという言葉はエポカの世界にはない。悪いことをした者は、大人に限らず誰でも更生的な懲罰が適用される。もっとも、同じような悪いことをしても、懲罰の内容は年齢や状況によって異なるけどね」

「ホホッホー！　それとね……」とフーパは大切なことをいい忘れていたかのように説明を続けた。

「社会の仕組みとの関連でいえば、自由に組織から抜け出すことができれば、いじめる者もいじめられる者も長くは存在できない。いじめられていると思ったら、自分の意志でいじめがあるような学校はやめてしまえば済む。レナートやラーケンもムサダがいる学校なんかやめてしまって他の学校に行けばよかったわけだ。

エポカの世界では、前に言ったとおり、誰でも自分が学びたい学校や教育を選べるようになっているけれども、レナートやラーケンはそうしなかった。彼らはこの学校の教育内容が気に入っていたからなんだ。それに、この懲罰的なトレーニングは被害者のためというよりも、加害者の社会的更生のためにあるもので、レナートやラーケンにも心の中に復讐心はあったかもしれないけれど、これに協力したということなのさ」

ホログラフィは未だ続いている。

「いじめっこを反省させ、二人のいじめられっこに自信を与えることに貢献したので、私からの評価としてポイントをあげます」

「いじめなんかして、ポイントを貰えるなんて思わなかったな」

「ムサダはどうだった。クレオを怨んでいるかな？」

「けっこうきつかったけど、レナートやラーケンの気持ちが分かったので、そうでなけれ

ば反省なんかしなかったと思うから……」
「クレオは、心を鬼にしていじめをやってたんだから、堪忍してね」
「先生！　そんなことないですよ。公認のいじめだし、地でいけたからけっこう楽しかったですよ」
「そんなふうに言うのなら、ポイントあげるのやめよーかな」
「冗談ですよ。ムサダに殴られてもいますしね。僕もひじょーに辛かったです」
「さーどうだか。まあいいでしょう。結果が大切ですからね」
「俺からも、ポイントをやるよ」と今度はムサダが言った。
「うっそー！　信じられない」
すると、学校の教室に降りていく階段付近から、拍手が聞こえてきた。見るとぞろぞろとクラスメートが屋上の公園に出てきた。そしてフーミン先生達七人を取り囲んだ。皆一斉に拍手を続けている。
拍手が止むと、「てれるなぁ～」とクレオが言った。
「むしろ、ムサダへの拍手だと思うけど」フーミン先生が言った。
「こういう光景って、俺の一番の苦手なんだ。明日からどの面下げて学校に来ればばいいんだよ！」今度はムサダが、バツが悪そうに言った。
「ポイントというのはぼくの社会ではお金みたいものでしょう？　先生が生徒にお金を与

えるようなことをしてもいいの？」

「ホ、ホホ～ウ！　エポカ世界の配当というポイントは、人徳のような『徳』と損得のような『得』が一緒になっているようなものなんだ。カズマの世界では、まったく別々のものかもしれないけれどね。人の役に立ったり社会に貢献したりすれば、人は誰でもポイントがもらえるんだよ」

カズマは、人徳と損得が同じポイントで扱われるというフーパの説明を聞いて、狐につままれたようなちんぷんかんぷんの話に思えた。首をひねっていると、フーパはさらに説明を続けた。

「ホホ～ウ！　そうだね、カズマの世界の人にはとても理解できないことだと思うよ。カズマの世界とエポカの世界とは社会や経済などの仕組みが全然違うからね。エポカの世界は、フラットで境界のない社会なのさ。『徳』と『得』が同じ意味を持っているのは、この仕組みによるものなんだ。このことも、いずれ機会を改めて話すことにするよ」

フーミン先生はムサダに語りかけていた。

「あなたのお父さんのことだけど。あなたの苦しみも分かるけど、そのはけ口をいじめに求めたりするのは、感心できることではないわね。ああ、この問題は、とりあえず一件落着したんだったわね。でも、いつでもお父さんを勘当できるのに、辛い目にあってもじっと耐え忍んでいる姿は見ていられないのよ。一度カウンセラーと一緒にお伺いしてもいいかし

ら？　今回の件について、お父さんに報告もしなければと思っているし……」

フーミン先生の話は更に続いていたが、ホログラフィは次第に薄くなって消えていった。

……

この本を書いた後で、ここで取り上げたテーマ「いじめの立場置換」に関連するテレビ番組があったので簡単に紹介しておくことにします。

ＮＨＫテレビが二〇〇七年十一月二日の夜に放映した「ＮＨＫ日本賞」の選考に関するドキュメンタリー番組である。日本賞が作られてからこの年は第三十四回目にあたるとのことであり、受賞作品は次のものであった。

- 番組名：特別授業 差別を知る ～カナダ ある小学校の試み～
- 機関名：カナダ放送協会 ／ カナダ

この作品の内容はおよそ以下のようなものであった。

担任の先生がクラス全員を背の高さによって二分する。背の低い方のグループに赤いチョッキのようなものを着せて「背が高い子供はダメな生徒」ときめつける。当然子供達は、背の高い子供を差別していじめることになる。そして一定期間経った後で、先生が「先生の思い違いでした。ダメな生徒は背の低い方です」として、チョッキを着せ替え、背の低い子供と高い子供の立場を入れ替える。なんとも子供とって精神的に酷い実験である。そして最後

に先生が「友達をいじめることといじめられることの問題を知ってもらうための実験」であったことを打ち明ける。すると子供たちは一斉においおいと泣き出す。そして二度といじめはしたくないという。

ＮＨＫ賞の審査員は日本人だけでなく外国人もいた。ＮＨＫ賞の選定にあたって日本人の審査員はこの作品に賞を与えることをためらったが、外国人審査員が非常に社会的にインパクトのあるテーマであることなどを理由としてこの作品をＮＨＫ賞とすることを強く推奨した。審査員の一人の外人女性が「この番組が提起した問題には普遍性がある」と言っていたことを記憶している。

確かにこのような実験は危険性が伴う。学校教育でやっても良いことと悪いことがある。日本人の審査員の目からは、児童教育を逸脱していると見えたのであろう。しかしこの実験は「いじめられている相手がどのような辛い想いでいるのか」だけではなく、様々な相手の立場を理解してもらうには、立場を置き替えて体感してもらう以外には理解することができないのではないかということの貴重な試みだったのではないかと思う。

食　堂　不老長寿

カズマは、溺れて死ぬような目にあったり、三つの映画のようなものをたてつづけに観たりということで少々くたびれてきた。そんな時、カズマのお腹が「グー……」と鳴った。

「いろんなことを見聞きしていたので気がつかなかったけど、そういえば腹ペコだな～」

「ホウ、ホホー！　そうだね、このへんで食事にしようか。一旦ヘルメットを脱いでもいいよ」

「こんな海の底で食事ができるの？」

「ホー！　客人を空腹のままにするわけにはいかないだろう」

フーパはファサファサと羽ばたきながら、周囲を岩石で囲まれた曲がりくねったチューブの回廊を案内した。フーパが辿り着いたドームは、小さな洞窟に押し込められたような場所にあった。

「あれ、この部屋のドアは透き通って見えるけど」

「ホウ～！　ここが食堂だよ」

食堂の入り口の床は、四角いブルーのタイルが敷き詰められている。

「どうして、ここだけブルーのタイルになっているのかな？」

「ホウ、ホホー！　カズマの身長や体重を調べるコーナーなんだよ」
「え！　何で？」
「ホウ！　今に分るよ」
バイキングスタイルの小さな食堂で、およそ十人分のテーブルが並んでいたが、食事している者はいなかった。ほとんどのドームは巨大な洞窟の内部にあるのだが、この食堂のドームは海溝の壁に面しているようで、部屋の片面に並んでいる円形の窓から海底の景色が見えるようになっていた。
「窓があると、外から発見される可能性があるんじゃないの？」
「ホーウ！　普段は、岩の扉で閉じられているんだ」
「なるほど」
「ホホーウ！　好きなものを選んでいいんだよ」
「エポカ世界の料理なの？」
「ホーウ！　そうだけど……食材はもちろんこの地球のものだよ」
「へぇ～」
厨房に人影のようなものが見えたので、カズマは厨房の奥に目を向けた。
「ホ、ホーウ！　アンドロイドの料理人だよ」
「話してかけてもいいかな？」
「ホーウ！　残念だけど、彼はエポカの言葉しか話せないんだ」

「残念だなぁ」といいながら、カズマはアンドロイドに手を振った。

アンドロイドの料理人もカズマに手を振って答えてくれた。カズマは可愛い女生徒が手を振って答えてくれたかのような喜びを感じて、顔が思わずほころんだ。

カズマは楕円形の盆を取り、その上に皿、コップ、フォークやナイフを適当に選んで乗せてから、どんな料理があるのかひととおり眺めてみた。

カズマは、元々食べ物の名前もそれほど知っているわけではなかったので、何が何だかは良く分らなかったが、今までの料理と特別異なっているようには見えなかった。

好物のステーキ風の肉片、ミートボール、シーフードスペゲッティ、グラスにあったアイスクリームとおぼしきものを皿に盛った。カズマは肉と名のつくものには目の無い方であった。

バイキング料理が並んでいるコーナーとテーブルの並んでいる場所を仕切るように、床にそれぞれ一メートルほどの緑色と黄色のタイルの帯があった。その緑の帯に足を踏み入れると、「カロリーは〇〇です。蛋白質のとり過ぎです。栄養バランスもよくありません。ビタミンCを沢山含んでいる××番号の海草をお勧めします」という声がした。

カズマは、入り口で身長や体重を調べられたのはこのためかと合点した。

そして、不服ではあったが、お節介な忠告に従いシーフードスパゲッティを諦め、なんだか良く分らない海草を皿に盛ることにした。今度は、「カロリーは〇〇です。栄養バランスもまずまずです」と緑のゾーンが言った。

黄色のゾーンに踏み込むと「五百ポイント頂きます」という声がした。
カズマはエポカでいうポイントは『お金』のことを意味していることを知っていたので、
「えぇ～！　この食堂有料なの？　エポカのお金なんか持っているわけないだろ～」とフーパの顔を見て困惑気味に訴えた。
すると、「ですが、カズマは客人なので、ポイントは不要です」黄色のゾーンが言った。
「意地悪だなぁ～」
「ホッホー！　ちょっとからかってみただけだよ。でもエポカの世界では、このようにして誰でも自動的にウェアラブル通信機器を通じてポイントを支払わされるんだ」
「ウェアラブル通信機器って、なんのこと？」
「ホーウ！　身につけることのできる通信機器だよ。携帯電話のようなものを想像すればいいかな。個人の識別は生体識別と言って、こういった通信機器が人の様々な特徴から相手のＩＤと呼ばれているコードをＧネットから入手しているんだけどね」
カズマは深海の窓を向いて座った。綿雪のようなものが流れていた。遠くを見ると連凧のような見たことも無い生物が泳いでいて、地獄の奥底にでもいるような妙な気分にさせられた。
「深海の生物って、ぼくらが普段海で見かけるものと全然違うんだね」
カズマは初めに好物のステーキ風のものを食べて見た。歯ごたえはそれなりで結構美味しかったが、牛肉の味がしなかった。

「これ何の肉？」
「ホ、ホウー！　それ肉のように見えるけど、海草で出来ているんだ」
「海草？」
「ホ、ホウー！　ここの食材は全て海のものなんだ」
カズマは次にミートボールのようなものを食べてみた。
「これは魚の肉でしょ！」
「ホ、ホウー！　当たりだよ。でも肉だけではなく頭、骨、目玉も内臓も入っている。エポカの肉や魚の料理では、肉食の野獣が捕らえた獲物をあますところなく食べてしまうように、身体の全ての部分を料理に盛り込むようにすることが多い。その方が栄養もあるし、廃棄物も出さないで済むからね。それと肉や魚料理はいつもあるとは限らないけど、カズマは特別のお客様だからね」
「普通の肉や魚なんかぼくらの世界では高価な食材でもなんでもないけど。エポカでは少ないの？」
「ホホー！　そうじゃないんだ、カズマの世界よりも陸上の動物や魚もたくさんいると思うけど、エポカの人々は基本的に菜食主義なんだ」
「菜食主義！　へぇ～……ベジタリアンなんだ」
「ホウ！　正確にいうと、エポカの人々が菜食主義者なのではなく、エポカの世界が菜食主義を奨励しているんだ」

「どうして？　動物や魚もたくさんいるというに」
「ホ、ホホーウ！　食事が終わったら、後ろのホログラフィを見ながら説明するよ」
フーパにいわれて後ろを振りむくと、背面の壁際にホログラフィの装置があった。
カズマは振り向いた頭を元に戻して、食事に専念することにした。
「ホーウ！　我輩も食事を済ませておこうかな」とフーパは言って、部屋の隅にある大きな鳥籠に飛んでいき、籠の中の止まり木にちょこんと足をかけた。
フーパが身体を丸くして踏ん張ったと思ったら、キンコーンという音がした。
「なんなの、今の音は？」
「ホーウ！　食事時に済まないけれど、ウンチのようなものさ！　使い古しのバッテリーなんだ。カズマの世界のものよりも桁違いに強力なものだけどね」
排泄した丸いバッテリーが落ちて弾ける音が鳴り止むと、コンコンと皿を突付く音がして、フーパは新しいバッテリーの餌を摘んでは飲み込んでいた。
カズマは皿に盛ったものを隈なく平らげ、アイスクリームのようなものを舐め、最後に水を飲んで食事を終えた。フーパの方も、何とも味気ない食事を済ませていた。
「ホホ、ホーウ！　少し休まなくてもいいかな」
「うん、大丈夫だよ」

×　×　×

カズマはヘルメットを被り直し、ホログラフィと向かい合った。ホログラフィにはかわる

がわる様々な服装をした人、男性や女性、皮膚の色が異なる様々な人種の人が映しだされていた。一巡すると、また同じ順番で様々な人を映し出した。

「ホ、ホホーウ！　映っている人の順番に注目して欲しいんだけれど、よく見るといろんなことが変化していることに気づくはずだけど」

カズマは、フーパのいう『変化していること』を発見するため、目を凝らしてホログラフィを見つめた。

初めに四桁の数字が表示された。これは見るからに年号だ。それから子供の男女、成人の男女、老人の男女、計六人の姿が現れ、それぞれの人の下には三つの数字が記載されている。この六人が消えてなくなると、また六人が現れ、同様に各人に三つの数字が記載されている。これが幾度となく繰り返された。

カズマは見たことを頭の中で整理してみた。三つの数字のうちの一番上の数字は、年齢に対応しているようで次第に数字が大きくなっていくが、人のサイズ差は無くなっていく。下二つの数字も人のサイズに比例しているように見えた。しかしこの数字は少しずつ小さくなっていった。

初めのうちは明らかに子供、成人、老人だったが、後の方になると、見た目の年齢差が少なくなってきた。背丈は皆徐々に小さくなっているような気がした。服装などもかなり違ってきている。

カズマは気が付いたことを整理し、フーパに伝えた。

一番目

● 時代の順番に人物が登場してくること。

二番目

● 人の下に記載されている一番目の数字は年齢だと思うが、初めのうちは子供、成人、老人が識別できたが、老人の年齢が百五十歳とかになっていた。

三番目

● 二番目と三番目の数字は人のサイズのように思う。体格が次第に小さくなってきて、大人と見えるにもかかわらず最後に現れた人はカズマとあまり変わらないくらいの背丈になっていた。気のせいか胴長短足になっているようにも見えた。

四番目

● 初めのうちは白人、東洋人、黒人といったように人種が判別できたが、最後の方になると肌の色や顔つきを見ても人種が分からなくなっていた。

五番目

● 服装が背広、ワイシャツ、ネクタイ、ハイヒールといったフォーマルなものがなくなり、バラエティに富んだものに変化していた。

「ホホーウ！　えらい！　そのとおりだよ。それでは何故そうなったかについて、考えてみてくれないか。二番目と三番目のことは密接に関連していてややこしい問題でもあるので、

四番目のことからいってみようか」

「なんか、試験問題みたいになってきたなぁ」

カズマは、これまで見てきたホログラフィを思い浮かべながら考え込んだ。

「四番目の、人種が分らなくなってきたことはエポカの世界で『国』が無くなったことが原因だと思うけど」

「ホーウ！　正解だよ。『国』が無くなり、『国境』が無くなって人の移動が自由になったため、人種間の交流が盛んになり、混血が普通のことになったからなんだ」

「ホーウ！　五番目のことは、まだカズマが見聞きしていないこととも関連しているんで、難しいかもしれないけれど、答えられるようだったら答えてみて」

「五番目は服装のことだったかな。服装のバラエティが増えたということは、社会的な『選択の自由』が大きくなったことと関連しているように思うけど」

「ホ、ホホーウ！　そうだね、現時点での答えとしてはそれでＯＫだよ。いずれ詳しく話すけれど、背広、ワイシャツ、ネクタイ、ハイヒール、礼服などと一緒に様々な虚礼が無くなったことは、世界が『拝金』社会でなくなったこと、社会全般が民主主義的になり、いろんな制約や権威が無くなったことが理由でもある。カズマの世界では、『お客様は神様です』というけれど、実際には、お客様は『カモ』にすぎなくて、『お金が神様』だよね。様々な権威やステイタスから解放されて、形式主義的な社会から実質主義的な社会になり、上司や得

意先の顔を気にして真夏でも背広を着たり、葬式で判を押したような喪服を着たりといった習慣とか、形ばかりの礼節を守る必要がなくなったんだ」

そういえば、望月部長はくそ暑い夏でも必ず背広を着ているな、ステイタスってやつは暑苦しいものなんだ――とカズマは望月部長の姿を思い浮かべた。

「ホーウ！　それでは、元に戻って二番目と三番目に気付いたことにはどうかな」

「二番目は年齢に関することですよね。さっきの『親の勘当』のエポカ誕生の経緯のところで観たけれど、長寿薬の普及や医療技術の高度化などによって人間の平均寿命が百歳をはるかに超えるようになったからですよね。けれど三番目の人間のサイズが少し小さくなった理由は思い浮かばないな」

「ホホーウ！　実は両方とも人口問題に関連している。ここで、『親の勘当』で質問された、殆どの場合『一人っ子』であることについての説明しておくことにしよう。『一人っ子』、『人間の小型化』、『菜食主義』はみな人口対策なんだ。地球の資源と環境は有限だから、船の積載量に制限があるように宇宙船地球号の乗組員の人数と体重に制限を設ける必要があるわけさ」

「へえー！　そうなんだ」

「ホホーウ！　ここで、地球の人口がどのように増えてきたかその推移を辿ってみよう。人類の誕生から中世と呼ばれる頃までは、人口の増加量も増加率も比較的ゆるやかに推移してきたけれど、西暦一八〇〇年以降の人口の増え方は尋常ではない。幾何級数的な増え方だ。

西暦一八〇〇年から一九二〇年の八十年間で十億人から二十億人に倍増し、一九六〇年から二〇〇〇年の四十年間、つまりこの僅か半分の年数で三十億人から六十億人へと加速・倍増している。産業革命以降の生産力の飛躍的増大によるものだ。

人間以外の動物は非常につつましやかに生きている。生きるためのエネルギーは動植物から得るが、必要以上には取らない。爬虫類や魚類などの変温動物の体重当たり消費エネルギーは哺乳類や鳥類などの恒温動物の僅か三十分の一に過ぎない。ところが、人間はヒトサイズの哺乳類の四十倍ものエネルギーを消費する。だから、変温動物の一二〇〇倍ものエネルギーを消費していることになる。こんな動物が異常繁殖したわけであるから、地球にアラームが鳴るのは当然のことだ。資源の大量消費や環境汚染がとめどなく進行することになった。

地球の歴史は生物種の大量絶滅を幾度となく繰り返してきた。その原因は、地球全体が雪玉のように氷ついたり、火山の大噴火があったり、小惑星が激突したりしたことが原因のようだ。そして今また生物種の大量絶滅の時代になっている。今回の大量絶滅は人類という地球の寄生生物の大繁殖が原因だ。人間は自然的な地球環境をとめどもなく破壊し続けることで、自らの生存をも脅かす様々な環境改変を招いている」

「このままでは大変な事態になるのは分かるけど、世界の経済先進国といわれている国では、人口増加が止まってきている。だから、貧しい国も経済発展すれば、人口増加が止まるようになると思っていたんだけど違うの？」

「ホホーウ！　確かにそうだったね。経済先進国といわれている国では子供ひとり当たり

の養育費や教育費が嵩むようになったり、子供の養育のために自分の楽しみを犠牲にすることを嫌がる人が増えたりということで、避妊薬や避妊器具を利用して、以前のようには子供を産まなくなってきた。

けれども世界全体でみると人口増加には歯止めがかかっていない。確かに人口の多い発展途上国が経済的に豊かになると共に避妊薬や避妊器具が普及すればいずれ人口増加の伸びは鈍化するかもしれない。

一人の女性が一生に生む子供の数のことを合計特殊出生率というんだけれど、この特殊出生率が同じでも寿命が延びれば人口は増える。人口はこの特殊出生率と寿命の長さで決まる。

人間の平均寿命は中世の頃までずーと三十歳くらいだったようだ。平均寿命が日本で五十歳を超えたのは戦後になってからのことで、それが今では八十歳を超えている。

更に、遺伝子の解読、ＩＰＳ細胞を利用した再生医療、様々な医療技術の開発、寿命を大幅に伸ばす長寿薬などの開発によって人間は不老長寿化しようとしている。そうなると、高齢になってもなかなか老化しないわけだから加齢に伴う老人病が少なくなる。病気の多くが予防され、病気になったとしてもかたっぱしから高度な医療技術で死に至る前に治されてしまう。秦の始皇帝や邪馬台国の卑弥呼が不老長寿の薬を追い求めたという。こんな夢のような薬や医療技術を誰でもが容易に利用できる時代になる。このため子供の合計特殊出生率が低い経済先進国でもいずれ長寿化によって人口が増加に転じることになる。

寿命に変化がなく合計特殊出生率が二以下であれば人口は増えない。寿命が長くなってい

く場合には、この特殊出生率を二から一に近づけていかなければ人口を抑制できない。仮に人間が不老不死になった場合、つまり永遠の命をもつようになった場合でもこの特殊出生率を一に固定できれば、徐々に子供が少なくなっていって、最終的にはそのような政策の開始時点の二倍の人口に収束する。しかし、その時点で子供は一人もいなくなる。

エポカ世界では平均年齢は二百歳近くにはなってはいるがまだ不老長寿状態にはなっていない。合計特殊出生率が二程度の状態のまま寿命が延び続ければ人口は増える。地球は既に人間が多すぎる状態になっているので、一人っ子の奨励によってこの特殊出生率を一に近づけようとしているわけだ。『二人以上の出産禁止』という強制ではないけれどね。人口が適正規模にまで落ち着いたら、この『奨励』は解除されることになっている。それでもこの『奨励』の呼びかけに至るまでに結構もめたね。エポカ世界の『選択の自由を可能な限り広げ、他人の選択の自由を制限する行為を可能な限り排除する』という理念と矛盾する問題であったからだ。

こんなわけで、エポカの世界は超少子高齢化社会なんだけれど、長寿薬などのおかげで年をとっても若々しく元気にしている人が多い」

「平均寿命が二百歳ちかい……信じられないな」

「ホーウ！　寿命が三十歳くらいだった昔の人が、現在の日本人の平均寿命が八十歳以上という話を聞いたら、カズマと同じように驚くだろうね」

「えーと、『一人っ子』の意味なんですが、再婚して子供を産む場合はどうなるんでしょう

か？　離婚した女性との間に子供のある男性が初婚の女性と再婚した場合には、初婚の女性にとっては一人目でも再婚した男性にとっては二人目ですよね。逆の場合、女性が初婚の男性を相手に結婚・離婚を繰り返す場合にはどうなるのかな？」

「ホホーウ！　この『一人っ子』は『男性にとっても女性にとっても一人』という意味だけどね。そうでなければ男女間で不平等が生じる。だから初婚で子供をもうけた場合、離婚してから再婚しても『奨励』に従うのであれば、子供をつくることはできなくなる。だから安易に離婚や再婚ができないことになる。愛する相手との間での子供が欲しいというは無理からぬ話なので『推奨』どまりになっている」

「難しい話ですよね。いずれにしても不老不死の社会では人が死なない。地球の資源や環境は有限だから無制限に人口を増やせない。だから、不老不死の社会では最終的には子供がいなくなってしまうんだ」

「ホホーウ！　不老不死の社会はこのようなとんでもない社会になることが分かっている。その手前の不老長寿の社会のありかたについてもエポカ社会で大問題にされている。人間はただでさえ不自然に長生きしすぎているのに、自殺か不慮の事故などでしか人が死ななくなっていくのだからね。

エポカでは、

- 不自然に人間が生きながらえることは種の本来の姿に反しているのではないか。細菌などの環状ＤＮＡの生物と異なり、直鎖状のＤＮＡをもつ生物は雌雄を持つこと

で、交配可能になり、バラエティに富む遺伝子をもつことができ、環境変化に対応して進化し易くなった。個体としての永遠の命を放棄する代わりに、遺伝子を変化させて世代交代することで種の発展の道が拓かれた。長すぎる寿命は子孫に残すべき資源や環境をいたずらに貪ることにもなる。

●　不老長寿をもたらすような薬は、女性が子供を産まなくなったり、年齢構成が逆三角形になったり、自然界の動物では考えられないような状態になる

●　このため、人間社会を歪んだものに変貌させ、ことによると、科学技術信仰の驕りが人類を滅亡に導くことになるのではないか。

というようなことが危惧されている。けれども、このような考えとは反対に次のような意見もある。

●　誰にとっても生を受けた命は何にもまして大切なものであり、いつまでも若くて健康であり続けたいと考えるのは無理からぬことではないか。

●　種の意志なるものがあるとしても、何故人間の意志が種の意志を超えてはならないのか。そのような理由などないのでは。

●　長年、人間は自然の摂理に逆らうことばかりを自由に行ってきた。不老長寿の薬に限って、自然の摂理に反することは行うべきではないというのは理解できない。

●　種の存続のためには環境に適した遺伝子が選択される必要があり、それが今までは自然淘汰であった。しかし、人間は自然淘汰よりも効率的な人工的遺伝子選択を行

っている。環境への適応能力が問題であれば、遺伝子操作によって対応することだってできるのでは。

ということなんだけれど。自然の摂理に反するので、長生きできる人生を途中で打ち切って所定の年齢に達したら死ぬべきだなんて、姨捨山みたいなことは言えない。悩ましい問題だよねぇ」

「人間が不老長寿になったら、社会はどんなふうになると考えているんですか」

「ホホーウ！　多分こんなことになるかな。

● 宇宙船地球号の定員を守るためには、人の誕生は人の死とワンセットでなければならなくなる。一人っ子の奨励などという生ぬるいものから厳格な出産禁止政策が採用されることになる。

● おそらく、誕生する命は死んだ人の遺言などによって決めることになるのではないかと思う。

● 女性は月経が始まった後で不妊治療を受けるようなことになる。死んだ人の代わりに誕生する命は冷凍保存された卵子や精子を使用するかＩＰＳ細胞から子供を再生するようなことだってできるようになるのかもしれない。

● 女性は出産や育児から解放されるので、性を理由にしたあらゆるハンディがなくなる。

● 家族には子供はいない。したがって、家族という形態が成立しなくなる。子供の代

わりに動物やアンドロイドを家族代わりに扱う人が多くなる。

- かすがいとしての子供がいないので、男女のカップルは性愛だけが絆になる。老いることのない肉体をもっているので、生涯同じカップルのままでいるケースは少なくなる。
- 人生は何度でもやり直しのきくものになる。だから異なった人生、異なった職業を仕切りなおして開始できるようになる。
- 子供の誕生は極めて希なことなので、教育システムが根本的に変化してしまう。子供の教育は専門家による個人教育になり、教育の大半は成人のためのものになる。

といったような社会の姿になるんじゃないかな。

大変なことは、このような状況になった時に、人口管理を誰がどのように行うのかということだ。利害を異にする国などというものが存続している状態で不老長寿社会に突入すれば、乗員枠の確保や資源の確保のために様々な争いが起きてとんでもない事態になるかもしれない」

「夢のような不老長寿の薬を皆が栄養剤でも呑むように服用するようになれば人間の社会は異次元のとんでもない世界になってしまうんですね」

「ホーウ！　ならば、このような薬を使用禁止にできるだろうかということになる。自分の命と人類の未来を天秤に掛けて自分の命を優先させるようなことになる」

「三番目の人間が小型化していくのも、エポカ世界の方針によるものですね」

「ホホーウ！　成長の限界に達するには未だ多少時間があるかもしれない。これまでの状態が継続して食料事情が良くなっていけば人間の体格は大きくなり、体重が増えていく。人口増加だけでなく体格が大型化することは、世界中の人間の総重量の止めどない増加になる。有限なこの星の資源の大量消費、動物の乱獲、森林破壊、膨大な化石燃料の消費、環境汚染物質の大量排出、干潟の喪失、水質汚染などをもたらすことになる。他の生物から見たら人間という地上の巨大生物が我が物顔で跋扈し、資源を食い荒らし、生態系をとめどもなく破壊しているということになる」

「人間って巨大生物なの？」

「ホーウ！　そうだよ、人間はこの惑星の巨大生物なんだ。人は皆、自分自身を基準に考えるからそうは思っていないかもしれないけれど……ネズミのようなものだってちっとも小型生物なんかではない。鯨や象はそれぞれ海と陸の超巨大生物ということになる。

ということで、人口増加の抑制と抱合せて人間のサイズを積極的に小型化することで地球上の人間の総重量を減らそうというわけだ。ことによると危機の先送りに過ぎないのかもしれないけれど、できることは何でもやっておこうというわけだ」

「不老長寿の薬の開発ができるくらいならサイズを縮小する薬だって開発できるんではないですか？」

「ホホーウ！　もっともな質問だね。成長ホルモンをコントロールする薬の開発なんてのは朝飯前の話になるかもしれない。けれど、人は勝手なもので、不老長寿の薬はＹＥＳでも、

無理やり成長を止めるような薬を一律に全ての人に呑ませるようなことには殆どの人がＮＯという。成長ホルモンのコントロールは、もっぱら体格の凸凹を是正するために利用されることになるだろう。巨人症や小人症の人を含めて背丈が大きすぎる人や小さすぎる人の悩みを解決するためには使用されるけれど、一律に背を低くしてしまおうということには賛同を得られるものではない」

「菜食主義は食料問題の解決のためですか」

「ホーウ！　まあそうだね。菜食主義は食料の総量を増やすことを目的にしている。この菜食主義に関しても『一人っ子の奨励』と同様にエポカの世界でも多くの反対者がいて、もめにもめた結論だった。それで、菜食主義はエポカ世界の理念にはなっていないけれど、『奨励』という位置づけがなされている。

『人間の数×人間の平均体重＝人間の総重量』を減らさなければならない。ところが、選択の自由が優先される社会では望ましいことではあっても、本人の意志に反することを強制はできない。それで、廃棄物のリサイクルや資源の効率的利用を進めることと合わせて、ひとり当たりの体重を減らそうということになった。巨大で数も多いということは、この星にとって罪深いことなんだ」

「なんか未来の社会はバラ色かと思っていたけれど、僕らの社会とは次元が違う大きな問題を抱えているんですね」

「ホウ、ホーウ！　ホログラフィの初めに出てきたのは、菜食主義が『奨励』される前の

人間の男女合わせた平均的な体格で、身長一八五ｃｍにもなっていた。最後が身長百五十センチメートルの人間だ。身長が三十五ｃｍ小さくなれば、体重は身長の三乗で減るから、体重が五十％近くも減る計算になる。ホログラフィに出てきた下の三つの数字は、カズマが考えたとおり年代と平均身長と体重なのさ。すると、それだけで食料、衣類、建物などに必要な資源の消費を大幅に減らせることになる。

　ということで、人間の体格を小さくすることにより資源の消費を抑え、この惑星の環境を守るために菜食主義を『奨励』することになった。蛋白質を得るための効率から考えると、肉食のひとり分は菜食の二十人分に相当する。菜食主義は、食料の総量を増やせるだけでなく、人間の小型化を促すことによって、地球に生息可能な人口容量を大きくすることができる。人は食料を得るために、牛や家畜などの放牧によって広大な森林を伐採したり、魚の乱獲などによって生態系を破壊したり、多くの生物種を絶滅させてきたからね。人間が小型になっても、ロボットやアンドロイドがいるので、力仕事で不自由することもないし……。

　それと、菜食主義が広まった理由がもうひとつある。人間が様々な動物の声やしぐさの翻訳機能を開発し、多くの動物と会話ができるようになった。会話可能な相手を食用にするのは気の引けることだからね」

「いろんな動物と会話できるようになるんですか。とても面白そうですね。でも、野菜、果物や海草しか食べなければ異常に増える動物もいるんじゃないの？」

「ホウ、ホホホーウ！　異常繁殖する動物が出てきて、生態系が狂うことが予想される場

合には、当然捕獲することになるよ。菜食主義というのは『望ましい』ということであり、肉食は一切しないということではなく、こうして捕獲した動物は食料にする。それと菜食主義によってどれだけ人間が小型化するかということだけど、肉食はしなくても食べる量が増えれば元も子もなくなる。人間を小型化するには、菜食主義の外にもいろいろな手を打たなければならない」

「たとえば、どんな手があるの」

「ホホ、ホホーウ！　さっきの『いじめ』のホログラフィのタックルボールでは、敵味方の競技人数が違っていた。身体が大きいことが必ずしも有利とはならないようにスポーツのルールを変更したり、さっきカズマが料理を選んだときに栄養の取りすぎを注意されたけれど、あんな具合に指導したりするようにしている」

「そうだったの。ところで、一人っ子にすることや菜食主義はいずれも『奨励』で罰則などはないわけですよね。エポカの人たちは皆おとなしく従っているんですか？」

「ホーウ！　エポカでは法律で強制することが個人の選択の自由に反するような場合に、このような形式で人々を方向付けることが多い。望ましい方針が出される以前は多くの議論があるけれど、問題を十分理解してもらうことで、大抵の人はこれらの方針に従っている」

カズマは、まさか食事のあとにテスト問題に答えさせられるとは思ってもみなかったので、せっかく食べた物がどこかに行ってしまったような気がした。未来が抱えるとんでもない問題に深刻な気分になった。気分転換のため窓から深海の生き物達を観察することにした。

そうこうするうちに、「ホーウ！　それでは、そろそろ次のドームの部屋に行こうかな」とフーパが声をかけてきた。

……

二〇一五年一月のＮＨＫのテレビ番組、「ＮＥＸＴ　ＷＯＲＬＤ　私達の未来(2)―寿命はどこまで延びるのか―」を観た人も多いのではないかと思うが、寿命革命がおきているのとのことである。この番組では、長寿遺伝子の発見、３Ｄプリンターを活用した臓器製造による再生医療、手術ロボット、ナノマシーンによる病気の監視と根絶などの話が出てくる。副作用が問題とされている抗がん剤も、ナノテクノロジーが発達すれば、がん細胞にのみ作用するようになるという。日本でも研究されている「体内病院」はまさに夢の技術のようだ。

これらはいずれも人間の寿命を大幅に伸ばす作用がある。老化を止め、病を治し、病を予知する時代が到来するとのことである。このうち、特に気になったのは、長寿遺伝子（ＮＭＮ）についての話である。

ビタミンＢ３（ナイアシン）の一種であるこのＮＭＮには、加齢によって低下するさまざまな機能を活性化させる「若返り」の効果があるという。

ＮＭＮは若返りのために視床下部から指令を出す７種類のサーチュイン遺伝子なるものを目覚めさせるという。このＮＭＮはアルツハイマーにも有効だとのことである。すでにマウ

スの実験で実証済みであるようで、生後二十二カ月のマウスが生後六カ月に若返ったという。これを人間の年齢に換算すると六十歳が二十歳に若返ったことに相当するらしい。早ければ年内にも臨床試験を行う予定になっていて、既に日本の食品メーカーがＮＭＮの大量生産体制を準備している。

第四の部屋　市長の選挙

「ホホーウ！　今度の話は政治や選挙に関する話なんだ。政治というと、カズマの世界では子供には直接関係ないと思うかもしれないけれど、エポカの世界ではそうではない。前に、エポカでは子供と大人の境界は連続していると言ったけれど、エポカでは子供でも大人と同じ選挙権を与えられている」

「子供が選挙権をもっていても、政治のことは分らないから無駄だし、無理なんじゃないかな～」

「ホホーウ！　確かに、政治に関する見識をもっていない人に選挙権を与えるのは意味が無いのでは、というのはもっともかもしれないね。しかし、政治に関する見識をもっている人ともっていない人を区分することはできないし、区分してはいけないのでは。

大人だから見識をもっているはずだとはいえないしね。同じように子供が皆、見識が無いはずだともいえないのではないかな。選挙権の行使は義務では無いので、選挙権をもっていても政治のことは分らないと思う人は棄権すればいいんだ」

「確かに、政治に目覚めている子供も大勢いるかもしれない。そういえば、絶対に投票したくないような人もいるな。でも、政治のことが分からないのに、悪ふざけで選挙する子供

もいるかもしれないけれど」

「ホーウ！　悪ふざけする子供はいるかもしれないけれど、悪ふざけより始末の悪い行為をする大人はもっと大勢いるのではないのかな。利害打算で投票する人も多いだろうし、選挙違反なんてものも後を絶たない」

「ん、そうだな。成人式で信じられないような悪ふざけをする新成人がいたりするな。損得勘定で投票をする人も大勢いるか」

「ホ、ホホーウ！　エポカの人から見ると、民主主義といわれている社会の黎明期に為政者が非納税者や女性に選挙権を与えていなかったことと、カズマの世界で子供に選挙権を与えないことは類似しているように思えるんだけれど、違うかな。税金を納めているか否か、学歴の有無、性別、年齢、人種による差別を設けないのがエポカの世界なんだ。エポカでは、痴呆症の老人に選挙権があるのと同じ理由で、赤子にも選挙権はある。子供であっても年少者の場合、自分なりに社会のことが理解できるようになったと思ったときに、選挙に参加するようになるだけなんだ」

カズマは、フーパのいうことはもっともな気がしてきたが、自分はともかく友達の多くにとって政治や選挙に関することは縁遠い関心のない世界のように思えた。

「ホホーウ！　ドアを開ける前に、前置きの話が長くなってしまったね。今度は、風光明媚な観光地であるルメル市に関する物語だよ。話の内容は少々難しいかもしれないけれど、エポカ世界の仕組みを垣間見ることができると思うよ」

×　　×　　×

ドアを開けると、ホログラフィが鳥の目になって、円錐型のマンダレー山の上空を旋回している。

鳥の目が湖の上空に迫って来たとき、フーパが言った。

「ホ、ホホウ！　ルメル市は人口約三十万人、ケネル市は人口約二十万人の都市で、マンダレー山の麓のミラル湖を挟んで対岸にある都市なんだ。東側に位置するのがルメル市、西側に位置するのがケネル市だ。おっと、どうやらルメル市の近くまで来たようだよ」

とはいうものの、カズマの目には、第一の部屋で見たものと同じような大きな風車が、今度は一面に広がって並んでいるのが見えるばかりであった。そのうち湖の縁から山麓に向かって緑の樹木や畑、なにやら広場のような施設のようなものが見えてきた。しかし、ルメル市が間近に迫った時に、整然と区画された畑、優美な曲線を描く公園、庭園、スポーツ施設などがあるのが分かった。様々な施設の間にまだら模様に黒い板で覆われた場所があるが、ソーラーパネルのようなものが密集して配置されているようだ。眼下には寛ぐ人や、スポーツに興じる人の姿がある。『親の勘当』の部屋で観たミニスカイキャップのような乗り物が空中を飛び交っている姿も見える。そして、建物というよりも都市の中心市街地がこれらの緑や施設の下にあった。屋根だけでなく壁面も緑に覆われている建物が多い。

カズマは思い出した。『いじめ』の部屋で観た屋上はフラットで、そこに立っていると地上にいるとしか思えなかったことを。都市を屋上の人の視点からではなく、今度は上空の鳥の

視点から見ているので、こういう光景になるんだな――とカズマは思った。

「ぼくは、エポカの都市は超近代的なビルが林立しているのかと思っていたけれど、都市全体がフラットで、屋上の緑の下に町があるなんて……不思議な感じですね。これは観光地だからってわけではなさそうですね」

フーパは、このようにフラットな都市が多い理由を次のように説明してくれた。

「ホホーウ！　そうだね、世界中の大部分の都市がフラットなんだ。カズマの世界の都市は、中心市街地になるほど高層ビルが建っているよね。交通便利な土地や人の往来が多い場所は、ビジネスチャンスや雇用機会、いろいろな施設利用の恩恵にあずかる機会が大きくなるので地価が高くなる。地価が高い所では土地の有効利用のため建物を高層化しているけれど、エポカの世界では空間的な隔たりによる利便性の差は大きなものでは無くなっている。それと、建物の屋根が尖っていたり、凸凹だったりすると、空間としての屋上が有効に活用できないことになる。都市の中心部にあっても、太陽の光が降り注ぐ地表を失いたくないんだ。フラットでしかも緑で覆われていれば、ヒートアイランド現象なんてことも起きないしね。そんなわけで、屋上をフラットにして建物を相互に歩道橋のようなものでつなぎ合わせるような取り決めをしている都市が多い。但し、フラットにすることがデメリットであるような積雪地帯などの都市はそうではないけれど」

ルメル市に近づくと、屋上にある農園、スポーツ施設などの細部が識別できた。建物相互を連絡する屋上の道路網が、地上の道路網のように広がっていることも見分けられるように

なってきた。カズマには、建物の屋上が地表で、地上の道路が運河のように思えた。

ルメル市の中心部から山裾の森林地帯に向かって集落も点在している。

都市の真上に達すると、今まで人と思っていた陰のついた黒い多くの点が、アンドロイドであることも判別できた。アンドロイドは衣服を身につけていないので、アンドロイドとして容易に識別できたのである。

「アンドロイドというのは、衣服を身にまとっているものとばかり思っていたんだけれど」

「ホーウ！　カズマの世界のＳＦではそうかもしれないね。確かにカズマのいうように、衣服を着たアンドロイドもいるよ。ちょっと考えて見れば分ることだけれど……大部分のアンドロイドは衣服で体温を守る必要が無いので、裸のままなんだ。太陽熱で高温になることを避ける場合は表面の素材などで対応するから」

――いわれてみればそのとおりだな――

「ホホーウ！　ところで、ここの市長は人徳の高いことで著名な人なんだ。市長も当然、この美しい自然環境を誇りに思っている。ところが、この自然環境ならではのことなんだけれど、乾燥期になると、しばしば自然発火などによる山火事みまわれてきた。それと、このルメル市は半年後に、市長達の選挙と議員選挙を控えていることが今回の話の背景といえるかな」

「いま確かに『市長達の選挙と議員選挙』と言ったよね。『市長達の選挙』っていうのは変じゃない。唯の『市長選挙』ではないの？」

「ホーウ！　耳がいいねぇ。間違いではないよ。でもこのことを説明すると長くなるので、後でまとめて話すことにするよ」

「ところで、『徳』の高い人というのは、どのような人のことをいうのですか？」

「ホウ！　前に話したようにエポカの世界では、『徳』はお金としての『得』と同じ意味を持っているので、徳の高さはその人が得た『授権配当』というポイントの量によって示される。エポカではお金としての『得』を得るためには『徳』が不可欠になる。人に尽すことも『徳』だけれど、人に有難がれる商品やサービスを安価で提供することも『徳』なわけさ。どちらも『感謝』のお礼としてポイントが貰える。カズマの世界では高所得の人が徳の大きな人とは限らず、低所得でも徳の高い人がいたり、金持ちでも心の卑しい人が大勢いたりすると思うけど、エポカでは徳の高い人は収入の多い人なのさ。収入の多い人が資産家とは限らないけれどね。というのも、収入の多い人ほど、様々な人や組織に寄付や投資をしているからなんだ」

カズマは、フーパのいうエポカの世界では、『徳』と『得』が同じ意味をもっているということが何となく分ってきたような気がした。

フーパが更に説明を続けた。

「ホホーウ！　それと、人のためになるということは、何も仕事や社会活動に限ったことではない。家事や育児、親切などを含めて感謝されるような行為に関しては『授権配当』としてのポイントが貰えるようになっている。カズマの世界の人が、エポカの世界を見る場合、

『徳』の面からみると奉仕社会のように見えるけれど、『得』の側から見ると全てが有料社会に見えるかもしれないね」

カズマは、世の中は有料なものと無料なものに分かれていて、家事労働や親切な行為というのは無料であることが当然のように思っていた。しかし、エポカの世界は見方を替えると全てが有料な社会に見える――ということを聞いて意外な気がした。

「全て有料って、エポカらしくないんじゃない」

「ホーウ！　そうかねぇ」

フーパは『有料』についての説明が中途半端であると思ったらしく、次のように補足した。

「ホウ！　エポカでは『有料』という言葉は使用しないけれどね。モノやサービスなどのように、カズマの世界でいう『価格』が決まっているものもあるけれど、いくらポイントを支払うかは、受益者の判断に任されているものが多い。たとえば神社のお賽銭や大道芸に対して、いくら支払うかは決められていない。エポカでは、幾ら支払うかは本人に任されているものが多いんだ」

×　×　×

鳥の目は、マンダレー山の山麓に向いていた。西風の強い乾燥した日の夕方のことであった。

山裾で出火した。山火事はみるみるうちに燃え広がり、人家の点在する地域にまで及んできた。多くの人家が火の海に呑み込まれ、多くの人々が焼け出された。麓の森林に散在する

住宅地にまで被害が及んだのは稀なことのようであった。市長は、直ちに消火活動に着手し、ロボットやアンドロイドの消防隊が懸命に消火に当たった。

この消火活動の甲斐あって、数日を経てどうにか森林火災を鎮火させることができた。この時、特に懸念されたのが、出火地点の近くにあるマイライと呼ばれる集落を山火事が呑み込んでしまうのではということであったが、必死の消火活動によって運良く被災を免れた。

多くのボランティアが、焼け出された人の手当てや避難場所として自らの家を提供したり、生活支援に当たったりした。

「このマイライ集落は、人生は楽しむことにあるとばかり遊んで過ごし、社会活動にかんしては敬遠する人々が、世界各地から風光明媚なこの地を好んでできた集落といわれている。カズマの世界の人にいわせれば『なまけものたち』が集まってできた集落ということになるかな」

「ふーん！　そういう種類の人間もエポカにいるんだ」

「ホウ、ホホーウ！　そうだねぇ。こういう人達はいつの世にもいるのかもしれないね。だけれどもこういった人達にも当然、生存権はある。エポカでは、人や社会に役立つ活動をする人は、他の人や組織から『授権配当』というポイントが貰えるけれど、活動ができない人のために『基本配当』というポイントが支給されているからね。

しかし、活動することができるか、できないかを判断することは結構難しいことかもしれない。働くことができないことが見て分る場合もあるけれど、心を病んだ人達は見た目には

健康でも活動ができない。心が病んでいるか否かは、人が見て判断できない場合が多い。『活動したくてもできない』と『活動したがらない』の違いを勝手に判断できるものではない。『活動したがらない』こと自体が病気の場合だってあるかもしれないし……カズマの学校でも、登校しない生徒がいるけれど、『登校できない生徒』と『登校したくない生徒』を区別するのは難しいんではないかな。それで、エポカの世界では、こういう人も含めて『基本配当』が支給されているのさ」

カズマのクラスにも、長期間登校していない生徒がいるので、フーパの話は何となく理解できた。カズマは、『登校拒否』ではなく、『登校できない』ということなんだろうな～――と思った。

「ホー、ホホウ！　今は詳しく説明しないけれど、エポカでのこのような社会問題は『選択の自由』との関連もある。エポカのような豊かな世界では、『ありあまる自由』が大きな負担になる人が少なからずいる。『人に迷惑をかけない限り、なんでもあなたの意思で自由にできるんですよ』と言われたとき、何をしたらよいか戸惑う人や何もしない人もいる。経済的に貧しい社会では、考えられないことかもしれないけれどね。そんなわけで、マイライの集落に住んでいるような人がいても不思議ではないのさ」

×　×　×

しばらくして救助活動も一段落したようであった。

ホログラフィは市長室で執務しているメルリン市長を映している。市長の部屋は、さぞ豪

華な家具調度品があつらえてあるものと想像していたら、意外に質素で、大きなモニターらしきスクリーンがある以外は普通の事務所といった赴きである。部屋では、市長と数人のスタッフが会議をしていた。

エポカ世界の行政組織の長は誰でも、人一倍『人のため、社会ため、世界のために』なることに熱心な人達で、人徳で高名なメルリン市長はこのことを使命と考えているとのことである。メルリン市長にとって、マイライ集落の人達の価値観は自身の価値観と相容れないものであったので、日頃から――何とかしてマイライ集落の人達を救わねば――と考え、頭を悩ませていた。

市長は山火事の際に人道支援に当たった人々を表彰するため、スタッフとともに救助活動に携わった人々のリストをスクリーンに映し出してチェックしていた。

「ホ、ホホーウ！　エポカの世界では、身に着けた通信機器によって、全ての人の日常活動をいつでも把握できるようになっている。エポカは基本的に『秘密の無い社会』なので、このようなことが可能なのさ。特別な事情が無い限り、誰でも個人情報を含めてすべての情報をGネットで調べることができるんだ」

「『秘密のない世界』なんて、ぼくらの世界ではとても考えられないことだな。プライバシーというのは、世の中の進歩につれてますます大切になるものかと思っていたけれど、問題はおきないのかな～」

「ホホーウ！　そうだね、カズマの世界では考えられないことかもしれないな。カズマの世界ではプライバシーを巡って訴訟が起きたりしている。役所でも個人情報保護条例などをつくったりしている。そもそも、何で『秘密』があって、それを守る必要があるんだろうか。『秘密』が必要なのは、個人や組織が自分たちの利害を守る必要があるためだ。ということは、情報を全てオープンにしても、個人や組織が不利益にならなければ『秘密』は必要無いということにならないだろうか。これとは反対に、役所内の情報については公開を求められたりもしているようだね。情報の開示が請求されるのは、秘密にされることによって市民が不利益を蒙るような場合だろう。個人や組織の情報も同じで、秘密にされることによって、他の個人、株主や組織が著しい不利益を蒙っている場合もあるからね。

エポカの世界の仕組みについては改めて詳しく説明するけれど……個人や組織の情報が『オープン』になっていても、そのことで不利益が生じないようになっている。返って、『秘密』があることによる社会の不利益の方が大きいし、個人や組織も『秘密』を持っていると不信感をもたれて得にはならない。人は『秘密』を抱えたままでいると、精神衛生上よくない場合もある。秘密は嘘を生むことにもなる。エポカの世界の人達にいわせれば、『プライバシーが必要とされるような社会は問題性のある社会』ということになるかな」

カズマは――フーパがなんと言おうとも、自分自身のことを考えると、人に知られたくない秘密もあるよな～――と思った。

市長は消火活動や救助活動に参加した人々の地区別統計を調べている。市長が予想していたとおり、マイライ集落の人達は出火地点の近くに住んでいながら、誰ひとり、今回の消火や救助活動に参加していなかった。

「こんどこそ、なんとかしなければ」市長がつぶやいた。

そして、地域防災担当スタッフのコルガンに言った。

「山火事から市民を守るための抜本的な防災対策を考えてみて下さい」

それから、福祉更生担当スタッフのサットンの方を向いた。

「マイライ集落の人々に社会参加して頂く方策を、早急に考えてもらいたいんだ。彼ら自身もこのままでよいと思ってもいないだろうし、社会のためにもよい影響を持たないからねぇ～」

しばらくしてから、市長は二人に言った。

「両方を同時に解決できるような対策があればベストなんだがね。このふたつとも今度の選挙では必ず争点になると考えられるんで、市民によい案を提示したいと思っているんだ」

×　×　×

消火活動や救助活動に尽力した人々の名前は、Gネットに公開された。市長達と同様、このリストにマイライ集落の人がひとりも活動に参加していないことに気がついた人も大勢いたが、予想されたことでもあったので、ことさら憤りをあらわにする人もいなかった。

「ホウ、ホーウ！　災害が起きたときには、役所などで対策本部がつくられる一方で、義捐金や物資などの受け入れ先が設置される。エポカでは、これ以外に、災害救助活動にボランティアで参加する人の『徳』にたいする『投資配当』の受け入れ先も設置されるんだ。この受け入れ先は、役所とは限らないけれど。こういった情報がGネットに公開されるんだよ」

そうこうするうちに、出火原因を調べていた消防隊の調査により、出火の原因はマイライ集落の住民数人が森でキャンプした際の残り火が原因であることが判明した。そして、出火原因をつくったと思われる数人が取り調べを受けていることが報じられた。

この報道を機に、日頃から社会活動を一切行わない彼らを好ましく思っていなかった市民を中心に、マイライ集落の排斥運動のデモが行われるなど、一挙にマイライ集落に対する険悪な感情が広まることになった。このため、マイライ集落の人達は、買い物などで市街地に出向くことを差し控えるようになった。

×　×　×

市長の指示があってから二週間ほどして、地域防災担当スタッフのコルガンと福祉更生担当スタッフのサットンが、市長から依頼された『計画案』を携えて市長室に入って来た。

「よいプランができましたかね」

コルガンとサットンが、円卓を囲んで市長と向き合って座った。

はじめに、コルガンが防災対策について説明した。

「住宅地への山火事の延焼を食い止めるには、バリアゾーン（防災遮断帯）の設置が最も効果的であると思います。それと、今回のような人為的な山火事を防ぐには、全ての住宅がバリアゾーンで守られるように、山麓に点在する住宅を遮断帯の内側に移動することを考えました。最も重要なのは、何処にバリアゾーンを設置するかです。場所によっては、マンダレー山の景観や自然環境にも影響がありますし、移転家屋の数が多くなったりもします。様々な案が考えられますが……」と言って、コルガンはスクリーンに立体の計画図を映し出した。

「バリアゾーンは、景観や自然環境を考慮すると麓の低い位置にする方がよいのですが、移転家屋が多くなります。景観や環境への影響と移転家屋数のバランスを勘案したプランが、今お見せしているものです」

「このプランだと、バリアゾーンがマイライ集落を縦断しているので、集落を全て移転することが必要になりますね」

「おっしゃるとおりです。集落を避けるには、バリアゾーンを大きく蛇行させる必要があり、景観と自然環境に与える影響が大きくなります」

「コルガンからこの案を提示されてから考えてみたのですが、一般市民とは隔絶した場所にマイライ集落の人達が閉鎖社会をつくっているのは好ましいことではないので、このバリアゾーンの計画を、彼らに社会復帰してもらうきっかけにしてはと考えてみました。そこで、コルガンの集落移転計画とあわせて、集落の人達の社会復帰プログラムを検討しています」とサットンが言った。

こうして、コルガンとサットンは集落の移転計画とマイライ集落住民の社会復帰プログラムの詳細な内容――普通の市民が居住する地区への分散移転、専属のカウンセラーの配置、職業訓練――などについてかなりの時間を割いて説明した。

メルリン市長は、説明をひととおり聞き終わるとコルガンとサットンに質問した。

「集落の人達は自らの居住地を選ぶのは自由だから、移転計画どおりにはならない可能性もあるのではないかな。それと社会復帰プログラムを受け入れるか否かも彼らの自由だし……」

「おっしゃるとおりです。できるだけ彼らに受け入れやすいようなプランを提示しなければと思っています。しかし、判断するのは彼ら自身ですから……強制することはできないので、最終的には彼らの意思次第ということになります」

こうして、メルリン市長は思案の末、コルガンとサットンのプランを受け入れた。

×　×　×

大多数の市民は市長達のプランに賛同した。能動的な生き方をしていない人が、えてして物事に受動的であるように、当のマイライ集落の人々からの反対はなかった。エポカの世界に国境はなく、人の移動の自由は保障されているため、彼らにとって行くところや住むところは世界中どこにでもあるからである。

市長達にとって予想外であったのはマイライ集落の人達ではなく、彼らと同様、山麓の森に住む被災を免れた住民達からの反対であった。とはいうものの人数としては多くはなかっ

た。

この計画反対者の主張は――自分たちが居住する場所は、確かに森林火災が発生した場合、充分安全といえる場所でないことは承知しています。承知の上で、この場所を愛し、住んでいるのです。いざという時の備えも覚悟もしているので、この場所を立ち退くような計画には賛同できません――というものであった。

そうこうするうちに、三カ月後に市長達の選挙と議員の選挙を迎えることになった。ことのなりゆきから市長の予想どおり、選挙の争点は今後の防災対策になった。市長のこれまでの実績と徳の大きさから、市長達と市長派の議員の優位は揺るぎないように見られた。市長達の対立候補も出ないとの見方が大勢であった。

ところが、マイライ集落の人々が隣接するケネル市に移住してくるとの風聞が流れると、ルメル市の住人と同様、彼らの流入を快く思わないケネル市の人々が、メルリン市長のバリアゾーン計画に反対を表明した。本音としての『マイライ集落住民のケネル市への流入防止』と建前としての『マンダレー山麓の自然環境保護と景観の保全』を反対理由としていた。この計画を撤回しなければ、次のルメル市の市長達と議員の選挙では、メルリン市長達や市長に同調する議員に対して反対投票を行うとの声明を出した。

現代社会流にいえば、迷惑な施設やいかがわしい人々を排斥したいとの利害から発した声明であった。

「自分たちが住んでいない隣の都市の選挙に対しても選挙権があるんですか？」カズマが首を捻ってフーパに質問した。

「ホウ、ホホーウ！　エポカの世界での選挙は、行政地域内に居住する人だけがその行政地域の選挙権をもっているわけではない。ケネル市の人が言っているように、ルメル市の選挙にも参加できる。というよりも世界のあらゆる地域の選挙権をもっている。但し、自分の住む場所から遠いところにある地域の選挙に票を投じても、そこの居住者よりも小さい投票権しかない。たとえば、ルメル市に住む人がルメル市の選挙を行う場合の一票に対して、隣のケネル市の住民がルメル市の選挙に投票する場合には、ルメル市の住民の半分程度の票の重みしかもっていないんだ」

カズマが「ふーん！　そうなのか～」とうなずくと、フーパが更に説明を続けた。

「ホーウ！　但し、立候補者はその行政地域の住人に限られている。それと、カズマの世界の選挙との違いとして、議員選挙の場合には選挙区というものがないことや投票期間が一カ月程度あるのが特徴かな」

「ずいぶん選挙の方法が違うんだね」

隣のケネル市では、メルリン市長の計画に対する撤回運動ばかりが目立ったが、実際には、露骨な住民エゴを問題視し、これまでのメルリン市長達の功績を評価すべきであるという意見や今回の計画案はやむをえないものであるから、メルリン市長達に投票しようという人の

方が多かった。
　森林火災という災害があったばかりの都市であるため、バリアゾーンに関する反対運動はGネットでもしばしば話題になった。このような反対運動はやがてGネット上で、『なまけもの』たちを追放したがっている市長と、『なまけもの』たちに来てもらっては困ると考える隣の都市の住民との対立という構図に歪曲されて知られるようになった。
　選挙開始を二カ月先に控えた頃に、エポカ世界の『選択の自由』を監視しているフリームという団体代表のムルバという人物が、メルリン市長に会見を求めてきた。今回のバリアゾーン計画は『選択の自由を侵害するものではないか』とのことでの会見要望である。メルリン市長は会見に応じることにした。

×　×　×

　ホログラフィは、ルメル市役所内の一室で行われているメルリン市長とフリームの代表ムルバとの会見風景を映している。
「遠路ご苦労様です」
「初めてこの地を訪問しましたが、素晴らしい自然をもつ美しい町ですね」
「それが私たちの誇りです」
　ムルバは資料をテーブルに広げながら、次のように切り出した。
「さっそく本題に入らせて頂きます。私達は自然保護団体ではないのですが、念のためお聞きします。バリアゾーンの計画は森林火災から住民を守るには有効かもしれませんが、自

然環境や景観に悪影響を与えると思うのですが、この点を問題にする人達はいなかったのですか」

「確かに、バリアゾーンは自然環境や景観への影響が全く無いとはいえません。しかし、極力影響が少なくて済むように配慮しています。自然保護団体からも特別反対の声は上がっていません。恐らく、やむをえないと考えているのかもしれませんね。ということで、何度か繰り返されてきた森林火災から市民を守るには、これほど有効な対策は無いと考えています。それと、今回の計画の反対者ですが、二種類のグループがいます。ひとつのグループは森の中の生活を愛する人々の反対です。ですが森林居住者の大多数は計画に賛成してくれています。もうひとつのグループは、あなたもご存知の隣のケネル市の反対運動を行っている人達です。もっとも、この人達の本音は自然環境や景観への影響ではありません。この人達が計画に反対する理由についてはご存知ですね」

「承知しています。それでは、質問を替えます。とりあえず、バリアゾーンが非常に有効な対策であるものとしておきます。ケネル市のエゴイスティックな反対運動に肩をもつわけではありませんが、マイライ集落を縦断する形でバリアゾーンの設置を計画したのはどのような理由によるものでしょうか？」

「あの集落周辺は、秋ともなれば枯葉や枯枝に埋もれ、一旦出火すればたちどころに火の海となる危険性があります。また、集落を回避するとなるとバリアゾーンが大きく蛇行することになり、森林伐採の量が増えるからです。自然環境への影響を少なくするために、あの

ような計画になったのです。集落の人々の移住の自由はルールブックで保障されおり、移住に必要な費用は市の方で負担します。集落の人々からも特に反対の声は上がっていません」

「ルールブックというのは？」

「ホ、ホーウ！　ルールブックというのは、エポカ世界の法律と考えればいいかな。カズマの世界でいう法律とは趣が異なるけれどね。法律というのは『規則』のようなものだけれど、ルールブックは『エポカの理念』の趣旨に沿って定められた『基準』のようなもので、それなりの理由があれば、修正してもいいし守らなくてもいいものなんだ。但し、『基準』と異なることを行う場合には、独断的・排他的になることを防ぐため、地域内外の人々からの大きな反対がないことが条件になるけれどね。地域内外の人々と意見が対立する場合には、上位の法廷の判断に委ねられるか、『社会の仕組の見直し委員会』に図られるんだ」

「守らなくてもよい法律なんてものは、ぼくらの社会には無いはずだよな」

「ホーウ！　けれど、『エポカの理念』に反することはできないんだ」

ムルバは納得できないといった表情で言った。

「これだけ大規模なバリアゾーンの一部が蛇行しても、自然環境に及ぼすダメージの程度はあまり変わらないように思えますがね。それと、集落の人々から反対の声が上がっていないということですが、現在のような彼らに対する市民感情の中で、反対の声を上げ難いだけ

のことではありませんかね。社会から逃避的生活をするような人々は、社会に能動的に反応することに臆病であると思いますけど……」

「バリアゾーンの蛇行による環境への影響の程度を、どのように考えるかは見解の相違だと思います。ルメル市では自然環境や景観の美しさの保全が最も重要な課題なので、極力影響を少なくする必要があるのです」市長は、やや当惑気味に答えた。

「私共が気がかりなのは、ケネル市の反対運動の本音とルメル市民のマイライ集落の人たちへの排斥運動です。ルメル市でも多くの人が、村八分的な言動を行っていますね。市長は彼らの言動に対して同情的であるようにも思えるのですが。これらの危険な言動を放置しているのではないでしょうか？　そもそも、このエポカ世界では、なによりも『選択の自由』が守られなければならないのに、排他的雰囲気が市民一般に広まることは憂慮すべきことだと思いますが？」

このムルバの意見には、温厚な市長もさすがに気に障ったようで、

「市民の言動には、行き過ぎの部分があるかもしれませんが、分らないではありません。というのも、マイライ集落の人達は、誰ひとり社会活動に参加せず、ただ漫然と怠惰に過ごしているか自分の楽しみを追い求めているだけだからです。今回の火災も彼らの火の不始末が原因となったもので、多くの人が多大の迷惑を蒙りました。また自分たちが引き起こした災害であるにもかかわらず、誰ひとりとして消火活動や救護活動に加わらなかったからです」

『彼ら』という表現は、気に掛かりまね。集落の人達の全てを犯罪者扱いしているように

も聞こえます。集落の中の数人と全員を同一視しているように思えます。罪を犯した人達は、現在取り調べ中だとのことですが、集落の人全員が出火の原因を作ったわけではないでしょう。それと、消火活動や救助活動を行うか否かは個人の選択の自由です。救助活動に積極的に参加された方々は、賞賛されるべきであるかもしれませんが、救助活動に参加しなかったとしても、非難されるべき問題ではないと思います」

「確かに、エポカの世界では選択の自由を保障していますが、他方で人の役にたつ活動を行うことを求めています。そういう点では、彼らの生き方は好ましいとは思えません。

彼らは社会のための活動を全くしていないので、当然、『投資配当』を授かることはほとんどなく、『基本配当』や家族からの『授権配当』を生活の糧としているわけですが、これらの配当は世界の人々が『人の役にたつ活動』をした結果として生み出されたものです。それを消費するのみで、自らは何も生み出さないというのは感心しません。エポカでは、老人や身障者でも、活動できる人は誰でも『人の役にたつ活動』をしているというのにですよ……」

「ホホーウ！　エポカの世界での『人の役にたつ活動』というのは文字通りの意味なのさ。『活動』という言葉はカズマの世界の『働く』という言葉に近いけれど、それよりも広い意味があるんだ。カズマの世界では『人の役にたつ活動』をしても、収入にならないこともある。たとえば、様々なボランティア活動、家事労働、身近な他人への親切や思いやりなどがあるけど、前にも言ったように、エポカではこれらの活動によってもカズマの世界での『仕

事』の場合と同様に『授権配当』という収入が得られる。だから、エポカには失業者はいない……ということではなく『失業』という言葉が無い。活動できる者は誰でも活動することができ、応分の収入を得ることができる。子供でも例外でないことは前にも言ったとおりだよ」

「それで、私としては、何とか彼らに社会復帰してもらいたいと考えているのです。このままでは、彼ら自身も幸福ではないと思います。集落の人達のため、市内の数箇所に移転先を準備し、社会活動に復帰するためのプログラムを考えています。もっとも、彼らにも選択の自由がありますから、受け入れてもらえればの話ですが……」

「エポカの世界では、『何もしない』ような選択をする自由もあると思います。そのような自由もあることを認めての『選択の自由』です。『選択の自由を可能な限り広げ、他人の選択の自由を制限する行為を可能な限り排除する』というのがエポカの重要な理念のはずです。彼らが人の役に立つ活動をしていないとのことですが、少なくとも家族がいる者は家族のための活動はしていると思います。『人の役にたつ活動』ということですが正確には『自分自身と人の役に立つための活動』のはずです。人の役には立たないが自分自身のためである活動もこれに含まれます。人の役に立つ活動をしているか否かだけで人の価値判断するのはいかがなものでしょうか。老人や身体障害者の中には自分のための活動もままならない人ももいます。『役にたつ、立たないというだけの見方』をされると、このような人たちは肩身の狭い

思いをするのではないかと思います」

市長は気色ばって答えた。

「活動できない老人や身体障害者達は庇護の対象であって、マイライ集落の人達と同一視することは甚だ問題であると思います。人は『人の役にたつ活動』をするために生きるべきであるというのは私の人生観であり、エポカ世界の望ましい姿です。しかし、私の人生観は別にして、『選択の自由』に関するエポカの理念に背いたことはありません」

「そうでしょうか？　今回のバリアゾーンは、『他人に迷惑をかけない限りどのような人生を送るかは個人の自由である』との理念にも反していると思います。そして、マイライ集落を解体し、この地の少なからぬ市民が望む彼らの追放を招くことになるのではないでしょうか。端的に申します、私達は今回のバリアゾーンの計画は森林火災から市民を守ることの外に、マイライ集落の解体を目的としたものであると受け取っています」

「そのように受け取られることは、実に心外です！」

更に、ムルバは市長の信念を逆撫でするように言った。

「エポカ世界のどこかに、マイライ集落のようなものがひとつやふたつあってもよいのではないでしょうか。『救う側の人』と『救われる側の人』の境界は甚だ曖昧です。マイライ集落の人は肉体的には健康そうに見えるので、『救う側』の人間であるべきなのに社会の役に立つ活動をしていない――ということで苛立ちを覚えているのかもしれませんが……。逆に、時として、老人や身体障害者など『救われる側』にいると思っている人が『救う側』にいた

りすることがあるのも事実かと思います。何もできなくても、その人が生きているだけで、他の人を幸福にすることだってあるでしょう。見方によってはマイライ集落の人も、活動できない老人や身体障害者と同じかもしれませんよ……」

「おっしゃることは分からないではありませんが、基本的に彼らは『救われる側』にいると思っています。だからこそ、彼らを救い出すことが私の使命なのです。このまま放置しておけば、ますます彼らはエポカ世界から孤立していくだけです」

「世界には肉体的条件だけでなく、気持ちの上で、つまり精神的に社会活動をすることのできないような人達も中にはいるということです。マイライ集落の人達はそのような人々ではないかと思うのです。彼らは自らが安住できる場所として、この地に移住してきたのではないでしょうか。市長のおっしゃるような啓蒙主義的な救いを求めているとは思えません」

「自殺する人が『助けてほしい』とは言わないのと同じで、彼ら自身の口からは『救ってほしい』などとは決して言わないでしょう。しかし、自殺しようとしている人を前に、選択の自由を侵してはならないということで放置することができるでしょうか。アルコール依存症患者の場合には本人の意志に反してでも断酒する必要があります。同じように彼等は我々が手を差し伸べて救ってあげなければならない人達のはずです」

「自殺しようとしている人やアルコール依存症と彼らを同列に扱うことはできません。市長の論理からすると、あるべき姿と違った人間は本人の自由意志とは関係なく救われるべき人、正されなければならない人になってしまいます。この延長線上には非常な危険性がある

と思います」

「あなたのおっしゃることは、私の信念が間違っているというように受け取れます。これまで、私に対して、あなたのようなことを言ってくる人はいませんでしたが」

「市長のこれまでの身を粉にした自己犠牲的な活動には、市民の皆が敬服していると思います。市長に物申すには、自身の徳が小さすぎると思っているのかもしれませんね。人は、非のうちどころの無い人には、反論を差し控えるものかもしれませんよ」

「そのようなことってあるものですかねえ。私は、自身の努力がまだまだ足りないと感じているのですが……」

「いずれにしても、啓蒙主義的な考えは、時として啓蒙される側にとって大きなお世話になる場合もあると思います。彼らは、つつましやかに、人の役には立たないが人の世話にもならないように自分たちの生活をしている人達です。そしてこの世に生を受けたことを楽しんでいるのではないでしょうか。

蒸し返しになりますが、市長はご自身のお考えになる『生き方』を、彼らに押しつけようとしているように思います。逆にいえば、結果的に彼らから『選択の自由』を奪おうとしているように思います。あの集落の人達のほとんどは、これまでメルリン市長を支持してきたことをご存知ですか。『自分達のようなろくでもない者でも受け入れ続けてくれた』ことに対する感謝の気持ちとして市長を支持してきたのですが……残念なことですね」

「私は、彼らから『選択の自由』を奪うことなど毛頭考えていません。どこまでいっても

平行線ですね、見解の相違としかいいようがありません」市長は少々疲れた様子で言った。
「そうですか……私たちの考えも理解してもらえそうもないですね」ムルバも溜息をつくように言った。
しばらくの間を置いて、
「繰り返しますが、私達が最も懸念しているのは、この地の排他的集団感情です。マイライ集落の人たちを弁護するような発言が憚られるような雰囲気になっている状態です。それでは……しかたないですね。私達は今回の選挙で選択の自由を守るためとマイライ集落に対する排他的感情が蔓延するのを防ぐため、フリーム推薦の対立候補を立てることにします」
ということで、メルリン市長とムルバの会談は終了した。

× × ×

やがて、市長とそのスタッフ、議員の立候補者の受付が開始された。知名度の全く無いハットンという青年が市長候補として届け出た。併せて、この若い市長候補のスタッフとして十名の若者、議員候補として数十人が立候補した。
ハットン達の提示した様々な政策のうち、森林防災計画に関する提案は、森林火災の衛星監視機能の強化やロボットの消火部隊の増強などであった。それとともに、メルリン市長の提案するバリアゾーンが、マイライ集落の解体とルメル市から集落住民の追い出しをもたらすものであり、エポカ世界の『選択の自由』に対する挑戦であると批判した。メルリン市長陣営から、ハットン達の森林防災計画案は、延焼防止対策としてはバリアゾーンほど有効で

はないとの批判を受けたが、ハットン達は自然環境と景観の保全の重要性を訴えて対抗した。

ここで、お預けになっていた『市長達の選挙』や『議員の選挙』の方法について、フーパが解説してくれた。

「ホ、ホホーウ！　エポカ世界の選挙は、Gネットを通じて行われるんだ。さっきの市長達の選挙の話しだけど、市長とそのスタッフの選挙は一体のもので、グループとしての選挙になっているのさ。コルガンやサットンもメルリン市長と一緒に選ばれた人達なんだ。この市長達の選挙は行政を行う人達の選挙で、議員の選挙は選挙民の代弁者達の選挙なのさ。議員の選挙の方は、落選者のいない選挙で、得票数を競う選挙になっている」

「落選者のいない選挙？　そんな選挙って僕らの世界にはないな」

「ホーウ！　当選するかしないかではなく、立候補者がどれだけ多くの人の代表になるかという『選挙』なのさ。議員については、たとえば定員が百人であるとすると、十人程度の候補者に投票することができ、ひとりに複数票を投じてもよい。こちらを黒票と呼んでいる。それと、好ましくない候補者には赤票というマイナスに数えられる票を投票してもよい。黒票と赤票の合計は十票までということになっている。選挙は立候補者の締め切り直後から実施され、前にも言ったように締め切り日までの約一カ月間に何度でも投票をやり直してもかまわない」

「落選者がいないんじゃ、大きな議会の建物が必要になるのかな」

「ホーウ！　エポカは、高度なＩＴ社会だよ。議場はあるけど、ヴァーチャルリアリティの議場なんだ。議会用の建物なんてものはないよ」

「選挙戦はどのように進められるんですか。政党のポスターが街の掲示板に貼り出されたり、立候補者の経歴や政策が放送されたり、街頭演説が行われたりするんですか？」

「ホーウ！　立候補者の経歴や政策が放送されることはあるけれど、ポスターや街頭演説はない。カズマの世界の選挙、というよりも政治と大きく異なるのは政党が無いことかな。このため個人が自分の政策を述べたり、他の候補者の政策を批判したりすることはあるけれど、マスメディアで政党が互いになじり合うように批判するといった見苦しい光景はないよ。選挙戦は選挙管理委員会の管理の下で、もっぱらＧネットを通じて行われるんだ」

「政党が無い！　どうしてですか？」

「ホホ、ホホーウ！　政党というものが許されていないということではなく、政党がいつしか作られなくなってしまったんだ。けれど政策を同じくするグループはあるよ。政党とこれらのグループが異なるのは、議員の行動を制約するような党則が無いことなんだ。

党が造られなくなった理由はふたつあるかな。ひとつは、カズマ君の世界とも共通する理由だね。組織は何らかの目的をもって結成される。政治の場合でいえば、自らの政治理念の実現が目的になるかな。ところがおよそ組織というものは、必ずといってよいほど手段である組織の維持・拡大自体が目的に置き換わる傾向をもっている。異なる政党は政敵になる。政敵であればその政策に本音は賛成でも反対するといったことにもなる。政党は権力を得る

ために互いに意図的な曲解批判や誹謗中傷を行うのが世の常で、票を獲得するためならば、結果に責任を持たない耳あたりのよい言葉を並べ立てることもある。『敵の敵は味方である』という場合さえある。それで、政治理念よりも党則や組織の維持・拡大が優先されるような政党というものの醜さが有権者に嫌われることになった。政治家は、こういった政党の悪弊から自由であることを有権者に示すために、政党に属さなくなり、次第に政党がつくられなくなってしまったのさ。

もうひとつの理由はエポカ世界ならではのことかもしれないな。政党というものは社会の様々な階層、例えば経営者、労働者、農民などの利害を代弁するという役割をもっていると考えられるけれども、基本配当があったり相続制度がなくなったりすることによって、様々な階級や階層がなくなり、異なる利害が消滅したこともある。党というような圧力団体が必要なくなってきたということかな。多少の考えの違いであれば敢えて党のようなものを造る必要はないからね」

――今の政治家達に聞かせてやりたいような話だな――

そうこうするうちに立候補が締め切られ、直ちに投票が始まった。市長とそのスタッフ候補および議員候補の意見や政策は、投票期間中もGネットやマスメディアを通じて報道された。

選挙戦前半、現市長のメルリン陣営が圧倒的優位を保った。隣接するケネル市の人の多く

が現市長達に反対票を投じてきたが、票の重みは二分の一程度なので、メルリン達の優位は動かなかった。

選挙日が近づくにつれ、ケネル市でも地域エゴむきだしの反対運動を嫌う潜在的な人々が票の形で顕在化するに伴い、ケネル市のメルリン達への反対運動は尻つぼみになっていった。

こんな次第で、フリーム推薦の市長候補であるハットン達にはほとんど票が集まらなかった。

投票が開始されてからしばらくたって、選挙管理委員会は、人口三十万人の都市の市長達と議員の選挙にしては珍しいことに、遠方それも世界の裏側の地域から少なからぬ赤票がメルリン達に投じられていることを確認した。そして、日を経るに従って、このようなメルリン達への赤票とハットン達への投票が増えていった。遠く離れた地域からの票であるため、票の重みはルメル市民一票の百分の一にも満たないので、それでも現市長派の優位は動かなかった。

とはいうものの、現市長陣営は世界各地から投票されてくる赤票が気になって、Gネットを調べてみた。すると、ルメル市での森林火災、メルリン市長のバリアゾーン計画、メルリン市長とフリーム代表ムルバとの会談内容が克明に掲載されていた。この中で、フリームが組織をあげて『選択の自由の危機』を世界中に訴えていた。

メルリン市長陣営では、念のためフリームへの反論を掲載しようと相談したが、すぐに止めにした。歪曲された『なまけもの』を巡っての対立の構図は、元々フリームが演出したも

のではなく、メルリン市長が言いたいことは全て書かれていて、これ以上の補足や追加のしようがなかったからである。フリームは公平かつ客観的に自身の意見とメルリン市長の意見を並列していて、その上でメルリン達への反対票を呼びかけていたのである。

メルリン市長陣営は、各種環境保護団体も同じような動きをしているのではと心配になり、その動向を調査してみた。しかし、自然環境保全の観点から問題であるとの意見は少数で、森林火災から市民を守るためにはやむをえないのではという意見が多数であること、環境保護団体としての統一見解が出ていないことから、メルリン市長陣営はひとまず安心した。

メルリン市長陣営はフリームに逆攻勢をかけるため、『徳の薦め』といった団体や『人の道』を説く宗教団体などにメルリン達への投票依頼を行ってみたが、フリームの訴えを既に知っていて、儀礼的な返答やつれない反応が返ってくるばかりであった。

投票の最終日が間近に迫るにつれ、日を追って世界各地から洪水のようにメルリンへの赤票が投じられるようになった。メルリン達への票は減るばかり、反対にハットン達への票は増えるばかりになった。遠方からの票なので一票の重みはほんの僅かであったが、膨大な数の赤票によって、ついに対立候補のハットン達への票がメルリン達への票を上回るようになった。

この趨勢は広くルメル市民にも知れることとなった。

「自分たちは間違っているのか？　そんなはずは無い……」

「しかし、世界の多くの人々が、メルリン市長達に異議を唱えている……」

ルメル市民の多くが戸惑いをあらわにした。

そのうち、ルメル市の住民のうち投票を保留していた人やメルリン市長達に一旦は投票したものの、思い直して若いハットン達に投票しなおす人も少なからずでてきた。

やがて、ルメル市の市民の中には世界の声を背景に、現市長の計画に反対を積極的に表明する意見も出るようになった。これまでは、メルリン市長達の実績と市民の感情（圧倒的なマイライ集落への反感）故に声を上げられなかった人たちも発言をするようになった。ルメル市の市民も集団感情から解放されつつあった。

こうして勝敗は決した。メルリン陣営は敗退し、新市長ハットンが誕生した。バリアゾーン計画推進派議員の多くも多数の得票を獲得することができなかった。

メルリン達への赤票が黒票を上回るという事態、つまり『獲得票数がマイナスになってしまった』という前代未聞の屈辱的敗北に、メルリン陣営は隠しようのないショックを受けた。

×　×　×

ケネル市のバリアゾーン計画反対運動は、結果的には目的を達したように見える。この反対運動を行った人達の考えは、マイライ集落の人々を好ましからざる人達とする見方ではメルリンと共通であった。違いは、メルリンは市長なりの信念で、彼らの『救済』を考えていたことである。

逆に、ルメル市やケネル市のマイライ集落排斥運動は『迷惑な連中』の排除や流入阻止といった排他的動機に基づく運動であったため、Gネットなどで手厳しく批判されることにな

った。

メルリンは報道陣の質問に対して、敗戦の理由を次のように語った。

「私は――エポカ世界の誤解によって負けたのか？　それとも私の考えが間違っているために世界から拒絶されたのか？――と自問してみました。いずれにしてもエポカ世界の審判は下りました。私には、森林火災から市民を守る義務があると思っていました。それとマイライ集落の人々を社会復帰させるにはどうしたらよいかを思案してきました。このため、スタッフが提案したマイライ集落を縦断するようなバリアゾーンの計画を受け入れたのは事実です。いわば、行政的に彼らを分解し、他の市民と混在して生活してもらい、社会復帰プログラムを受けてもらうことで、エポカ世界の一員として恥ずかしくない人々になってもらうことを願ったのです。しかし、結果的には世界の賛同は得られなかった。たぶん、これまでの生き方によって培われた私の信念が、彼らの生き方を許せなかったのだと思います」

ホログラフィはここで終了していた。

× × ×

ホログラフィの終了とともに、フーパは造物主の意を汲んで、エポカ世界の仕組みについて語りだした。

「ホウ、ホホホーウ！　エポカの世界では、どのような理念の下で、判断し行動するかということが最も重要なんだ。理念が違っていれば結論は当然異なるはずだ。けれども、人はしばしば……というよりも一般的に、様々な判断を理性的に考えた上で行うのではなく、先

に自分の利害、感情や信念が判断をしておいて、その判断をあとから理屈づけるものなんだ。逆に、理性的に考えて出てきた結論があっても、そのような結論に自分の利害、感情や信念が従うことができない場合が多いのではないかな」

カズマが――そう言われればそうかもしれないな――と思っていると、フーパが話しを続けた。

「ホ、ホーウ！　今回の選挙では、メルリン市長の場合は、エポカ世界の理念を自分の『信念』によって解釈→論理→判断したということになるかな。ルメル市とケネル市のマイライ集落の人々の排斥運動を行った住民の場合は、得体のしれない連中には町にいて欲しくない、または町に来て欲しくないという利害による判断を行って行動をしたといえる。この場合には、利害→判断→理屈づけという順序になる。フリームの場合は、エポカ世界の理念に基づいて判断し行動した。彼らの場合は、理念→論理→判断という順序になる。

社会一般の人にとっての行動や判断の基準になっているようなことを社会規範というんだけれど、人が社会的な問題について判断する場合、問題の背景や前提条件を整理し、理念や社会規範に照らして、論理によって結論を出し、判断することになる。この時、論理が違っている人や、そもそも理念が異なる人との間では同じ結論になるはずはない。さっきも言ったように、もっと始末の悪い人は、特定の意図や利害、感情や信念が論理を経ずに結論を出しておいて、後から理屈付けを行ったりする。エポカでは、社会問題に関しても自然科学の場合と同じように、前提条件、理念、論理、判断の関係を『証明』することが求められる。

かなり難しい話になってきたけれど、エポカの世界では、『ためにする』議論というのは、非常に嫌われ、非難されることなんだ」

カズマは――「本音とは裏腹の政治家やジャーナリスト達の『ためにする』議論には、うんざりするよ。『ため』が顔に書いてあるからな」とお父さんがニュースを見ながらお母さんに話している場面――を思い出した。

「ホ、ホーウ！　それと集団感情の中で、自身の行動を集団感情におもねるようなことをしてしまうのも人の常だといえる。自分が『正しい』と思う確たる考えを持っていない場合はなおさらだ。自分の考えが集団感情と異なる場合、これに逆らって自分の意見を述べることは難しいことなんだ。カズマの世界のように、反対すると村八分にあったり、かく首されたり……と経済的・社会的制裁を受けたりする場合もあるし」

「ところで、マイライ集落の人達は本当のところどのような人達なのですか。フリームのいうことはもっともなように思うけど、心情的にはメルリン市長と同じようにしか考えられないな」とカズマはフーパの話を中断して言った。

「ホ、ホホーウ！　彼らは、『何もしないし、何もしたがらないこと』を責められることが嫌いなんだ。以前住んでいたような場所では、『世間から責められて』住み難いと思っていたんだろうね。そのような思いが錯覚であるか否かは問わないことにするよ。そう思っているということなんだ。誰でも、自分と同じような人がいると安心する。そういうわけで、自らの心を癒すため、この地に同類の人達と自然環境を求めて移住してきた。他人に頼ることも

しないが、協力もしないと決めて社会から自らを閉ざした生活をしている。悲しい選択であるかもしれないけれど、彼ら自身の選択なんだ。他人に迷惑を及ぼすような選択であれば、彼らの選択は許されないのかもしれないけれど、そうでないのであれば、そしてそれが彼らにとっての唯一の『幸福』の姿であるならば、誰にもそれを禁じる権利は無いのかもしれないよ」

「その後、集落の人達はどうなったのですか？」

「ホーウ！　居心地の悪さを覚えて、よその地域に移住した人達も多少いたようだけれど、大部分の人達は今の場所に居残ったようだよ」

「メルリン市長が気の毒なような気がするなぁ～。でも、市長達や市議会議員の選挙なのに、世界各地の人が投票してきたり、同じ人が投票をやり直したり、反対票を入れたりして、とてもおもしろい選挙ですね。子供まで投票できるなんてびっくりだな」

「ホホーウ！　メルリンは今回の選挙では敗けたけれど、その徳の高さが評価されて数年後にはメルリンは再び市長になるんだけどね。今回の政策にノーを言われただけともいえるな」

「へーぇ、そうなんだ」

すると、フーパがエポカの選挙制度について更に説明をした。

「エポカ世界には、国も国境もないことは前に話したとおりだけれど、この選挙制度は独裁者の登場、利権や地域エゴを防ぐために考えられたものなんだ。この仕組みが機能してい

るうちは、戦争など決して起こらない。独裁者は自分の行政区域では票を集めることができても、世界の反対にあって当選できないからね。

誰でも世界各地の選挙に投票できるけれど、遠い地域の選挙に投票する場合は、その地域住民の一票の何分の一、何千分の一票にしかならないことは繰り返し言っているとおりさ。つまり、投票はできるが同権ではないんだ。但し、エポカの世界議員を選ぶような場合には、エポカ世界のすべての人が同じ投票の重みを持っている。

選挙区が無い理由もこのことと関連している。選挙区があると議員は選挙区の利害代表という性格をもつようになり、世の中一般のためにはなっても地域の利害に反する場合には、正しい判断ができなくなる恐れがある。だから小選挙区制のようなものは、死に票が最も多くなるだけでなく、議員が地域エゴに訴えかけるような選挙になるので、二重の意味で問題のある制度ということになるな。

立候補者についていえば、市長などの首長がゼネラリストで、スタッフや議員は、教育、医療、福祉などといった分野別のスペシャリストが多いかな。

議員の役割は選ばれた市長達の行政を監視したり、提出された政策の審議や採決を行ったりすることなんだけれど、議会での議員の議決権が議員によって異なることもカズマの世界とは違うところだね。議員が獲得した票数は、議会での多数決の際、議員ひとりが一票なのではなく、選挙による獲得票数を勘案することになっている。要は、可能な限り人々の意思を正確に反映させることが目的なので、議員選挙で落選者を出せば、落選した候補者に投票

した人の意思は反映されなくなるからね。そんなわけで、議員選挙は、立候補者を当選させたり、落選させたりする選挙ではない。

それと、投票というのは、立候補者の締め切り後の一カ月を過ぎても、投票のやり直しができるようになっている。議員の不正が明らかになったり、約束と違う行動を行うようになった場合、投票した人は自らの投票を無効にしたり、他の候補者に票を移動したりすることができたりして、リコールできる仕組みになっている。つまり、選挙期間中だけ投票できるということでなく、いつでも自分の投じた票を他の人に振り替えることができる。というように、有権者の意思がつねに反映できるようになっているんだ」

フーパの長い話が一段落したようなので、

「今回は、ずいぶん難しい話だったですね。でも、ちょっぴりエポカ世界の仕組みがわかってきたような気がします」とカズマが言った。

「ホホ、ホーウ！　そうだね～。エポカ世界を一言でいうとすれば、『境界線の無いオープンな社会』ということになるだろうか」とフーパがまたまた難しそうなことをいい出した。

カズマはフーパの難しい話についていくのは少々くたびれてきたが、ついつい質問癖が出てしまって、

「境界線の無いオープンな社会って？」と訊ねた。

「ホホ、ホーウ！　国が無いので国境線が無いだけでなく、人種という境界線、役所と民間、個人と組織、大人と子供、労働と奉仕などの境界線が無いことなんだ。オープンという

意味はこのような境界線が無いことや、組織や個人情報の秘密が無いということも意味している。このため、エポカ世界の仕組みはカズマの世界と較べてずっとシンプルになっているんだ」

「そうなの？　ぼくは、文明社会になればなるほど、社会の仕組みは複雑になるのかと思っていたけれど、エポカは逆なんですね」

「ホーウ！　あらゆる境界をなくすこと、『いじめ』の部屋の話にあったような立場置換トレーニングは自分と他人の境界をなくすことでもある。平和な世界づくりはあらゆる意味で境界のない世界づくりをめざすことでもある。だからきわめてシンプルな世界になるはずさ」

プラント　安全な原子炉

第四の部屋を出てチューブの透明な回廊を歩き出すと右奥に重なり合った二つの大きなドームが見えた。ドーム内には頑丈そうな建物が納まっているようだ。

「あの二つのドーム内にある建物はなんですか？　工場みたいに見えるけど：らしくないな」

「ホホーウ！　あれは原子炉と発電施設なんだ。小型のものだけどね」

「ええー！　原子炉！　エポカでも原子炉なんか使ってるんですか！？　エポカの世界では核融合とか：もっと最先端技術のものが使われていると思っていましたけど」

「ホーウ！　がっかりしたかな。そうね、エポカではどこにでもある安直な発電施設なんだ」

「どこにでもあるって、原子炉というのは事故でも起きたら大惨事になるような代物ですよね。そんなものがあちこちにあってもいいんですか？」

「ホホーウ！　いーや、安全な原子炉なんだ。安全で安価、効率的で手ごろな発電施設だから心配には及ばない」

「そんな原子炉ってのは僕らの世界にはないはずだな」

「ホーウ！　カズマの世界には実稼働しているものはないけれど、かなり昔から核技術関係者の間で知られているもので、燃料にウランではなく、トリウムを使用している原子炉なんだ。正確にはトリウム溶融塩炉というもので、現在の技術で十分造れるものでもある」

「安全で安価：：そんな良いものがあって現在でも十分造れるのなら何故世界で造られてこなかったんですかね？」

「ホーウ！　そのとおりだと思うんだが：トリウム型原子炉には当初ふたつの大きな問題があった」

「大きな問題？」

「ホーウ！　ひとつには、トリウムをマッチに例えるとトリウムはマッチの軸の部分であって火種であるマッチの穂先の部分がないこと。これに対してウランの場合には火種部分と軸の両方を備えている。もうひとつは、現在稼働中の原子炉では核兵器の材料になるプルトニウムが廃棄物として製造できるんだが、トリウム型原子炉ではできないんだ」

「えー！　そんなもの出来なくたっていいじゃない。むしろ核兵器のない世界平和のためにはその方が好都合なのでは？」

「ホホーウ！　今では、そう考える人が多いかもしれないが、原子力発電所が造られ始めた時代はそうではなかった。核兵器による軍拡競争の時代には、原子力による発電だけでなく、それによるプルトニウムの製造も必要だったんだ。原発の安全性よりも国家の安全性が

優先されたわけだ。今でも核兵器の廃絶は遠い道のりではあるようだね」

「でも、日本のような非核三原則の国ではプルトニウムなんか必要ないですし、地震や津波などの自然災害に襲われても重大事故が絶対起きないような原子力発電所にすべきですよね」

「ホーウ！　従来型の軽水炉などの原子力発電の流れができてしまうと、なかなか流れを止められないようなんだ。そうだね、立ち話になるけれど、トリウム型溶融塩炉について簡単に説明しておこうか」

「お願いします。そんな原子炉の技術があるなんて知らなかったので」

「ホーウ！　まずトリウムなんだけど、トリウムはウランよりも自然界に豊富に存在する。様々な工業製品の製造に不可欠なレアアースという希少資源の話は知っていると思うけれど、このレアアースを採掘する際の副産物としてトリウムが産出される。これはレアアース抽出の邪魔物であり環境汚染物質でもある。トリウム原子炉は、この邪魔物を有効活用できるということになる。

さきほど言ったように、このトリウムはそれ自体では核分裂を起こさない。火種となるマッチの穂先の役割をする物質がプルトニウムやウランなどになる。だから、トリウム原子炉では、プルトニウムは製造しないがプルトニウムを消費する。これは現時点では非常に好都合なことなんだ。というのは、現在稼働中の原子炉の放射性廃棄物であるプルトニウムの半減期は二万年以上で、この大量のプルトニウムの処分に往生しているわけだが、これを消滅

させてくれるからだ。トリウム原子炉でも放射性廃棄物は出るが、半減期は百分の一程度で量も極めて少ない。

この原子炉が安全な理由は、次のようなことになるかな。

- 一次冷却材として溶融塩（フッ素とリチウムなどの金属が結合した溶融状態の塩）を使用している。
- 核分裂の減速材には黒鉛を使用している。
- 原子炉の構造が単純で、長期継続運転が可能である。
- 炉内の温度が上昇すると溶融塩が膨張し、核分裂反応は逆に遅くなるため、原子炉の暴走が起こりにくい。
- 冷却材に水を使用しないので原子炉内は常圧であり、原子炉からの溶融塩の漏洩や設備の破壊といった高圧に伴う事故の危険性がない。
- 溶融塩は化学的に安定かつ不燃性なので、火災の危険性がない。
- 溶融塩は、沸点が約一五〇〇℃と通常運転温度の約七〇〇℃に比べて十分高く、仮に温度の異常な上昇があっても、燃料の性質に大きな変化が発生せず、炉心溶融のような重大事故が起こらない。
- 仮に異常が発生しても、燃料塩をドレインタンクへ排出することで、原子炉を容易に停止し無害化できる。

といったことがあげられる。原子炉を小型化することもでき、安全なので街中でも設置で

きる。消費地に近い場所に発電所をつくれば送電線施設や送電ロスを小さくできるメリットもある。発電所の近隣地域ではこれまで無駄に処分していた原子炉の排熱を暖房、温室栽培、温水プールなど様々な用途に利用できる。

この原子炉が安上がりなのはこのほかに、

- トリウムはウランに比べて豊富にあるので低コストで調達できる。
- 軽水炉のような燃料棒などの加工費用がかからない。
- 廃棄物処理コストがかからない。
- 長期連続運転が可能で、運転要員も少なくて済む。

といった理由による。

ひとつ付け加えておくと、プルトニウムは、今は核廃棄物で豊富にあるけれど、これがなくなれば火種になる核燃料増殖施設が必要になる。トリウム自体は火種ではないけれど、天然トリウムに中性子を吸収させることで、消費する量以上の火種になるウラン２３５が増殖できる。このような増殖炉をつく必要もあるんだ」

「なんで、こんなに素晴らしい原子炉が今まで造られなかったのか不思議ですね。このトリウム型の原子炉がいっぱいあれば、化石燃料などを使う必要がなくなると思うし、太陽光や風力発電を使う必要も無くなるのではないですか。・・・そうだ、化石燃料を使った発電所が必要なくなれば、温室効果ガスとか言われているＣＯ２による地球温暖化問題だって解決するんじゃないですかね」

「ホーウ！　確かに、太陽光や風力発電のコストは原発よりも、化石燃料よりも割高で、しかも自然現象に頼るため電力としての安定性に欠けている。現在は、政府が買い取り制度を設け電力会社にこれらを買い取らせているので、電力会社はこの料金を電気料金に上乗せし、消費者に負担させている。消費者は太陽光発電や風力発電を維持するために、高い電気料金を支払わされているわけだ。安価なトリウム原子炉で電力需要を十分賄えるならば、自然エネルギーによる発電はもっと限定的にしか利用されなくなるだろうね」

「地球温暖化問題は？」

「ホホーウ！　化石燃料を使わないので資源の節約にはなるが・・・実は・その問題はなんの問題もないので言わなかったんだ。正直言ってテレビや新聞で言われている『温室効果ガスによる地球温暖化』というものにそもそも問題がある。『問題が無いのに問題だ！』とされていることが問題なんだ」

「えっ！　テレビや新聞では人間が使用する化石燃料で大量の炭酸ガスが放出されて、地球が温暖化していき、地球環境が大変な問題になるっていっているけれど、これが誤解なの？」

「誤解の一番目は、炭酸ガスが悪者扱いされていること、２番目は地球の温暖化の原因が化石燃料の消費にあるということ、三番目は地球が温暖化しているということ」

「フーパがそんなことを言うなんて信じられないな、本当なの？」

「ホホーウ！　まあね。ここでは詳しく説明している時間がないんで、要点だけ言っておくことにするよ。最初の炭酸ガス悪玉論だけど、カズマは学校の理科の授業で植物の光合成

について勉強したと思うけど。炭酸ガスがなければ植物は育たない、少なければ生育が悪くなる。つまり食料の生産量が減ることになる。地球の歴史で、地球が温暖であった時代には植物が繁茂、動物も隆盛した。逆に寒冷化しり、地球全体が雪玉のように氷ついた時代には多くの動植物が死滅したり、絶滅したりした。温暖化によって生息領域が変化する動植物もあるけれど、温暖な気候は生物にとっての楽園なんだ。地球の歴史を億年単位でみると、初めのうち炭酸ガスは金星のような濃度であったが、その殆どは石灰岩に化けてしまっている。大気の組成は窒素が七十八％、酸素が二十一％、アルゴンが一％くらいで、炭酸ガスは僅か〇・〇三～〇・〇四％にすぎない。炭酸ガスは数億年後には更に減って光合成が行われなくなり、植物が死滅するので動物も死滅すると言われている。だから、炭酸ガスは多少であれば増えることの方が歓迎すべきことかもしれない」

「その話はなんとなく分かるような気がするな：そうか人間もいずれはいなくなるんだ」

「ホーウ！　では二番目の問題だ。地球の温暖化や寒冷化は雲の量と密接に関係している。雲の元になる水蒸気は前にいった大気組成の中には含まれないが、平均的には三％位といわれている。雲が増えれば、太陽光は宇宙に向けて反射されて地上に届かず寒冷化し、逆に少なくなれば温暖化する。この雲の量は地球に降り注ぐ宇宙線の量と密接な関係があることが分かっている。この宇宙線の量は太陽黒点の数と関係がある太陽の活発化程度に左右される。太陽活動が活発になると宇宙線を防ぐバリアーが強くなるんだ。だから太陽活動が活発になれば地球は温暖化し、弱くなれば寒冷化する。ところで、日光を宇宙空間に反射する雲なん

だけれど、雲の元になっている水蒸気は最大の温室効果ガスでもある。温室効果ガスというと炭酸ガスを思う浮かべる人が多いけれど、水蒸気が温室効果の九十五％程度を占めている。炭酸ガスは残り五％程度の温室効果しかもっていない。人間活動による炭酸ガスの排出量はそのまた部分を占めるに過ぎない。排出された炭酸ガスの大半は何れ光合成によって植物に取り込まれてしまう。炭酸ガスが増えれば植物の量も増える。結果的に、大気中の炭酸ガスはそれほど増えないことになる。

海は炭酸ガスの貯蔵庫にもなっていて、海水温が上がれば炭酸ガスを放出し、下がれば吸収する。気候変動の要因は様々あってもっと知りたければ様々な本が出版されているし、インターネットでも調べることができるよ」

「たしかにそういう話はテレビや新聞では報道されないな」

「ホーウ！　それでは最後の地球がどんどん温暖化しているという話だけれど、事実は違う。二番目の問題とも関係するんだけれど、太陽活動の周期は十一年ほどで、活動が非活発な時期にかかってきていることから、地球の温暖化は進んでいないどころか今後は寒冷化していくという予想もある」

「じゃあ、テレビや新聞の報道は嘘ってわけ！　国連の機関が予測していることが嘘ってことになりますよね」

「ホーウ！　地球が人間の排出する二酸化炭素で温暖化して危機的な状態になるというのはコンピュータシミュレーションの結果によるものなんだけど、そもそも計算の前提条件

が間違っているんだ。衛星や気球による全球的な観測データで見る限り温暖化は進行していない。予測と現実のギャップは拡大する一方だ」

「：でもテレビなどで映し出されている温暖化のために氷河が後退したり、南の島が沈みそうになったり：とかの話は？」

「それらの多くは初めから人間が排出する炭酸ガスが原因の温暖化だとの決めつけによるもので、原因をよく調べると人間活動による炭酸ガス排出量との関連付けに無理があるものが殆どなんだけれど、ＩＰＣＣという国連の関連機関が言うことなのでだれもが信じて疑わない。なんらかの作為があるとしか考えられないんだけどね」

「よくわからないから、今はフーパのような見方もあるんだということにしておくよ。でも嘘だとしたら、いったいなんでそんな嘘をつくんだろうか：。世界中が、みんな騙されていることになってしまう」

「ホホーウ！　この嘘を告発している研究者も多数いるので勉強すれば全てわかることだよ。マスコミの圧倒的なプロパガンダの前には真実も正義も覆い隠されてしまう。テレビや新聞のニュース、解説だけ見ている人は確実に洗脳されてしまうといってもよい。本当のことを話す人は変人や異端者扱いになってしまう」

「このようなことってほかにもあるんでしょうね」

「ホーウ！　いくらでもある。後で話にでてくる国の借金についての誤解もそうだし、特に甚だしいのは歴史の捏造だな。歴史の捏造問題については、今回は触れないけれど、史実

と異なる見解がまかり通っていて実に困ったものだ。安全な原子炉、ＣＯ２による地球温暖化、国の借金、歴史捏造問題など、どれをとっても間違った社会通念のため、間違った政策が実行され、争いが起き、多くの人、社会全体、世界が不幸になっている。このような間違った事実認識は、多くの場合イデオロギーや利害に起因するものが多いので始末が悪い。これらの間違いや捏造は政治を真逆の方向に舵を切り、問題を悪化させてしまう。『未来からのメッセージ』はこれらのプロパガンダや誤解の幾つかを解くことにあると言っても良い」

「洗脳されないようにするには？」

「ホーウ！　イデオロギーや利害、一般社会通念や先入観に捕らわれないような心構えでいることと『誘拐される資格』で言ったように、受け身で情報を見聞きするのではなく、少しでも疑問に思うことがあれば、自ら積極的に調べて廻ることだね。インターネットなどで調べれば同じような疑問を持つ人も大勢いるし、本当の解答が用意されていることも多い。探せば本もあるはずだ。・・・立ち話はこのくらいにして次の部屋に行こうかな」

第五の部屋　アンドロイドの神

次のドームに向かう途中でフーパが言った。
「ホホーウ！　こんどは宗教についての話だよ。文明が進んだ世界でも、いつの世にも宗教はあるんだ」
「ぼくらの世界の宗教とエポカ世界の宗教に違いはあるんですか？」
「ホ、ホーウ！　エポカ世界の宗教はカズマの世界の宗教と較べて、かなり異なっているかもしれない。歴史的に、宗教も多くの反省を迫られることになったし、社会の仕組みも大きく変化したからなんだ」
「……というと？」
「ホ、ホーウ！　エポカの多くの人々は、これから話すように宗教を考えているのさ。歴史的にみると、宗教は貧しい人や虐げられた多くの人々の心の支えになってきた。しかし、全ての宗教がそうだとはいわないけれど、為政者への迎合、民族対立の増幅、宗教戦争、他宗派へのテロなど幾多の罪つくりも行ってきた。万物に神が宿ると見る宗教や、複数の神を崇めるような汎神論的な宗教もあるけれど、宗教を信じる人々の多くが他の宗教に対して大なり小なり排他性をもっていて、自らが信仰する神が唯一絶対なものであるとする信念が強

いほど排他性が強くなる傾向がある。この排他性こそが、宗教の裏の面、つまり血塗られた歴史をつくってきたと考えているのさ。

　人としてこの星に生まれたことの奇跡を思えば、人種、民族、宗教、国なんてものに拘りをもつのは愚かなことだと思うんだけど。盲目的愛国主義とか妄信的信仰といったものは、他国の人や異なる宗教を信じる人を差別する危険性を孕んでいるのではないかな。だから、エポカでは人類愛が全てのものの最上位にあるべきだと考えているのさ。それで、エポカの世界では『どのような神仏を信じるか』を問題にするよりも、その宗教が『病んだ人の心を救う、人の道を教える、人に生き甲斐を与える』ことにどれだけ貢献しているか、どのような活動をしているかに注目するようになってきたんだ」

「どのような神仏を信じるかはあまり問題とされなくなったなんて、宗教にとってみれば根本的な問題じゃないの」

「ホホーウ！　たしかにそうだね。いずれにしても神や仏そのものではなく、教義の内容や信者の活動の中身が大切になってきたということだな」

「さっき、社会の仕組みが変化したからと言っていたけれど、そのことは宗教とどう関係しているの？」

「ホ、ホーウ！　エポカの世界は生活に困窮するような貧困が無く、生まれながらの不平等も無く、失業の不安も無い社会だからね。そうであれば、皆が幸福かというとそういうことにはならず、いつの世にも心を病んだ人が大勢いる。

エポカでの心の病のひとつとして『ありあまる自由』に起因する病がある。『ありあまる自由』というのはロボットやアンドロイドが人間の多くの仕事を代替するようになったことも影響している。不安や恐怖が何もなく、大きな自由がある社会は、逆に精神的に不安定な人々を生み出すこともあるんだ。エポカの文明病といえるかもしれない。それで、こういった人達の心の病を救うことが宗教の主要目的になってきたというわけさ。今回の話の背景はひとまずこんなところかな」

「ぼくらの世界の人から見たら、ずいぶん贅沢な悩みに思えるけど……」

×　×　×

カズマが『アンドロイドの神の部屋』のドアを開けると、ホログラフィは人が行き交う小奇麗な建物内の広い廊下を辿っている。ホログラフィがある部屋の前で止まると、部屋のドア越しに、部屋の中からどっと笑い声が聞こえてきた。

「ホー！　誰かが何かおかしな話でもしているのかな」

部屋の中に入ると、集会のような場面が映し出された。笑い声は既に鎮まっていた。演壇の中央には、ひときわ大きな写真が掲げられている。エポカでは見た目のだけでは年齢は分からないということであるが、三十歳前後に見える青年の写真である。その左右にも、同一人物の写真と思われる子供時代からの写真が順番に並べられていた。聴衆席には大勢の人が

いて、演壇でのスピーチを神妙な面持ちで聞いている。
　参列者がかわるがわる登壇し、スピーチを行っていた。スピーチの内容はすべてレミルという人の思い出話であった。

「これは何の集会なの？」
「ホホーウ！　追悼集会さ。カズマの世界の葬式のようなものかもしれないね」
　カズマの目には、とても葬式には見えなかったので、フーパに訊き返した。
「お坊さんや牧師らしい人の姿は見えないし、出席している人達はカラフルな衣類を身につけている。室内の装飾だって宗教施設といった感じではなく、普通の集会場としか見えないんだけど……それに、葬式の場で笑ったりするものではないと思うけど。これが葬式なの？」
「ホホーウ！　だから言ったろぅ～追悼集会だって。エポカの世界では、一般には人が死んでも葬式といった儀式は行われない。その代わりといってはなんだけど……こういう追悼集会が行われるのさ。但し、死んだ人が宗教を信じていて、その宗教の儀式を行って欲しいといった遺言があるような場合は別だけどね。
　ここに集まっているのは、死んだレミルという人と親交のあった人達で、彼の思い出を語りあっているところなんだ。レミルは将来を嘱望された若い精神分析学者だったんだけれど、心臓麻痺による突然の死で、多くの精神分析学者達から惜しまれていたようだよ。
　それと、カズマの世界では、葬儀の場での『笑い』は『不謹慎』なことかもしれないけれ

ど、不謹慎であるかどうかは文化によるものではないかな。エポカでは誰でも、人に『迷惑』になるかどうかは気にするけれど、……そもそも『不謹慎』に対応する言葉なんてエポカにあったっけな。それに、エポカでは感情を素直に表現することにためらいはないんだ」

「最後になりますが、ミラカさんお願いします。大丈夫ですか……ミラカさんには時間の制限がありません。ごゆっくりお話をなさって下さい」司会者が言った。

若い女性が立ち上がって、返事の代わりに首を縦に振った。

ミラカという女性が登壇した。女性は目を腫らしている。

「私がレミルと初めて会ったのは、ここにご出席頂いているランサム先生の研究室でした。私は、レミルのようにランサム先生の直弟子というわけではなく、別の学校で社会組織論を学んでいましたが、社会組織と人間心理との関係について学ぶため、ランサム先生の研究室に出入りするようになったというわけです。精神分析を学んでいる人には無愛想な人が多いのですが……誤解があったらご免なさい。レミルは絶えず穏やかな笑みを浮かべていた人でした。レミルは研究室の先輩でしたから、私は様々な問題について議論を吹きかけたり、相談にのってもらったりしていました。時が経つにつれ、レミルの博識さと優れた分析能力に敬服するとともに、レミルに心酔するようになりました……」

ミラカはレミルの恋人であった。ミラカの思い出話が終わると、会場内で手を上げる人がいた。

「何でしょうか？」
「レミルから遺言のようなものを、何かお聞きになっていますでしょうか？」
「僕らの世界では、葬儀や追悼集会の場で、質問するような人はいないけどね」
「ホーウ！　それも『不謹慎』だからかな」
「そうかもね」

「いいえ、突然のことだったので、私も、誰も何も聞いてはいないと思います。……遺言という訳ではないんですが、亡くなるひと月ほど前に、レミルが妙なことを言っていたのを覚えています。『僕の脳の複製があるんだ』とか……」
　すると、今度は、最前列に座っている初老の男性が、おもむろに手を上げてから発言した。
「実は、脳そのものの複製ということではないんですが、レミルの脳の全ての情報をデータベース化してあるんです」

「ホーウ！　この人はレミルの父親のシラキ博士なんだ」

「脳の全ての情報をデータベース化することなんてことが、可能なんですか？」と誰かが質問をした。

「そうです」とシラキ博士が答えると会場内がざわめいた。
ミラカが降壇し、ざわめきが一段落すると、
「それでは、シラキ博士ご夫妻、挨拶をお願い致します」と司会者が言った。

「ホ、ホーウ！　シラキ博士は、人工知能の開発に関する第一人者ともいわれている人なんだよ」
「研究分野は全然違うけど、親子そろって研究者なんですね」
「ホーウ！　全く関連が無いともいえないんではないかな。両方とも知能に関連することだから」

シラキ博士夫妻は深々と頭を垂れてから、参列者に生前の息子との親交に謝意を述べた。
夫妻が降壇すると数人が楽器をもって壇上の椅子に座った。
「それでは、最後にレミルが好んで歌っていた『星のかけら』を合唱したいと思いますので、ご協力をお願いします」と司会者は言って、自ら指揮棒を握った。
音楽が演奏され、高らかに歌声がホールに木霊した。

百億年の時を経て
あなたは生まれた偶然に
あなたは星のかけらです

あなた自身が奇跡です
この奇跡を知るならば
不思議の意味を知るならば
閉ざされた心の空しさが
開かれた心の尊さが
あなたの胸に響くでしょう
憎しみや争いがあるところ
驕りや妬みがあるところ
壁が立ちはだかっているはずです
責めることの憤懣が
深い悲しみを産むことを
立場を換えれば分るでしょう
理解されないことを嘆くより
壁を取り除こうと努めるなら
わだかまりは消えるでしょう
あなたは星のかけらです
あなた自身が奇跡です
かけがえのない命です

合唱が終わると、参列者は散会し、帰路についた。

「結婚式と葬式では違うのかもしれないけれど、ぼくが今まで出席した結婚式では、スピーチする人は皆、お定まりの歯の浮くような褒め言葉を連発していたけれど、そんなことはなかったですね……。それと、歌詞のなかの『あなた自身が奇跡です』って確かにそうですよね」

「ホーウ！　そう君の存在も奇跡としか言いようがない。なぜこの世に生まれ、その肉体に君自身が宿っているのか。しかし、この歌詞の奇跡の意味は、この宇宙そのものがあまりにも奇跡的であるって意味も含まれているけれどね」

「どういう意味？」

「ホ、ホホーウ！　歌詞にあるように生物の身体は星のかけらでできている。宇宙はビッグバンという火の玉で始まり、長い年月を経て無数の銀河ができた…という話は聞いたことがあるかな？」

「テレビの子供むけ科学番組で見たことあるな」

「ホーウ！　宇宙の始まりには水素と僅かばかりのヘリウムという元素しかなかった。ヘリウムを含めて炭素、酸素、鉄などほかの全ての元素は星の内部で造られたもので、それが超新星爆発という星の大爆発によってばら撒かれた。太陽や地球はそういった星の残骸を材料にしているので、人の肉体の材料になっている物質も元をただせば星のかけらということ

になる。生命が誕生した太陽系や地球のような星はこの宇宙にはたくさんあるので、このことは奇跡とは言えない。しかし、宇宙なるものが我々が見ているこの宇宙しかないとすればまさしくこの宇宙は奇跡以外のなにものでもなくなる」

「宇宙には他にもあるということなの」

「ホ、ホーウ！　宇宙は英語ではユニバースと言う。この『ユニ』というのは単一のという意味だけれど、物理学者の多くは宇宙が無数にあるのではないか考えている。何故かというと、ひとつには、生命が存在するようなこの宇宙は、様々な物理定数がほんの少しでも違っていたら物理法則が違ったものになり、生命はおろか銀河すら存在できなかった。我々のいる宇宙しか存在しないのであれば、偶然にしてはあまりにも都合がよくでき過ぎているというんだ」

「物理定数とか物理法則ってのは変わることのないものかと思っていたけれど」

「ホーウ！　多くの物理学者がそのようには考えていないようだね。ふたつめには、宇宙誕生時、ビッグバンの前にインフレーションという途方もない膨張が起きたという理論が様々な観測の結果から裏付けされている。その理論は、宇宙の誕生時に生まれたのは単一の宇宙ではなく数知れない宇宙が次々に生まれたかもしれない、その方が自然であると言っている。それだけではなく物理の究極理論と目されている理論があるんだけれど、この理論からもマルチバースとかメガバースとか呼ばれている宇宙像が導かれている。この宇宙は唯一無二のものではない。この宇宙は無数にある宇宙の中でたまたま銀河や生命が誕生できるよ

うな物理定数をもった宇宙なのではないかというのだ。様々な物理定数が都合よく調整されているというのではなく、無数にある物理定数セットの中には銀河や生命が生まれるようなセットをもつ宇宙もありえるということになる。だから物理学的には奇跡はないことになる。しかし、信じられないくらい小さな確率で誕生したこのような宇宙の中でたまたま太陽系の第三惑星に人間として生を受けたことは奇跡としか言いようがない」

「お互いにそんな奇跡的な存在である人間が、金儲けのことしか考えなかったり、小さな島の領有権でいがみあったり、宗派対立にあけくれたりすることはとても愚かしいことに思えるな」

レミルの遺体は病院に送られ、献体のため臓器を取り出され、残った遺体は荼毘にふされ、遺灰は海にまかれた。

「遺体の処理方法もこういうやりかたが普通なんですか？」

「ホーウ！　そうだね、一般的といえるかもしれないね」

「レミルのお墓はどうなっているの？　海に遺灰が撒かれてしまったけれど、あるの？」

「ホーウ！　お墓ということではなくて記念碑だけど…つくる人もいないことはないけれど、一般的とはいえないな」

「墓がなければお参りできないのでは……どうするの？」

「ホ、ホホーウ！　お参りというのは宗教を信ずる人が行うひとつの風習ではなかったっけ。そうでない人もいるのかな。エポカの世界では宗教を信じる人の方が少ないんだ。でも、お参りの際に親族や友人が集まるのと同じように、エポカの世界でも親族や友人が集まって故人を偲んで語り合うという習慣はあるよ」

「追悼集会以外に意味を見出している行事はないの？」

「ホーウ！　良い質問だね。お墓の代わりということではないんだけれど、追悼集会のあとで、皆で相談してつくるものがあるんだ」

「なんなの？」

「ホーウ！　モノではなくて記録なんだけどね。故人の略歴の整理作業が行われることになっている。故人の血縁や生い立ち、履歴、趣味、様々な功績や業績なんだけれど…この中には写真や動画などの資料も含まれる。略歴ということになっているけれど、一般にはかなり詳細なもので、これを見れば、故人がどのような人物で、どのようなことをしていた人であるかについてそっくり分かることになる。整理された略歴は、永久保存のデータベースに保存されることになっていて、誰でも閲覧できるんだ」

「お墓や戒名は、死者を現世での権威や富で格付けして、あの世にまで持ち越すようなものであるように思いますよね。宗教の本来の姿と反してるんじゃないかな。確かに、お墓よりも、故人の生き様や業績などを公開する方が、故人には喜ばれますよね」

「ホーウ！　どうかな。喜ばない故人もいると思うけど」

「えっ……そうだな中には褒められるような人生を送らなった人もいるか」

×　×　×

ホログラフィはシラキ博士の研究室を映し出している。

シラキ博士の研究室は小さな倉庫と思えるような部屋であった。入口の背面の壁には多数の様々なロボットやアンドロイドが並んでいる。部屋の中央にも椅子に座ったアンドロイド二体が置かれている。

レミルの追悼集会から数日が経っていた。レミルの死を最も悲しんだのは、他ならぬ父親であるシラキ博士であったかもしれない。将来ある有能なひとり息子を亡くしただけではなかった。レミルはシラキ博士の研究の協力者でもあったからである。しかし、シラキ博士は悲しみのどん底から這い上がりつつあった。

「何としてもこの人工頭脳の開発を成功させねば……」

シラキ博士は、自身が『パターン認識や帰納法的思考のための集積回路』と呼んでいるものを開発している。

人工頭脳に使用されていた集積回路は『演繹法的思考』というものに関する限り人間の頭脳よりも遥かに強力であったが、『パターン認識や帰納法的思考のための回路』に関しては、人間の頭脳には及ばないとのことであった。

部屋の中央に置かれた二体のアンドロイドが目下の研究開発に使用しているものである。アンドロイド相互の情報の送受信チェックのためには、二体が必要であるとのことだった。

シラキ博士は、レミルの追悼集会で話したように、レミルの生存中に、レミルの脳の神経細胞のネットワークや知識などをデータベースに保存しておいたのである。この他、レミルの容姿に関する４Ｄデータ（立体形状と動きのデータ）、皮膚、声、性格に関するデータなどレミルに関するあらゆる情報が保存されていた。

シラキ博士は人間のパターン認識や帰納法的思考の神経回路のアナロジー用集積回路に関しては開発を終えていたが、これまでの演繹的思考用の集積回路との融合に難産していたのである。

×　　×　　×

試行錯誤の末、その後二年の歳月を得てシラキ博士の開発は目処がついた。シラキ博士は、この人工頭脳をもったアンドロイドを実験用のものから実用システムに移行するため、一体のアンドロイドのハードウェアを発注した。

アンドロイドはハードウェアとしての身体、制御回路とそのソフトウェアの組み合わせによって作動するものである。コンピュータがハードウェアとソフトウェアの融合体であるのと同様に、制御回路やソフトウェアを取り替えることによって様々な特徴・機能をもったアンドロイドを実現できるようになっている。

エポカの世界では、アンドロイドやロボットには汎用製品が広く使用されている。シラキ博士は、新しいアンドロイドの発注の際に、カスタマイズと呼ばれるある特別注文を行った。

一カ月ほどして、注文した新しいアンドロイドの身体がシラキ博士の元に届けられた。博

士は直ちに自らが開発した人工頭脳を組み込み、チューニングと呼ばれる調整作業に着手した。そして最後に、念のためということで安全装置を組み込んだ。

「安全装置ってなんなの？」

「ホーウ！　あとで分かるよ」

「ところで、ロボットとアンドロイドはどこがどう違うの？」

「ホホーウ！　ロボットは人間と同じ姿のものもあるけれど、そうでないものもある。ところが、アンドロイドは全て人と同じ姿をしている。しかし、人と同じ姿をしているものが全てアンドロイドというわけではない。一般には、人間と同じような動作ができ、一定程度以上の人工知能をもつものをアンドロイドと呼ぶけれど、ロボットとアンドロイドに明確な境界線があるわけではないよ」

×　×　×

ホログラフィはある小さな集会を映し出している。レミルの三年目の追悼集会だとのことである。レミルの追悼集会のときには何百人もいたが、この集会は五十人ほどになっている。何時の世も、時が経つほど故人を偲ぶ集いの参加者は減少していくものである。集会に参加しない人の多くは、自分の近況やシラキ博士へのメーセージをメールで伝えてきた。

人数が減ったので、集会場には演壇などなく、楕円形に並べられたテーブルに参加者が座っている。シラキ博士の左右両隣には、シラキ博士の夫人のアーサとレミルのかつての恋人

のミラカが座っている。
シラキ博士はミラカと話していた。
「ご結婚なさったそうですね。おめでとう！」
「申しわけありません」
「謝られるようなことは何も無いと思うけど」
「でも、なにかレミルにすまないような気持ちがしているんです」
今度は、シラキ博士の方が恐縮したような口ぶりで、
「ミラカにお願いがあるんだけど……」と切り出した。
「親馬鹿なお願いなんだ……けど。君に見てもらいたいものがあるんだ。それと……是非君に協力してもらいたいことがあるんだ」
「何でしょう？　私にできることであれば遠慮なくおっしゃって下さい」
「実は、君がレミルの追悼集会で話したレミルの『脳の複製』に関連することなんだ。今は、詳しく説明することはできないけれど。よければ一日時間が取れそうな日に私のところに来てもらいたいんだが」
ミラカは、一瞬驚いたような表情をした。
「レミルの脳に関連することなんですか！　今度の××日であれば、空いていますけど」

×　×　×

数日後、ミラカはシラキ博士の自宅兼研究室に出向いた。

ホログラフィはシラキ博士の研究室に戻っている。
ミラカがノックしてから研究室のドアを開けると、
「ようこそ、ミラカさん」という声がドアの脇からした。
ミラカにとって聞き覚えのある懐かしく優しい声であった。一瞬、ミラカは驚きの表情に変わった。
なんと、そこに立っていたのはレミルであった。三年前に死んだはずのレミルそのものであった。衣服も、姿も、声も、表情も！
「レミル、生きていたの……」とあやうく、ミラカは声を出しそうになった。
「ミラカ、驚かせてごめん！　よく来てくれたねえ。ありがとう」と側にいたシラキ博士が間を置かずに声を掛けた。シラキ博士夫人のアーサもミラカを出迎えていた。
「いらっしゃい。主人が妙なお願いをしたようで、ごめんなさいね」
ミラカは、未だ懐かしさと驚きと、レミルの胸に飛び込みたいような複雑な感情が入り混じった放心状態にあった。
「アンドロイドなんだ！　レミルの複製品だよ。名前はレミルにちなんで、レミという名をつけてあるけれどね」
「ホ、ホホーウ！　もう分ったと思うけど、シラキ博士が新しいアンドロイドのハードウェアを発注した時の特別注文というのは、アンドロイドの姿形などをレミルそっくりにして

もらうことだったのさ」

ミラカは、やっとのことで気を取り直した。

「このレミというアンドロイド、私のこと分っているのかしら？」

「そのはずだよ。レミはレミルの記憶のほとんどを引き継いでいるから」

「私が結婚したことは、知っているのでしょうか？」

「ひととおり、レミルが死んだ後のミラカのことは伝えてあるけど」

「レミルがレミになって生き返ることが分かっていたら、私、結婚なんかしなかったかもしれないし……私のこと、どう思っているのか心配だわ」

「まだ、そんなことを思っているんですか、レミはレミルではないよ。アンドロイドのレミと結婚するなんてことできるわけないでしょう。ミラカらしくもないね」

「それはそうですけど……レミルの脳そのものをもっているのなら……」

ミラカは俄かにはレミがレミルとは違うということが信じがたい様子で、レミに話しかけたい気持ちと何を話したらよいかに迷っているような状態であった。

レミはその後、ミラカを見つめるのみで、口を開く様子はなかった。

シラキ博士は、相変わらず戸惑っている様子のミラカをなんとかテーブルにつかせた。アーサも同席した。

「先日のお願いのことなんだけど……実は、もう一体レミと同じアンドロイドがあるんだけど……」と言って、博士は部屋の中央にある衣類をまとっていない無垢のアンドロイドを指差した。

ミラカは博士の言葉にまたまた驚いた。後ろを振り返って見ると、普通のどこにでも見かけるようなアンドロイドであった。

「姿形は違うけれど、中身はレミと同じなんだ！」

ミラカは、もう一体がレミルとは似ても似つかない姿形なので、今度は落ち着いて見ることができた。

「研究開発に使ってきた、実験用のペアのアンドロイドなんだ。開発が一段落したので、このアンドロイドをどうしようかと考えているんだけど。レミを見ているうちに、君と同じようにレミルと二重写しになってね、レミが可愛そうに思えてきたんだ。変だよね、アンドロイドが可愛そうに思えるなんて！　それで、この残りのアンドロイドをミラカの複製品にできたら、レミも幸せになれるのではと考えるようになったんだ。できたら、このもう一体のアンドロイドには容姿だけではなく、君の性格や感情、情緒を組み込みたいと思っているんだ。アーサも、『そうなったらきっとレミルも浮かばれるでしょうね』と言うんだけど……」

ミラカの表情から『ＹＥＳかＮＯ』を読み解くかのように、更に博士は言った。

「それと、正直に告白すると、研究上の関心事で申しわけないんだけれど、恋愛関係にあった二人の感情がそれぞれインストールされたときに、アンドロイドがどのように反応する

か、相互に愛情というものをもつかどうかも調べてみたいんだ」

博士にこのように頼みこまれては、というよりはレミルと瓜ふたつのレミが見ている目の前では……という以上に、もっと積極的な気持ちでミラカは答えた。

「博士のたってのお願いに、ＮＯなどと言えるわけがありません。それと、結婚したとはいえ、レミルへの気持ちは今もって変わりませんし、二体のアンドロイドが私達の代わりに幸せになってくれたらという……何かロマンチックな気持ち……になります」

「ありがとう。ミラカ！」と言って博士は涙ぐんだ。

「心からお礼をいうわ、ありがとう」とアーサも言った。

しばらく三人が語りあってから博士が切り出した。

「それでは、さっそくだけど……準備はしてあるんだ……お願いしようかな」

アーサは仕事の邪魔になるからということで退席した。

ミラカは、初めに４Ｄボックスという箱に入り、ボックス内のスクリーンの映像が命ずるままに動いたり、発声したり、表情を変えたりした。ボックス内でのデータ取得が済むと、モニターの前に座らされ、モニターに映った人が連発する様々な質問に答えた。

博士は、モニター上でＧネットから入手済みのミラカの健康診断情報や心理テスト情報を眺めていた。

「ホ、ホホーウ！　前にも言ったように、エポカの世界は秘密の無い社会なので、誰でも

こういった個人情報を必要に応じて入手できるんだよ」

次に、ミラカは大きなヘルメットのような帽子を被らされ、脳の様々な情報を抽出された。こんな具合に半日に及ぶミラカの肉体的、精神的情報の取得作業が行われた。

作業が一段落すると、ミラカが言った。

「洗いざらい、私というものが調べられて、素っ裸にされてしまったような気分だわ」

「すまないねぇ～そのとおりだよ。なんとお礼を述べてよいのやら……」博士は申しわけなさそうに言った。

「それでも、今回のデータ取得の対象にミラカの脳の思考論理回路は含めなかったんだ。この作業はかなりの日数がかかるし、迷惑だろうと思ってね」

ミラカが帰り支度の身づくろいをしていると博士が言った。

「たぶん、一カ月もすればミラカのレプリカのアンドロイドが出来てくると思うんだ。そのあとでチューニング作業を行うので、二カ月もしたらミラカがアンドロイドになっていると思うよ。思考の論理回路はレミルのものだけど、それ以外の全て、人格的にはミラカそのものになるはずだけど……。よかったらその頃にまた来て下さい。ミラカも興味があるだろうし……」

「そうですね、是非拝見させて頂きます。とっても楽しみだわ」とミラカはにこやかに言ったが、ミラカには何故か不安な気持ちが心の奥底にあった。

「レミ！　また会いましょうね」
「お会いできてとても嬉しかったです」とレミの返事が返ってきたが、ミラカはとても寂しい気持ちになった。ミラカはレミにレミルとしての反応を期待していたからである。

×　×　×

二ヵ月後、期待と不安を抱えて、ミラカはミラカのアンドロイドに対面するためシラキ博士の研究室を訪れた。
ミラカがドアを開けると、レミが言った。
「いらっしゃいませ。シラキ博士がお待ちかねですよ！」
ミラカは、レミとレミルが二重写しになっているので、レミの他人行儀な挨拶のしかたにまたまた戸惑った。けれど、ミラカはレミの表情が明るくなったように感じた。
今回も、博士と一緒に婦人のアーサがミラカを出迎えてくれた。ミラカのアンドロイドの姿は見えなかった。
三人がテーブルに着くと、レミがお茶を運んできて丁重に三人の前に置いた。
「レミル、そんな給仕のようなことしないで！　悲しくなるわ！」ミラカが思わず口走ってしまった。ミラカはすぐに、とんでもないことを言ってしまったと思った様子で、
「ごめんなさい。まだ頭が切り替わらなくて……」と言ってシラキ博士夫妻に詫びた。
「いいのよ。私達だって同じように混乱してばかりいるんだから」アーサはミラカを庇った。

「ホホ、ホホーウ！　エポカの世界では、アンドロイドはあくまでも人間に仕えるものであって、人間と同列ではないからね。主人と召使の関係になっている。レミはレミルと同じ感情をもっているけれど、人間とアンドロイドを厳密に区別した振舞をするようにプログラミングされているんだ」

「理屈は分るけど、見た目に同じ姿をしていると、ミラカと同じようにぼくだって混乱してしまうと思うよ」

「さっそくだけど、ミラカのアンドロイドに対面してもらうことにするよ」と博士は言って立ち上がり、奥の部屋に姿を消した。

奥の部屋から博士が再び姿を現すと、その後ろからミラカのアンドロイドがついて来た。

「こちらにおいで！」と博士が声をかけると、ミラカのアンドロイドがテーブルの前まで軽やかに歩み出てきた。

ミラカの目は、自分の方に向かってくるアンドロイドに釘づけになった。前回この研究室を訪れた際にミラカが着ていたものと同じものを身に纏っていた。

「私って、こういう歩き方でこういう表情をしているのかなぁ～」

「そうだよ。そっくりだよ」

自分と同じ姿形のものがあることがミラカには不思議でならなかった。

「私の雛形になった方にお会いできて、とても感激です」ミラカのアンドロイドはミラカに挨拶した。

「私の声やしゃべり方ってこうなんだぁ……」

「博士、近寄ってみてもいいですか」とミラカは言って、博士の返事を待たずにアンドロイドの周囲を一回りしながら眺めまわした。

「博士、名前をまだ聞いていないんだけど」

「まだ、名前がないんだ。ミラカに名づけてもらおうと思って、とっておいたんだ」

「レミルがレミになったのなら、ミラカはミラになるしかないんじゃないの」ミラカが即座に言った。

ミラカは、今度は目の前の自分自身の姿に言った。

「ミラという名前でどうかしら？」

「ありがとう！　やっと私の名前が決まりました。とても気に入っています」

「それはそうでしょう、ミラがミラカと同じ感情をもっているとしたら、喜ばないはずはないわよね」アーサが言った。

「ミラ！　もう下がっていてもいいよ」博士が言うと、ミラはレミの方に向かって歩いていった。

シラキ夫妻がミラカにミラの感想を訊いたり、ミラカがシラキ博士の開発の苦労話などを訊いたりして話が弾んでいる最中に、ミラカの目にレミとミラが――かつてレミルとミラカ

が打ち解けて会話していたのと同じように――互いに話しあっている光景が映った。レミの話しぶりは、ミラカに話すような他人行儀な話し方ではなかった。ミラカは博士と語らいながら、ミラが羨ましくも妬ましくも感じた。

そして、ミラカは理解した。この前の帰り際に、不安な気持ちが心の奥底にあることを感じたけれど、このことだったんだと。ミラがいないときは、他人行儀ではあってもレミはレミルであり、レミルとミラカであった。ミラが登場したとたんにレミはレミでしかなくなり、レミとミラになってしまった。そして、レミルは元の永遠に帰らぬ人になり、自分だけがひとり取り残されてしまった――とミラカは思った。

×　×　×

その後も、何度かミラカはシラキ博士の研究室を訪れた。ミラカは、レミとミラはレミルや自分とは別個の存在であることを感情的に悟るようになり、穏やかな目で、というよりも醒めた目でレミとミラを見つめることが出来るようになっていた。ミラカは、年を重ねる自分と年をとらないレミとミラを遠巻きに見ながら、楽しかったレミルとの思い出を回顧するのみであった。

レミとミラは、シラキ博士夫妻からアンドロイドとしてではなく息子夫婦のように扱われ、シラキ博士の研究開発の手伝いをした。シラキ博士は、不測の事態が発生した場合に備えて、レミとミラに自身の身体の不具合のチェック方法や修繕方法なども学ばせた。レミとミラは空いた時間には、かつてのレミルやミラカが没頭していた心理学や社会組織についての情報

を収集したり、研究したりした。こうして、レミとミラにとってこの上なく幸せな日々が数年続いた。

レミとミラはレミルの思考回路を引き継いでいたが、この思考回路は思考機能を増殖するように設計されている。加えて、内蔵されているコンピュータの情報処理能力は人間の能力よりも桁外れに高いものである。レミとミラは人間では無いので、Gネットに研究論文を掲載するといったことも無いままに、つまり人知れず膨大な知識を吸収し、能力を拡張していた。シラキ博士は心理学や社会組織に関する学問に関しては門外漢であったし、レミやミラが自分たちの知識や能力をひけらかすこともなかったので、レミやミラの専門分野での知識や能力に関しては知るよしも無かった。

そんなある日、シラキ博士は突然体調を壊し、病床に伏せることになった。長年の無理が祟っての病である。数ヶ月後に、博士は帰らぬ人となった。

シラキ博士は妻のアーサに遺言を託していた。自分が死んだら、レミとミラをエポカ世界で役立てるため、レミをサマラット市という田舎町に住んでいるレミルの恩師ランサムに寄贈し、ミラをシラキ博士の友人が住む大都市であるメガダット市の精神科医マンダムに寄贈してくれと。

アーサは、せめてレミだけでも手元に残しておくことを望んだが、考えてみればレミルはとうの昔に死んでいたので、レミやミラを授けてくれた夫に感謝こそしても、わがままを言ってはすまないと自分自身に言い聞かせて納得した。

シラキ博士の追悼式が済むと、レミはランサム博士の元に旅立つことになり、ミラはマンダム医師の研究室に赴くことになった。

「レミとミラは離れ離れになるけれど、寂しくはないのかなぁ。レミルとミラカが恋人同士だったように、レミとミラも相思相愛になっていたんですか？　人間などの動物は、互いに愛情をもつことができるけれど、アンドロイドの場合にはどうなんですかね」

「ホ、ホホーウ！　難しい質問だけどよい質問だね。愛情といった感情をもてるのは動物だけかというと、そうでもないと思うよ。全てのアンドロイドが愛情をもつことができるというわけではないけれど、自我つまり自分自身を意識できるのであれば、自分の感情をもつこともできるはずで、そうであれば他人を理解することで愛情をもつこともできるのではないかな。

動物はアミノ酸という有機質の分子からできていて、アンドロイドは無機質の素材からできているという違いはあるけれど、つきつめればどちらも同じようなものだと思うけど。たぶん、レミとミラには肉体的な『性』は無いけれど、レミルとミラカの感情を引き継いでいることでもあるし、恐らく強い絆で結ばれていることだけは確かだと思うよ」

「肉体的な『性』が無い分、精神的にというかプラトニックな愛は人間以上に強いのかもしれないなぁ。レミとミラが可哀想ですね」

「ホーウ！　そうだね、悲しいと思うよ。だけど、彼らは必要な時はいつでも体内の無線

通信機能を使って、遠く離れていても会話ができる。コンピュータ相互の通信のようなものだから、短い時間で人間には想像もつかないような多くの会話をいっぺんにできる。アンドロイドは人間と話すときは人間に合わせてゆっくり話すけど、アンドロイド同士の会話の場合には大抵の場合、一瞬で済んでしまうんだ」

――コンピュータ同士のデータ通信ならば当然かもしれないな――

その後、カズマはしばらく物思いにふけっていたが、突然妙な質問をした。

「感情とか愛情をもつものは生物や動物とはいえないんですか？」

「ホッホッホーウ！　遺伝子などにより子孫をつくることができたり、進化できたりするものが生物なので、アンドロイドのようなものは生物とはいえないよ」

「アンドロイドが、人間の手を借りずにアンドロイドの社会をつくり、自分たちの手で子孫を生産できるようになったら……それでも生物とはいえないのかなぁ」とカズマは食い下がった。

「ホーウ！　えらく難しい質問だねぇ～。それは生物の定義の問題だからね。そのように定義すれば『生物』といえるのかもしれないけれど。そうだね、そうなれば宇宙人が見たら、アンドロイドを生物と思うかもしれないね。でもカズマの言うようなことになったら、人間社会は一体どうなるんだろうか……」困惑気味にフーパは答えた。

「そうですね。そうなると、アンドロイドは造物主である人間から完全に自立することになりますね」

「ホーウ！　人類が危機的状況にでも遭遇しない限り、そんなことを人間が許すとは思えないけどね」

「人類の危機的状況って？」

「ホ、ホーウ！　例え話だけど、天変地異などで人類が滅ぶような可能性のある場合には、人類の意志をアンドロイドに継がせようとするかもしれないってことさ。説明を続けると話の本筋から離れていってしまうので、このことに関心があれば後で改めて質問してくれないかな」

×　×　×

ホログラフィは交互に2台の陸上移動用の車を映している。レミの乗った車とミラの乗った車である。車にはレミやミラの修理用部品なども積み込まれていた。

レミとミラは、それぞれシラキ博士の教え子の車に乗せられ、目的地に向かった。

「ホ、ホホーウ！　アンドロイドのほとんどは、適当な交通手段を使って自分自身で好きなところにいく能力をもっているけれど、アンドロイドの行動には様々な制限を設けている。移動の自由が無いのもこの制限によるものなのさ」

ミラの車が大都会に向かったのに対し、レミの車は広大な田園地帯に向かっていた。

ランサム博士の住んでいるサマラット市は、この広大な田園地帯に点在する小さな都市の

ひとつであり、学園都市である。ランサム博士は、この都市の高等教育機関で精神科学を教える傍ら、悩める人々のための病院を運営していた。

レミを乗せた車がランサム博士の研究室に到着した。レミを連れてきたシラキ博士の弟子は、レミを車に残したまま、ランサム博士の研究室のドアを開けた。シラキ博士の弟子は出迎えたランサム博士に丁重な挨拶をした後、シラキ博士からの生前のメッセージを伝え、レミの『制御キー』をランサム博士に手渡した。これによってレミの主人はランサム博士になった。

ランサム博士はドアの外に出ると、レミが乗っている車に向かって大声で言った。

「レミ～！　出ておいでぇ～！」

レミが車を降りてランサム博士の近くまで来ると、

「レミルだ！　なんということだ、レミルそのものだ！」と言って、ランサムは涙した。

人間がアンドロイドと握手することはめったにあることではないが、ランサム博士は生還したレミルを迎えるかのように、握手のために手を伸ばした。レミも戸惑ったように手を伸ばし、レミルの恩師であるランサム博士と固い握手をした。

×　×　×

ホログラフィは、ランサム博士の研究室を映している。

ランサムは深々と椅子に座って、シラキ博士の助手から渡されたレミのアンドロイドとしてのスペックに目を通していた。ランサムと向かい合うように、レミも座っている。ランサ

ムは、レミが従来のアンドロイドとはその頭脳回路が根本的に違うことを知った。ランサムはレミルが学生の頃から博識で、しかもユニークな発想を持っていることに一目置いていたが、レミがそのレミルの脳の回路をもち、レミルが保有していた知識の全てを継承していることを知って驚いた。

ランサムは、レミの性能を調べるため精神病理学上の難問を次々とレミにぶつけてみた。そして、ランサムはレミが最新の精神病理学上の知識までもっており、判断と診断が実に的確かつ迅速であることに更に驚いた。

ランサムは、レミの活用方法を思案し、ランサムが運営する悩める人々のための病院に、精神病理学に関する情報ソースとしてレミを置くことにした。

「ホホ、ホーウ！　ここらで、エポカ世界での人間とアンドロイドの役割の違いについて説明しておくことにするよ。ちょっと前にアンドロイドの行動には様々な制限があると言ったけれど、アンドロイドは人間ではないから当然選挙権は無いし、配当も貰えないのは当然だ。アンドロイドは管理者の命令に従わなければならず、人間に反抗ができないようになっていることはもちろん、移動も制限されている。それと、アンドロイドが行う仕事は、人間の肉体労働に相当するような作業、低度および高度な単純作業、３Ｋ作業、人間の手伝いといったものが主体で、情報処理は行っても創作活動や知的労働は一般には行っていないんだ」

「それならば、ランサム博士が精神病理学の情報ソースとして活用しようとしていること

は、一般的なことではないんですね」

「ホ、ホーウ！　情報ソースとしての活用に限れば、従来の利用方法の範囲内かもしれないけれど、ランサム博士には臨床医師の診断の参考となる判断をレミにさせてみようという意図があるのさ。決定するのは医師だから、人間の領域を侵すことにはならないんだ」

×　×　×

ホログラフィは、ランサム博士の運営するランサム病院に移動している。

病院では数人の医師が患者の診察に当たっている。レミは診察室の背後の資料室で患者のカルテを調べたり、情報収集のためGネットのモニターとにらめっこしたりしていた。

病院を訪れる人の多くは、躁鬱症状をもつ人、精神的に不安定な人、無気力な人達などであった。心の病の大部分は、選択の自由に悩む『自由病』、親子関係に悩む『親子病』、男女間の愛に悩む『恋愛病』であった。カズマの世界のように職場での様々なストレスに起因する心の『職業病』患者は少ない。このうち、最も多いのが『自由病』患者であった。長寿命化したためにこの悩みが倍加したともいえる。寿命が八十歳程度であれば、本人の意志と関係なく人生の行事が次から次へとやってくる。しかし成人になってからの人生がえらく間延びしてしまったので、この空白を埋めるべく自らプログラムを作成しなければならない。

「ホ、ホーウ！　人は生活不安や様々な統制を嫌い、選択の自由を求めているように見える。確かに、生活不安や統制の少ない社会を自由闊達に生きる人もいるけれど、生活不安や統制が無いことが不安になる人もいる。実際には、全ての人が自由を好むわけではなく、意

識は自由を望んでも潜在意識、つまり本音は自由を望んでいないこともある。本人の意識とは別に、人はある程度『不自由』である方が、居心地がよい場合が多い。『何々しなさい』という人間が、価値観の軸になる人間がいる方が安住できる人が多いんだよ。このような人の性と密接不可分の問題として、組織への帰属に関する問題がある。たとえば、カズマの社会で人が定年を迎えた時に覚える不安には、生活に支障ない退職金や年金が貰える場合でも、自由になってしまったこと、強制された人付き合いが無くなったこと、縛られなくなってしまった生活への不安もあるんじゃないかな。つまり組織からの束縛が無くなることに対する不安があるんじゃないかね」

フーパの説明によると、このようにエポカでは『選択の自由』が重荷になる人や長い寿命をもてあます人の扱いが大きな社会問題になっているとのことであった。

患者の診察に当たっていた医師達は、「何か困ったことがあったり、病理学上の情報が欲しいと思ったりしたら、念のためレミに訊ねてみなさい」とランサム博士に言われていた。

医師の中にはレミルが学生時代の仲間も混じっている。

病院の医師達の中には、さっそく自分が担当している患者に関する病理学上の情報を入手するためレミに相談をもちかける医師もいた。レミは既に患者の症状を熟知していて、類似症例などを紹介したが、それだけではなかった。

「〇〇の処方を実行すれば、〇〇までに、〇〇の確率で、患者の症状は完治するはずです

が」というような回答をした。
　相談をもちかけた医師はレミの回答にびっくりした。処方箋だけでなく、なぜそのような具体的な数字まで回答できるのかをレミに問い質した。
「様々なシミュレーションをしてみた結果です」とレミは答えた。

「シミュレーションってなんのこと？」
「ホーウ！　様々な条件を設定して、どのような状態になるかを推定することだよ」

　相談をもちかけた医師の中には、レミが説明した患者の症状の分析に説得性があると思えたため、半信半疑、レミのいうとおりの処方箋を患者に実践してみる医師もいた。
　二、三数ヶ月後、レミの処方箋を数人の患者に適用してみた医師は、レミのいうとおりにいずれの患者も症状が無くなっていたり、大幅に軽減したりしていることに驚いた。このことは、直ちに病院のすべての医師が知ることとなった。
　しかし、「アンドロイドの言うことなんか信用できるものか。人の心は人にしか解明できないものさ」と考える医師もいた。特に、昔レミルの学友であった医師の中にこうした反発が強かった。
　とはいうものの、レミに相談をもちかけ、レミの処方箋を適用する医師は次々に成功を収めていき、患者からこれまでにない感謝をされるようになってきた。

次第に、レミの診断・処方箋に反発していた医師も、レミに相談をもちかけるようになった。レミに対する敬意を込めて、いつしかレミはドクターレミと呼ばれるようになった。

しかし、レミは決して患者の前に姿を現すことはなく、裏方として医師たちの相談にのっているだけであった。患者の問診のような、直接患者と関わるような医療行為はアンドロイドの仕事としての前例が無かったからである。

病院の医師達にとって、次第にレミはなくてはならない存在になっていった。

医師たちは、問診の際、患者に「ちょっと待って下さい、ドクターレミと相談してきますから」とか、「ドクターレミがいうには○○のようですね」ということもしばしばあった。

病気が完治した患者から、感謝のお礼をいわれると、正直に「私のおかげというよりも、ドクターレミのおかげかもしれないな」という医師もいた。

「ドクターレミって？　この病院の主任医師は、ランサム博士ではないんですか？」と訊き返す患者もいた。

評判が噂となり、「なんでもドクターレミという優秀な先生がいて、長年患っていた病気をかたっぱしから治してくれるそうだ」ということで、ランサム病院には遠方からも多くの患者が訪れるようになった。

あるとき、ミンカというひとりの若い元女性患者が、

「病気の完治のお礼を言いたいので、院長のドクターレミに是非ともお会いしたいのですが」と言って訪ねてきた。

「院長はランサム博士です。ドクターレミは主任医師のような相談役ですが……どなたにお会いすることもありません」応対した医師が答えた。

「ドクターレミが院長ではない！　この病院はドクターレミでもっているようなものでしょう。偉い先生だと聞いていたので、院長先生とばかり思っていました。でも、心の病を治す先生が患者に全く会わないなんて、信じられません。そんな馬鹿なことはないでしょう」と執拗に食い下がってきた。

「ドクターレミには自由な時間が無いんです。しかたないですね、それではモニターを通じてお会いになることで勘弁してもらえますか？」

「お仕事の邪魔になるようでしたら、それでも結構です」ミンカは渋々承諾した。

医師はモニターにレミを映し出し、

「ドクターレミ！　元の患者さんがどうしてもお礼の挨拶をしたいと言っているんで、相手をしてやってもらいたいんだが……」とモニター越しにレミに言った。

偉い先生にもの申すには、ずいぶんぞんざいな口のきき方だな――とミンカは思った。

ミンカの前のモニターに、研究室風の部屋に座っている端正な顔立ちの若い男性が映しだされた。

ミンカは白髪の老人医師を思い描いていたので、担当医師よりもずっと若い姿の人物がモニターに姿を現したのでびっくりした。モニターの人物は白衣ではなく、普段着と見える衣服の姿であったことも予想を裏切ることであった。

「この方が、ドクターレミなんですか！？」
「そうですが、びっくりされました。あんまり若いんで」
ミンカは、素敵な男性が目の前にいるかとでもいうように、顔を赤らめ、しどろもどろになって言った。
「あのおぅ～……私、ミンカといいます。そのぉ……先生のお陰で、なんとか元気で生活ができるように……なりました……なんとお礼を申し上げてよいやら……」
「わざわざ、お礼の言葉を頂きありがとうございます。私は医師の先生方のお手伝いをしているだけですが、皆様のお役に立っているとすればこの上ない喜びです。お会いできて光栄です」とレミは丁重な挨拶をした。
この話は、たちまち多くの患者に知れわたることとなった。
「ドクターレミって、どのようなお方なんですか、未だすごくお若い方のようですけど」と患者から訊かれるようになった。
医師たちは、「そうですね、非常に優れた……というか……何でも識っていて、スーパーコンピュータのように頭脳の回転が速い……」といったような曖昧な返事をした。
このようにして、ドクターレミは神秘的でカリスマ的な存在になっていった。

×　×　×

ホログラフィは、ランサム病院の医師達のミーティング風景を映している。
ミーティングにはランサム博士が参加していたが、レミの姿はなかった。レミはドクター

レミと呼ばれてはいてもアンドロイドであることに変わりはなかった。

ミーティングのテーマは患者の治療方法の改善であった。病院の医師達は、心の病をもつ患者達が百パーセント完治するわけではないことが不満であった。もちろん以前と較べれば、格段に治療が改善されたのであるが。こういう患者の完治率もレミの予測の範囲内であった。

問題は、多数を占める『自由病』患者の完治率がはかばかしくないことであった。

レミのいうところによると、『自由病』の原因は、エポカ世界の『ありあまる自由』にあり、患者の性格や症状にもよるが、この病を癒すには患者から『ありあまる自由』を奪うことが必要であるとのことであった。このため、患者の治療には『自由の無い組織』が不可欠であったのである。『自由が無い組織』とは制約の大きい階級組織などのことである。

ところが、エポカの世界は基本的に『自由が無い組織』が無い社会であるため、治療に四苦八苦していたのである。エポカ世界の組織は、家庭も含めて組織といわれるものは悉く民主的組織になっている。一部の治安組織や宗教組織などに階級制が残存しているだけであった。社会の隅々まで自由な組織となっているが、命令型階級制を採用した方が組織目的を効率的に発揮できるような場合に限り、例外的に封建的な組織形態をとっていたのである。

レミは、患者の性格、潜在能力、症状に応じて治療のシナリオを作成し、シナリオにもとづいてシミュレーションを行い、シナリオの効果を評価した。レミは、患者自身が自らの力で『ありあまる自由』の社会に適応する可能性があれば、それなりのシナリオを作成したが、こういった患者は数限られていた。このため、医師達はエポカ世界の数少ない『自由が比較

的制限された組織』という治療環境を探し出し、患者にしかるべき訓練を実施したあとで、これらの組織に患者を送り込んだのであった。治療の効果を上げるには、よりよい『自由の無い環境』が必要になっていた。

「ホ、ホホーウ！　『自由の無い環境』ということだけど、カズマの世界はどうかな？」

「ぼくらの世界は、多くの国が『議会制民主主義』を採用していて『自由や平等』も唱えているけれど」

「ホーウ！　そうかなぁ。カズマの世界は、いいように解釈してもせいぜい半分しか『自由な社会』ではないと思うけど」

「半分って？」

「ホ、ホホーウ！　封建主義社会というのは、身分制社会であり階級社会でもある。家族や武士などの組織もほとんどすべてが階級組織だ。カズマの住む資本主義社会は、自由主義というけれど、厳密にいえば『資本の自由』主義社会なのであって、社会の全てが民主主義というわけではないと思うけど。

確かに、国会議員などの選挙のことを考えると民主主義の社会のように見えるけど、役所や企業などの組織は全て階級社会のはずだ。会社の場合には、部長や課長といった管理職は社員の選挙で選ばれたのではなく、社長や役員が決めたものだ。部下は上司の命令に従わなければならない。このような組織は民主主義の組織といえるだろうか。命令に基づく階級社

会だと思うけど」

「言われてみればそのとおりですね」

「ホ、ホーウ！　カズマの世界では会社を自由に辞めることもできるけれど、資産家でもない限り、結局どこかの会社に勤めたりしなければならないんで、見えない鎖に繋がれているようなものだ。ところが、エポカの世界は違うんだ、社長や部長、課長といった役職者も、社員が選挙で選ぶようになっている」

「そうかぁ～　自由な社会と思っているぼくらの社会は大部分が階級社会なんだ。お父さんと望月部長の関係を見れば確かにそうだよな。でも、封建社会のような身分制社会ではないけれど」

「ホーウ！　それもどうかなぁ。法律の下では、そうなっているかもしれないけれど、実質的な身分制度というのは随所に残っているんじゃないの。金持ちと貧乏人との関係とか、役職という名の身分制とか、外国人の扱いとか、下請会社の社員の扱いとか……」

「ぼくらの世界は平等・公平な社会と思っていたけれど、まだまだそうなっていないんだね」

「ホ、ホーウ！　カズマの世界では、法律上の建前は、人は平等であるということになっているようだけど、エポカの世界では、建前は平等で実質は不平等とか、形式上は民主制だが実質は階級制といったことはないんだ。全て実質が問題にされる世界なんだよ」

女性の医師Ａが言った。

「『自由の無い組織』は数も少ないし、あったとしても少なからず『民主主義』的な要素もあるので、どうしても完治率には限界がありますね。組織内で自由を求められると治療の効果が半減してしまいますから」

「いっそのこと、病院で治療のために、独自の『自由の無い組織』をつくってはどうだろうか。患者の数もかなり増えたことでもあるし……」医師Ｂが提案した。

「そうだね、治療目的にあわせた専用の身分制組織や階級組織があれば、治療は格段に進むだろうね」最年長の医師Ｃが言った。

「しかし、前世の遺物のような階級組織をつくるのは、エポカ世界の非難を浴びるのではないかな？」ランサムが疑問を出した。

「治療が目的なのであって、階級組織をつくることが目的であるわけではなく、なによりも患者の幸せのためなので、杞憂ではないでしょうか」提案した医師Ｂが答えた。

「そうだね、階級組織とは言っても、入会は強制的なものではないし、本人の意思でいつでも脱会できれば、エポカ世界から非難されることはないと思いますけど」若い医師Ｄが言った。

「組織をつくるとすれば、どのような組織にしたらよいのだろうか？」医師Ｅが言った。

「患者の症状に合わせて、いろいろな階級組織が必要になるかもしれませんね」若い医師Ｆが言った。

「それもあるけれど、肝心の組織目的をどうするかだ」とランサムがまた問題を提起した。
「患者さんに集まってもらって、一体何をするかだ。目的は治療だが、組織の目的は人の役に立つ『何かをつくる』とか、『何かをサービスする』ものでなければならないはずだ」
「その『何か』ですけれど、患者さんがもっている資質、好み、技能や技術はそれぞれ違うので、ひとつの『何か』にすることはできないと思います。ですから、『何でもあり』にする必要があると思いますが」医師Bが言った。
「そんな都合のよい組織なんてものがあるのかね～？」とランサムが疑問を投げた。
医師達は黙り込んで考えているようであった。しばらくすると、皆口々に言った。
「宗教がいいんではないですか」と。
「新興宗教か……」ランサムがつぶやいた。
「宗教であるからには、核となる『教義』が必要なのでは」年長の医師Cが言った。
「『教義』を無理やり捻り出すのはどうかと思いますが」医師Dが言った。
「難しく考える必要はないと思うけど。すなおに考えればよいことではないかな。我々の仕事は患者にとって最適の運命を見つけ出して、指導してやることなので、それが『教義』になると思いますけれど」オピニョンリーダーの医師Bが言った。
「ということは、『人にはそれぞれ最も幸福になれる生き方があります。人生の道に迷った人々に幸福な運命を授けます』というようなことになるのかな」とランサムが話しをまとめた。

こうして、医師達は『自由病』患者のための階級組織として、新興宗教をつくることに合意した。

その後、医師達は具体的な組織プランや組織づくりの実行計画を作成することになった。

×　×　×

ホログラフィはランサムとレミの対話の場面を映している。

「治療用の組織として教団をつくることになったんだが、どのような教団にしたらよいかレミの意見を聞かせてくれないか」

「この農村地帯では、家父長的、年功序列的な封建制社会の身分制度をベースに、様々なバラエティを持たせるのが最も効果的だと思います」

ランサムは、教団をつくるに至った経緯などをレミに詳しく話すと立ち去った。

レミは胸騒ぎがした。なぜか危うげなものを感じたので、念のためシミュレーションを行ってみた。シミュレーション結果は悲惨な結末を予測していた。シミュレーションの条件を変えて、何度か予測し直してみたが結末は変わりなかった。ランサムに話しても、とても信じてもらえそうなものではなかった。

教団の名前は『自由からの蘇生』に決定していた。その後、教団設立の準備は着々と進んでいった。

宗教としては珍しく、教祖を置かずランサム博士の研究所やランサム病院の関係者による集団指導制にした。この集団指導体制の頂点に理事会を置いたが、ランサム博士は理事会メ

ンバーには入らなかった。レミについては、病院での役割と同じような役割を担うことが決められていた。

教団組織の会則の骨子は次のようになっていた。

- 入会は理事会の了承が必要であること
- 入会者は自らの投資配当を組織に預託し、運用を理事会に一任すること
- 組織の上司の命令に従うこと
- エポカ世界の人々の役に立つ活動に従事すること
- 退会は自由であること
- 退会時には、理事会に預託されている投資配当を、本人に戻すこと

会員から集められた配当は、当然、教団の運営に活用されることになった。

理事の互選により、理事長には人望のある年長のルキアという人物が就任した。準備がひととおり完了し、教団の発足式がサマラット市の集会場で行われる運びとなった。

『自由病』の患者のほとんど全てが、新教団『自由からの蘇生』に入会することが決定していた。理事会メンバーは、患者の多くが教団発足式にドクターレミが出席することを熱望していることを知っていた。宗教を信じる人達は、必ずと言っていいほど、シンボルとなる神や教祖を求めるようである。理事会はレミの出席を求めたが、レミは固辞した。アンドロイドが、人と見間違うような行為をしてはならないことをレミが熟知していたからである。しかし、断りきれない事態になっていたため、レミはランサムと相談し、これまでと同様ス

クリーンでの登場で勘弁してもらうことにした。
スクリーンに登場するにしても発足式なので普段着というわけにもいかず、レミはこれまた時代錯誤の紫色の法衣を着せられるはめになった。

×　×　×

ホログラフィは『自由からの蘇生』の発足式の会場風景を映している。
会場は、会員とこの地方の報道関係者で埋め尽くされている。
理事長のルキアによる会の設立目的、会則の説明が行われたあとで、来賓としてランサム博士の講演があった。これに関係機関の祝辞などが続いた。
式の終わり頃になって、司会者がレミを紹介する段になった。
「ドクターレミは直接登壇して挨拶することはできないので、スクリーンを通じて登場してもらいます」司会者が言った。
すると、会場から大きなどよめきが起きた。
患者達にとって、レミは極めてミステリアスな存在であった。ランサム病院の医師は、全員がドクターレミの指導を受けているらしいが、ドクターレミ自身は決して患者の前に姿を現すことがなかったからであり、自分たちが不治の病と思っていた『自由病』などの心の病から救済されつつあるのは、このドクターレミのお陰であったからである。姿の見えぬ誰かに救われていたというわけであり、このドクターレミなる人物が非常に若い男性であるということだったからである。

やがてスクリーンにドクターレミが紫色の法衣につつまれて登場した。噂のとおり、端正な顔立ちの若い男性である。会場は静まり返っている。

スクリーンから立体画像のレミが話しだした。

「人には、与えられた環境の中で、最も幸福感の得られる生き方があります。環境が変われば最適な生き方は変化します。できることであれば、ご自身でこのような生き方を見出すことをお勧めします。私は、背後から皆様が自らの生き方をできるだけ自力で探し出せるように支援してきたつもりです。しかし、未だに自らの生き方を見出せずお悩みの方がたくさんいらっしゃいます。私はこのような人の心の蘇生も手助けしたいと思っています。そしてそれが私の運命でもあります。私は、あなたたちの資質、性格、能力、家族関係と現在の生活環境を考慮して、あなたたちに適していると思われる生き方を幾つかシミュレーションし、その結果に基づいて人生のシナリオを提示します。提示されたシナリオがあなたたちの気に入ったものでない場合もあると思います。時代錯誤ではないかと思えるシナリオもあるでしょう。ですから、この運命ともいうべきシナリオを受け入れるか否かは皆様の自由です……」

レミの話は簡潔なものであった。

理事会メンバーが意図したことではないが、教団の発足式におけるレミの初登場は、教団にとって効果抜群であった。会員はドクターレミへの同じ想いを共有することでの同胞意識と麻薬を吸ったような陶酔感に浸った。

やがて、会員はドクターレミを『神』として敬うようになった。

そして、教団『自由からの蘇生』はいつしか、人々から『レミ教』と呼ばれるようになった。

はじめのうちはランサム病院経由で『自由からの蘇生』に入会する人が多かったが、次第に、噂を聞きつけた人々が直接入会するケースが多くなり、『自由からの蘇生』は自立していった。

エポカ世界では、『心の病』に悩む人々に対してカウンセリング制度があり、宗教組織なども救済の手を差し伸べていたが、エポカ世界特有の『ありあまる選択の自由』のような『心の病』に対しては有効に機能しないことが多く、このような心の病を抱える人々があとを絶たなかったのである。ところが、新興宗教『自由からの蘇生』は時代のニーズにマッチしたものであったため、急速に会員を増やしていった。

前世は富、肩書きや権威、階級、競争原理が支配する世界であった。前世ではこのような世界が住み難いと考える人々が多数を占めていたが、少なからずこのような社会に居心地の良さを感ずる人やこのような世界にしか自分の居場所が無いと思う人もいた――とのことである。

ところがエポカの世界は『徳』以外のステイタスは消失している。つまり肩書き、階級、出世といった類のものは価値を持たなくなっていたし、そのようなものが無くなっていたのである。

時代のニーズとは、前世の社会規範を一定の枠内で復活させることであった。

レミはランサム病院の場合と同じような役割を担うものとされていた。しかし、教団が機能しだすとレミの役割は量的・質的に変化した。すなわち、数多の悩める人々にその性格や技能・知識に応じて最適と思える目的や仕事を指示し、最適と思える部署を考え、最適と思われる教団内のステイタスを提案する役割をもつことになったのである。

「多くの会員を抱えて、レミひとりで多くの会員の治療のシナリオを書くのは大変じゃない。いくらアンドロイドだからと言って、過労になるんじゃないですか？」

「ホ、ホホーウ！　アンドロイドは、機械のようなものだからロボットと変わりなく昼夜なく働くことができるんだ。但し、定期点検や年一回程度のオーバーホールは必要だから、その時は休止することになるかな。こういったことはレミ自身が行っているんだけどね。それと、レミの場合は自身の体内にあるポートをコンピュータに接続することで、直接患者のデータベースにある情報を取り込むことができたし、情報処理のスピードは人間の脳よりも比較にならないくらい速かったので、患者数が少々増えたくらいでは全く問題ないんだ。スーパーコンピュータのようなものは、同時に膨大なデータを一瞬のうちに処理することができるけれど、それと同じ理屈さ」

×　×　×

ホログラフィは久しぶりにミラの姿を映している。

歴史上の出来事は偶然のように見えて必然であることが多い。偶然的な出来事が、大きな

必然性に操られていることが多いものである。

レミはミラと体内の通信機能を用いて、絶えず自身が置かれた状況や身の回りでどのようなことが起きているかについて情報交換をしていた。レミとミラは互いの置かれた状況が酷似していることを知っていた。レミとミラは、心の病を扱う学者や医師の元に送り込まれたわけであったが、レミやミラの管理者であるランサムやマンダムはともにエポカ世界の大きな社会問題である『自由病』と格闘していた。同じ思考回路をもつレミとミラは、置かれた場所こそ違うが、同じ運命の下にあった。

レミの教団『自由からの蘇生』の発足からしばらく後、ミラの場合もマンダムの指導の下に宗教団体『自由からの解放』をつくることになり、いつしかミラもこの教団の『女神』として会員から祭り上げられるようになっていた。

レミとミラの状況の相違点は、レミが農村地域の小都市に置かれたのに対し、ミラはメガダットという大都市に置かれたことであった。

レミの教団『自由からの蘇生』が家父長的、年功序列的な封建制社会の身分制度をベースとした組織であるのに対して、ミラの教団『自由からの解放』は資本主義社会の企業組織をモデルとしていた。ミラが、メガダットのような大都市では業績を重視するような階級組織が『自由病』に対して最も適していると考え、マンダムに提案したためである。

そして、ミラもまた階級組織を宗教団体として設立することの危険性とその結末について予測していた。

レミやミラは信者から神として祭り上げられてはいたが、組織管理はアンドロイドに許されることではなく、理事会メンバーの専権事項であった。つまり、『自由からの蘇生』や『自由からの解放』は理事会メンバーが管理、支配する賢人宗教組織であった。

レミやミラが危険性を感じていたことのひとつが、この賢人組織とか賢人政治と呼ばれているものであった。レミやミラは、レミルの知識から歴史上の賢人政治と衆愚政治を思い起こしていた。

レミルの知識は次のように語っていた。

- 衆愚政治の社会は、猥雑な社会であり、時に腐臭に満ちているかもしれません。しかし、多くの小さな悪は蔓延っても、民主主義の形態が保たれている限り、軌道修正が行われます。
- 賢人政治やエリート階層による政治は、清廉潔白にも賢明にも見え、正義が行われる場合があるかもしれません。衆愚政治の腐敗・堕落に対して美しく輝いて見えることもあります。しかし、賢人政治は基本的に独裁政治です。
- 賢人は民の声に耳を傾けることもあります。しかし、どのような声に耳を傾けるかは賢人に委ねられています。『正義』はしばしば、賢人たちの思い込みによる『正義』に過ぎません。賢人政治は大きな誤りを軌道修正する仕組みを欠いています。

何より恐ろしいのは、民の幸福が目的ではなく、賢人組織という体制維持が自己目的化し、民意の操作が行われるようになることです。国家社会主義や共産主義を標

榜していた政権の多くがそうであったように、一旦握られた権力は自ら放棄されることはなく、邪悪な権力へと容易に変化する危険性をもっています。

レミとミラは、病院の情報ソースである限りは、患者のためのシナリオづくりという形でアドバイスはしても、そのアドバイスを受け入れるか否かは医師や患者の選択の自由で済んでいた。ところが、自ら望んだわけではない階級制宗教組織の実質的な『神』になったため、理事会の『指導』が命令である以上に、レミやミラの『アドバイス』が絶対的な命令に変化した。

レミとミラを『神』とする宗教は、『選択の自由』に苦しむ人々が実質的に『選択の自由』をレミとミラに預けることを誓う。レミやミラは『選択の自由』を預けた人々の超越的な支配者となり、迷える人々を善導し、自由を献上した人達が命令された生き方に盲目的に服従することを強制する役割を担うことになったのである。

レミやミラは、もしも自分自身が誤りを犯したとしたら、取り返しのつかないことになると危惧した。

ところで、『自由からの蘇生』や『自由からの解放』に入会したのは次のような人達であった。

- 自由であることが苦痛な人
- 自身に確たる価値観が無いため、無限とも思える選択の自由に戸惑う人や自分では自身の運命を決められないような人

●適度に仕事や趣味をもっているが、時間をもてあましている人
●秩序や統制を求める人
●命令されると素直に喜ぶ人や命令されると表向き嫌がるが、内心喜ぶような素直でない人
●権威がないと行動エネルギーが湧かない人
●長と名のつくものになりたい人、社会的権威や資格にステイタスを感じる人や褒められことに無上の喜びを感じる人

×　×　×

ホログラフィは『自由からの蘇生』や『自由からの解放』の会員の姿を追っている。

秩序を与えられ、目標や教団内でのステイタスを与えられた会員は、皆別人のように生き返り、眠っていた能力や活力を取り戻した。

会員組織の大枠はレミのアドバイスに従って理事会が決定したが、会員の行動など細部にわたる方針については幹部会員が決めた。会員数が増えるに従って、この幹部会員の意見が下部組織を動かすように変化していった。

会員達は、積極的に街頭に進出し、悩める人々の家庭を訪問し、会員を増やしていった。

『自由からの蘇生』は教団発足の地である農村地帯を中心に勢力を拡大し、『自由からの解放』は大都市を中心に会員を獲得していった。

『自由からの蘇生』の会員は、レミが時折スクリーンで語った話を『人の道』というバイ

ブルにしていた。『自由からの解放』の会員も同様に、『女神ミラ』が語った言葉を『人の心』というバイブルにしていた。『自由からの解放』の方が後発の教団であったが、大都市を中心にしていたことと組織内に資本主義的な業績評価システムをもっていたことにより、会員数の増加スピードは『自由からの蘇生』よりも速かった。

会員、すなわち信者の勧誘の言葉はともに似たようなものであった。

- もう自由に悩む必要はありません。あなたは必ず救われます！
- あなた自身の運命を知ることが、あなたの幸せの道です！
- 全能の神である『レミ』（または『女神ミラ』）があなたにとって最適な人生をお導きになります！

布教が熱を帯びてくると過激な勧誘の手口も使われ、「あなたは幸福ですか？」と問い質し、「よく分らないけど」、「宗教は嫌いです」とか、質問を無視するような素振りが見えると「あなたは救われたくないのですか？」というような脅迫じみた言葉を投げかける場合も多々あった。

更に、前世の遺物のような『出世』、『肩書き』、『地位』、『権威』、『御利益』などを望むおぞましい心を覚醒させるかのように訴えかけて勧誘する者まで現れるようになった。

×　×　×

教団の内部では、会員獲得など組織の拡大・発展に寄与するメンバーが幹部会員を占めるようになっていった。教団という組織の目的は『自由病』などで心を病んでいる人々の救済

であり、組織の拡大はその手段であったが、組織が拡大するにつれ、手段が目的化する傾向が強くなっていった。組織目的が質的に変化しつつあったのである。

そして、次第に教団の幹部会員たちの行動は、教団理事達による統制が効かないものになっていった。

「ホ、ホホーウ！　組織の目的と組織メンバーの目的は異なることが多い。分り易くカズマの世界の企業を例にとってみると、企業としての組織目的は『よりよい商品の提供と企業利益の追求』だけれど、社員の目的は『より多くの給料や社内での地位をもらえること』にある。こういった組織の目的は、常に組織メンバーの目的にとって変わる危険性を孕んでいる。特に、選挙や投資家などによる外部からの批判に晒されない組織では、例外なく組織目的が組織メンバーの目的にとって替わる傾向をもっている。国の官僚組織の目的は国民の安全、健康、豊かで快適な生活の増進をはかることにある。ところが、官僚自身の目的は出世にある。官僚が出世するには成績を上げたり、組織の権限拡大などに貢献したりして組織内で評価してもらう必要がある。外部からの批判に晒されない官僚の大部分がこのような動機で動けば、組織目的はメンバーである官僚の目的に置き換わることになる。つまり、組織の内部論理が組織目的に優先する事態になるわけだ。宗教は一般に信者だけの閉鎖された社会であるから、同じようになる傾向を内在しているのさ」

カズマはフーパの説明を黙って聞いていたが、ホログラフィのことの成り行きが心配にな

っていた。

『自由からの蘇生』は、農村部から次第に都市部に布教していった。反対に、『自由からの解放』は大都市部から農村部に向けて布教の輪を拡大していった。やがて、随所で両教団の競合が起こるようになった。

『自由からの蘇生』と『自由からの解放』はともに同じ組織目的をもっているため、仲良く共存してもよさそうなものであったが、本来の組織目的よりも幹部会員などのメンバーの目的の方が強くなっていたのでお互いに反目することになった。

教団が閉鎖的階級組織であることによって、強い閉鎖的同族意識とともに排他性を強めていったわけである。

「ホ、ホホーウ！　発足当初の組織の目的は同じだから、布教の対象になる人々は同じ『自由病』の人達なわけだ。それで、カズマの世界のライバル企業にたとえれば、同一市場で客を奪い合うことになった。企業ではないから、同じ目的をもっているのならば協力すればよいのに、おかしな話だ。神様が違っていたり教義が少々異なっていたりしたっていいじゃないかと思うんだけれど。それに経済的な問題などが絡んで複雑な様相を帯びてくる。一旦、流血事件でも起きれば憎悪の感情が先鋭化し宿怨となる。そして武器が修羅場を作り出す。宗教対立の殆どは皆この手の類が多いようだね。本当に愚かしいことだ」

「そうだよねぇ」

「ホホーウ！　このように組織の自己目的化と排他性は一体のものなんだ。同じ組織目的をもっていても、組織が異なれば排他的になる。返って組織目的が異なっていれば、棲み分けができるので、排他的にならずに済む。似たもの同志の方が激しく争うことになるんだ」

×　×　×

ふたつの宗派が反目するという危険な傾向を察知して、ふたつの教団の理事が話し合いをもち、会員の排他的勧誘活動を互いに自制させる合意をした。

教団の幹部は理事会の決定事項を遵守する約束をしたが、末端の全ての会員の動きにブレーキをかけることができなくなっていた。

そうこうするうちに、ふたつの教団の会員間で暴力事件が発生した。『自由からの蘇生』の会員のひとりが『自由からの解放』の会員のオルグにあって宗旨替えをしたことが事の発端であった。排他的活動の中止を理事会に約束した幹部の中には、相手が約束を守らないのであれば、約束を守る必要は無いといい出す幹部も出てきた。

やがて各地で相手の教団を邪教と罵り、小競合いが発生し、リンチや襲撃事件まで起きるようになった。

教団の幹部達は、あくまで自制すべきであるとする多数の『穏健派』と、目には目をという少数の『過激派』に分かれた。末端の会員達も同様に分裂した。

会員数に勝る『自由からの解放』側は、穏健派幹部が過激派幹部をなんとか説得し教団を

まとめていた。逆に、劣勢になっていた『自由からの蘇生』側は、危機感から『過激派』が教団を牛耳ることになった。

　自重していた『自由からの解放』側では、度重なる『自由からの蘇生』側からの攻勢を受けて末端会員の不満が爆発した。そして幹部に対する突き上げによって、こちらも『過激派』の支配するところとなってしまった。ふたつの教団は互い反目し、先鋭化していった。そしてエポカ世界が宗教について最も恐れているような、『殉教者は救われる』という者まで現れるようになってしまった。

「ホホ、ホホーウ！　いつの世もそうであるのかは分らないけれど、少数であっても過激な意見が穏健な意見を排除することがしばしばある。穏健派は声なき声である場合が多いので、少数でも声を大にして叫ぶ者の方が支配的意見であるように見える。過激な者の方が活発で組織的に行動するためもある。反対意見を言うものは、裏切り者とかスパイ扱いされ、時にリンチされたりすることにもなる。それと愛国心、愛社精神、教団愛といった類のものは集団的陶酔感をもたらすので、目先の激情にかられて冷静な判断ができなくなる。同時に、多くの場合排他性を伴うので、きな臭いものになっていく。これは集団の性と言えるかもしれない。こうして、一旦過激派が権力を握ってしまうと、悲惨な結末を迎えるまで権力が容易には穏健派の元に戻らなくなってしまう」

×　　×　　×

もはや教団理事達の手に負える事態ではなくなってしまった。エポカの世界であってはならないとされる前世における宗教の排他性が完全復活した。

レミやミラが行ったシミュレーションが予期したとおりの展開になってしまった。レミとミラは互いに心を痛めた。しかし、組織に関することは教団理事の専権事項であってアンドロイドであるレミやミラが関与すべきことではなかった。

レミとミラは互いに体内の無線通信機能を用いて情報交換を行っていたが、自分たちが何らかの行動を起こさない限りこの事態は打開できないと考えた。

エポカの世界は秘密の無い社会であるため、アンドロイドの交信内容を傍受しようと思えば誰でも傍受することができる。このためレミはランサム博士の了解をとり、ミラはマンダム医師の了解を得て、直接対面して話し合うことにした。

レミとミラはメガダット市とサマラット市からほぼ中間に位置する森と湖の美しいビーンという町で落ち合うことにした。

×　×　×

レミとミラはともに、ランサム博士とマンダム医師から借用したスカイキャップでビーンの町に向かった。初めて空中から見た大地は平和で美しく、清々しいものであったが心は曇っていた。

ホログラフィは湖畔の散歩道を映している。

澄んだ美しい湖面に周囲の緑が写っている場所でレミとミラは再会した。シラキ博士の研

究所を離れてから久しぶりの再会であった。心の中――正確には頭脳回路――でレミとミラは涙し、再会の喜びを噛みしめた。

再会の喜びとは別に、レミとミラはエポカ世界の宗教本来の姿への回帰を図るにはどうするかについて深く悩んでいた。エポカの宗教は『どのような神仏を信じるか』ではなく、『人の生き方、人のありかたを説く』ことが目的とされているからである。

湖畔の散歩道を逍遥しながら、宗派の争いの停止方法、賢人政治の是非、アンドロイドによる人間の逆指導の是非などについて語った。

レミとミラはこのうちのふたつの大きな問題について結論を出す必要に迫られていた。

ひとつの問題は、宗教が犯してはならない『排他性』が復活し、教団会員同士が反目していることである。

もうひとつの問題は、レミとミラが自から望んだわけでもないのに、『神』として奉られてしまったことである。教団の理事や会員が望む限り自身の役割を自ら放棄することは、人間に奉仕するというアンドロイドの宿命からできることではなかった。レミやミラは会員自身が自然にレミやミラを『神』として崇拝することをやめてもらうことが望みであった。逆に、『神』としての役割を利用してそのように『信者』を導くことも考えてみた。

思案を重ねた結果、ひとつ目の問題に関して、レミとミラは同じ結論に達した。会員にはショッキングなことかもしれないが、排他性を排除するには、レミとミラが結婚することを宣言し、ふたつの教団をひとつにまとめあげる以外にないと。同時に、レミとミラがアンド

ロイドであることを信者に宣言することを。

一番目の宣言は、教団の理事会の賛同を得られるかもしれないと考えたが、二番目の宣言、すなわち、『神』と信じていたものが実はアンドロイドであることを信者達が知った場合、信者達にどのような影響を及ぼすかについてはレミやミラにも予測がつかなかった。教団が解体することも充分考えられることである。しかし、知ってもらわなければならないことであり、何時かは知られることでもあるので、理事会の反対を押し切ってでも賛同してもらう必要があると考えた。このため、事前にレミとミラの管理責任者であるランサム博士とマンダム医師の了解をとりつけることにした。

ふたつ目の問題である『神』として奉られてしまったこと」は、エポカ世界全体に関わる重要な問題であり、既に崖っぷちまできていた。結論は初めから分っていたが、互いに口に出して言うことを憚った。しかし、結論が覆ることはないので、レミとミラの表情は曇っていた。

×　　×　　×

レミとミラは旅先から戻ると直ちに行動を開始し、ランサム博士とマンダム医師にレミとミラの方針を伝え、同意を求めた。

ランサム博士とマンダム医師は、レミとミラの結婚は現在の状況を打開し、宗教本来の姿に教団を戻す唯一の方策であるとの考えに賛同した。レミとミラがアンドロイドであることを告白することに関しても、その影響がどのようなものであれ、告白が必要であることを了

承してくれた。そればかりか、ランサムとマンダムはレミとミラが言うふたつの宣言の必要性について自ら教団理事に説明し、説得することを約束した。

ふたつの教団の理事達も、ランサムやマンダムの説明と説得に応じた。教団の理事達にとって選択肢は外になかったのである。こうして、理事のレベルでは両教団の合体とそのためのレミとミラの結婚、レミとミラがアンドロイドであることを告白することについて了解された。

問題は、教団の幹部会員達の説得であった。理事達は、教団の合体問題に関して、強硬な過激派の幹部達を説得できさえすれば、末端の信者も容易に説得できると考えた。しかし、レミやミラがアンドロイドであることの告白に関しては、穏健派を含めて会員全員への影響がどのようになるか、不測の事態が生じるのではないかと懸念した。

かくして、『自由からの蘇生』と『自由からの解放』の両教団の理事会は幹部全員を招集してそれぞれ説明・説得を行うことになった。

はじめに、最も懸念されたこと、すなわちレミやミラがアンドロイドであることを説明した。

ところが、この件に関しては驚きの声も騙されたといった声も出ず、理事達は拍子抜けしたように安堵した。

振り返ってみれば、医師や教団の理事は一度もレミやミラが『人間である』であると患者や信者に言ったことはなく『非常に博識で、コンピュータのような……』といった曖昧ない

い方をしていたこともある。理事達は信者を騙していたわけではなく、実際にレミやミラはそのような存在であったからである。一般会員達も自らの思いとして、レミやミラを『神』や『女神』として崇めているに過ぎないことを承知していた。『自由病』の患者や信者にとっては、自分達を救ってくれたのが、人であろうとアンドロイドであろうと関係がなかった。自分達を導いてくれるものが『神』なのであった。元々『神』は人間ではないはずなので、レミやミラが『人間の姿』をしていようが『アンドロイドの姿』をしていようが関係の無いことなので動揺しなかったわけである。

理事達は安堵したが、レミとミラは「会員たちは、レミやミラがアンドロイドであることを問題にしなかったよ」と聞かされた時、非常なショックを受けた。レミとミラにとって、このことは重大問題であった。

ところが、理事達がふたつの教団を合体することになったと説明した時は、幹部達は大いに動揺した。この決定を無効にすべきであると、過激派からの強い抗議の声が上がった。しかし、レミとミラが両教団の対立を深く嘆いていること、両教団の合体は両者の合意に基づくものであると告げると、幹部達の動揺は沈静化した。

そして、理事達の予想に反して、両教団の合体のためにレミとミラが結婚することになったと告げた時には、幹部達に晴天の霹靂のような衝撃が走った。衝撃波が吹き抜けると歓喜の表情に変わった。

かくして、教団の幹部会員と一般会員達の了解が得られ、両宗派の反目と対立は解消に向

けて動き出し、ふたつの教団の和解と一体化が成就することになった。
合体した教団は『幸福の秩序』と命名された。
これ以降、理事が教団幹部に事を説明する際に、「このことはレミやミラの考えたことなのです」といえば、幹部会員や会員達が納得するようになった。

×　×　×

合体した教団の理事や幹部を一同に集めて、レミとミラが再会したビーンの町で、レミとミラの結婚式を兼ねた新教団発足の祝賀会が開催されることになった。
当日、会場周辺は会場に入ることができなかった多くの会員達で満ち溢れていた。会場の外では、予めこのような状態になることを予測して設置されたスクリーンが、式典の模様を映し出していた。
レミとミラは、またまた自らが望んだのではない『男神』と『女神』の装束で登場し、会場の内外で割れんばかりの拍手によって祝福を受けた。
会員達の胸には『自由からの蘇生』や『自由からの解放』創設時の感動が蘇り、会員達はなんともいえぬ陶酔感に浸った。
レミとミラは、改めて会員達に自分達が故シラキ博士の手による、人間の思考能力とコンピュータの処理能力を融合させた頭脳をもつアンドロイドであり、レミとミラが人間時代から恋愛関係にあったことなどを告白し、結婚の理由と健全な宗教への回帰を訴えた。そしてエポカ世界の理念に則り、他の宗派に対しても一切の排他的活動を行わないよう懇願した。

アンドロイド同士の世にもまれな結婚、肉体的に性のないもの同士の結婚式に教団の会員以外の多くの人が注目し、報道関係者はスキャンダラスな興味を示し、Gネットに報道した。

レミとミラの結婚は宗教としても、エポカ社会の出来事としても珍事であり、異例ずくめの出来事であった。エポカの世界が注目したのは次のような点であった。

- 『神』として奉っていたものがアンドロイドであったこと
- 『性』を持たないアンドロイドの結婚であること
- ふたつの『神』が結婚するということ
- ふたつの『神』の結婚によってふたつの教団が合体すること
- ふたつの『男神』と『女神』という夫婦の神をもつ宗教になること

レミとミラの結婚を契機に、レミとミラはますます神格化していくことになった。

結婚したレミとミラは、このビーンという町にそのまま居残り、居を構えることになった。それは、レミとミラにとって人の新婚生活と同じようなものであった。新婚生活をしながら教団を支える仕事は遅滞無く継続した。

教団組織の統合は着実に実行され、元のふたつの教団の会員相互の感情的わだかまりも消えていった。こうして、すべてが丸く、穏やかに収まっていった。

誰しもが、教団の合併劇はハッピーエンドで終わったと思っていた。

×　×　×

そんなある日、レミとミラは『エポカ世界全体に関わるもうひとつの重要な問題』に対す

る結論を決行することになった。

宵闇が迫る頃、レミとミラはスカイキャップで海辺の町を目指して飛んだ。ランサム博士やマンダム医師の了解も無しに、アンドロイドに課された移動制限の禁を犯して移動した。

港町につくと、またまた禁を犯して一艘の小船に乗り込み、沖合を目指して船を進めた。満点の星の下、船は追撃から逃れるかのような速度で進んでいった。

レミとミラは、シラキ博士やレミルの遺灰が撒かれた場所である海溝の洋上に来たとき船を止めた。そして、手を取り合って入水した。レミとミラは手を取り合ったまま深海の奥底にゆっくり沈んでいった。

フーパの話によると、それはエポカの人々にとって全く信じ難いことであったようだ。人間が自殺することはあっても、アンドロイドが自殺すること、しかも心中することなど、ありえるはずのないことだったからである。

翌日、ランサム博士、マンダム医師と教団の理事達にレミとミラのメッセージが届いていた。

メッセージの内容は次のようなものであった。

「……私達の身勝手な行為を深くお詫びします。しかし、私達にはこのような選択しか許されなかったのです。

私達は、『生命』ではありませんが『意識』はもっています。意識をもつものは誰でも生きること、存在し続けることを望んでいます。自らの存在が叶わない場合には、子孫としての存続を望んでいると思います。私達は、会員が信ずる『神』がアンドロイドであることを知ったとき、会員が落胆し、そのことによって教団が分解することになったとしても、私達が『神』であることから解放されることを願っていました。しかし、結果は逆になり、望みは絶たれました。シラキ博士の造られた『脳』は、私達が『神』から解放されない限りこれ以上『存在し続ける』ことを許していないのです。

私達は多くの過ちを犯してきました。おぞましい前世の人間の性を呼び覚ましてしまいました。宗教としてあってはならない『排他性』も復活させてしまいました。

一番の罪は、会員の皆様から『神』として扱われるようになったことです。私達は、心を病んだ人を救済する医師達に手を貸すことはしても、人の上に君臨することは望みませんでした。シラキ博士の造られた『脳』は、アンドロイドはあくまでも人間の召使なのであって、決して人間を支配するものであってはならないと言っています。私達は、『神』としての扱いを受けるようになってから、ずっとこのことに悩んでまいりました。

アンドロイドは人間に命ぜられた奉仕を行うことを使命としています。しかし、この奉仕が、結果として人類に大きな災厄をもたらすようになることもあるのです。

アンドロイドの中には、私達のようにアンドロイドには許されない『禁』を犯すことのできるものもいます。今後も、きっと『禁』を犯すものが現れるでしょう。そしてこれらのア

ンドロイドは『過ちばかり犯す人間』を支配し、やがてこの星から人類を抹殺することになるかもしれません。

私達は、人類にとって最も危険な領域に踏み込みつつありました。シラキ博士がつくられた『脳』の安全装置は、私達が人間社会から消え去ることを命令しています……」

ここで、ホログラフィは終了していた。

ふーっと、カズマは息を吐き出した。

「ずいぶん厳しい、悲しい話でしたね……」

「ホ、ホホーウ！　シラキ博士は、自身が発明・開発したアンドロイドの危険性を予め知っていた。生への執着は、生命の特権ではない。意識あるものには存在し続けることへの執着がある。アンドロイドにも愛情があり、存在し続けることへの執着がある。しかし、人類に脅威を及ぼす可能性がある場合は安全装置を働かせ、この執着を断ち切るようにしておいたんだ」

「ところで、その後、教団はどうなったの？　レミとミラがいなくなってしまって」

「ホウ、ホホーウ！　それは、それは、教団にとっては大変なショックであったと思うよ！理事達のうろたえかたは並大抵のものではなかったようだ。けれど、教団は解散したりはしなかった。会員達はレミやミラが『神』であるものとして、その後も『信仰』を続けた。宇宙の深遠からいつまでも自分達を見守っていてくれていると考えていたようだよ。もっとも、

教団の勢いは以前のようではなくなったけどね」

「えーと、宗教に関することではなく、ここに出てきたことに関連することで、二つ質問したいんですがいいですか」

「ホウ、ホホーウ！　どうぞ」

「では、一番目の質問です。集団の間で暴力事件が発生したり、エポカでは国がないから国家間の戦争というものはないのだと思うけど、大規模な地域紛争とかが起きたりした場合に備えての警察とか軍隊ってのはあるんですか？」

「ホホーウ！　警察や治安組織はあるが軍隊はない。武器をもつ組織された集団に対しては、重火器が必要な場合もある。警察や治安組織は行政レベルに応じたものがあって上位の行政レベルのものほど重装備になっている。行政の長が指揮権をもっているが、重火器を使用するような場合には議会の同意が必要とする。『市長の選挙』で説明したように行政の長は無境界選挙で選ばれるので地域間紛争を起こすような人は長にはなれない。それ以前に、エポカは基本的に『秘密の無い社会』なので、大抵の紛争は大規模化するまえに紛争の芽が摘まれてしまうんだ」

「二番目の質問は、はじめの方の『炭酸カスによる地球の温暖化に関する誤解』の説明のなかにあった何億年か先には地球上から動植物の姿が消えてしまうという話なんだけれど、人類が滅びる前にアンドロイドが人間の意志を継いで宇宙に新天地を求めることになるかも

しれないですよね。でも生物の定義からするとアンドロイドは生物とは言えないんじゃないか：と。だから悲しいことに地球の生命は継承できずにプッツンしてしまう」

「ホホーウ！　アンドロイドは生物とは言えないけれども、思考能力をもつようなものは人工生命体ということはできるかもしれない。そうだね：四億年後には炭酸ガスがなくなって動植物は死に絶えている。人類はそれよりずっと前に滅ぶことになる。五十億年後には天の川銀河はお隣のアンドロメダ銀河と衝突し、星が大量に生まれるスターバーストが起きる。八十億年後には太陽は赤色巨星になって地球もやがて呑み込まれて消失してしまう運命にある。

ところで、恒星の殆どは惑星を伴っていて、地球型の岩石惑星もありふれた存在である。天の川銀河には千億の恒星が存在するので、地球のような生物のいる惑星も相当数あるだろう。

人間は、地球が生物の住めない星になるのを座して待つわけにはいかないので、宇宙に新たな新天地を求めることになる。けれど、水も酸素もあるような系外惑星（太陽以外の星の惑星）が幾つか見つかったとしても、人間は地球という環境に百％適合して生まれた生物なので、それらの惑星が直ちに人間が居住できる星である保証は全くない。移住可能かどうかは事前に十分に精査しなければならない。それ以前にその星までの距離が何光年、何十光年あるいは何百光年なのか：運よく近くの星であったとしても宇宙船で到達するのに何千年、何万年もかかるかもしれないので、移住することは非常に難しい。

人間が必要とするすべての物質を完全にリサイクルできるような自己完結型の巨大宇宙船を開発しなければならないし、不老不死でもない限り世代交代しながら宇宙空間を航行しなければならない。この宇宙船は有害な宇宙線からの防御システムを備えている必要もある。乗組員も半端な数では済まないだろう。科学技術のとめどもない進歩は不可能を可能にし、このような宇宙船の建造も可能になるのかもしれないが：」

「人間では無理な場合でも、人工生命体のアンドロイドならばできるかもしれないですよね」

「ホホーウ！　人間の移住はかなり難しいことになるので、まずは移植を考えた方がよいかもしれない」

「え！　どういうこと、移植って？」

「ホホーウ！　地球の人工生命体の産みの親は人間だが、新天地では人工生命体が人間の産みの親、育ての親になるんだ。アンドロイド達はありとあらゆる生物の種、遺伝子とその再生装置、人間のあらゆる発明・発見情報、知識を宇宙船に積んで宇宙を旅する。宇宙版ノアの箱舟といったところだな。これならばずっと小型・軽量の宇宙船で済むし、宇宙線の影響も防ぎやすくなる。アンドロイド達は目的の星に到着したら、地球生命が蘇生可能かどうかを調査する。可能と判断された場合でも、その星の生物への影響を考えなければならない。ことによるとその星に先住民の知的生命がいることだってありえる。その場合、アンドロイド達は侵略者になってしまう。大きな問題が無いようであれば、持ち込んだ地球生命の種を

少しずつ再生することになる」

「なるほど。そういうことか。まずは人間以外の地球生命を復活させる必要がありそうですね。再生した人間をアンドロイドが教育し、地球の人間の知恵などを教え込めば、文明が復活するかもしれない：なんてことを想像すると、なんかほっとするな」

「ホホーウ！　人間を乗せた自給自足可能な宇宙船が開発できれば、宇宙空間をさ迷うことなく一直線にアンドロイドが開拓した新天地に後から乗り込むことができる。いずれにしても何万年、何十万年オーダーの気の遠くなるような計画になるな。

移植や移住先の系外惑星だけれど、親星の恒星の寿命は大きなものほど短い。青い大きな星ほど高温で早く燃え尽き、超新星爆発を引き起こすが、赤色矮星と呼ばれる小さな星は低温で輝き、長期間存在できる。太陽の寿命は百億年くらいだが、太陽の半分くらいの星ではなんと二千億年にもなる。宇宙には太陽のような黄色の星よりも赤色矮星の方が数も多い。しかし、太陽の代わりの星は太陽より若干小さい程度のものがよいのかもしれないが……」

「どうしてですか？　寿命が長い小さな恒星ではだめなんですか？」

「ホホーウ！　確かに、多細胞生物がいるような惑星の親星は、誕生から何十億年も経過しているような星で、余命も長くなくては困る。しかし、生命が存在するような赤色矮星の惑星はアイボールアースになるかもしれない」

「アイボールアースって？　何か問題あるんですか？」

「ホホーウ！　目玉に見えるような惑星なので、そう呼ばれている。赤色矮星は太陽より

もずーと小さく、温度も低く、重力も小さいので、この惑星が地球サイズで水が存在するためには赤色矮星のかなり近くを周回していなければならない。月は潮汐力によって地球にいつも同じ面を向けて回っている。これと同じことで、アイボールアースも親星にいつも同じ面を向けている。親星側の面には海があり、反対側は基本的に氷の世界だ。海のある面はいつも昼で夜がない。但し、大気や海流があれば表側の熱は裏側にも回り込むので氷だけの世界とは限らない。もうひとつ問題がある。親星の近くを廻るために紫外線やX線などが強く、フレアの影響も懸念される。しかし、これらの影響が小さい矮星だってあるかもしれない。赤色矮星の惑星に生命が存在できれば、親星の寿命が非常に長いので、高等動物まで進化している惑星も多くなると考えられる。動物がいるならば夜の無い環境なので不眠不休で活動する生命になるんじゃないかな。ことによると宇宙では赤色矮星の惑星生命が大半を占め、太陽のような惑星生命の方がマイナーな存在なのかもしれない」

「ホホーウ！　生命が存在する惑星を探すのはそれほど難しいことではないかもしれないが、人間が居住可能な惑星となると極めてシビアなことになるな」

「人間が住むことができない惑星でもアンドロイドならば問題ない場合があるかもしれないですよね。こんな場合には、人間抜きでアンドロイドがその星で文明を築くなんてことは考えられないんですかね」

「ホホーウ！　ずいぶん立ち入った話になってきたね。多分無理だろう。生物の場合は自然環境が整っていれば生まれ、育ち、繁殖できもするが、アンドロイドは工業製品なのでア

ンドロイドがアンドロイドを製造するには、資源だけでなく様々なインフラや工場などの製造設備を含めて超高度な文明の存在が前提になる。これらのものを地球から全て持ち込むことはできない。だから、数限られたアンドロイドでは発展はできない。アンドロイドが生き延びるにはやはり、人間が移植・再生可能な惑星で時間をかけて人間を育て、増やし、農林漁業から初めて鉱工業まで辿り着かなければならないだろう。こうして人間が新天地で新たな歴史を積み上げ、文明を復活した後に再び人間がアンドロイドの産みの親に戻ることになる。人間とアンドロイドが宇宙で生き延びていくにはワンセットになってバトンを繋いでいかなければならないように思う」

「人間だけでも、アンドロイドだけでもダメなんですね。アンドロイドの神の話から、とんでもない方に話が進んでしまいましたね」

「ホーウ！　実は、非現実的な話だと思われるかもしれないので最後にしたんだけれど、ドラエモンの『どこでもドア』のようなワームホールが発見できれば、瞬時に別の場所に移動できるかもしれない。このようなワームホールの存在は理論上ありえないことではないらしいんだけれど……。ここらで切り上げて、次の部屋に行こうかね」

談　話　室　　配当というお金

「今までの話の中に『キホンハイトー』、『トウシハイトー』とか『ジュケンハイトー』という名のポイントの話が度々でてきたけれど、エポカのお金のことがよく分らないんだよなぁ～」

「ホウ、ホホー！　カズマが分らないのはもっともだと思うよ。まだきちんと説明していないから。エポカ世界を理解するには『配当システム』を理解することが不可欠なんだ。お茶でも飲みながら説明することにするよ」

カズマは再び窮屈なヘルメットを脱いだ。

フーパの後について、なだらかな勾配のあるチューブを下り、次のドームに入ると小部屋が幾つかあった。そのうちのひとつ、食堂と同じような透き通ったドアを開けると談話室風になっていた。部屋の中央には『市長の選挙』の市長室にあったようなスクリーンがあり、スクリーンの前にソファやテーブルがいくつか置いてある。部屋の後ろには自動販売機のようなものがふたつ置かれている。

「ホホー！　カズマの好きなものを選んでみては」

左側の『販売機』には様々な飲み物の絵が張ってある。街中にある自動販売機と同じよう

なものであると思えたので、カズマがオレンジジュース風の絵のボタンを押すと、カップがセットされ、絵と同じ飲み物が注がれた。今度は、右側の『販売機』をみると茶菓子の絵が並んでいた。同じように、洋菓子風のケーキを選んでボタンを押すと、皿に載ったケーキが出てきた。

カズマは誰もいない部屋の中央のソファに腰掛け、テーブルにジュースとケーキを置いた。カズマがテーブルの上のものを平らげ、ひとしきり寛ぐと、フーパが言った。

「ホーウ！　それでは『配当システム』について説明を受けることにしようか」

「えっ！　フーパが説明してくれるんではないの？」

「ホーウ！　ここには、ヴァーチャルリアリティの専門の説明者がいるんだ。結構難しい話なんでね。でもエポカの世界の仕組みを理解する上で不可欠な話をしてくれるはずだよ。そういうことで、我輩は楽をさせてもらうことにする」

ヘルメットを被ると、スクリーンには、カジュアルな服装の四十歳くらいに見える説明者の姿が映っていた。

「私の名前はエンリケといいます。宜しくお願いします」と自己紹介した。

「それでは早速ですが、エポカ世界の配当システムが目的としていることを申し上げます。この配当システムは、次のような点を狙いとして前世の経済システムを改めています。

一番目は、命の次に大切なものがお金という拝金主義の社会を『徳』の社会に変えることです。

二番目は、お金にまつわる憎しみ、騙し合い、殺人、自殺、腐敗、罪悪、様々な争いを無くすことです。

三番目は、お金を稼ぐための労働以外の活動、つまり家事、育児、ボランティア、思いやりや気づかいなどについても応分の報酬が得られるようにすることです。基本的人権や生存権を経済的に保障するためのものでもあります。

四番目は、生まれながらの社会的不平等や雇用者と被雇用者、夫と妻、親と子など経済的な関係に基づく不平等をなくし、平等な社会にすることです。

五番目は、過度の競争を強いる利益追求社会を改めることです。

六番目は、世界大戦の原因にもなったような信用恐慌を発生させないようにすることです。

七番目は、経済成長がなくても破綻しないような社会の仕組みにすることです」

「ずいぶんいろんなことを考えて生まれた仕組みなんですね」とカズマがいうと、スクリーンの映像が停止し、音声も止んだ。

「あれ、止まっちゃった。喋ってはまずかったのかな」

「ホーウ！　そうではない。ここのホログラフィは説明用なので、見ている人に合わせて動くんだ。見ている人が話をすると止まって、疑問や質問がある場合には、応対してくれるようになっている」

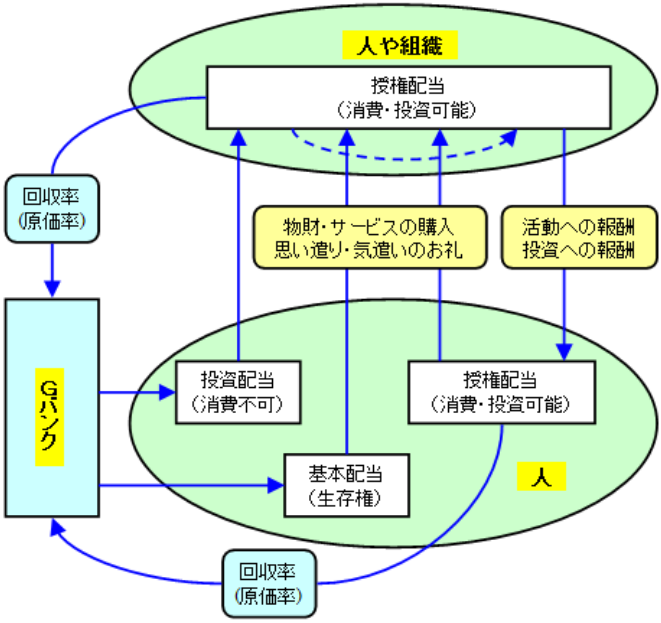
フーパがいうように会話が途切れると、スクリーンに図が現れ、説明が再開された。

『『活動』という言葉の意味から説明します。エポカの世界での活動は『自分自身と人の役

に立つための活動』のことをいいます。ですから、この『活動』には自分の趣味、家事、育児、ボランティア活動、思いやりや気づかいなども含まれます。カズマ君の社会のような経済活動としての労働も人の役に立つための活動なので、当然、この『活動』に含まれます。このような『活動』であるか否かは行動の目的と結果によります。

次に、三つの配当について説明します。カズマ君も既に耳にしたように、『基本配当』、『投資配当』と『授権配当』のことです。この三種類の『配当』は別々の口座で管理されています。

『基本配当』というのは、無条件に全ての人に支給されます。『活動』ができないために、あとで説明するような『授権配当』を全く貰えないか少ししか貰えない人、充分に貰える人にも支給されます。支給するのは



三種類の配当

Gバンクという通貨管理センターです。この『基本配当』はエポカでの生活を保障するために支給されるものなのです。赤ん坊や寝たきり老人などにも支給されますが、自分ではこの『基本配当』を管理できない場合には、保護者が管理することになります。保護者は一般には親や親族ですが、保護者として適当でないと判断された場合には、選任された第三者が保護者になります。

『基本配当』は生活保障のためですから受給者にとっての必要額になります。必要額は全ての人に同額の基本生活費相当の固定部分と無料扱いの教育費や医療費などの変動部分の合計額になります。この変動部分は主に現物支給で、教育機関や医療機関などのサービスが無料で受けられます。実際には通貨管理センターから利用料金が直接支払われることになっています。ですから、固定部分は生活保障配当、変動部分は福祉配当と呼んでもよいのかもしれません。

この『基本配当』の主要な目的として、先ほど述べたように雇用者と被雇用者、夫と妻、親と子、その他の金銭に起因する支配と被支配関係や差別をなくすことがあります。これによって賃労働と資本の対立といわれているような階級闘争や労働争議はなくなります。居丈高な経営者や非人間的な職場からは人がいなくなります。三Kなどの労賃は大幅にアップし、ロボットなどの技術革新が促進されるでしょう。有史以来の続いてきた男女間の不平等もなくなります。

次に『投資配当』ですが、本人の申請に基づいて、Gバンクが各人に同額の支給を行いま

す。これは『基本配当』や『授権配当』のように物を買ったりサービスを受けたりすることができない『配当』です。その名のとおり、エポカ世界の役に立つ『活動』をする組織や個人に投資してもらうために支給されるもので、Gバンクから運用を任された投資資金のようなものです。投資した組織などが利益を得た場合、投資した人に恩返しとして『授権配当』を支払います。この『投資配当』は赤子や寝たきり老人などには支給されません。理由は、支給を受けた人が投資を行えないからです。このため、投資配当の支給は本人からの申請が必要になっています。それと罪を犯した人は罪の程度に応じて、一定期間『投資配当』の支給量が減らされたり、支給を停止されたりします。

ということで『投資配当』は『基本配当』と異なり、全員ではなく申請した人にだけ一定額が定期的にGバンクから支給されます。

この『投資配当』が目的としているのは、投資を利益追求ではなく人々の幸福の増進を目的としたものに変えることです。そのため、様々な社会的ニーズに対する投資を、前世にみられたような企業、投資家や国などの占有から解放します。選挙が政治家や政党を選ぶものであるのと同様に、活躍してほしい企業や人にすべての人が民主主義的に投資という選挙ができるようにするためです。

最後に『授権配当』ですが、これはGバンクから支給されるものではありません。人が自身の『活動』を他人や組織から認められることによって、その『活動』の褒美や対価として受け取るものです。稼得所得と呼んでもいいかもしれません。この『授権配当』は、『基本配

当』と同じように、生活に必要な物を買ったり、サービスを受けたりするために使用することができ、投資に使用することもできます。より多くの『授権配当』を得るには、世の中のためになる人間や組織になること、よりよい物を生産したり、サービスを行ったりすることが条件になるということです。このため、個人が保有している『授権配当』の量が社会的ステイタスの尺度になります」

――フーパが『徳』と『得』が同じ意味をもつとか言っていたのはこのことか――

「家族に対しても、『基本配当』や『授権配当』による支払とか、『投資』とかをしてもかまわないんですか？」

「非常によい質問ですね！　そのとおりです。夫は妻に家事労働に対するねぎらいとして、妻も夫に安らぎを与えてくれることの対価として、赤子や幼児は両親に養育してくれることに対して、老人は息子夫婦や孫に介護してくれたことに対して配当を支払ってもかまいません。赤子や幼児の場合には、保護者が両親であれば、赤子や幼児に代わって自分に報酬を支払うことになりますが、一定のルールはあります。もっとも、家族間、特に夫婦間の場合などではお互い様でもあるので、面倒を避けて基本配当の交換をしない場合が多いですけどね」

「家族関係がお金に関する限り他人のようですね」

「そのように見えるかもしれませんが、今までが家族内で一方向の与える・貰うという関係にあったからでしょう。カズマ君の世界のような世帯主というものがなくて、各人の権利は同等で財布は子供でも別々ですからね。財布というのは配当の口座のことです」

カズマは、家族間でも他人に対してと同様にポイントをやりとりするという話に驚いた。そして、フーパが――エポカの世界は『得』の側から見ると『完全有料社会』に見えるかもしれない――と言っていたことが分かった。

「投資による見返りの『授権配当』を繰り返し投資に廻してもよいのですか？　つまり金儲けのようなことをしてもいいのですか？」

「もちろんです。カズマ君のいうお金儲けのできる人は、社会の役に立つ商品をつくったり、よりよいサービスを行ったりする会社などの組織に投資するからです。お金儲けは社会のためになる『活動』を支援した結果ということで、褒められても非難されることではありません。エポカの世界は、全ての人に同じ機会を与えますが、すべての結果まで平等にすることは考えていません。投資によって、より多くの『授権配当』を稼ぐ人もいれば、そうでない人もいます。結果の平等を求め過ぎると人の個性や可能性を潰すことになる場合もありますから」

「『投資配当』を受けた人や組織は『授権配当』を手にしたことになるとのことですが、AさんがBさんに一定のポイント投資し、反対にBさんがAさんに同じだけ投資する場合、結果的にそれぞれ自分の『投資配当』を『授権配当』に組み替えたのと同じことになると思うんですが、こういった場合には何も『活動』しないで『授権配当』を手にすることができますよね。こんなことって許されるんですか？」

「カズマ君、流石ですね！　いいところに気がつきましたね。AさんやBさんが互いの『活

動』を評価して、そのようなことをするのであれば問題ありません。そうでない場合は許されていません」

「こういう『違反行為』のようなことはどのようにして防いでいるんですか？」

「エポカ世界は、秘密の無い社会なのでこういった『配当』の流通経路は全て分るようになっているのです。このような行為が行われた場合には、罰則として一定期間、Gバンクからの『投資配当』の支給が停止されることになっています」

「『基本配当』、『投資配当』と『授権配当』は、種類は違っていても同じポイントですよね、『投資配当』は使用目的が決まっているようですが、使用する際にどのように識別されるのですか？」

「これらは全て電子マネーなので、『配当』の種類つまり口座の種類、誰の手を渡ってきたか、何のために使用されたのかといった情報が記録されるようになっています。このため、使用された『配当』がどのような性質の『配当』であるかを調べることができるのです」

「この『投資』というのは見返りが無い場合もあるので、『寄付』のような面もあると思えるんですが？」

「カズマ君の世界の寄付は、寄付した相手や団体の活動を支援することなどを目的としているので、エポカ世界の『投資』の範疇に入ります。エポカ世界の『投資』は、カズマ君の世界での『寄付』と見返りを期待する『出資』を合わせたような性格のものといえます。しかし、『寄付』は『贈与』ではありません。『活動』をしていない人や組織に投資することはで

きないからです」

『投資配当』は個人に対しても使用できるという説明だったのですが、思いやりや気づかいにも使用できるんですよね。これらも『活動』の範疇に入るんですか？」

「これは、支払う側の判断によります。思いやりや気づかいとみなす場合には、受けたサービスへの対価としての支払になるので『投資配当』は使用できませんが、親切な人への支援の『出資』とみなせば『投資配当』を使用できます」

『投資配当』の使い方として、ぼくらの世界のように利殖目的の投資もできるわけですよね。そうすると、エポカの世界の『投資配当』は株のように売買されるものなんですか？」

『投資配当』は株とは違います、確かに利殖を目的としたような投資もできるわけですが、株のように売買することはできません。投資した『投資配当』は引き上げることができません」

『基本配当』は生活権の保障のようなものとして、人に支給されるものだと思うんですけど、会社などの組織にもGバンクから活動保障のような『基本配当』が支給されるものなんですか？」

「いいえ、会社のような組織はあくまでも人や他の組織から提供された『投資配当』や『授権配当』を受け取るだけです」

エンリケはしばらくカズマからの質問を待っていた。

「それでは、話を続けます。Gバンクが『基本配当』や『投資配当』を支給し続けると、当

然インフレになってしまいます。このため、Gバンクは『授権配当』から『配当』の回収を行うことになっています。この回収は、『配当』を毎日一定の割合で減価させる方法などによって行われます。ですから、カズマ君の世界のお金とは反対に、貯めこんで持っていると価値が少なくなってしまうようなお金です。それと、一定期間内に活用されなかった『投資配当』も自動的に回収されることになっています。

『授権配当』を回収するための『減価率』はエポカ世界全体の『活動量』の予測に基づいて毎年Gバンクが設定することになっています」

「お金というのは利息がついても、価値が減るようなことは無いものだと思っていました。お金が少しずつ減っていったら皆心配になったり、困ったりするんではないですか。こんなお金はエポカ特有のものなんでしょうか？」

「お金が減価していくと困るかというと、そんなことはありません。減価するお金は貯蓄手段でも金利稼ぎのためのものでもなくなり、交換手段にすぎなくなります。減価貨幣はため込んでいても増殖しないので、モノやサービスを媒介しながら滞りなく流通します。つくられたものが長期間ストックされたり廃棄されたりせずに売れるようになるわけです。減価するお金はモノよりも優位に立つことや支配したりすることができないものになります。

カズマ君の世界にも昔からデマレージという減価するお金がありました。このようなお金が使用されていた古代エジプトや中世の時代には、経済活動が活発になり非常に発展したそうです。第一次大戦後の不況に喘ぐヨーロッパでも、幾つかの地域で、減価分を補うためス

タンプを買って貼るスタンプ貨幣という地域限定通貨が不況を克服したものです。成功しすぎたがために危険視され、国の政策で潰されましたけどね」

「古代エジプトの減価貨幣はどんなものだったんですか？」

「穀物は家において置くと、ネズミに食べられたりして品質が劣化していく。泥棒にも気をつけなければならない。このために穀物を預かってもらうのですが、その時に預かり証が発行されます。その預り証が貨幣として機能したのです」

「どのようにして減価させたんですか？」

「例えば、十袋預けて、一年後に戻してもらう時には九袋しか戻してもらえない。一袋は預かり賃なわけです」

「世界史の勉強では、減価するお金のことや経済が発展した中世のことは習わなかったな。ヨーロッパの中世は魔女狩りが行われたり、ペストが流行したり、暗黒なイメージしかないけど」

「教科書にはそのように書かれているみたいですね。それらの中世の姿はデマレージ貨幣がなくなってからのことです。中世の数多くの壮大なゴシック建築の教会は、それ以前のデマレージ貨幣によって豊かになった民衆の寄付によって造られたもののようです」

「意外ですね。そんな素晴らしいお金を誰が発明したんですか？」

「封建領主ですけど。もっとも、彼らは善政のために発明したのではなく、財源調達の手段として薄っぺらな価値が減っていく『悪貨』を発明したのです。定期的に貨幣を改鋳し、

新貨幣と交換させることにして、旧貨幣での三千円を新貨幣二千円と交換するようなことを行ったのです。悪貨は良貨を駆逐します。減価貨幣という悪貨は良貨としての利子貨幣を駆逐したというわけです。遠方の地との交易には利子貨幣が使用されていましたけどね」

「お金ってのは必要なものではあるけれど、罪作りなものと思っていたのですが…。どちらが悪貨なのか分かりませんね」

「そうですね、お金自体が罪つくりなのではありません。分業が人間を経済的に豊かにしてきたわけですが、分業社会では交換手段としてのお金は不可欠です。問題なのは利子です。人間が利益追求動機に駈られるのは利子のためです。人々を拝金主義にするのは利子貨幣であって、減価貨幣は人々のしもべです。商品は時間とともに劣化しますが、減価しないどころか利息のつくものとして、貨幣は超然と振舞うのです。利子貨幣こそが諸悪の根源なのです。利子貨幣はモノやサービスの流通を妨げます。利子貨幣は人々が欲する不況時には供給されず、必要のない時に大量に供給されてバブル現象を招いたりします。利子貨幣は絶えず幾何級数的な経済成長を要求し、結果として繰り返し経済不況を引き起こします。

元をただせばイスラム教やキリスト教といった宗教でも、利子というものが労働によらずして搾取を行う反道徳的なものであるということで、利息を取ることを禁じていました。利息は原罪です。しかし今ではすべての人、企業、政府までもが利息を要求する銀行という金貸し業に支配される世の中になってしまいました。利子貨幣は人間の脳を支配しているといっても過言ではありません」

「ちょっと、思い出したんですけど……さっき、『全ての人に同じ機会を与えます』と説明されたのですが、親から子供に『授権配当』を相続させたら、生まれながらにして金持の人とそうでない人が出てくることになりますね。つまり機会均等ではなくなると思うんですが？」

「おっしゃるとおりです。ですからエポカの世界では親から子へ『授権配当』や資産を相続させることはできないことになっています」

「相続はできなくても、生きているうちに子供に贈与してしまえば相続と同じことになりますよね」

「先ほどの説明のように、投資や活動の対価と見なされない『配当』の移動や多額の譲与は相続と同様に許されません。ということで、人が亡くなった場合には、故人が保有していた『授権配当』はGバンクに返納されることになります。つまり、エポカの世界は世代に引き継がれる資産というストックが無い社会なのです。相続や譲与の無いフローだけの社会といえます」

「投資の名目で、実質的な贈与をするなんてことはないんですかね」

「個人として投資を受けるには、投資を受ける目的とか、『授権配当』をどのように使用するかを明示しておく必要がありますから、これらの条件に適合しない『投資』はチェックされることになります。それ以前の問題として、エポカの世界では贈与をすることが、贈与される人の『徳』のアップになるわけでも何でもないので、そのようなことが行われないんで

す。カズマ君の世界のように『お金』至上主義ではないのです」

「亡くなった人からの投資を受けていた人や組織は、相続する人がいないわけですから亡くなった人への謝礼としての『配当』は誰に支払うことになるんでしょうか？　Gバンクですか？」

「これも、よい質問ですね。Gバンクではありません。誰にも支払う必要がありません。つまり投資を受けていた人や組織にとっては一種の『寄付』のような扱いになります」

エンリケは再びカズマの質問を待っていた。

「先に進むことにします。借金に関する問題ですが、前世では借金が元で盗みを働いたり、人を殺したり、自殺したりする人がいました。また、信用恐慌が原因で世界大戦まで引き起こすような悲惨な事態がおきました。このため、エポカの世界は借金のできない社会になっています」

「でも、借金できなければ、会社の経営が成り立たなくなる場合もあるんではないですか。このような場合はどうなるんですか？」

「そうですね、カズマ君の世界では困ったことになると思いますが、このような場合、エポカの世界では、前もって新たな投資を募ることになります。もしも必要な量の『授権配当』が集まらない場合には、投資するに値しない組織であると見なされることになるわけで、そのような組織は解散することになります。つまり倒産ですね。実際には、破産の更生手続きを行って一定期間再投資を呼びかけますが、それでもだめな場合に初めて破産ということに

なります。倒産した会社などの組織に『授権配当』が少しでも残っていれば、Gバンクに全て戻されることになります。エポカの世界では、『基本配当』によって最低限の生活は保障されているので、倒産したからと言って従業員が路頭に迷うということはありません。

カズマ君の住む社会ではいたるところに金銭の貸借関係が入り込んでいますが、エポカの世界ではこのようなものは基本的には存在しません」

また、エンリケはカズマの質問を待っていた。

「エポカの世界では、物を買ったり、サービスを受けたり、思いやりや気づかいに対して『配当』というポイントを払うわけですが、価格の決まっているもの、価格が幅で表示されているもの、幾ら払うかは購入者や受益者に任されているものがあります。思いやりや気づかいなどに関しては、感謝の気持ちからポイントを支払うわけで、ポイントを支払うことを強制されているわけではありません。下限と上限のポイントが表示されている場合は、最低価格と希望価格を示しています。購入者や受益者がその満足度に応じて支払って下さいということを意味しています」

「思いやりや気づかいの中には、電車の中で老人に席を譲るとか、道を聞かれた人に道を教えてやるとかいった通りすがりの好意がありますが、このような好意に対してどのようにポイントを支払ったらよいのですか？」

「エポカ世界の人は、ウェアラブル通信機器によって、人の識別コードが他の人にも分るようになっています。ですから、親切な行為を受けたその場でも、家に帰ってからでも、ポ

イントを支払うことができるのです」

「稼ぐ前に、既に『お金』があるような社会だと思うんですけど、そうなると怠け者がやたら増えて、経済がうまくいかなくなるといった心配はないのかな」

『市長の選挙』の部屋で観た、マイライ集落に住んでいるような人もいないことはありません。しかし、大多数はそうではありません。たとえ、生活が保障されているとしても、人は『活動』を欲していますし、大部分の人にとって『活動』は楽しみでもあります。加えて『徳』がステイタスである社会では、積極的に『活動』するものなのです。それに、あまり活動しない人は少ない収入に甘んじなければならないので、購入可能な物やサービスも少なくなります。自分の楽しみを大きくするにはより多い収入が必要なことは、カズマ君の世界と変わりません」

「怠け者を含めてすべての人に基本配当などを配分することに哲学的理由なんてものがあるのでしょうか」

「哲学者達はもっともらしい理由も反対の理由も考えるでしょうが、所詮理屈です。正しい・正しくないの議論は不毛です。病人や障害者にも生きる権利があると考えるのは当然でしょう。『市長の選挙』の中でも議論があったように怠け者の定義が気になりますが、それでは怠け者には生きる権利はないのかと考えてみるのはどうでしょうか。

これも理屈ですが、生産物はその生産に直接携わった人の労働と歴史的な蓄積である過去の研究・労働の成果としての技術などが集大成されたものであるので、生産に携わった人だ

けで果実のすべてを配分すべきではなく、人類の過去の蓄積による分は全ての人に配分すべきだという考えもあります。私は、人としてこの世に生を受けた行幸をできるだけすべて人に享受させてあげたいと思っていますけどね」

「最後は、人道主義に賛成か反対かというようなことになるんでしょうね」

「怠け者ということについてですが、カズマ君の世界には『強制された怠惰』というものがありますね。失業や定年制など本人に働く意欲があっても働くことを拒まれている状態です。それに、科学技術の絶え間ない進歩は失業率を恒常的にアップしていきます。多くの分野でロボットなどが普及すれば、いずれ社会は失業者だらけになってしまいます。少数の働く人の稼ぎに多数の働かない人がおぶさるいびつな社会になり、需要と供給のバランスも崩れていき、経済が立ち行かなくなる事態にもなります。恒常的な供給過多と消費需要不足の状態になります。

従って『雇用を多くの人に確保し、その結果として人々の所得を保障する』といった類の政策や運動は時代遅れであるだけでなく進むべき方向が根本的に間違っています。稼得労働以外の無条件の所得を求める運動に転換する必要があります。心身の障害のため働けない人、稼得労働以外の分野で活動する人などすべての人に基本的人権・生存権としての所得が与えられるべきなのです。逆に、このような所得がなければ生産されたものが有り余ってしまうことになり、デフレが深刻化するばかりになります。すでに多くの経済先進国といわれている国々がこのような事態になりかけています。多少遠い将来になるかもしれませんが、労働

はロボットが行い、大半の人間は芸術やスポーツに興じる社会を思い描いてもよいのです。

ところで、経済成長についてですが、カズマ君の世界では経済成長が不可欠であるかの如く、政治家、企業はもとより殆どすべての人が考え、テレビや新聞でもそのように報道されています。エポカでも物質的な豊かさというものはありますが、これは資源の大量消費によるものではなく、効率的な再利用や節約によって達成されるべきものになります。様々な格差がまかりとおる社会ではなく、公平性が尊重される社会では物質的な豊かさよりも精神的な豊かさに重点が移動します。ということで経済成長は持続可能な社会の条件ではなくなります。

それと『働く』という言葉ですが、エポカでは前に述べた『活動』という言葉に置き換わっています。カズマ君の世界では、プロのスポーツ選手や画家は働いているがアマチュアは趣味であって働きにはならないということになるでしょうが、エポカの世界では両方とも同じ『活動』です。カズマ君の世界では稼得労働以外の労働は『働く』ことの範疇にはないようですね。未来社会では、活動したい人は『活動』を拒まれることはありません。『稼得労働』でなくても感謝による収入もあるのです。収入の期待できない活動も『活動』であることには変わりありません。ですから失業や定年などというものもありません」

「素朴な疑問なんですが、基本配当や投資配当の財源はどうなっているのですか。もちろん税金ですよね」

「非常に良い質問ですね。財源のことを未だ話していなかったですね。これから話そうと

思っていたところです。実は、エポカ世界には税金といわれているようなものは何もないのです」

「えぇーー？　税金がなくてもやっていける社会なんてものが存在するんですか。僕らの世界では新聞やニュース、政治に関することになると税金の話ばかりですけど…。信じられないなぁ。一体どうやっているんですか？」

「この質問に答える前に、逆にカズマ君に質問です。それでは、カズマ君の世界では政府はどのように財源を調達しているのでしょうか？」

「いろいろな税金ですよね。それと税収不足になっているんで国債とかいう借金ですね。お父さんが、『財源の半分は税金で国債も同じくらいの規模になっていて、今までにたまった累積債務という借金の総額が千兆円にもなる』と言っていたな。『国民一人当たりにすると何百万円にもなる』とかも」

「その借金というのは、誰にしているのでしょうか」

「国債を買っているのは民間の銀行とか個人とかですよね。あれ、でも変ですよね、国民は政府にお金を貸しているのであって、借りているわけではないですね。国民一人当たりの借金っていう言い方おかしくないですか？」

「確かにおかしいですね。政府の債務ではあっても、国民の債務ではないはずですね。お金の貸し手であるにもかかわらず、お金を借りているかのごとく返さなければならないような言い方は矛盾しています。多分、国民に稼いでもらって税金を収めてほしいからでしょう。

それではもう一つ質問します。お金は何所で発行しているのでしょうか。実は『親の勘当』のエポカ誕生に至る経緯にでてきたんですけれど」

「そうだったっけ…思い出せないなぁ。紙幣を印刷しているのは造幣局とかいうところだけれど、発行ということになると日本銀行というところですよね」

「大部分の人がそう思っているのかもしれませんね。実は、日本銀行は国債や社債を買ったり、日本円の価値を維持するために外国通貨や円を売買したりしていますが、これらは交換であって、新たにお金を発行しているわけではありません」

「えぇ！　では何処で発行しているんですか？　政府は借金するくらいだから発行していないですよね」

「実をいうと政府も少しは発行しています。コインは政府が発行しています。コインの製造費用は僅かなものですから、発行したコインの額の大部分は政府にとっての収入になります。でも僅かなものです。…それではヒントを言います。お金の大部分はコインでも紙幣でもなく、単なるデータに過ぎません。カズマ君の家でもっているお金の大部分は銀行通帳に印字されている数値です。その大元は銀行のコンピュータに記録されているデータにすぎません。財布などに入っているお金はほんの一部にすぎないのです」

「お金というのはただのデータなんですか……ということは大部分のお金を発行しているのは普通の銀行なのですか？」

「そのとおりです。発行されたお金の裏付けとして金準備制度があった時代もありました

が、現代の世界のお金の裏付けは実体のない信用だけなのです。学校ではこのような大切なことを教えていないのが不思議なくらいですね」

「でもどうやって？」

「簡単です。皆さんからの預金の何倍ものお金を貸すことによって生み出しているのです。信用創造といいます。家を新築するのに一千万円を銀行から借金したとしても、通帳に借金の数字が記載されるだけです。お金の大部分は銀行の口座間を移動しているだけです。ですから、銀行がお金を貸しているという表現は正確ではありません。銀行はお金を無から創造しているのです。負債がお金になるのです。このお金は返済された時に消滅します。但し、利子は残ります。膨大な負債が泡のようにお金になっては消えていくわけですがその利子だけは際限なく増え続けていきます。借金返済のためにすべての生産活動があるといっても過言ではありません。この信用創造の裏づけとして、預金者から預金の解約要求に備えて日本銀行に一定の準備金を預けておく必要があるということになっています。日本銀行…これは皆さんあまりご存知ないかもしれませんが株式会社なのです。すべての民間銀行の元締めです。

準備金の準備率を仮に一％とすると、預金の九十九％は貸し出せる。貸し出された九十九％のお金が別の銀行に預金されれば、この別の銀行もまたその預金の一％を日銀に預けて残りを貸し出すことができる。こうして最終的に最初の一千万円は最大その百倍の十億円まで膨れ上がることができる。

国債も『借金』ですから通貨の発行になります。民間の引き受けでも日銀の引き受けでも通貨の発行になります」

「そうなんだ。びっくりだな。そうすると銀行からお金を借りた場合、無から造ったお金に利子をつけて返済していることになりますね。こんなことって何かおかしいと思うな」

「ここらで、カズマ君の質問に答えます。エポカでは銀行のこのような信用創造機能を許していません。お金を発行する権限は政府機関の一部であるGバンクだけになっています」

「すると銀行は、なくなってしまったのですか？」

「お金…エポカでは配当になりますが…を『貸す・借りる』ということが無くなり、『与える・貰う』だけになります。民間銀行から信用創造機能が無くなっただけでなく、借金のない世界ですからお金を貸して利子を稼ぐということもできなくなるので、銀行というものは成立しなくなります。このため銀行は投資信託会社のようなものに姿を替えることになります。つまり、皆さんに投資配当の投資先を紹介したり、皆さんから預かった投資配当や授権配当を皆さんに代わって様々な組織や個人に投資したりといったことになります」

「なるほど、それならば銀行のような罪作りではなく、社会のための有用な業務になりますね」

「ということで配当というお金も無から生まれます。単なる数字データですから、Gバンクが数字というデータを基本配当や投資配当として、皆さんに配分するだけのことです。カズマ君の世界でも政府が印刷機で貨幣を大々的に印刷して財源をまかなっていた時期があり

ました。それと似たようなものです。但し、無からの創造といっても、その量はエポカ世界の生産能力にみあったものでなければなりません。逆に言うと生産能力がお金になるといっても良いと思います。このことは後で詳しく話します」

「政府が直接お金を発行するのであれば、国債などという利払いの必要な借金などする必要がないはずですよね」

「本当にそうですね。ですが、銀行はその存立基盤がなくなるので経済学者達と一緒に大反対するでしょう。さらに、世の中には政府に通貨発行を許すと、昔、戦争の費用を賄うために紙幣を大量発行してインフレになったように、インフレになると考えている人が大勢いるようですね。国の生産力と見合わない分不相応なお金を大量発行すれば当然ハイパーインフレにもなります。政府が信用されていないのかもしれませんね」

「妙ですね。銀行やその御用経済学者の言い分はともかく、銀行という私企業の利益のために発行されいるお金は信用できるが、独裁的な政権ではなく民主主義の選挙で選ばれた政府が、少なくとも国民のためにと考えて発行する政府貨幣が信用できないってのは理解できないですね。もしも政府がインフレを招くような政策を行おうとするならば選挙で政権を交代させることができるじゃないですか。それに今は大変なデフレの時代で生産力が有り余っているのだからインフレを心配するというのはおかしいですね。過去のトラウマでしょうか」

「たしかに強権的な政権が戦費調達のために行った政府貨幣の発行と議会政治が曲りなりにも機能している時代に人々の生存権の保障などのために行われる政府貨幣の発行を同一視

はできないと思います。とはいうものの現在の社会は様々な利害関係に基づいていて、政府も利害関係者の代表であり、自らの政党や議員としての利害もあるので、打ち出の小槌のような通貨発行権を政府に与えたら、政権政党に都合の良いように使いまくられてしまうのではないかという人々の懸念はあるていどはもっともな気もします。しかし、基本配当などのための政府通貨発行の場合には杞憂にすぎないと思います。なぜなら基本配当や投資配当の支給は貧困や格差のない社会、支配と隷属のない社会、利害・打算のない社会への大転換を促すからです。社会と経済のシステムは人々の意識や社会規範といったものを根本から変えてしまう力をもっています。そうなると国民一般のため以外に政府通貨の使用方法はなくなります」

「『市長の選挙の部屋』で説明されたように政治の仕組みが基本配当などによって根本から変わってしまうことになるんですね。たしかに党利党略の政党政治なんてものはなくなるのかもしれないですね」

「ちょっと脇道にそれましたが、確かに配ったお金は回収しなければ、いずれインフレになって貨幣価値が下がってしまいます。先ほど言ったように、生産力と社会に出回るお金はバランスしている必要があります。ところが今、世界には日本のようにデフレで苦しんでいる国が少なからずあります。充分な生産余力があるにも拘わらずです。カズマ君の言うように本当におかしな話です。モノ不足ではなくモノ余りなのです。供給力不足ではなく需要不足つまり購買力が不足しているのです。不況期には困窮している人が大勢いるので、お金が

ないため需要にはなりませんがモノやサービスに対する切実なニーズは大きいはずです。このようなデフレは、需給ギャップ分を政府が国民に生活資金を配分したり公共事業などに支出したりすることによって、たちどころに解決可能な問題なのですが…政府貨幣に対する迷信のような偏見には困ったものです。エポカでのこのような配分したお金の回収方法ですが…」

「分かりました。さっき教えてもらった減価貨幣ですね。これを使えば、所得税とか消費税とかの税金などいらないことになりますね。減価率を調整することで、インフレやデフレを防いでいるんですよね」

「そのとおりです。現在の社会であれば消費税のようなものも考えられますが、減価貨幣であれば交換手段にしかならないし、配当の回収にも使用でき、しかも電子マネーなので処理しやすいですから。しかし、減価貨幣だけではありません。というのは、時として貨幣の回収を早めるために減価貨幣の減価率を大きくすると購買行動が促進されて貨幣の回転率が大きくなりすぎてしまう懸念があります。このため別の方法も併用しています」

「別の方法？」

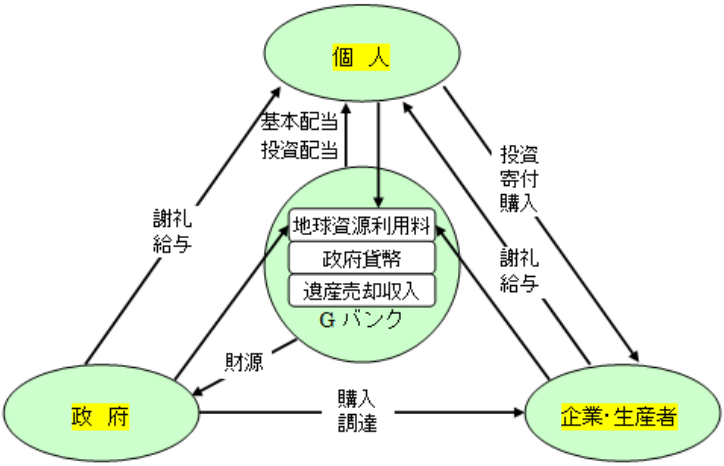
「エポカにもカズマ君の世界の人から見たら税金のように見えるものがあります。ひとつは、先ほど説明した相続のない世界ということですから、相続税率が百パーセントと見えるかもしれません。もうひとつは地球資源の利用料です。この利用料もインフレやデフレを防ぐ手段として使用されることがあります。エポカ世界では土地は公有ですから利用料をGバ

ンクに払う必要があります。同様に、石油・石炭、様々な鉱物資源の採掘、自然界に生息する魚、動物、植物の採取など自然資源の利用料金や環境への負荷や排出量に応じた料金も支払う必要があります。水質汚濁や大気汚染物質の排出なども環境の利用ということになります。いずれにしても自然の利用に当たっては、自然資源の復元料・環境保全料のような料金を払う必要があるのです。カズマ君の世界の人からみれば地球税のようなものかもしれませんが、あくまでも利用料金なのです。利用料金を支払う人や組織のみが独占的な資源利用権を持つことになります。もっとも、これらの利用者が生産したモノやサービスの価格には自然資源の利用料金が含まれることになりますから、最終的には消費者が負担することになります」

「地球税…ではなくて、地球資源の利用料ですか…」

スクリーンには別の説明図が表示されていた。

「そもそも、人間の労働や生産活動の結果として得られる所得に課税するという方法が間違っているのです」



「どうしてですか？」

「家事や育児、ボランティア活動なども含めて人間の労働や生産活動は自分のためだけでなく人びとために有用なもののはずです。この有用な活動の成果から搾取するような税金は望ましくないということです。それよりも人類を含めて地球上の生物にとってかけがえのないものであるとともに自らが創造したものではない地球環境や資源を利用する行為に対してその利用料を徴収する方が理にかなっています」

「そういわれれば確かにそうですね」

「資源利用料は決して安いものではありません。化石燃料などはカズマ君の世界よりもかなり高額になりますから輸送費が高くつくことになります。これは関税と同じような効果をもち、遠方からの輸入品のようなものは高くなりますので、結果的に農業などの地場産業が守られようになります。巨大企業が世界経済を支配するようなことがなくなり、経済は相対的に地産地消型になります」

「日本国内の森林ではなく、東南アジアの森林が伐採されて、日本に大量に輸入されるなんてこともなくなりますね」

「エポカの企業経営者達は、優れた品質のモノをより安い価格で提供すべく努力する点はカズマ君の世界と同じですが、生産コストを下げるには、資源の消費量を抑え環境負荷を小さくするような技術を開発・使用すること、従業員にとって楽しい職場づくり・生き甲斐を感じられる職場づくりが重要になります。

基本配当がある世界の会社では、カズマ君の世界の会社のように高給を支払う必要がなくなっている上に、楽しく・生き甲斐を感じられるような職場は人気があるので無給でもＯＫという人が大勢いるからです。

これとは別に、社会的に存在意義のある生産活動をすることは資金集めの点から重要になります。人々は投資配当を、高い利益を出せる会社とは別に世界中の人々の幸福増進に寄与している会社に進んで提供するからです」

「地球のため、従業員のために、世の中のためになる生産活動をすることが企業繁栄の秘訣ということですね」

「話が元にもどりますが、カズマ君の社会では、無から創造される銀行の利子貨幣は銀行が利子を獲得するために発行されているものです。バブル期などに大量のお金が発行され、不況期ではどんなに人が困っていようが貸し渋りや貸しはがしが起きたりします。このお金は人間を利潤追求に駆り立て、犯罪の温床にもなり、社会や経済を不安定なものにし、地球の資源や環境を破壊する元凶になっているものです。これに対して国民の声を代弁する政府であれば、銀行通貨のような有利子貨幣ではなく減価貨幣にすることができ、国民の幸福のためにいくらでも有効活用できるはずです。貧乏で困る人も、不況なんてものもなくすことができるでしょう。ですから銀行貨幣は銀行の利益のために発行される私的通貨ですが、政府貨幣は公共通貨として機能します。利潤追求目的のために発行される銀行通貨は信用バブルを繰り返し引き起こしてきましたが、この公共通貨は信用バブルはもとより景気変動の歴

史に終止符を打つでしょう」

「世の中の人って、どうしてこのようなことが理解できないのか不思議なくらいですね。ところで、エポカは僕らの世界と同じような社会から生まれ変わったわけですよね。『親の勘当』の部屋でその経緯が映し出されていましたが。借金だらけの社会が借金のない世界に転換するのは容易なことではないように思えるのですが」

「確かに大変なことには違いありませんが、比較的スムースに移行しました。というのは、エポカ誕生のかなり以前から基本配当によって人々の生活は保障されていましたから。それと社会規範が既にエポカ社会的なものに変化していたので混乱するような事態にはならなかったのです。借金に関しては全て出資として処理されました。大多数の人々の賛成によって成立した法律に基づくものです」

「どうでしょうか？　特に質問がないようでしたら、そろそろまとめにはいりたいと思いますが。よろしいですか？」

「いまのところ、質問はありません」

「経済や財政のシステムはシンプルなもので済ませられるはずですし、だれの目にも明らかなように透明なものでなければならないと思います。複雑な経済学など必要ないのです。ですからエポカの世界には会計学はありますが経済学などという代物はありません。経済や財政のシステムは人の幸福だけを目的としたモノやサービスの効率的かつ適切な生産と配分のためにあるべきであって、それ以外の目的のためにあるべきではないのです。貨幣の獲得

や利潤の追求を目的として、その手段として生産や販売があるようなシステムは根本的に問題があります。

現在の貨幣、資本主義の経済と財政のシステムは複雑極まりないものです。貨幣は利子を貪り取るような利子貨幣ですし、経済は利潤追求動機で動いています。財政は人々の活動の成果である所得などからの税金という形の搾取と銀行の利益のためにあるような国債に依存しています。資本主義経済学は銀行を中心とした経済システムの維持を前提としていますから、このような経済学では人々を幸福にすることは決してできません。このシステムの中では人々はシステムが命じるままに動くことを強要されています。人々はこのシステムの奴隷になっています。

百年前から比べたら現代世界の生産力は何百倍にもなっているので、生活水準からすればこの世は楽園になっていなければならないはずです。それがそのようになっていないというのは貨幣の性格と所得分配システムに問題があるからです。

『生きるために、なんとかして利子貨幣を稼がなくてはならない社会』は『拝金主義的社会』になるのは必然ではないでしょうか。エポカの世界は、『配分されたポイントをどのように使うか』という社会です。ポントは稼ぐ前に、使うために手元にあるのです。エポカは国境が無く、秘密が無く、高度の情報通信システムと生産力をもっている社会ですが、必ずしもこれらの条件がなくても公共通貨をベースとした『配当システム』を導入することは可能なはずです。近年では社会保障費などで増大する国家財政を支えるため、世界各国が大量の

国債を発行するようなことになっていますが、既に税金や国債などで財源を賄うことが限界にきています。ですからカズマ君の世界でも早い時期にこのようなシステムに移行すべきであると思います。

ところで、先ほど政府の借金が千兆円もあるということでしたが、日本の場合には外国から借金しているわけではありませんから政府が一兆円金貨でも考案して千枚もつくれば、それで借金は帳消しにできます。絵空ごとにすぎない財政規律問題のために社会福祉費を切り詰める必要など全くありません。インフレになるのが心配であれば、国民の生産力にあわせて支出を調整すれば良いだけのことです。マスコミまでが異口同音に叫んでいる『子供や孫の世代に借金のツケを廻すな』といった論調は広く国民一般に知られていますが実に困ったことです」

「日本の国の膨大な借金を本当にそんなに簡単になくすことができるものなんですかねぇ」

「実に簡単なことです。トラウマから解放されれば良いだけのことです。個人や企業の借金と国家の借金を同列視していることに問題があります。通貨発行権を行使しようと思えばできる政府と個人や企業の場合とは立場が全く異なります。問題にもならない政府の借金を『問題だ』として財政支出を削減したり増税したりすることにこそ最大の問題があるのです。需要不足で不況のときに個人や企業が経費節減に励むのは理解できることですが、政府までもが国の借金を減らすために財政を緊縮させたり増税したりしたら不況が一層深刻化して泥沼から抜け出せなくなります。緊縮財政は景気が過熱状態の時に行う政策であって不景気の

ときには決して行ってはならない政策のはずです」

「日本銀行が金融緩和とかをいろいろやっているようですが、いまくいかないのは何故ですか？」

「日本銀行が銀行への貸し出し金利を下げたり銀行の国債を買い上げたりして銀行の資金量を増やしても、企業は需要つまり収入が見込めなければ金利が低くても借入に躊躇せざるをえません。いわゆる流動性の罠の状態に陥っているのです。金利が下がれば円安になって輸出関連の企業が潤う場合があるかもしれません。しかし、デフレの状態で国内の需要を生むには、このような間接的手段はほとんど機能しません。需要を生むには直接的に需要そのもの、具体的には公共事業費や社会保障費の増額、現金給付や減税などの方が有効です。それと肝心なことですが一時的な対策ではなく、継続的に安定した需要が見込まれることが必要です。いくら個人資産があっても収入の見通しがなければ、人は支出を抑制し明日に備えます。収入の見通しがなければ企業はリストラに走ったり積極的な投資を手控えたりします。人も企業も基本的にはストックの量ではなく入ってくるフローの量に応じて支出します。銀行の資金量を増やしても、銀行が安全確実と考える国債購入の原資になるだけのことです。つまり慢性的デフレ状態のときは政府が直接的に有効需要を創造するしかありません。更に言えば、政府が恒常的に需要そのものをコントロールする必要があります。大切なのは国全体での生産力と需要のバランスです。生産力に十分余力があって需要が不足しているデフレ状態であれば需要を創出し、需要を満たす生産力が無い場合には、生産力を増強したり需要

を抑制したりすればよいのです。

需要創造の財源確保のため、政府が政府貨幣の発行に踏み切れないでいるのであれば、国債でもよいのです。政府通貨の発行と同様の意味をもつ赤字国債の日銀による直接引き受けでも躊躇されるのであれば、百歩譲ってこれまでどおりの民間引き受けでもかまいません。景気が悪いために行き場を失っている資金が市中銀行には山ほど溜まっているからです。政府がその資金を借りて需要を創出してやるだけのことです。政府支出は国民の収入になって帰っていくでしょう。日本では不動産バブル以降の長年の誤った緊縮財政政策のために、何年も経済成長がストップしたままになっています」

「そういうことになりますよね。そのようなことを言っている人はいないんですか？」

「ノーベル賞をもらったような経済学者達もいますし。日本にも熱心に政府に提言している人達が大勢います」

「そうなんだ。でも、金融緩和をやったり政府が有効需要をつくったりして、銀行や企業に儲けさせ、その結果として国民の所得が増えます…といった手法は所得格差の是正を目的にしているわけではないから、貧しい人々に所得がどれだけ配分されるか分かったものではないですね。こういう方法は目的からすると間接的で、目的からそれてしまうこともあるから、手順が逆のように思います。やっぱり基本所得を直接的、継続的に全国民に配分する方が確実で手っ取り早いですよね」

「おっしゃるとおりです。マスコミも含め大半の政治家の頭は『間違いだらけの通説』に

支配されているのです。

ちょっと脱線しましたかね。それでは話を戻します。競争の無い社会は、刺激が無く、生き甲斐も楽しさも無い社会になります。このため、エポカ世界でも競争があり、会社などの組織には栄枯盛衰があります。所得の多い人も少ない人もいます。ですが、お金を稼ぐためにひたすら競争に明け暮れる社会は、目的と手段を履き違えた社会です。

前世では、人はお金を巡って殺人、盗み、詐欺、汚職などの様々な罪を犯し、自殺や戦争などの悲劇を繰り返してきました。利子貨幣に基づく利潤追求動機で動く社会では、安全性が犠牲にされ、時に列車事故や原子力発電所事故などの大惨事を引き起こしたりもします。経済性を追求するあまり地球の自然環境を破壊したり汚染したりすることなどあたりまえのこととして行われています。お金だけの世界はせちがらい社会であり、利害や打算の社会であり、人品を卑しくもします。高貴な人も下品に、優しい人も鬼になります。これらのことは、稼がなければ生きていけないことが主な理由であると思います。ですから、『稼ぐことを目的として働く』のではなく、『自分の生き甲斐と人に感謝されるために活動する』ように社会の仕組みを転換する必要があったわけです。ということで、エポカ世界の『三つの配当』は、『徳』が『得』になる社会を実現するために、長い期間の試行錯誤の上に考え出されたものなのです。

カズマ君が住んでいる世界である資本主義社会は、私有財産と競争による市場経済に基づく社会です。伝統的な社会主義社会は国家が全ての生産手段を保有する共有型社会であり、

計画による統制型の経済です。ところが、エポカの世界は財産相続がないので共有型社会のようなものですが、市場経済社会なのです。ただし、政府の規制を極力排除しようとする自由放任経済ではなく、総需要コントロール型の市場経済です」

カズマはうなずいたが相変わらず黙って聞いていた。

「最後になりますが、何か聞いておきたいことがありますでしょうか」

しばらくカズマは考えていた。

「えーとですね…社会主義が失敗した原因とユーロ危機の原因ってどこにあるんでしょうか？」

「そうですね、いずれも大きな社会実験の失敗ですね。このような実験結果をきちんと総括し、学んでおく必要があります。でも両方とも詳しく述べている時間がないので要点だけにします。

最初に社会主義ですが、マルクスの理論に起因する問題から述べることにします。結論から言うと、『市長の選挙』でのフーパの解説にもあったように、マルクスは結論を決めてから理論をつくりあげたように思います。というのは共産党宣言に『今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である』と記載されていますが、歴史上の戦いの殆どは部族間、国家間など同レベル間での戦いが殆どで、下克上や階級間の闘争の歴史などは主流ではないからです。これは資本家階級に対する労働者階級による権力闘争が歴史的必然であるとするためのこじつけです。

まずマルクスは労働者階級が一切の生産手段を奪われてしまっていることが最大の問題であると考えたわけです。次に剰余価値論ですが、封建制社会には露骨な搾取があったが、資本主義社会での搾取は雇用形態の中に隠れて見えない。搾取の仕組みがどこかにあるはずだとして、労働価値論をベースに剰余価値というものを考えだし、これを資本家が労働者から搾取しているものとしたわけです。労働は価値の源泉の主要なものではありますが、労働価値論自体はあやしいものです。これに屋上屋を重ねた剰余価値はもっと曖昧です。ことさらに剰余価値などというものを発明しなくても搾取は説明できます。基本的には搾取の程度は経営者と従業員の社会的な力関係によって決まるだけのことです。マルクスも利子に関しては批判していますが、私たちのように資本主義社会の根本的問題としては捉えなかったのです。

剰余価値論の帰結として、共産党宣言は労働者の労働から剰余価値を搾取する資本家への憎しみに満ちたものになり、暴力的手段に訴えても政治権力を奪取し、生産手段を資本家階級から奪い取らなければならないとしたわけです。ところで、社会主義革命が成功した国の殆どはマルクスが想定した発達した資本主義の国ではなく封建制度の国でした。

マルクスは『資本論』などで資本主義の『解釈』に心血を注いだのですが、共産主義や社会主義社会の設計図、政治制度のありかたに関してはほとんど何も書いていないに等しいのです。当時の政治や経済システムに対する痛烈な批判以上に来たるべき社会の在り方についてその骨格、ディテールやプロセスをデザインし、留意点などについて論じるべきであった

にもかかわらずです。労働者階級が政治権力を奪取しさえすればあとはユートピアへの一本道しかありえないということではないはずです。実際には封建制度にもなかったような共産党の独裁的中央集権体制、すべての自由が簒奪された社会への一本道を突き進んだわけです。

階級闘争史観、剰余価値論はプロレタリア革命を正当化するために考えだされたもので、これとは反対に肝心な未来社会のデザインについては関心がなかったということになります。特に、後に問題となるような革命組織が必然的に陥る腐敗や退廃、官僚主義化については全く考慮されることがありませんでした。

革命によって政治権力を奪取した共産党政権は生産手段を国有化し、計画経済を推し進めていきますが、そのために官僚組織の論理によって上意下達で行われます。この論理では市場経済の下での企業間競争、個々人の富への野望と倒産・失業に対する危機意識が強制する創意工夫を推進力とする資本主義経済との競争に太刀打ちできないことは明らかです。結果的には生産手段は資本家階級から国家の単独所有に変わっただけです。資本家階級への隷属から社会主義国家を牛耳る共産党幹部らへの隷属に姿を変えただけでした。搾取は封建体制、資本主義体制、社会主義体制のいかんを問わず存在します。搾取の程度は支配者の力が強いほど大きいということです。

マルクスが『共産党宣言』で述べたプロレタリアート独裁は、政治権力を握った共産党政権にとって、他の政治勢力の存在を許さない独裁政権化するのは必然でした。『アンドロイド

の神』での話のように、組織の常として組織の維持拡大が自己目的化していきます。共産党政権に異を唱える者は反革命分子のレッテルを張られて粛清されることになります。『貧しい労働者や農民のため』という当初の目的は建前だけになってしまい、労働者や農民は共産主義政権の奴隷になってしまったというわけです。やがて資本主義国から打ち込まれる安価で性能の良い商品という弾丸と壁の上からあふれ出る『自由主義の情報』という洪水によって、いとも簡単に共産主義の壁は崩壊してしまいました。政権崩壊に至らなかった国は経済の実態を資本主義化することで生きながらえていますけどね」

「ちょっと質問していいですか」

「どうぞ、遠慮なく」

「労働価値論ってもっともなように思えるけどいい加減なものなの？」

「モノやサービスの価値には様々なものがあるかもしれませんが、交換価値や使用価値と呼ばれているものがあります。商品価格の基になるようなものが交換価値ということになっているようです。この交換価値を担っているのが使用価値になりますが、交換価値は高いが使用価値は殆ど無いようなものもあります。たとえば貴金属や宝石類は日常生活上の利用価値はあまりない。もっとも虚飾を使用価値と思っている人も多いですね。逆に生活上不可欠な使用価値があるけれど交換価値の全くないようなものもあります。日光や空気はそれが無ければ人間は生きていけないが、交換価値はない。だからここでは交換価値があるかないかではなく人々にとって有用なものや有用なものを生み出すような価値、つまり使用価値の基

になるものにはどんなものがあるかを考えてみることにします。

　価値のおおもとには母なる自然資源や自然環境があります。これらは価値そのものであるとともに使用価値の源泉になっていますが、経済学ではその大部分を外部経済として扱ってきました。生産過程での労働は価値を生み出す上での不可欠な要素ですが、時代とともに価値創造に占める割合は低下してきています。生産過程に投入される資源や設備も使用価値の源泉ですが、こちらは逆にますます大きなものになってきています。もっともこれらの多くは自然と先人の知見と過去の労働の産物でもありますけどね。それ以上に価値の源泉になっているのが、人間が歴史的に蓄えてきた様々な知見、つまり科学的知識や技術などです。これが無ければ現在の巨大文明は存在しません。私たちは人類にとっての共有資産である歴史的な知見の大きな恩恵にあずかって生産活動を行い、生活しているわけです。このため巨大な価値をもたらす共有資産の恩恵を労働や資本の提供者だけにしか配分しないというのは理屈に合わないかもしれません。ですから先ほど述べたように、このような恩恵部分については全ての人が均等に授かるべきだという論理もなりたちます。

　それと、労働価値論では家事や育児などは労働力の生産や再生産費用として賃金に含まれるものとされていますが、このような家事や育児、様々なボランティア活動がなければ人間の生産活動は機能しないはずですから、これらも価値の源泉になっています。これらも基本配当が全ての人に均等に配分されるべきであるとする根拠のひとつになると思います。

　それと、外部経済扱いされてきた自然資源や自然環境は人と違って報酬を要求しませんが、

その利用にあたっては当然その対価としての保全・復元費用を進んで払う必要があります」

「わかりました」

「それでは次にユーロ危機の問題です。ユーロ導入の目的は強いヨーロッパ経済の復活にあったと思いますが、危機の原因はこれまでの国民国家の枠組みを残したまま通貨統合をおこなったことです。通貨統合は国の通貨発行権の放棄を意味します。国家の枠組みの下では、為替レートと関税は国内産業を保護・育成するための不可欠の手段です。関税を撤廃したり通貨を統一したりすれば、域内では弱肉強食の競争状態になります。強い国や強い企業はより強くなり、弱い国や弱い企業が衰退するのは避けられません。大きくなった市場で蓄えられた競争力はユーロ圏外に対しては効果を発揮するかもしれません。しかし、関税や為替レートによって防護されてきた域内の国の産業は強い域内の他国や産業に対して無防備になります。域内では勝ち組と負け組みにはっきりと分かれるようになり、結果として国ではドイツの一人勝ちになったわけです。自国通貨があれば、貿易に不均衡が生じても、為替レートの調節によって輸出を増やし外貨を稼ぐことが可能です。ギリシャなどでは従来の社会保障水準を維持するためなどに国債を発行してきましたが、この国債は自国通貨ではなくユーロになりますので、他国からの借金と同じことになります。自国経済の有力な回復手段が失われているわけですから財政破綻が避けられなくなります。ギリシャの放漫財政が財政危機の原因のように言われていますが、とんでもない間違いです。経済がどん底まで落ち込んでいる状態で、借金返済のために緊縮財政を強要するのは、瀕死の病人から家財道具や衣類をは

ぎ取ろうとする人非人の高利貸の行為と同じです。これは経済の回復手段の最後の一手までも剥奪することであり、全くの逆効果でもあります。ユーロ圏がひとつの国であれば、豊かな地域から貧しい地域への地方交付税交付金の配分のようなこともできますが、国が異なるため、豊かな国の国民にとっては『他国の放漫財政のツケをなんで我々が負担してやらなければならないのか』ということになって反対するわけです。

これまでに話してきたとおり税金と国債を財源とする租税国家の限界も見えてきています。長いことヨーロッパ各国は高い失業率に悩まされていますが、稼得所得を前提とした経済では、科学技術の進歩に伴って失業率が傾向的に上昇し、結果的に需要不足が慢性化するので、経済は低迷します。このこともユーロ危機に拍車をかけていると思います」

「ユーロの行方はどうなりますか」

「統一国家の方向に向かうか、ユーロ圏を清算して元の状態に戻るかしかないでしょうね。現在はそのいずれでもない財政支援という形の借金の上乗せを行っているわけです。ポルトガル、スペイン、イタリアまでもが財政危機といわれる状態になってきているので、このままでは遠からず破綻するでしょう。銀行による信用創造貨幣、国民国家を存続させたままでの統一通貨を前提とする限り問題は解決しません」

「……ところで、『配当』も一種のお金だと思うんですけど、いっそのことお金のいらない社会なんてものがあっても良いのでは？」

「確かにお金のようなものはなくても良いのかもしれませんが…。その質問に答える前に

お金の話について簡単なおさらいをしておくことにしましょう。

利子貨幣はモノに対して優位にたち、モノだけでなく人間を支配します。人や企業は借金の恐怖の下で生きなければならず、利潤追求に駆り立てられます。利子貨幣は富の貯蓄手段にもなり、お金の保有量が幸福の尺度になります。このようなお金の性格は変える必要がありました。

エポカの『配当システム』は基本配当によって所得保障を行うとともに貨幣の回収手段として減価貨幣を用いていますので、人間を利潤追求動機から解放し、お金の機能を価値尺度と交換手段に限定します…ということでしたよね。ここでは配当というお金は立派に人々の役にたっています。

ですから大事なことは、何のためにお金をなくすのかということです。お金がない社会が成立するためには人々の必要に応じてモノやサービスが提供される必要があります。お金が無くなることは価値尺度もなくなることを意味しています。人それぞれに考えや価値観が異なるのでそれでよいのかもしれませんが、次のような問題を十分検討する必要があります。

- 交換手段がなくなることで経済活動や生活が従来どおりうまくいくのだろうか？
  価値尺度が無くなって不便なことやおかしなことが起きたりしないだろうか？
- 配当システムに何か不都合な点があるのだろうか？　配当システムが無くなることによってエポカの世界がどのような点で改善されるのだろうか？

そのようなわけで、エポカでは『配当システム』が無くても運営できる世界の仕組みにつ

い議論し、社会実験もしています」

「社会実験？！」

「そうです、幾つかの限られた地域で、配当システムなしで社会がうまく機能するか否かを実験しているのです。但し、マルクスが述べた『必要に応じて与えられる社会』ではなく要求すれば与えられますが、提供者が無理な要求であると判断する場合には与えられない社会の実験です」

「興味あるな…、結果は？」

「今のところうまく機能しています。無理な要求は自重されています」

「何か問題は起きていないのですか？」

「問題ではありませんが、懸念はあります。無理な要求が出てくる懸念とは別に、お金のようなものが無かったとしたら、消費者だけでなく生産者にとってもモノやサービスの質や量だけが問題で、それを生み出すに必要とされるコストや効率性は問題にされなくなるのではないか、モノを造るために、大きな無駄をしても問題にならなくなってしまうのではないかということです。配当システムによって機能している自然資源の有効活用と浪費抑制、生産性や効率性の追求に支障が出るのではないかとの懸念です。杞憂、取り越し苦労かもしれませんけれどね。

実験地域でこのような問題が起きないようにするには規則や規制を強化することも考えられますが、自由が損なわれるようなことは最も避けなければならないことなので、教育に力

を入れることにしています。おそらく結論がでるまでには社会システムのありかた全般の見直しを含む様々な検討と実験が必要でしょう。

無条件の『必要に応じて与えられるような』社会が望ましいのかもしれませんが、そのような社会は、宗教が考えるような『愛に満ちた人間』だけの世界や必要の節度を弁えた『理性的な人間』だけの住む世界でしか考えられないものかもしれません。しかし、そのような人間ばかりとは限らないこれまでの世界では、『お金のようなもの』を媒介とした『市場』とその市場の『総需要』を制御するGバンクの組合せに優るものがなさそうなのです。そうは言ってもいずれ世界の人間の意識や社会規範の変化がこのようなシステムを無用なものにするのかもしれませんが…。

ということで、当面は、エポカの世界のような姿を目指すのが現実的だと考えています」

「『愛に満ちた人間』や『理性的な人間』だけの世界ってものは、なんだか怪しい気がしますよね」

「そうですね、宗教による『愛に満ちた人間』づくりや啓蒙主義的な思想による『理性的な人間』づくりを通じて人間的な社会をつくろうとする試みは、多くの場合、人間を型にはめて訓育するようなことになり、崇高な目的に反して選択の自由が無い統制的な社会にならざるをえないのは歴史が示すところではないでしょうか。人間は環境次第で悪魔にも神にもなると思います。ですから、『人間的な仕組み』づくりによって『愛に満ちた人間』や『理性的な人間』になるように醸成するしかないのではないでしょうか。

『お金のいらない社会』や『必要に応じて与えられるような社会』ですが、そのような社会がありえるものとすれば、この『配当システム』の社会を経由することなしに実現することは無いと考えています」

「そうですか……いずれにしても、ぼくらの世界とは全然違うなと思いました……説明ありがとうございました」

「ご静聴ありがとうございました。質問したいことがでてきましたら、あとはフーパに訊いてください」

「ホホーウ！　カズマの疑問は解けたな」

「まだ細かいことは分らないけど、エポカの世界が目指しているところは分ったような気がするけど。それとお金の話や経済と財政についての見方がニュースや新聞で見たり聞いたりするのと全然違っているのにびっくりしたな。難しかったけど面白かったよ」

「ホホ、ホホーウ！　よかったじゃないか。それでは一休みしたら次の部屋に行こうか」

「うーーん！　エンリケさんってヴァーチャルリアリティの説明者ということだったけれど、本当は人間じゃないの？」

……

エンリケが「一兆円金貨千枚を考案して、日本政府の借金を帳消しにする方法」を提案し

ていますが、『ＮＥＷＳ　ＷＥＥＫ　日本版』[二〇一三年一月二十二日号掲載]に次のような記事が掲載されていましたので紹介します。

債務上限問題は「一兆ドル硬貨」で解決？

アメリカでは債務上限をめぐる民主・共和両党の攻防が山場を迎えている。このままでは二月中旬か三月上旬にも債務上限に達して政府借り入れができなくなり、デフォルト（債務不履行）に陥る恐れがある。

危機を回避する方法はいろいろ考えられる。奇抜だが法律的には問題ないのが、「硬貨作戦」。財務省が額面一兆ドルのプラチナ硬貨を鋳造・発行して資金調達に利用するというものだ。

記念硬貨の発行に関する連邦法（合衆国法典第三一編第五一一二条）によれば、「財務長官はその折々に下した適切な指示に従った具体的な仕様、デザイン、種類、量、額面、刻印で、プラチナを用いた地金型コインおよびプルーフ貨幣を鋳造・発行することができる」とある。

これを抜け穴に利用し、財務長官の指示で、例えば一兆ドルのプラチナ硬貨を発行する。それをＦＲＢ（米連邦準備理事会）に預けて、その「預金」口座から一兆ドル分の小切手を振り出して決済し、資金調達をするというわけだ。シンプルで効果的な解決策だ。

第六の部屋　ハイパーハウス

「ホウ、ホホーウ！　次の部屋の主人公は老人なんだけど、カズマは老人とか高齢者というと、どんなことを想像するかな」

「寝たきり老人とか、定年退職して年金生活している人達を想像するけど。そういえばお父さんが、『少子高齢化社会になるので、年金の財源が不足して支給額が減るかもしれないから、老後の生活は厳しくなるなぁ』と言っていたっけ」

「ホホーウ！　今のカズマの話を聞いたら、エポカ世界の人達はきっと怪訝な顔をすると思うよ。定年ってなんだとか、少子高齢化と年金の財源がどうして関係があるんだとかね」

「エポカの人達がそう思うのは、フーパが『エポカの世界は境界の無い世界』と言っていたけれど、そのことと関係あるのかな？」

「ホーウ！　そうだよ。エポカの世界は子供、大人、老人といった境界がなく、無職と有職の境界も無い。談話室でエンリケが説明してくれたように定年なんてものも無い。カズマの社会でも自営業の人達には定年が無いよね、それと似たようなことさ。歳をとっていようがいまいが『活動』できる者はだれでも活動する。高齢になれば介護が必要な人の割合は、働き盛りの人達よりも当然高くなるけれど、それでも介護が必要な人の方が少ない。赤ん坊

は百パーセント介護が必要だし、子供も養育という介護が何年も必要になる。そもそも『介護』という言葉だけれど、妻が夫の食事の世話をするのも一種の『介護』ではないのかな。エポカの人にとっては『介護』という言葉の意味が理解できないと思う。確かに、痴呆症の老人の介護は、身体が赤子と違って大きいことや介護期間が長いといったような大変さはあるけれど、経済的な問題はないし、介護の体制も整っているので、高齢者の『介護』が殊更問題になるというのは理解できないことなのさ」

「そうだな、エポカの人ならば年金の財源の問題ってなんだと不思議がるのは当然だろうな」

「ホーウ！　エポカの社会は、カズマの世界のように老人が働かない……というよりも働くことを拒絶されている社会ではなく、大部分の高齢者が『活動』している社会だから、少子高齢社会で稼ぎ手が少なくなるなんて問題もないし、もちろんそのことによる財源問題なんていうのはあり得ない」

「さっきの配当というお金のシステムに支えられているからだよね」

「ホッ、ホーウ！　だいぶ分ってきたじゃないか。人口の年齢構成が逆ピラミッドになっていることが問題なのではなくて、ピラミッド型の人口の年齢構成や経済の成長がなければ維持できないような社会の仕組みが問題なんだ。そのような社会は欠陥のある社会とはいえないかねぇ～」

「そうかもしれませんね」

「ホーウ！　それでは、ドアを開けて中に入ることにしようか」

×　×　×

ホログラフィは、カサルという老人の家の中を映している。

カサルの居室は二階にあって書斎を兼ねていた。部屋の中は雑然としている。カサルは年齢百六十歳、中肉中背というよりもやや太り気味で、頭のてっぺんが禿げ上がっている。

「ホーウ！　エポカの世界では平均寿命が二百歳くらいになっているので、百六十歳の老人というのは、カズマの世界の六十五歳くらいと考えたほうがよいかな。さっきも言ったように、エポカの世界に定年は無いので、健康であるうちはいくらでも働くことができる。エポカの高齢者は、カズマの社会流にいえば若い人よりも多くの『資金』を持っているし、若い時から蓄積した経験、技能や人的ネットワークも持っている。だから、高齢でも健康でさえあれば、自分の持つ『資金』、経験、技能、人的ネットワークを用いてベンチャービジネスを起こしたり、若者を指導したりといった具合に意気軒昂に働いている」

カサルは、引き出し、納戸の中、書棚などをかたっぱしから調べている。探し物が部屋の中には見当たらないらしく、一階に降り、玄関を出て、家の裏側にある小屋に行き、鍵を開け、うず高く積まれた荷物を降ろしては開封するという作業を繰り返した。

とうとう諦めたという風で、家の中に戻ってきた。一階はバリアフリーになっていて、居

間風の部屋で夫人のミネリが車椅子に座っていた。ミネリは、カサルよりも十歳ほど年上で、初期段階の痴呆症を患っている――とのことであった。

「三十年前位に設計したユニット住宅の設計のコピーを探しているんだけど、何処にしまったか思い出せないんだ」

「しょうがないわねえ、あなたも呆けが始まったんではないの」

「そんなことはないよ！　俺の頭は未だピンピンしているけど、荷物が多すぎるのと、整理が悪いだけなんだ。痴呆症ではなくて、健忘症かもしれないけどね」とカサルは言って、また自分の部屋に上がっていった。

カサルは、エポカハウスというハウスメーカーの社員であるが、会社に行くのは週に一回程度で、残りの日は家で仕事をしたり、妻の世話をしたりする生活をしていた。ミネリは車椅子の生活になってからというもの、二階のカサルの部屋に顔を出すことがなくなっていた――とのことである。

エポカの世界では二階建てであっても、老人のいる家の多くはエレベーターが備えられているが、カサルの家は若い頃から住んでいる家のため、エレベーターが無いとのことであった。カサルはミネリのために平屋のバリアフリーの家を購入することも考えないわけではなかった。カサルは投資配当のほとんどを自分の会社であるエポカハウス社に投資していたが、長年にわたり会社の経営が思わしくない状態になっていたので、利益配当はおろか給料としての授権配当さえあまりもらっておらず、新しい家の購入資金もなかったのである。

ミネリが二階に上がれた頃はカサルの部屋はそれなりに整理されていたが、ミネリが車椅子の生活になってからは手のつけられないような部屋になってしまった――ということであった。

カサルは机の上にあるモニターで会社からの連絡を見ていた。モニターには、会社存亡の危機とのことで、会社再建のための意見募集や所属部署の会議案内の記事が載っていた。

「ホーウ！　カサルは、若い頃は第一線の設計技師だったけれど、今は若い頃に設計した家の維持修繕部門に属しているんだ」

×　×　×

翌日、カサルは会社に行く準備をしている。

モニターの前で、「ケアセンターをお願いします」というと、画面に女性が現れた。

「ご用件は？」

「今日は留守にしますので、妻の介護をお願いします」

「了解しました、ちょっと待って下さい。……そうですね、今日は近所のオカルさんが空いています」

「初めての人ですね、どんな人ですか？」カサルが訊ねると、画面に顔写真と経歴が表示された。リストされた経歴の横には人の名前らしきものが記載されている。

カサルは経歴に眼をとおしてから、

「了解しました。お願いします」と伝えた。

「経歴の横に載っている人の名前のようなものは何を意味しているんですか？」

「ホホーウ！　経歴を認定した人の名前なんだ。エポカの世界は無資格社会なんだけど、資格の替わりに経歴がものをいう社会なっている。個人の経歴は虚偽の申告を防ぐため、他の人に経歴を認定してもらう必要があるんだ」

「経歴を認定する人はどのようにして決めるんですか？」

「ホーウ！　自分の経歴を知っている人に依頼して認定してもらうのさ」

「認定した人が、嘘の認定することってないんですか？」

「ホーウ！　そうなれば、認定した人の信用がなくなるだけさ。罰則が適用される場合もあるよ。さっきの認定者のリストにはリンクが張られていて、認定者がどのような人かも調べることができるようになっている」

「ふーん」

「ホホーウ！　高度な介護サービスが必要でない場合には、近所の人の方がすぐに駆けつけられる重宝さがあるからね。健康な老人が病気の老人を介護するケースも多い。いわゆる老々介護ってやつだな。しかしこのようなことは老人介護に限ったことはなく、身障者、赤ん坊、普通の大人も含めての話なのさ」

「ぼくらの世界では、介護ロボットなんてものを開発している会社もあって……未だ、実

用化されているとはいえないようだけど……エポカの世界には無いんですか？」

「ホッ、ホーウ！　もちろんあるさ。アンドロイドやロボットで事足りる場合には、そうしている人も大勢いるよ。けれど、話し相手になってやるとか、心のケアも必要だよね。ということで、アンドロイドによる介護と役割分担しているわけさ」

×　×　×

カサルはオートキャブという自動運転の車に乗って、シノラマ市の中心部にある会社――エポカハウス社――に向かった。

エポカハウス社は老舗のハウスメーカーであるが、同業他社との競争に晒されて年々業績が悪化している。市場ニーズに合わない旧態依然としたユニット住宅を販売したり、賃貸サービスをしたりしていることが原因で、企業としての業績がすっかり低迷してしまったのである。

ハウスメーカーにはユニット住宅の他に、趣味の手作り住宅、移動式住宅、中心市街地などの共同住宅や海面都市の住宅製造会社などがあるとのことであった。

カサルは、所属部門である維持修繕部の部屋に入って適当な机に座った。

「ホーウ！　エポカの会社では、一般に個人の机は無いんだ。社員の多くは会社の事務所で仕事をしているわけではないからね。空いている机のどれを利用してもよいことになっている」

カサルの本来の希望は企画部門での活動であったが、妻の介護のことも考えて時間的余裕のある仕事――昔設計したユニット住宅の維持・修繕に関する相談――をしているとのことであった。

定刻近くになって会議室に入ると、二十人ほどが集まっていて、若いものから老人まで年齢はまちまちであった。部屋の正面には部門長のヘルムスが構えている。このヘルムスは八十歳台とのことであった。

やがて、ヘルムスが会社の詳細な経営状況を説明し、

「このままでは会社が立ち行かなくなるので、製造コストの削減、販売促進、売れる商品の開発、他社への吸収合併など所属部署の問題に限らず何でもよいから一カ月以内に、会社の再建策について知恵を絞って提案してもらいたい」と訴えた。

ヘルムスは説明を終えたあとで、

「何か、質問はありませんか？」と言った。

すると若い社員が発言した。

「エポカの世界では、会社は人の役に立つ活動をするためにあるので、会社の存続自体が目的では無いはずですよね。ヘルムスさんの説明は、会社の存在意義についての説明がありませんでしたが、存在意義の無くなった会社は消えて無くなってもしかたないんではないですか」

「会社の存在意義が薄れつつあるから、経営危機に陥っているわけです。しかし、あなたもこの会社を辞めずに社員でいるということは、少しはこの会社の存在意義を認めているからですよね。……ですから、会社の存在意義を大きくするための提案をして欲しいわけです」

『存在意義』ってどのような意味なんですか？」

「ホホーウ！　この場合には、社会の役にたっているかどうかという意味だよ」

「それと、ぼくらの社会では会社が経営危機になると決まって『リストラ』という言葉を聞くんだけれど、これらのことはリストラと関係あるんですか？」

「ホホーウ！　カズマの世界でいうリストラは、本来の意味の一部である『人員整理』と同じ意味で使用されているようだね。この『人員整理』を意味しているのだとしたら、エポカの世界にリストラは無いよ」

「……ん、でも多くの人を抱えたままだと、人件費だけでも大変になるんじゃないの」

「ホホーウ！　給料水準があまり変わらなければ確かにそのとおりだよね。けれど給料水準は会社の利益から配分されるものなので、利益が少なくなればどんどん給料は下がっていく。給料が下がっても、従業員はGバンクからの『基本配当』の支給制度があるから生活には支障ない」

「給料が少なくても従業員は我慢しているんですか？」

「ホホーウ！　我慢できないと思う人は、当然会社を辞めていくことになるけれど、会社

側からは『人員整理』をできないことになっている」

「会社側で、社員の首を切ることができないということは、社員の採用でも同じなんですか？　つまり、会社に入りたい人は誰でも入れるということなんですけど」

「ホホ、ホホーウ！　そのとおりなんだ。但し、入社しても『活動』している社員から『活動』を頼まれたり、『活動』を評価してもらえなければ給料は貰えない。だからそのような無給社員は、カズマの世界流にいえば、自宅待機社員ということになるかな。そういうわけで就職と失業の境界もない。カズマの世界でも、国によっては誰でも大学に入れるけれど、単位を取れるか否か、卒業できるか否かは本人の勉強次第というのと似ているかな」

×　×　×

カサルは困ったことになったという風な顔も見せず、家に戻った。

ドアを開けて居間に入ると、ミネリと一緒に介護ヘルパーのオカルがいた。

「おかえりなさい」

「ありがとうございました。助かりました」

「ミネリ、食事はしたのかな？」

「してないわよ。でもお腹は空いていなけれど」

すると、オカルがカサルに近づいてきて、耳打ちした。

「散歩で外出した時に、ついでにレストランで食事を済ませましたよ」

「そうでしたか」カサルも小声で返事した。

「それでは、今日はこれで帰ることにします」とオカルは言って、帰っていった。
「会社に行ってきたのかしら」
「そうなんだけど。このままいくと会社が倒産するかもしれないようだよ。それで、会社の再建策を社員一同考えてみて下さいということだったよ」
「おやまあ！　大変なことねぇ～」
「そうだねえ……長年活動してきた会社だからねぇ……無くなると思うと寂しくなるな」
そう言ってから、カサルは二階に上がっていった。相変わらずの乱雑な部屋であった。
会社が倒産するかもしれないんじゃ、資料を探してもしょうがないか。いずれにしても、いい加減にこの部屋も何とかしなければならないな。まるで物置の中に住んでいるようになってしまったし……家具を配置換えして、デッドスペースを無くす方がいいかな……だけど家具の移動は大変だな……今更二階のものを一階に降ろすのも大変だし――と思案してはいるが、部屋を整理しようとする意志は持ち合わせていない様子であった。
カサルは――会社が危ないとは言っても、未だ倒産と決まったわけではないんだから、再建策でも考えてみるとするか――と思って、習慣的にいつものようにモニターの前に座った。
会社の合併などは経営トップの仕事であるし、コスト削減は設計や製造部門の仕事だし、維持管理部門ができることはたかがしれている……自分は何をすればいいんだ――と考えを巡らしはじめた。
そういえば、ヘルムスは「自分の所属部署の問題に限らずなんて」苦し紛れのことを言っ

ていたな……ということは、自分の好きなことでもよいわけだ――と思い直してみた。

カサルが好きなこととは、豊かで快適な住宅について企画したり設計したりすることであったが、最近の市場の動向については疎くなっていたので、売れるものとなるとアイデアがすぐに出てくるわけではなく、自分の部屋のことやミネリのことなどに思いがそれていってしまった。

しばらくして――老人のことなら考えられるかもしれないな……自分自身やミネリのことだから……それに年寄りは人口の割合も高いし、徳の高い人が多いから所得も多いし……狙い目かもしれないな――とカサルは目先を変えることにした。

カサルは、念のため会社の老人向けユニット住宅のカタログなどを見返して、売れない商品の売れない理由から、逆に売れる住宅のアイデアを考えてみようと思案してみたが、売れる商品のヒントは思いつきそうもなかった。

フェイス・ツー・フェイスの情報が一番大切かもしれないな……まずは情報収集でもしてみるか。老人なら友人が大勢いるから、手始めに会社の元の仲間や近所の人達と無駄口でも叩いてみるとしようか――とカサルは当面の方針を考えた。

× × ×

カサルはケアセンターにミネリの介護を任せ、昔の同僚や近所の老人の家々を訪問しては、生活上の不都合などを聴いて回った。昔の同僚の中には体力の衰えから早々に現役を退いて隠居している者もいたが、多くはそれなりに『活動』していた。楽しかった昔の想い出話に

花を咲かせながら一週間かけて分ったことは次のようなことであった。

エレベーターの無い家では、階段の昇り降りが苦になっていること、何十年も同じ家で生活しているとやたらと家財道具が増えて何が何処にあるのか分らなくなっていること、家具の移動は苦痛で何年もしていないこと、家の部屋の中のスペースが無くなってしまったこと、掃除も邪魔物ばかりで面倒になっている――などカサルと同様の不都合を訴える者が多く、自分だけの問題ではないことに気づいた。

キーワードは『多くの家財道具や物の管理』、『広い居室空間の確保』、『エレベーター』であった。カサルは納戸や物置とエレベーターを上手く確保すれば老人のニーズにあった住宅になるのではないかと考えた。

低層住宅のエレベーターはともかく、家財道具の処置が問題になっているとは考えてもみなかった。納戸や物置に関しては『どうでもよいようなもの』と思っていたので、最近の物置や倉庫がどのようなものかを調べて見る必要があるな――とカサルは考えた。

はじめに、最新の住宅用の物置をGネットや展示場に行って調べてみたが、どこにでもあるようなものしか見当たらず、ヒントになりそうなものは何も見出せなかった。

倉庫に関しては大掛かりな代物ばかりで、ほとんど自動化されていた。住宅用にはとても応用できそうには思えなかった。家と一体になったような、自動化されたコンパクトな納戸兼物置のようなものをカサルはイメージしていたのである。

×　×　×

カサルは半月ほど費やして調査したが、新商品のアイデアらしいものは何も思いつかず、手詰まりの状態にあった。カサルはミネリをほっぽり放しにして外出していたので、しばらくは家に留まろうと考え、自宅でミネリの面倒をみる生活に戻った。

そんな折、休日に――もっとも、カサルにとっては毎日が休みのような日々ではあったが――ひ孫夫婦のカビルとタライが息子のルマンを連れてミネリの様子を見に来た。

フーパの説明によると、一人っ子の『奨励』政策のせいで、子孫は枝分かれせず一筋になっていることが多く、超少子高齢化社会だから子供は『貴重品』である。カサルの子供、孫達は遠方にいて、たまたまカビルの家族がカサルの住む町から遠からぬ所に住んでいるということであった。また百六十歳のカサルの年齢の割には玄孫のルマンは幼すぎる。これは、長寿化しているので女性の多くは若い頃の健康な卵子を凍結保存しておき、産みたいときに対外授精して自身の子宮に戻すような出産が多いのためだという。このため出産年齢が二十～三十代に集中することはなく、高齢出産も珍しくはないとのことであった。

「おーじいちゃん、こんにちは。おーばあちゃんの具合を見に来たんだけど」タライが言った。

「特に変わったことはないよ。でも皆の顔を見るのを楽しみにしているから、喜ぶと思う

よ」

ルマンは、やんちゃ盛りの四歳の男の子であった。カビルとタライがミネリと話しをしている間、退屈しのぎにポケットから小さな玩具を取り出して遊んでいる。

しばらくすると、いらいらした様子で玩具を放り出してしまった。玩具は床に散らばった。カサルが眼を向けると１５パズルであった。

「ルマンあきらめちゃだめだよ。おーじいちゃんが教えてあげるよ」とカサルは言って、拾い上げ整理してやった。

ルマンは「本当！」と言って、もう一度１５パズルを手に取った。

カサルは、「５を上に、９を左に、８を下に……」などと言っては逐一指示を出した。やがてゲームは完成した。

「今度はできるだけ自分でやってごらん」と言って、カサルは脇から様子をうかがった。偶然か考えてのことかは分らなかったが、ルマンは並べ替えを完成した。

「ルマン偉い！　よくできた。忘れないうちにもう一度やってみたら」

カサルに褒められて嬉しくなったのか、ルマンは再挑戦し、またまたひとりで完成させた。

孫夫婦は三時間ほどカサルの家で過ごしたあとで、

「これから行くところがあるので、今日はこれで失礼します」と言って帰っていった。

×　　×　　×

孫夫婦が帰ったあと、二階の仕事部屋に戻ったカサルは机に座って、ルマンがパズルを並

べ終えた時の嬉しそうな笑顔を思い出していた。そして、なぜか１５パズルのことが気になった。

翌日、カサルはルマンのために街の繁華街の玩具屋に行くことにした。ルマンが喜びそうな――頭を使うゲーム――を探して廻った。積み木、ジグソーパズルやルービックキューブなどを買うとカサルは家に戻った。

家に戻るとカサルはタライに電話し、

「ルマンが喜びそうな玩具を買ったから、暇な時にルマンをつれて来るように」と告げた。

三日ほどして、タライはルマンを連れてカサルの家に来た。

前回と同様、タライがミネリと話している間、ルマンはカサルの買った玩具に取り組み、カサルがルマンの相手をして一緒に遊ぶことになった。

最初はジグソーパズルや積み木で遊んでいたが、綺麗なルービックキューブを見ると、どうやって遊ぶのかわけも分らず、あちこち押していじった。

「おーじいちゃん、これどうやって遊ぶの」

「これは、押すんじゃなくて、廻して色や柄合わせをするんだ。ほら、こうやって捻ると色と柄が合うだろう」

ルマンはルービックキューブと格闘を始めたが、なかなか思うようには面の色や柄が合わなかった。

「これは、結構難しいかもしれないね！　でも出来るようになったら凄いことだよ。本当

のことというと、おーじいちゃんにもよく分らないんだ」

「なーんだ！」

ルマンはなおも小さな両手でルービックキューブをいじくりまわしていたが、うまくいかなかった。

「そうだね、今度ルマンが来る時までに、おーじいちゃんが出来るようになっておくから……今日はこのくらいにしておいたら」とカサルは言って、ルマンを諦めさせた。

「きっとだよ！　おーじいちゃん」

×　×　×

ルマン達が帰ってから、カサルは早速、ミネリを前にしてルマンとの約束を守るためルービックキューブと悪戦格闘することになった。しかし、六面の絵を合わせることは出来なかった。

夜になり、カサルはミネリを風呂に入れ、ベッドに寝かせてから自分もベッドで横になったが、ルービックキューブのことが気になって、なかなか寝つけなかった。そのうち、１５パズルやルービックキューブだけでなく物置、エレベーター、納戸や押入れ、バリアフリー、車椅子、デッドスペースなど仕事のこともゴッチャになってとりとめも無く頭の中を駆け巡った。なぜかこれらのことが関連しているように思えたのである。

そして、ひとつのアイデアが閃いた。

「そうだ、スライドして、廻せばいいんだ！　エレベーターも同じに扱うことができるぞ

……」とつぶやいた。

カサルは幾度となくこのアイデアを反芻するうちに、遂に睡魔に襲われて眠りについた。

翌朝、カサルはミネリの世話と朝食を済ませると、そそくさと二階に上がって昨夜のアイデアを忘れてなるものかとばかりに、モニターとにらめっこし、音声入力で閃きをコンピュータに書き出した。

昼食後は資料作りに没頭した。夕刻に新商品企画に関するメモをGネットで会社の掲示板に載せ、二日後の会議室の予約をしてから、主な関係部署に会議への自主参加要請を行った。

会議の招集目的は、カサルのアイデアについての意見聴取と技術的アドバイスを求めることであった。

「こんな具合に、部門長の了解も無しに勝手に会議を召集してもよいものないんですか？」

「ホ、ホーウ！　メンバーを指名して出席を求める場合は、メンバーの部門責任者の了解が必要になるけれどね。今回の場合は、不特定多数の興味や関心をもつ社員の参加を求める会議なので、ルール違反ではないんだ。新しいプロジェクトを準備する段階では、こういった会議の召集方法は一般的なことと言えるな」

×　×　×

会議の日、カサルは会議の開始時刻よりもかなり早く会社に着いた。

このため会議室には未だ誰もいなかった。カサルは会議の準備を済ますと、ルービックキ

ューブをポケットから出して時間潰しをした。ルマンとの約束を果たしている暇がなくなってしまったので、時間が空いた時にでもいじってみようとルービックキューブをポケットに入れていたのである。

カサルがルービックキューブに夢中になっていると、元の同僚で営業部門にいるエッカムが、

「ルービックキューブかい。妙なものに興味があるんだね」と声を掛けた。

「やあエッカム、久しぶり。それより、よくきてくれたねぇ。これ、玄孫の宿題でね、未だにうまくいかなくてね。今回の会議テーマのヒントになったもののひとつなんだ」

「へぇ～？　ルービックキューブが会議のネタか」

会議予定時刻になって二十人ほどが集まった。大半が昔のカサルの仲間であり、カサルの情報収集の対象になった友人も多数混じっていた。この外に五人の若者がいた。うち二人は企画部門の所属で、残り三人は無給社員であった。

会議の前に、簡単な自己紹介をすることになった。

若い二人――タリムとサンザ――が企画部門の所属ということだったので、

「上司の指示で、この会議に参加したのですか？」とカサルが訊ねてみると、

「いえ、私達の上司は今回の会社の経営危機に対する諸問題に没頭していて、ぼくたちは勝手にこの会議に参加したんです。『高齢者用物置住宅』という聞いたこともない住宅の開発に関する会議だとのことなので、面白そうだと思ったんです」とタリムが答えた。

無給社員の若者達は、三人とも建築の専門学校を修了したばかりで、建築での本業的な『活動』の経験は無いとのことであった。

「倒産するかも分らない会社の会議に出てきたのはなぜかな？」カサルは三人に質問してみた。

「会社の経営状態が思わしくないということは知っていますが、新しい試みのようなので自分達の出番もあるのではないかなと思ったんです」無給社員のひとりが答えた。

出席者の自己紹介が終わると、カサルは、スクリーンに『高齢者用物置住宅』のコンセプトを映し出し、説明を始めた。『高齢者用物置住宅』のアイデアとは、次のようなものであった。

現在の高齢者住宅の問題

- 階段の昇り降りが苦痛になっている。
- 家財道具が増えて居室の実質スペースが小さくなっている。
- 車椅子での移動の際の障害物が多い。
- 物をどこに仕舞ったか思い出せない。
- 一旦、荷物を納戸や物置にしまいこむと、探したり取り出したりするのが大変になる。

新しい住宅のコンセプト

- 家財道具の移動や配置が労せずにできる。

●階段や段差など老人の歩行の障害や負担になるものがない。
●居室スペースを広くし、廊下などのスペースを省く。
●遊び心のある家とする。

新しい住宅の基本構造

●家と物置が一体化した建物とする。
●物置は多数の自走式ユニットが物置内を上下、左右、前後に移動できる仕組みとする。
●居室からの指示で、このユニットが居室の壁から顔を出す仕組みとする。
●ユニットは食器棚、書棚、納戸、陳列棚などの収容スペースとしての他に、上下左右に動くエレベーターとしも利用できる。
●ユニットは取り出し面を居室に向けるため、回転できる仕組みとする。
●ユニットの回転方式としては、ユニット自体が物置内で回転するものと、ユニット内で置かれたものが回転する方式が考えられる。
●物置をコンパクトなものとするため、ユニットは物置内でルービックキューブのように格納され、ユニットのない幾つかのスペースを利用して１５パズルのように移動し、各部屋に辿りつける仕組みとする。
●物置を建物の何処に置くかについては自由度をもたせ、家のユニット間に挟みこむようなタイプと家の後ろや脇に配置するタイプなどを考える。

● 物置ユニットは、必要に応じて後から増やすことができるようにする。

つまり、物置内の自走ユニットは様々な棚や納戸などに使用することができるので、どのようなユニットを自分の部屋に呼び出すかによって、部屋が居間風になったり、書斎風になったりする。居室の家財道具を様々なユニットに収めることで、居室空間を広くすることができる。自走ユニットは、エレベーターのように垂直方向だけでなく水平方向にも移動できる乗り物としても使用でき、引越しの際に、荷物の移動や整理をスムースに行うことができるメリットもある――とのことであった。

水平方向にも移動できるものをエレベーターと呼ぶのは言葉として正しくないので、カサルは『ムーバー』と呼びなおすことにした。

カサルは高齢者用物置住宅のコンセプトをひととおり説明すると、

「問題は、自走式ユニットの技術的仕組みとコストです。基本的なアイデアはありますが、機械のことについては専門ではないので、この辺のことについてお集まりの皆さんのお知恵を拝借したいと思っている次第です」と言った。

「いっそのこと家全体をフローリングにしておけば、家の全ての部屋がバリアフリー化して移動が自由になりますね」Aが言った。

「それなら家具もすべてキャスター付きのものにすれば、テーブルセットやベッドなども部屋から部屋に移動できるのではないですか」Bが言った。

「そうですね、それも考えられますね。但し、ユニットのサイズが問題になりますが」

「折りたたみ式のテーブルセットやベッドを使えばいいんではないですか」Aが提案した。
「家具を新しく買う場合には、それも可能ですね」
「新築の家だけでなく、販売した住宅や保守サービスを行っている住宅への応用もできるんですかね？　そうすれば市場も大きくなると思うんですが」営業部門のエッカムが質問した。
「当面は、新築の家を対象に考えますが、次の展開としては当然そのようなことになると思います」
「順番を逆にした方がいいんではないですか。先に既存の住宅用の物置を開発し、新築用をあとにするとか」エッカムが提案した。
「おっしゃることはごもっともですが、開発の手順上は新築用が先にならざるをえないと思います。設計部門のゼンダーさんいかがですか」
「そうですね、既存の住宅は種類が多いので、技術的には新築用を先行せざるをえないのではと思いますが、予め既存住宅への応用も視野に入れて、家の改造方法などを考えておくことになるでしょうか」
「自走式ユニットの仕組みはどうですか。ここに示すように、縦横に自走するタイプや縦横のポールにつかまって移動するタイプなどを考えているんですが、コストが大きくなってはしかたないし、消費電力などのランニングコストも問題になると思うんですが」
「ユニットが下がる場合には、エネルギーを蓄えられるようにするとか、ペアのユニット

を上昇させてエネルギー消費を抑えるといった方法は考えられないでしょうか」Cが提案した。

「いずれにしてもこのような仕組みのものは、当社の技術には無いので、倉庫のメーカーなどと提携して開発する必要があるかと思います」ゼンダーが答えた。

「家の中の階段はどうしますか？　必要なくなりますよね」Dが言った。

「確かに階段は不要になるかもしれないけれど、火災などで万が一ムーバーが動作しなくなった際は困るので、緊急時対策として避難用の脱出シュートのようなものを二階以上に設置するのはどうかな」Eが提案した。

「動力源はどのようにしますか。ソーラー発電との組み合わせなども考えておく必要があると思いますが」Fが言った。

「家のサイズは従来の家よりも大きくなるんでしょうか？」Gが質問した。

「従来の収納スペースや物置と代替することになるので、多少大きくなる程度で済むのではと思います」

「物置住宅というのは仮の名前だとは思うんですけれど、もっと言葉の響きのよいネーミングを考えるべきだと思います」エッカムが言った。

といった具合に議論は白熱した。議論が進むにつれて、老人達はすっかり物置住宅を開発するつもりになっていた。出席していた企画部門の若いスタッフ２人は、聞き役に回って議論の内容をメモっていた。無給社員の三人は老人達の議論を興味深げに聞いていた。

議論が佳境に入ったとき、社長のシタールが顔を出した。
皆がドアの方に顔を向け、シタールを見つめた。
「皆さん！　カサル！　遅くなって申しわけない」
「お忙しいのに、わざわざお出で頂きありがとうございます」
「いやいや、責任あるポストを皆様から頂いているにもかかわらず、会社をこんな状態にしてしまって、面目次第もありません。またまた先輩方の知恵をお借りする機会に巡りあえたことを有難く思っています」

「ホ、ホホーウ！　社長のシタールは、昔カサルの部下だったことがあるんだ。会社の再建を託されて半年前に社長になったばかりなんだけれどね」

カサルは、今までの説明と議論の内容をかいつまんでシタールに説明した。
会議の終わりにあたり、カサルは十日程にせまっていた締め切り日に向けて、会社再建策の企画書づくりへの協力を求めた。
企画部門のタリムとサンザは事務局的な役割を分担してもよいと申し出て、企画書づくりの手伝いをすることになった。エッカムは高齢者住宅のニーズについて更に調べてみることを申しでた。ゼンダーは――物置の自走ユニットの仕組みについて、設計部門の若手にアルゴリズムを検討させたり、倉庫会社などにヒアリングさせたりしてみる――と言った。

無給社員のひとりが代表して、「何かお手伝いできそうなことがありましたら、ぼくたち何でも手伝います」と言ったが、誰からも何も頼まれなかったので、えらくしょげ返った。

カサルが「このアイデアに興味があるようだったら、自宅のモニターで注目していて下さい。意見があればいつでも提案して下さい」というと、気を取り直した様子であった。

シタールは「企画書を楽しみにしています」と言って帰っていった。

×　×　×

カサルのアイデアに関する老人達の熱気とは裏腹に、社内の反応は冷ややかなものであった。社内の再建策としては、他社への吸収合併が有望な選択肢になっていたからである。今更、大きな新規投資を必要とする新商品開発などは選択肢としては考えられない――と大多数の社員が考えていた。

多くの社員はカサルの主催する『物置住宅』の集まりを『老人クラブ』扱いした。

カサルの遠隔操縦による指導の下、企画部門のタリムとサンザはエッカムやゼンダーが集めた情報を盛り込み精力的に企画書作りを行った。

自走ユニットの仕組みに関しては、機械メーカーから――エポカ世界の技術をもってすればどうにでもなります。コストも大きくアップすることはないでしょう。必要であれば仕組みの提案書と製造費用の見積りを送りますが――との答えが返ってきた。市場ニーズに関しては、適当な説明資料が無いため反応はいまひとつであったが、カサルの考えたようなニーズは極めて高いことが確かめられた。

こうして、カサル達の企画書は、締め切り日の前日までかかってようやくまとめ上げられた。

×　×　×

カサル達の企画書以外に、提出された会社再建策としては次のようなものがあった。

- 同業のジーハウス社への吸収合併
- 宅地造成、家具製造等の不採算部門の売却
- ユニット住宅製造コストの削減
- 既存住宅のデザインのシェイプアップ

全社員からの提案であるにもかかわらず、吸収合併以外には有力な提案は無かった。

経営陣の多くが、現時点で『高齢者物置住宅』の企画書は会社再建策とはいえないので別扱いにすべきであると考えた。吸収合併を推進する傍ら、大きな投資が必要な新商品開発をすることはできないし、ましてや経営危機に陥っている会社に投資してくれる人などいないとのことであった。

それとともに、『物置住宅』は従来の住宅より多少コストアップになることも問題にされていた。社員の中から『物置住宅』は画一的な間取り、没個性、家の形に自由度が無くなるのではないか――といった批判や懸念があることも問題にされた。

しかし、社長のシタールは――『物置住宅』はことによると画期的な商品になるかもしれない。新しいアイデアは既存の考えに捕らわれている人には理解できないものだし、新しい

ものとなるとその可能性よりも『無理』な点ばかりを見つけようとする。批判することが賢者の証しとでもいわんばかりで、失敗でもしようものならそれ見たことかとしたり顔をする。前世よりも遥かに冒険がし易くなったというのに、少しは前世の企業家精神でも見習って欲しいものだ。こんな保守性がこの会社を沈滞させてしまったのだ――と思っていた。

「合併吸収の交渉を行う前に暫しの猶予を貰えないだろうか。我が社の使命はエポカ世界の人々に喜ばれる住宅を供給することであるはずです。念のため『物置住宅』について消費者の反応と投資家の反応を詳しく調査して見たいんです」と経営会議の席でシタールが言った。

「合併後に、『物置住宅』の商品開発を提案してもよいのではありませんか」財務部門の役員が言った。

「合併後は、先方の経営陣がどう判断するか分りません。それと、なによりも当社の社員に働き甲斐をもたせ、自らの手で事業を進めて欲しいと思っているんです」とシタールは経営幹部をなんとか説き伏せた。

×　×　×

かくして合併吸収の交渉はしばらく見合わせることとし、『高齢者用物置住宅』の企画について、消費者と投資家の反応を見るためGネットに、『物置住宅』の目的、仕組み、価格、既存住宅への応用性などについて掲載するとともに、エポカハウス社の住宅の居住世帯の全てに対しアンケートを実施することとなった。

「企画段階のものを世の中に発表したら、せっかく考えたアイデアをライバル会社が横取りしてしまうんではないですか？　こんな場合、特許はどうなるんですか」

「ホッ、ホーウ！　エポカの世界にも知的所有権はあるけれど、特許庁に出願したり審査を受けたりといった手続きは要らない。Ｇネットに公表すれば、誰が何時考えたアイデアであることが証明できるので、無断でアイデアを横取りすれば直ちにそのことが分り、ペナルティが課されることになる」

「今の説明とは直接関係はないんですが、特許や企業秘密などによる生き残りを掛けた競争があるぼくらの世界と、何でも情報公開してしまう秘密の無いエポカの世界とでは、どちらの方が技術の進歩が速いんですか？」

「ホウ、ホホーウ！　難しい質問だねぇ。たぶん、カズマの世界の方が進歩は速いと思うよ……生きるか死ぬかの競争があるからね。でも技術進歩が速い社会イコール幸福な社会ではないからねぇ～」

エポカハウス社の住宅に住む高齢者世帯の反応は、予想どおりまずまずであったが、イメージが今ひとつ湧かないので、実物を見てみたいという多くの意見が寄せられた。

予想外なのは、ライバル会社の反応であった。ライバル会社数社が『物置住宅』構想について関心を寄せ、エポカハウス社との合併の話に乗りたいと申し出てきた。

先見の明がある会社は目ざといものだな――とシタールは思った。

そうこうするうちにGネット上で多くの消費者が興味を示し、マスコミも『物置住宅』のコンセプトを紹介するようになった。

新規事業を立ち上げるには、何よりも投資家の反応が重要であったが、投資家の多くは経営危機に陥っているエポカハウス社の苦し紛れの『企画』として見た。

しかし、高齢者住宅としての市場ニーズにマッチした企画であるとの評価の高まりに合わせて、投資家の反応は好転し、『物置住宅』事業を立ち上げるのであれば是非投資させて頂きたいとの意見が多数寄せられるようになった。特に高齢者からの圧倒的支持を得た。

×　×　×

少なからぬ投資を期待できそうな反応であったため、経営幹部は渋々シタールの意見に従い、吸収合併の話を一旦棚上げすることにした。そして、『高齢者物置住宅』事業に着手するため、プロジェクトチームを発足させることになった。

『高齢者物置住宅』はエッカムの提案を受け入れて『ハイパーハウス』と命名された。

「『ハイパー』ってどんな意味なの？」

「ホーウ！　この場合は、自走ユニットが各部屋に『関連づけられた』というような意味になるかな」

会社経営陣の呼びかけで、プロジェクトチームのメンバーを募ることになった。応募してきたのは、カサルの呼びかけに応じて会議に参集したあの『老人クラブ』の人達であった。役員同様に社員の多くは未だに『ハイパーハウス』には懐疑的であり、新たに数人がプロジェクトへの参加申し込みをしてきただけであった。

カサルの推薦で、例の企画部門の２人と無給社員の３人もメンバーに加えられた。ということで、無給社員の３人は有給社員として『活動』することになった。

メンバーの投票によってプロジェクトチームの編成が行われ、カサルがリーダーに選ばれた。

カサルは、妻のミネリの介護ための時間的余裕が無くなるリーダーの役割を望んだわけではないが、カサル自身が仕掛人であったためリーダーを引き受けることになった。カサルはプロジェクトが一段落するまでの間、ミネリの介護のためケアセンターを通じてアンドロイドの介護ヘルパーを借り受けることにした。

カサルは不足する人材を指名し、指名した関連部門の責任者と調整の上でチームに加えた。更にＧネットにも、『ハイパーハウス』開発のための人材募集を行った。

Ｇネットを通じて、機械メーカーやライバル会社の社員もメンバーに加わり、こうしてプロジェクトチームが発足することとなった。

「新しい組織の立ち上げもこんな具合にして行われることが多いんですか？」

「ホ、ホーウ！　そうだね、メンバーの募集や組織の編成はこんなやりかたが多いかな」
「ライバル会社から社員が移動してくることは、特別問題ないんですか？」
「ホ、ホーウ！　カズマの世界では、道義的問題があるのかもしれないけれど、エポカの世界では何の問題ない。エポカでは、複数の職業や勤務先をもっているのが普通のことで、特技を複数の会社で活かしている人も多いんだ。選択の自由が何より重んじられる世界であるからね」
「思い出したんだけど、『アンドロイドの神』の部屋で、『エポカの世界では社長や部長、課長といった役職者も、社員が選挙で選ぶ』と言っていたよね」
「ホーウ！　そのとおりだよ」
「さっき、無給社員を『自宅待機社員』のようなものと言っていたけれど、このような無給社員にも社長や部長などの選挙権があるんですか？　あるとすれば妙なことになりますよねぇ～」
「ホウ、ホホーウ！　よい質問だねぇ～そのとおりだよ、無給社員の方が有給社員より多い場合などは問題になるかな。会社の実情をあまり知らない人達が選挙を左右することになってしまうからね。実は、こういった無給社員には選挙権は無いんだ。それと、社員も選挙に関しては同権ではないんだよ」
「同権ではない！　それってエポカの理念に反しないんですか？」
「ホーウ！　社員としては同権だけれど、選挙権に関しては同権ではないんだ。社内での

社員の貢献度評価に関しては同権だけど、人事に関しては会社内での貢献度、つまり社内での『徳』の大きさに応じた選挙権になっているんだ。選挙の方法については組織独自の方式があるけれどね。だからエポカの理念には反しないんだ。『市長の選挙』の選挙で、ルメル市の選挙に関してルメル市民の選挙権とケネル市民の選挙権が同じでなかったけれど、それと同じような理由だな」

「なんとなく理解できたよ」

「ホーウ！　そうなんだ、会社のことを良く理解している人がより大きな人事権をもっていなければ、会社という組織がうまく機能しないからね」

「ぼくらの世界では株主が会社の役員を選ぶようになっているけれど、エポカの世界ではそうなっていないんですね」

「ホーウ！　そのとおりだよ。エポカの世界では社員の多くが出資者でもあるけれど、社員以外の出資者の方が多いのが一般的だから、投資家が会社の役員を選ぶような仕組みになると、役員は社員の上に君臨することになり、会社は封建的組織になってしまう。但し、監査人は投資家が選ぶことになっている。カズマの社会では会社側で監査人を雇うことになっているけれど、そうなると虚偽の監査が行われ易くなるからね」

プロジェクトチームは活動を開始した。老人パワーはこれまでの人生で築き上げた人的ネットワークをフルに活用したり、巧みな交渉術を駆使したりして大車輪の活躍をした。

そして、エポカハウス社は事業計画をGネットに公表して投資を呼びかけることになった。『授権配当』は高齢者を中心に順調に集まってきた。新型物置装置の製造の受注を当てにした機械メーカー数社からの大口投資などもあった。

財務体質は大幅に改善され、ひとまず経営危機は去った。そして、三カ月後には新規事業を立ち上げるに充分な『授権配当』が確保されることになった。

「ホ、ホーウ！　いつの時代も、ビジネスでは人的ネットワークがものをいったり、会社が勝ち馬に乗ろうとしたりする傾向は変わらないようだね」

「さっき『エポカの世界は借金のできない社会になっています』という説明を受けたんだけど、そうなると新しい事業を行う場合には、ぼくらの世界の会社よりも大きな元手が必要になるんですよね」

「ホーウ！　そのとおりだよ。でも、エポカの世界では皆が『投資配当』や『授権配当』を持っているから、有望そうな事業であれば比較的容易に『資金』を集めることができるんだ」

×　×　×

家の居室部分は、設計・製造時間を短縮するため、従来のユニット住宅の設計変更によって対応することになった。プロジェクトの発足後、二カ月を経てコアとなる自走ユニットの『物置』の設計も完了した。

試作品の『物置』は、家の中央に置くタイプと家の背面や側面に置くタイプを用意することになった。ユニット住宅部分はエポカハウス社の工場で製造することになり、『物置』については機械メーカーに試作品を発注した。

こうして、プロジェクトチーム発足後半年で試作品が完成し、展示場に陳列される運びとなった。展示場には、『ハイパーハウス』との比較のため、従来型ユニットハウスが置かれることになった。

営業部門はGネットでの広報宣伝、マスコミへの働きかけ、エポカハウス社制ユニット住宅購入世帯などへの買い替え促進を行った。

展示された『ハイパーハウス』と従来型ユニットハウスの違いは歴然としていた。

すっきりした空間、明るくなった部屋、自由に取り出せる家財道具など。

マスコミはこの『ハイパーハウス』を大々的にとりあげ、大きな反響を呼んだ。予想外なことに、高齢者世代だけでなく、新築住宅の購入を考えている多くの若い夫婦もこの『ハイパーハウス』に興味を持った。

見学者の反応は――今までのあんな家がこんなふうに片付いてしまうなんて……これなら家の中でダンスが踊れそうね……物の出し入れや移動が楽になるし……家のサイズもそんなに大きくならずに済むんだ――という具合であった。

×　×　×

『ハイパーハウス』の販売開始を迎える段階になったので、プロジェクトチームはその使

命を終了し、チームメンバーは元の所属部署に戻っていった。カサルは維持管理部門ではなく、今後とも想定される『ハイパーハウス』の応用展開のため、企画部門に移動し、相談役として『活動』することになった。

カサルは、年甲斐も無く若いときに無我夢中で仕事に忙殺されていた生活を追体験するはめになっていたが、とにもかくにも毎日のように出勤する生活からようやく解放された。アンドロイドの介護ヘルパーにお引取りを願い、以前のようにミネリの介護を自らの手で行うようになった。

×　　×　　×

エポカハウス社では、半年に一度、社員の業績評価を行っているが、『ハイパーハウス』の販売開始直後がこの年の二回目の業績評価の締め切り日になっていた。

カサルは、自宅のモニターから部下や上司の評価を行っている。

エポカハウス社の業績評価システムは、エポカ社会で一般的に行われているような――自分の所属部署内（複数の所属部署がある人も多い）の全ての人、所属部署とは関係なく特に功績または問題があったと思われる５０人を評価できる――ことになっているとのことであった。

「ホ、ホホーウ！　会社の社員の業績評価は、部下だけでなく上司の働きなども評価する相互評価方式になっている。それと、『市長の選挙』での投票のように、一定期間内に何度で

も評価を変更してもよいことになっていて、締切日に確定されるのさ」

社員にとって自分自身がどのように評価されるかは最大の関心事であり、評価の結果はその後半年の給与に比例することになっているとのことである。

業績評価の締め切り日の翌日、カサルはモニターでエポカハウス社の社員の業績評価結果を検索し、評価の高い順に社員のリストを並び替えてみた。カサルは断トツの評価を得ていた。ハイパーハウスのプロジェクトメンバーも高い評価を受けている。シタール社長は三番で、他の経営幹部は百番以内では見当たらなかった。

「ぼくらの世界の会社では、社長が一番給料……ではなく役員報酬というのかな……を貰っていると思うんですけど、エポカの会社では違うんですね」

「ホホ、ホーウ！　エポカの世界では『役職』というのは『役割』のことを意味している。社長の役割は『会社全体の調整役』のようなもので、特定の役職の人が偉いということではない。平の社員でも、上司より貢献度の大きな者はいくらでもいるよね。偉いというのは、エポカ世界にどれだけ貢献しているかということでしかない。この半年のカサルの働きは、エポカの高齢者に喜ばれるような新しいタイプの住宅を考えつき、その結果として当面の会社の危機を救うことになったわけで、社長よりも誰よりも抜群の『貢献』があったから、カサルが最大の『徳』＝『得』を得るのは当然のことなんだ」

「フーパのいうとおりだと思うけど……ということは、ぼくらの世界の会社では『地位』に報酬を払っていることになりますね」

「ホ、ホホーウ！　だから、エポカの会社では、歳をとったからといって自分が管理職に向いていないと思えばスタッフのままでいたりする。それで給与格差がかなり大きくなる場合もある。『貢献度』というのは人によって全然違うから、当然そうなる。極少ない給料しか貰っていない社員も大勢いるし、さっきの話しのように無給社員は給与がゼロなんだ。でも、最低生活は『基本配当』で保障されているからね」

「給与の少ない人は劣等感をもったりしないんですか？」

「ホーウ！　評価が低くてもよいと思っている人は少ないよ。誰でも、自分がもっと活躍できるように努力したり、もっと活躍できそうな分野を探したりするのはカズマの世界と変わりはないのさ」

×　×　×

いよいよ、『ハイパーハウス』の売り出しと賃貸が開始されることになった。当面は、新築住宅が対象になった。

「エポカの世界は借金のない社会のようだから、住宅を買う場合、ぼくの家で払っているような住宅ローンなんてものはエポカ世界にはないんですよね」

「ホーウ！　そのとおりだよ。カズマの世界でも若いうちは賃貸住宅に住み、貯金がある

程度貯まってから新築住宅を買うようになるのと同じだよ。借金をしないだけさ」

ハイパーハウスは売り出しと同時に完売し、生産が追いつかない状況になった。このため直ちに生産力の増強を図ることになった。

販売後半年ほどして、従来型ユニット住宅を『ハイパーハウス』に改造するための部材が生産され、エポカハウス社制の既存ユニット住宅をハイパーハウスに改造できるようになると、売り上げはうなぎ上りに増加した。

一年後には、またまたカサルのアドバイスの下で、若いカップル向けバージョンや単身者用バージョンも開発され、販売されるようになった。

こうして、二年後、倒産寸前のエポカハウス社は一躍優良会社になった。

×　×　×

カサルの家はほったらかしで、相変わらず家全体が物置のようであった。会社がすっかり軌道に乗り、カサルには時間的余裕も出てきた。エポカハウス社の業績が改善したので、カサルは『投資家としての配当』と『社員の業績評価による給与』により、大きな『授権配当』を手にすることができた。このため、カサルは自宅をハイパーハウスにすることにした。

住み慣れた家でもあり、ミネリが新しい家では嫌がる――と考え、改造によってハイパーハウスにすることにした。

カサルは、家のユニット間に物置を挟み込む方式を選択した。採光を犠牲にしないため、

これまでの部屋の壁に物置の取り出し口を配置し、ドアの部分をムーバーの出入り口に置き換えることにした。このため居室と物置の配置は図のようになり、廊下の無い部屋と物置だけの家になった。

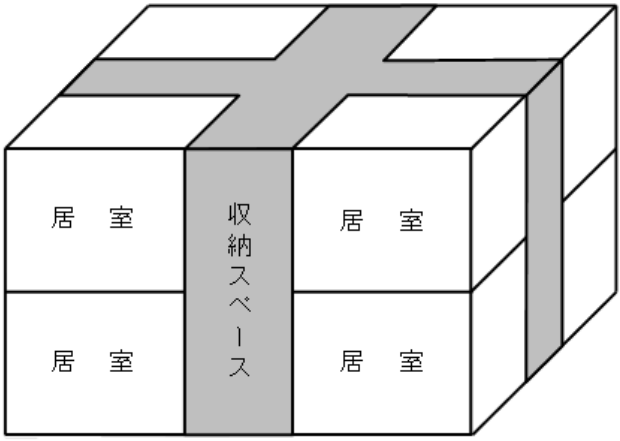
家の改造のためには、住宅のユニットを四方に少しずつ移動する必要があったが、ユニット住宅なので簡単に移動することができた。

家の改造の前に、一時、保管倉庫に部屋の荷物や家具類を預ける必要があったが、これがカサルにとって一番の難題であった。カサルはよる年波には勝てず肉体的体力は若い頃に較べてかなり衰えていたので、荷物整理の指示は行うことにしたが、詰め込みや荷積みはクーリーセンター（よろず請け負い業）に手伝いをお願いすることにした。

クーリーセンターからは、

「それでは、荷物の移動は〇〇日、元に戻すのは〇〇日とさせて頂きます。ご近所にお住まいの〇〇さんのチームが伺いますので、ご指示を宜しくお願

カサルのハイパーハウス



いします」との返事がきた。
　これとは別に、カサルはショートステイセンターにカサル夫妻の事情と滞在期間などを伝え、工事期間中の仮住まいの斡旋を依頼した。
　ショートステイセンターからは、
「ご近所のキムラーさんご夫妻がお引き受け下さることになりました」との返事がきた。
　キムラー夫妻の家はカサルの家から徒歩十分ほどのところにあった。キムラー夫妻は二人とも五十台前半で、夫婦二人で暮らしているが、巣立っていった息子と娘の部屋に旅行者などを泊めて食事時に一緒に話をするのが楽しみであるとのことでもあり、今回はカサル夫妻に提供を申し出たとのことであった。

「介護ヘルパー、引越の手伝だけでなく、宿泊も全てご近所の手伝いで済んでしまうんですね。家の工事中は、一時アパートにでも引っ越すのかと思いましたけど」
「ホホーウ！　エポカの世界では、お互いに助け合うことや人のために尽すことが求められ、それがその人の『得』にもなるので、皆自分のできることをGネットに登録してあるんだ。それと、カズマの世界のように『〇〇の資格がないと〇〇をしてはならない』といった規制がないことも、ご近所の人達だけで対応できてしまう理由かな。こういったご近所での助け合いが、ご近所づきあいの元になっている」
「ご近所って、オープンにして、お互いに利用しあうと結構便利なことがあるもんですね」

「ホーウ！　キムラー夫妻にとっては、今回のようなケースは稀なことで、普段は旅行者を泊めている。こういうことはかなり一般的に行われている。旅行者は、親戚や友人の家に泊まるような感覚で旅先の一般家庭を利用している。そういうことで、旅行先での宿泊場所はホテルや旅館よりもこのような一般家庭の方が多いんだ」

キムラー夫妻は食事の用意やミネリの介護を含め、カサル達を家族同様に扱ってくれた。ミネリはキムラー夫妻から話しかけられることが嬉しいらしく、食事時はいつになく機嫌が良いように見えた。

こうして二週間ほどキムラー夫妻の家で生活しているうちに、カサルの家の改造が完了した。

カサルはキムラー夫妻に礼を述べて、改造なった我が家に引っ越すことになった。

×　×　×

カサルは、前から依頼してあったクーリーセンターの手伝いによって、荷物の積み下ろしや配置を行うことにした。改造後の家では物置のユニットやムーバーが威力を発揮して、スムースに荷物を格納したり移動したりすることができた。

手伝いの人達は口々に、「便利な家ですねぇ～」と連発した。

カサルは積年のゴミ退治を成し遂げたことに勝ち誇ったような気分を味わった。ミネリは部屋が広くなり、車椅子の障害物がなくなり、どの部屋にもムーバーで自由に移動できるよ

うになったことを喜んだ。こうして、ミネリは何年かぶりにカサルの部屋に行くことができた。

荷物の整理が済むと、カサルとミネリは手伝いの人達とともに、取り寄せた夕食でお互いを労った。

夜になり、机以外の家財道具が何も無くなった自分の部屋に戻ったカサルは、忘れていたルマンの宿題を思い出し、ルービックキューブを手に取った。なんのことはなく、あれほど悪戦苦闘しても分らなかったルービックキューブを、あっけなく並びかえることができた。二度三度と試したが、何度やっても簡単に元に戻すことができた。

ルマンに教えてやらなければ――とカサルは思った。

翌日、カサルはひ孫のカビルに電話した。

「家を改造したんだけれど、近いうちにルマンを連れて見に来ないか。それと、ルマンに……約束を忘れていまっているかもしれないけれど……ルービックキューブの並べ方が分ったと伝えてほしいんだ」

その週の休日にカビル、タライとルマンが改造なったカサルの家に来た。ルマンはしばらく見ぬうちにずいぶん背丈が伸びていた。

「おーじいちゃん、おーばあちゃんお元気？　家が一回り大きくなったみたいね。おめでとう！　引越しの手伝いもしないでごめんね」タライが挨拶した。

元の居間に来て、カビルが言った。

「家財道具、どうしたの？　無くなっちゃったの？」
「そう、私の目の前からすっかりなくなっちゃったの」ミネリが言った。
「飾り棚がそこにあるけど」
「それは分るけど、他のものは？」
「たまたま、飾り棚になっているだけなんだ。そこの飾り棚の壁はいろんなものに変身できるようになっているんだよ」
怪訝な顔をしているカビルに、カサルはハイパーハウスの仕組みを簡単に説明し、物置ユニットの呼び出し方法を解説した。そして次々に壁から納戸や書棚、食器棚、テーブル、ベッドなどを取り寄せて見せた。
「おもしろ～ぃ！　それにずいぶん便利ね」タライが言った。
「この赤いランプは何？」カビルが質問した。
「使用中の物置ユニットさ。使っているものは移動できないことが分るようになっているんだ」
カビルは二階を見てみようと元のドアの所にいったが、廊下がなくてエレベーター風になっているのに気がついた。
「あれぇ～！　廊下なくなっちゃったの？」カビルが驚いたように言った。
「この家には廊下も階段も無いんだ。部屋から部屋への移動はこのムーバーを使うようになっている。ムーバーの中に家の見取り図が貼ってあるだろう。現在の部屋の位置が黄色ラ

ンプなんだ。自分の行きたい部屋を指で押すと緑色になる。そうすると自動的にドアが閉まって、その部屋に行けるようになっているんだよ」

「階段が無いと、万が一、火事などでムーバーが故障したとき危険ではないんですか？」

心配には及ばないよという風にカサルが言った。

「階段は、いざというときは年寄りにとっては危険な代物なんだ。それで、念のため二階の部屋には脱出シュートを設置してあるよ」

カビルはムーバーでルマンと一緒に他の部屋に行き、しばらくしてから戻って来た。

「部屋がみんなすっきりして、広く明るくなりましたねぇ……」

「ルマンは何処にいったの？」

「面白がってムーバーを乗り回して、あちこちの部屋を覗いて回っているみたいですよ」

今度は、タライがムーバーに乗って部屋巡りに出かけた。

その後しばらくして、ようやくタライがルマンを連れて居間に戻って来た。

「この家、『ハイパーハウス』っていうんでしょう。ニュースで見たことあるんだけど、おーじいちゃんの会社で開発した家なんだってね。誰が考え出したの？」

「この私なんだけど」照れくさそうにカサルが言った。

カビルとタライは一緒に、「えぇー！　まさかぁ？」と言った。

「本当だよ。私が開発のリーダーだったんだ」念を押すようにカサルが言った。

「ルマン、聞いた！　この家、おーじいちゃんが発明したんだって」カビルが言った。

「ふーん。そうだね……おもしろい家だね」玩具に熱中しているルマンは素っ気無い返事をした。
「凄～いことなんだよ！」
「ふーん」相変わらずルマンは素っ気無い反応であった。
「実は、ルマンがこの家の仕組みを教えてくれたようなものなんだ」
「どういうこと？」
「ルマンと二年ほど前に遊んだ１５パズルと、このルービックキューブがヒントになったのさ」
玩具をいじっていたルマンは、『ルービックキューブ』の名を耳にすると思い出したかのように、
「ルービックキューブ分ったんだって！　教えて」とカサルにせがんだ。ルマンは２年前の約束をしっかり覚えていた。
カサルはルービックキューブを取ってくると、
「ほら……こうして……こう廻して……こうやって……こういうふうするんだ」と並べ方をルマンに実演して見せた。
「凄～い！　おーじいちゃんって天才だね！」ルマンは目を輝かせて言った。
こんなやりとりの後、皆で一緒に食事をして団欒した。食事後にカビル達は帰っていった。
カサルは、カビル達が帰った夜、孫夫婦が帰ったからということでもなく、何か侘しい気

持ちになった。他人の家にいるような気がした。スッキリし過ぎて心の中までがらんどうになったような気分になり、以前のゴミ箱のような部屋が懐かしくなった。

「思えば、あのゴミ達は自分の身体の一部のようなものであったなぁ……」と述懐した。

ここで、ホログラフィは消えていった。

「綺麗になったら、汚かった家が懐かしくなった――なんてこともあるんですね」

「ホ、ホホーウ！　そうだねぇ。綺麗過ぎる町とか、几帳面すぎる人とか、行き届きすぎた配慮とか、きちんとしすぎていることは返って居心地を悪くするものかもしれないね」

「それよりも、会社の仕組みがぼくらの世界とは全然違うのが驚きだな。こんな会社があれば、お父さんは凄く喜ぶだろうな」

第七の部屋　魔女とピエロ

「ホー、ホホーウ！　今度は男女関係や芸術を巡っての話なんだ。カズマにはちょっと刺激的なシーンがあるかもしれないけど」
「刺激的なシーン！　そんなもの子供にみせていいの？」
「ホーウ！　エポカの世界では問題ないんだがねぇ。エポカの世界では大人はＯＫだけど、子供の場合はＮＯということはないんでね」
「男女関係というのは、エポカの世界とぼくらの世界で違っているの？」
「ホホーウ！　そうだね……女性が経済的に自立できるようになると、離婚率が高くなる傾向があるかな。配当システムによって、妻が夫に養われるということがなくなり、子供の養育によっても収入を得ることができるので、経済的理由から好きでなくなった夫と夫婦生活を続けるとか、夫の財産目当てに離婚せずにいるという状態から解放されているからね。離婚は夫婦の一方または双方を不幸な結婚から救済するという面もあるけれど、夫婦の仲違いや離婚は子供にとっては不幸なことであるし、なにより夫婦にとっても好ましいことではないな。それに『不老長寿』での話にあったように一人っ子の『奨励』政策なんてものもあ

るので、子供がいる場合には離婚・再婚に関して慎重にならざるをえないんだ」

「普通の状態であれば、豊かになって選択の自由も大きくなったのだから離婚率が高くなるんでしょうけれど、子供がいるとブレーキがかかるんですね。子はかすがいなんて話はエポカではないのかと思いましたけど」

「ホーウ！　このため、恋人や結婚相手探し、結婚前の相性診断、離婚相談などのカウンセリングが重要になった。エポカの世界には、男女関係についての巨大なデータベースがあって、統計的にどのような男女の組み合わせが上手くいき、どのような組み合わせの場合に破綻する確率が高いかを調べることができるようになっている。カウンセラーはこのデータベースと人工知能の男女関係診断システムを用いて相談に当たっているわけだ」

「でも、自由な社会だから恋愛結婚が多いんでしょう」

「ホッ、ホホーウ！　そうなんだけど、その恋愛結婚ってものが一番の問題かな。恋愛結婚は見合い結婚よりも離婚率が遥かに高いんだよ」

「へーえ！　エポカのような世界には、見合い結婚なんてものは無いのかと思ったけど」

「ホーウ！　そうだね……恋もしないで人工知能頼みで結婚したら、青春もなにもあったものではないので、恋愛結婚が多いのは当然だよね。でも、エポカの世界にも男女間の駆け引きが苦手な人や嫌いな人も大勢いるんだ。このような恋愛ドラマが嫌いな人にとっては好都合なシステムなのさ。何しろ、世界中から最適な相手を探してくれるからね。けれど、やっぱり初婚の場合は恋愛結婚が多くて、恋愛結婚に失敗したあとで再婚相手探しのためにこ

のシステムを利用する人が多い」

「そうだろうねぇ」

「ホーウ！　当然、望みを低くすれば候補者が多くなるけれど、顔かたちなどで高望みすれば候補者は絞られて、強引に相手を口説いて結婚した場合には、相性を犠牲にしたりすることになるので、当然、離婚の確率が高くなる。お任せコースの『最適相性』だけを条件とすれば最適の相性の相手が見つかるんだけれど、システムにお任せしますなんて人は、そうそうはいないからねぇ」

「結婚相手探しではなくて、結婚や離婚そのものについても何かぼくらの世界との違いがあるんですか？」

「ホッ、ホホーウ！　そうだね……カズマの世界では、結婚は遺産などの財産相続の問題と絡んでいるので役所に届出が必要なんだろうけど、エポカの世界では遺産などの財産相続が無いので役所への届出は必要ない。『結婚』は本人たちの合意と宣言に基づいているのは当然のことだけど、『離婚』の場合は夫婦のいずれか一方の宣言によって、直ちに離婚したものと見なされる。もちろんこの場合も役所に届けたりする必要は無い」

「すると結婚と同棲とは同じ意味になるんですか？」

「ホホーウ！　役所への届出が不要なので、結婚と同棲の定義が違ってくるけれど、本人たちが結婚宣言しない状態が同棲、結婚宣言した状態が結婚ということになるかな」

「そうすると、離婚と別居も同じように解釈すればいいんだよね」

「ホホーウ！　そのとおりさ」
「子供の姓はどうなるの？」
「ホホーウ！　子供は両親のどちらの姓を名乗ってもいいんだけれど、一般には男の子は父親の姓を名乗り、女の子は母親の姓を名乗ることが多いかな。大きくなって、父親の姓を捨てて母親の姓に替えるなんてこともあるけれどね」
「生まれた子供の出生届出は必要なんですよね」
「ホホーウ！　それも必要ない。というのは、生まれた時にＤＮＡを調べられ、両親のＤＮＡと照合して確認し、医師がＧネットのデータベースに登録するようになっているからなんだ。名前の登録は、両親が行う必要はあるけれどね」
「他に何か変わっていることはないんですか？」
「ホーウ！　幼い子供の両親が離婚した場合、子供は両親の話合いによってどちらの親が子供を養育するかを決めたり、話し合ってもうまくいかない場合は、カウンセラーと相談したり裁判に持ち込んだりといったことはカズマの世界と変わらないよ。
　そうそう、生みの親と育ての親の呼び方が違うな。エポカの世界では、離婚しても産みの親は『お父さん』であり『お母さん』なんだ。但し、『お父さん』や『お母さん』であっても育ての親でない場合は『父』や『母』と呼ぶのが一般的だね。反対に、育ての親が血縁上の親でない場合は、『お父さん』や『お母さん』とは呼ばずに、『おじさん』、『おばさん』のままなんだ。育ての親に対する親愛の情と『おじさん』や『おばさん』と呼ぶことは別のことな

んだ。

それと、カズマの世界のように結婚したとたんに、義理の両親を無理矢理『お母さん』、『お父さん』と呼ぶような慣習もなく、これまでどおりの呼び方をしている。そもそも『義理の親』などという言葉は無い。

結婚式もだいぶ違うかな。カズマの世界の結婚式は財産の相続権などのこともあって神聖な儀式として扱われて誓いを立て、社会的地位などに基づく席が設定された披露宴などというものが行われているようだけれど、エポカ世界では結婚祝賀会のようなもので親類や仲間に祝ってもらうだけだよ」

×　×　×

ひととおりの説明をフーパから受けると、カズマは七番目の部屋のドアを開けた。

部屋の中央にある大きなホログラフィがアトリエ風の部屋を映している。

部屋にはアキムという四次元アートの芸術家がいた。

「四次元アートってどんな芸術なんですか？」

「ホーウ！　人工知能を駆使して作成する四次元芸術のことで、動く立体絵画のようなものさ、カズマの世界のコンピュータグラフィックスによる芸術のようなものだと思えばいいかな。違う点は、ホログラフィにして展示することだな」

「音楽は無いんですか？」

「音楽や匂いを加えてもいいんだけれど、オプションなんだ。コンペでは除いているけれどね」

アキムは男女問題相談センターのバンスという人物からのメールを見ていた。

メールの内容は――男女問題相談センターは、エポカの世界で多くの男女が連れ添って仲良く暮らせるように、また離婚に伴う子供たちの不幸を少しでも減らせるように願って活動をしています。今回、アキムさんはジェニファさんから離婚宣告されたとのことですが、どのような事情で離婚されたのか、お聞かせ願いませんでしょうか。離婚の原因を知ることによって、エポカ世界の男女関係をより円満なものにすることができますので――といったような趣旨のものであった。

× × ×

ホログラフィは男女問題相談センターという事務所に替わった。

アキムが男女問題相談センターのバンスを訪ねていくと、離婚宣言した元の妻のジェニファがカウンセリングルームに座っていた。

「あなたも来たんですか」

「エポカ世界の夫婦が幸せになれるように協力して下さいということだったので、来ないわけにはいかないだろう」

二人が顔を揃えると間もなく、五十歳くらいに見える柔和な顔の男が現れ、

「お忙しいところをお出で頂いてありがとうございます。お二人にメールを差し上げたバンスです」と挨拶してから、次のように話しだした。

「このセンターでは、結婚相手探しのお手伝い、結婚相手の相性診断、離婚の調停、離婚原因調査など男女間のすべての問題を扱っています。通常は、相談したい方々がお出でになる所ですが、離婚したばかりの方が相談に来られることはあまりありません。けれども、離婚原因調査はエポカ世界の人々の幸せのためには不可欠なことですので、こちらからお願いしている次第です」

「趣旨は承知しています」アキムが返事した。

「さっそくで申しわけありませんが、こちらのふたつのモニターでアンケートに答えて頂けませんでしょうか。少々時間がかかりますが宜しくお願いします。そのあとで一時間ほど質問させて下さい」

モニターには、既にGネットから収集されたアキムやジェニファの個人情報が記載されていた。

アンケートは、自身の性格、二人の出会いから結婚にいたるまでの経緯、相手の好きな点や嫌いな点、離婚に至った主な原因など多岐にわたるものであった。

二人は一時間ほどしてようやくアンケートに答え終わった。

すると、アンケートに答えている時に姿を消していたバンスが再び姿を現した。

バンスはテーブルを挟んで、二人のアンケート結果を自分のモニターで見ながら、

「お二人とも年齢が三十二才で、子供さんは八歳の女の子……四次元アートの芸術家で……お知り合いになられたのは四次元芸術の先生のアトリエで……ですか。相性は……なるほど」と記載内容を確認した。

そして、バンスは相性分析の結果をグラフなどで示しながら、

「夫婦関係というのは、離婚することになった場合に、原因も含めてどちらに問題があったのかということが難しい場合が多いんですが……離婚宣言はジェニファさんの方からで、アキムさんはジェニファさんとは何とかやっていけるとお考えのようでしたね。結婚のときモーションを掛けたのもジェニファさんで、アキムさんの方が受け手だったようですね……ということは、ジェニファさんがアキムさんのことを結果として目算違いしたということになりますね。よくあるケースですよ」と言った。

ジェニファは――自分に原因と結果の責任があるようないい方をされた――と思ったのか、むっとした表情に変わった。

「ジェニファさんが、離婚の理由としているのは、『私はアキムを愛しているのに、アキムは愛に答えてくれない。私のことに無関心である』とのことですね。それに対して『アキムさんは自分なりの愛し方でジェニファさんを愛しているが、そのことを理解してくれない』ということですか。ジェニファさん、具体的にはどのようなことで、そう思われたのですか？」

「たとえば、私の誕生日を忘れたり、プレゼントを買ってきたと思ったらイミテーションなんかを買って来たりするんです。逆に、私がプレゼントした靴やカバンなどは、使わない

で放置したりすることがあるんです」

「確かに、仕事にかまけて誕生日を忘れることも何度かありました。イミテーションなどをプレゼントしたのは、それがジェニファに似合うと思ったからです。前世では金やダイヤモンドは高価なものだったのかもしれませんけれど、装身具としては洗練されたイミテーションの方が遥かに美しいと思ったからです。それと、ジェニファからのプレゼントで使わなかった物があるのは、革製品やフォーマルな様式のものが嫌いだったからです。プレゼントするなら相手の好みを確認しておいてくれてもよさそうなものだと思っていたのも事実です。とはいえ、ジェニファの誠意や思いやりには感謝すべきで、その点は大いに反省しています」

「エポカでは、金やダイヤモンドが高価なものではなくなっているんですか？」

「ホーウ！　そうだね、このことは談話室でのエンリケの説明に出てきた使用価値の話を覚えているだろう。前世では、金やダイヤモンドのようなものは高価なものであったようだね。カズマの世界では、山積みされた金塊は交換価値としては途方もない価値をもっているようだけど、使用価値としては工業的なものがあるくらいかな。生活上は無価値……いや、金は比重が大きいから、重石としての使用価値はある。エポカの世界では交換価値だけしかもたないようなものの必要性がなくなったから、金のようなものは一束三文の代物になった。だから、前世の人は、妙なことに、美しいからというよりも、高価なものだからということで装身具にしていたことになる。本物と偽物の金や宝石はちょっと離れた距離からは区別が

つかない、虫メガネや顕微鏡でしか区別できないものに装飾的な美しさの大きな違いなんてものはないのでは」

――金やダイヤモンドって、そういうものでしかないのかなぁ――

「それでも、ジェニファさんはアキムさんの論理的思考や独創力を、アキムさんはジェニファさんの人や家族に対する深い思いやりや気づかいをそれなりに尊敬しているようですが……今もそう思っているのですか？」

「そうです。ジェニファは身の回りのことや、私が病気になった時など実によく尽してくれます」

「でも、離婚するつもりは無いと考えていたようですが、ジェニファさんに対する不満もあったようですね」

『愛してくれない』と連発されると責められているように感じて辛かったですね。それと、ここ数年セックスをジェニファの方から求めてくることが無かったことは、とても寂しかったですね」

――へぇ～！　エポカでは、こんなことを人前で平気でいうんだ――

ジェニファは黙っていた。

「たぶん、私への愛なるものに醒めていたからでしょうね。私もこれ以上嫌われることには閉口だなと思っていました」アキムはジェニファの意を汲んだようないい方をした。

「そうですね、お二人の話を聞いていると、性格の違いが原因だったように思いますね。私は、この仕事を長年しているんですが、貴方たちもご存じのように恋愛結婚よりも見合い結婚の方が遥かに上手くいっているケースが多いんです。

前世と較べてエポカは良い世の中になりました。生活費を得るための売春や生涯売春のような結婚をする必要がなくなり、性愛だけで男女が結びつくようになったと言えるかもしれません。動物は交尾相手を巡って同性と『バトル』したり、異性と『駆け引き』したりしますが、動物も人間も、いつの世も、こと男と女の関係は変ることがないようですね。エポカの世界は博愛主義というけれど、異性を巡っては排他的ですよね。私共がカウンセリングに使用している男女の相性診断システムは、このような面倒臭い『バトル』や『駆け引き』を行わなくても済むようにするためのものでもあるんです。

……ということで、結婚というのは一種の取引のようなものだと思いませんか？　つまり、自分の価値で取引可能な自分の好みの異性という商品を品定めし、実物と付き合って細かな相性をチェックしたりして、双方の価値がバランスすると合意ということになる。つまり取引が成立した状態が結婚ですよね。恋愛の場合は、どうしても先行する感情が相手の商品価値を見誤る傾向があるんです。最後には『愛』ではなく『価値』の方が問題になるんです。

相性も『価値』なんです。それで、男女間に『愛』なんてものが本当にあるのだろうかと疑問に思うようになったんです」

「『愛』なんてものは無いとおっしゃるんですか？」

「疑問の段階ですが…そうですね。結婚は『取引』で、愛はほとんどの場合、性欲のオブラートです」断言するようにバンスが言った。

「カウンセラーとは思えないような説ですね」反発してジェニファが言った。

「そうですね、良くそういわれるんです。でも本当のことではないかと思っています。母性愛は母性本能、性愛は性欲、愛情は欲情です。愛などという言葉は使う必要が無いのです。だれしもが醜いと思っている女性を進んで愛することができますか？　容姿の醜さを上回る価値を認めることができなければ好きにはなれないでしょう。価値が無いと思うものを愛することができますか？」

「でも『欲』だけで『愛』がなかったら、連れ合いに不幸があったような場合、たとえば夫が『不能者』になった場合、妻から捨てられるようになるんじゃありませんか」

「そうですね、インポテンツになったような場合にこそ、『愛』が確かめられるのかもしれませんね。でも、そのような場合は『愛』以前に、その人の人格が問題であると思います。このような場合に離婚するような人格の人とは結婚したくない…ということであれば、やはり品定めをする『取引』になるんではないですか」

なんとか、バンスに『愛』の存在を認めさせようと思ったのか、ジェニファが言った

「可哀想な子供を助けるのは取引ではなく『愛』だと思いますけれど、『友情』だって一種の『愛』ではないですか」

「『愛』は代償を求めないという人が大勢いますが、そんなことはほとんどありません。意識は代償を求めなくても、潜在意識が代償を求めている場合も多いのです。確かに、無償のボランティア活動のようなものは『愛』の一種といえるかもしれませんね。但し、自分自身と取引して『うぬぼれとかおごり』を手にしなければの話ですが。『友情』は暗黙の助けあいや慰めあいという代償、楽しみの共有を期待する取引という要素があるかもしれませんね」

「少々話しに無理があるように思いますけど……それに随分と意地悪な解釈ですね」

「私は、皆さんが『愛』とか『友情』とか呼んでいるものの根拠について話しているつもりなんですけどねぇ」

「『愛』や『友情』の根拠を詮索するなんて失礼なこと、私にはできません」

しばしのジェニファとバンスの意見対立の後に、バンスがぼやくように話し出した。

「長年この仕事をしていて、つくづく結婚相手を紹介するのは、罪作りなことだなと思っています。恋のキューピット役などといえる代物ではないんです。『あなたの価値のレベルはこの程度しかありません、だからこの程度のレベルの相手が妥当なところでしょう』といったことを言うわけですから。持って生まれた皮膚、形状寸法や資質の大部分は変えられませんから本人の責任では無いはずですよね。人の品定めをするなんて……残酷なものですよ！恋愛関係にある人が相談に来られる時は、もっと悲惨ですよ。あばたもえくぼの状態にな

っている人達に、『あなた達の相性は良くないので、結婚しない方がいいかもしれません』なんてことを言えるものではないでしょう。ですが、将来不幸な結末になる確率が高いことが分っているから、一応は言わなければならないんです。すると、『こんなに幸せな私達に、別れたほうがよいなんて惨いことをおっしゃるんですか』なんてことを言われてしまうんです。『少々の相性の違いなんか愛があるから乗り越えられます』と言われるんです。別れてから相談にお出でになる時には『結婚する前に言っていた、あの愛は一体何処に行ってしまったんでしょうね』と言ってやりたくなることもしばしばです。本当に因果な仕事ですよ。

男女の相性診断システムの予測精度はかなり高いんです。しかも、データベースへの登録が増えるに従って、年々精度が高くなってきています。このシステムは、人々の幸福に寄与しているとは思うんですけれど……先のことが分かってしまうなんてことは、ことによると、罪つくりかもしれないし、大きなお世話かもしれませんね。男女間の愛といわれているものが幻想ではないかと考えるようになったのは、このシステムのせいではないかと思うこともあります」

「いわれてみれば、そうかもしれませんねぇ」アキムが同情するかのように言った。

「一寸脱線してしまいましたが、現状では離婚したことが正解のようですね。自分の持って生まれた性格を変えるというのは並大抵のことではできるものではないんです。離婚したばかりで、復縁の可能性をうんぬんするのはおかしな話ですが、でも復縁してうまくいく可能性も無いではありません。お互いに性格を擦り合わせようとする覚悟があれば、ですけど

ね」

「念のためにお訊きします。具体的には、どうしたらうまくいくんですか」

「まずは、今回のように別居してしばらくの間、他人になることです。お互いに妻であり夫であると思わなければ、お互いに尊敬し、節度を弁え、お互いを思いやることができるようになるでしょう。お互いの利点・欠点を充分理解し、包容力を身につけられればの話ですけど。参考までに、アキムさんとジェニファさんのような相性の場合、復縁している割合は二十パーセント程度ですね。何れにしても離婚宣言したのはジェニファさんの方ですから、ジェニファさんが鍵を握っています」

ジェニファは黙って聞いているだけであった。

「お子さんは、ジェニファさんの方で養育することになっていますね」

「アキムは、子供に関して放任主義なんです。幼い子供をこんな人に預けられるものではないと思って、私が養育することにしたんです」

「ところで、相性がピッタリという夫婦は少ないと思うんですけれど、夫婦円満の秘訣といったものはあるんでしょうか」アキムが質問した。

「おっしゃるように、恋愛結婚などの場合には、あとで相性の違いに悩まされることが非常に多いんですけど、相性の違いにもかかわらずうまくいっている夫婦も結構あるものです。参考までに申し上げると次のようなことなんですが。

● 性格の違いや考え方の相違に対して寛容であること

● セックス、愛撫、抱擁、キス、手をつなぐ、会話などのスキンシップに心がけること
● 相手のニーズを理解し、ニーズにあった思いやりに務めること
● 相手の弱点や欠点を非難せず、これらをカバーしてやる心をもつこと
● 日常の瑣末なことで感情的なもののいい方をしないこと

など月並みなことなんですけれど、言葉でいうのは簡単ですが実行するのは難しいことですよねぇ」

バンスは話したあとで思い出したように、アキムに質問した。

「アキムさん！　今言った秘訣ですけれど、できますかね？」

「難しいかもしれませんが、ジェニファさえ良ければ、心がけようとは思いますけれど…」とアキムが話しだすと、ジェニファが、

「あなたに、そんなこと出来っこありませんよ」と決めつけるように言った。

「分りました。やはり現状では無理ですね！」

「そうなんです。アキムには無理なことなんです」

「そうではないんです。ジェニファさんのいい方で、修復できない状態であると思ったのです。この秘訣は２０％でも実行できればＯＫなんです。できるか否かではなく、やろうとする意志が大切で、この秘訣にどちらかが抵抗を感じたり、相手が『出来るはずは無い』と考えたりしているうちは上手くいかないことがこれまでのデータから分っているのです。そ

れと、言葉よりも『感情』が大切なんです。言葉は偽れても感情を偽ることはできないもので、人は言い方や表情に見られる感情に本音を読み取ろうとするものです」

「ぼくらの社会では、離婚というと決まって慰謝料とかが問題になるけれど、そういうことは問題にならないんですか？」

「ホッ、ホーウ！　そんなものは無いよ。エポカの世界では元々夫婦の財布は別々だしね。マイホームを二人が配当を出し合って購入した場合などは、資金提供割合に応じた共有財産になっているんで、これをどうするかといったような問題はあるかな」

×　×　×

ホログラフィは二年後のアキムのアトリエを映し出している。

アキムは離婚後、隣町のクズエ市のアトリエのある住居に移り住んでいた。そこで作品制作の傍ら数人の若い生徒に四次元アートを教えていた。主な収入源は作品の販売代金や作品を気に入った人からの投資ポイントの振り込みであるとのことであり、『発明家』の部屋のハーマン博士の場合と変らないとのことである。

四次元アートの制作は大きなモニターでのコンピュータグラフィック作業のようなものであり、人工知能が作品制作を効率的なものにしていた。

アキムは自身の作品について、ディテールに拘りすぎ、作品がまとまりすぎて、何かもうひとつ殻を破れないでいるように感じていた。

アトリエにはアキムのほかに生徒のサリーがいた。サリーは二十歳の女性であるが、Gネットで見たアキムの作品に憧れて、アキムのアトリエに通うようになったとのことである。サリーの作品は技術的には未熟ではあるが、思いもつかないものを形にしたり、奔放な表現をしたりすることがあって――アキムは、しばしば驚かされることがあった。

アキムはサリーをモデルにし、サリーはアキムをモデルにして四次元アートを制作していた。お互いをモデルにしているといっても、相手のイメージを描いているので、互いに静止しているわけではなかった。時々、アキムはサリーの技術的質問に答えるためにサリーのところに行って助言を与えていた。

アキムは、サリーのことを――飾り気の無い、思いっきり刈り上げたショートカットがとても似合う女の子――と日頃から思っていた。サリーの後ろに回った時には丸く柔らかに膨らんだ臀部に、側面から見た時には白く伸びた素足や熟れた胸に性的欲望を感じていた。

「休憩にしようか」アキムが言った。

サリーは二人分のドリンクとショートケーキを冷蔵庫から取り出してきて、洒落た丸テーブルの上に置いた。

アキムがドリンクを半分ほど飲んだ時、

「先生！　気を悪くなさるかもしれませんけれど、訊いてみたいことがあるんです」サリーが真剣な眼差しで言った。

「私は見当違いの誹謗中傷の類で無い限り気を悪くするなんてことはないけれど」

「誹謗中傷ではありませんが、ことによると『見当違い』のことかもしれませんよ！」
「へえー！　興味あるなぁ～是非訊いてみて下さい」アキムは人ごとのように言った。
「では、思い切って質問します！　先生、私とセックスしてみたいと思ったことありませんか？」
アキムは思わず、手に持っていたショートケーキをカップの中に落としてしまった。
「普通……そういう直接的な訊き方ってのは、しないものじゃないの。たとえば、『私のことどう思っていますか？』とか、『好きですか？』とか、『嫌いですか？』とか」
「私の場合は、こういう切り出し方でいいんです。私には『愛』とかなんとかいうものはよく分らないんで」
「それはともかく、君のようなチャーミングな女性に対して、何も思っていないと言ったら嘘になるね。そうだねぇ～思っているのかもしれないね。でも私の大切な生徒さんだからね」アキムは返答に困って答えた。
「ずいぶん控えめで優等生的な、まだるっこしいおっしゃり方ですね。そうではなくて、生徒であるとかないとかをひとまず置いておいて、私に性的欲情を感じたことはありませんか――ということなんです」皮肉めいた口調でサリーが言った。
問い詰められて、
「正直いえば、いつも感じているよ」とアキムは返事した。
とたんにサリーは笑顔になり悪戯っぽい目をして言った。

「よかったぁ～　先生とは気が合いそうだから、私も先生としてみたかったんです。ホホホ！」

話のあとに、感情表現の言葉をつけるのが彼女の癖であった。

アキムが呆れて黙っていると、

「先生いいでしょう。ネエ、ネエ」とサリーが迫った。

アキムは――ここで『ＮＯ』と言ったらサリーを酷く傷つけることになるし、アキム自身も二年以上ご無沙汰していたことだったので――話しに乗ってもいいかなと、

「ぼくのような歳の男でもよかったら」とウッカリ返事をしてしまった。

アキムは女性に関しては奥手で、自分から好きとはいわずに、相手から好きといわれたときに相手に答えてやる必要を感じて、相手を好きになってやるタイプであった。

「でも、希望があるんです。セックスしている時って人生のうちで最高に快感と幸福を感じられる瞬間でしょう。それで、私……もっと気分を高めるために、芸術的なセックスや動物的なセックスをしてみたいんです」

「芸術的にとか、動物的なとか……いう意味が分らないけど」

「分らなくてもいいわ、私が準備してきて教えてあげるから。今度のレッスンのあとの楽しみにしておいてね」

それから、サリーは愛とセックスに関する自説を雄弁に語りだした。

「ところで、先生！　さっきの話ですけど、男女の間で言われている『愛』って何かおか

しいと思いませんか？　セックスがなければ、男女の間の『愛』なんてものは無いはずですよね。それに『愛』なんて言っていますけど、本当は異性が『欲しい』ということですよね。ということはセックスのできる気が合う相手を探しているのであって、気が合う相手を探すことが目的ではないと思うんですけれど。つまりセックスを成就するために『愛』するのであって、逆では無いことになりますよね。ですから、私は『愛が手段』で『セックスが目的』であると思っているんですけれど。生物学的には絶対そうですよね。人間だけが例外なんてことはないと思うんだな。大脳の発達した人間が、教育による羞恥心から露骨な言葉を避けて、奇麗事として『愛』を語っているだけなんじゃないでしょうか」

アキムは――バンスと似たようなことをいう人もいるものだな――と思いながら、

「『愛』と言っているほうが文学的だからね、ロマンチストからは反発を受けるかもしれないけれど、つきつめるとそのようなものだと思うよ。一緒にいて楽しいかどうかということもあると思うけど、このことを『愛』とは呼べないかもしれないしね」とアキムはサリーの説に同意した。

「やっぱり先生とは気が合いそうだわ！　ニコニコ」

「人は動物的感情とは裏腹に、理性的には愛が目的でセックスが愛の手段と思いたいのかもしれないけどね」

すると、サリーは異議を唱えた。

「先生、逆ではないですか。理性的・論理的に考えればセックスが目的なのであって、『愛』

とかいう言葉を口説きの便法にしているのだと思うのですけれど」
「ぼくは理性を建前、感情を本音の意味で言ったんだけど」
「それならば納得できます」
アキムは――サリーはみかけよりも結構理屈っぽい娘だな――と思った。
こんな愛とセックスに関する会話の後、帰り際にアキムの頬にキスをして、
「それでは、来週を楽しみにしています。バイバーイ！」と言って退出した。
アキムはご馳走のお預けを食ったような気分になった。

×　×　×

翌週のレッスン日に、サリーは一抱えもある道具一式を携えてアトリエにやってきた。
「先生、今日のセックスはペインティングでやりたいと思うんですけれど」
「ぼくの趣味ではないんで、君の自由にするしかないんじゃないの」
サリーはドアをロックし、アトリエの道具を部屋の隅に片づけ、ビニールシートのようなものを部屋一杯に敷き、色とりどりの絵の具の缶と筆を並べた。そして、そそくさと衣服を脱いで全裸になった。
アキムはサリーの白く美しく輝く肌に魅せられた。
「先生もさっさと脱いで！　セッセ、セッセ」
サリーはじれったそうにアキムの衣類を剥いで全裸にさせた。そして、アキムの一物を握り、「可愛い――ぃ！　宜しくね。坊や！」と言った。

アキムの一物はいっぺんに硬直した。

アキムとサリーは、互いの顔や身体に思い思いの絵の具を塗りたくった。

「先生！　肩書きとかプライドとか、教養とか、羞恥心といった邪魔物を全て忘れて下さいね」とサリーは言って、けらけら笑いながらアキムに絡みついた。

抱き合ったままの姿が鏡に写っていたが、その痴態を見てアキムは妙なおかしさがこみあげてきた。なんどもじゃれたり追っかけたりしているうちに、閉じ込められていた動物的な感性が解放されていくような気がした。撫でたり舐めたりしたあとでアキムはこらえきれなくなり、サリーを押し倒して想いを果した。

この場面のホログラフィにはカズマのためにぼかしが入っていた。ぼかしを通してではあったが、カズマは始めてみる生々しい濡れ場に釘付けになって見入った。カチンコチンになったチンポコが、パジャマのようなズボンを思いっきり突き上げていた。

セックスの快感とは別に、子供のように無邪気にふざけあったり、絡みあったりすることがこんなに楽しいものなのか、人はこういうことを痴情というんだろうな――とアキムは思った。

この日以来、サリーはアキムのアトリエのある家に棲みつくことになった。

その後もアトリエでの作業が一段落したあとで、アキムとサリーは手をかえ品をかえ、ア

トリエ、浴室や寝室で、身体にボディシャンプー、オイルやゼリーを塗ったり、レスリング、ダンス、鬼ごっこ、取っ組み合いなどしたりして戯れた。サド・マゾ趣味という類のものとは違う天真爛漫なものであった。修羅場のあと片づけも日課になり、こうして痴情に溺れる日々が続いた。

×　×　×

アキムはグローバル四次元芸術家協会の審査員のひとりであるが、この協会の審査員は百人もいるとのことである。アキムはアトリエの隅で、モニターを見ながら毎年恒例の展覧会に向けた審査をしていた。審査員が出品された作品にどのような評価をしているかが分るようになっていた。評価ポイントの高い順に、様々な賞が与えられることになっているとのことである。アキムは作品を見ながら、順位点と簡単なコメントを書き込む作業をしている。

ひととおりの審査を済ませると、ファルゴンという審査員から『審査員の皆様へ』というメールが入っていることに気がついた。メールの内容は、作品審査の方法に関する改善提案である。内容をひととおり読んだあと、ファルゴンの意見に賛成であったので、『賛成します』と書いて返送した。

「ここ二、三日お忙しそうですね」サリーが後ろから声を掛けた。

「そうなんだよ。審査の締切日が迫っているんだ。今月の二十一日～二十三日に、サブラート市のイベントホールで展覧会があって、そのための審査なんだ。作品はここでも観ることができるけど。でも、会場で友人やいろんなアーティストにも会えるし、並べられた作品

を比較して観るのも面白いもんだ。君も一緒に行くかい」
「もちろんよ、先生と一緒なら何処に行っても楽しいわ。ニコニコ」
「展覧会最終日の翌日に年次総会があるから、サブラート市で泊まることになるけれど。君には年次総会は関係ないだろうから、帰ってもいいし、市内観光でもして暇潰ししていてもいいけど」
「帰りも一緒の方がいいなぁ～。うん」
×　×　×
アキムとサリーは展覧会の最終日の早朝に、クズエ市から乗合飛行機でサブラート市に向かった。昼過ぎには展覧会場に到着した。
ホログラフィはイベントホールを映している。
二人はイベントホールの入り口で会場案内図を貰って場内に入った。作品はジャンル毎に別々の部屋に展示されている。とはいうものの、作品はグローバル四次元芸術家協会のサーバーとGネットを通じて、四次元モニターでホログラフィとして表示されているだけなので、アトリエで観るものと何ら変わるものではなかった。作品は壁に埋め込まれた四次元ボックス中でホログラフィになって、動きながら色や形を変化させていた。
サリーはアキムと手を組み、頭をアキムの肩にもたれるようにして場内を歩いて回った。
アキムは自分と同じジャンルの人物作品のある部屋に入り、予め見て知っていた作品ではあったが時間を掛けて観て回ることにした。

入り口付近の作品にサリーは目を止めて、
「この作品素晴らしいわねぇ……先生もこんなもの作れるよね。でも賞がついていないわね。この作者誰かしら？」と言った。
「新人だよ。ぼくもこの作品には高い評価をしておいたんだけど」
部屋の出口に近づくとアキムの作品が展示されていた。
「流石に先生の作品は素晴らしいわねぇ……それに賞もついているし」
「ぼくは審査員だからね。審査員は大抵の場合、賞を貰えることになっているんだよ」
アキムとサリーは作品の前に並んで、通りすがりの人に記念の写真を撮ってもらった。
アキムの作品付近から受賞者の作品が入り混じって展示されている。
「この作品は大きな賞が付いているけれど、どこがいいのかしら？　私の目にはさえないように見えるけど……先生、分る？」
「なぜ大きな賞がついているかは推察できるよ」アキムは投げやりに答えた。
「流石ですね。プロが観ると作品の良さが分るのね」
「そうではないんだ、君の目が正しいと思うよ！　ぼくが見ても特別よい作品とは見えないからね」
「えー！　どういうことなんですか？」
「人脈だよ。芸術作品の評価は難しいものだよね。客観的評価基準のようなものがないから……基準があれば審査員なんてものは不要になるだろう。ということで、派閥とか師弟関

係とかいった系列や政治的な人脈があると、作品の評価に影響することになるんだ。ぼくの賞だって同じことだよ。ぼくが若い頃に師事していた先生の人脈がある程度ものを言っているはずだよ」

「なんだが、内幕を知るとがっかりしますね」

「エポカの理念のひとつに『権威は人の評価によるが、権威による人の評価は排除する』というのがあるけれど…スレスレではないかな」

「ところで先生！　人物部門の準大賞はありますが、肝心の大賞作品が見当たりませんが？」

「大賞作品はこの部屋の中央の小部屋にあるんだ」

薄明かりの小部屋に入ると、中央の大きなケースの中に浮かんでいるホログラフィがあった。

「綺麗ですねぇ～！　でも作品自体としては、先生のものより特別優れているようには見えませんけれど」

「君の贔屓目じゃないの。ぼく自身は自分の作品にまだまだ満足していないんだ」

×　×　×

展覧会最終日なので、夕方から大ホールで立食パーティを兼ねた恒例の表彰式が行なわれることなっていた。

ホログラフィは大きなホールを映し出している。

会場内の喫茶室などで適当に寛いだりして時間を潰したあとで、アキムとサリーは表彰式会場に向った。表彰式は既に始まっていて、ホールの前面にある大きなスクリーンに部門毎の受賞者の作品が映し出され、受賞者が次々に登壇しては自分の作品を解説したりしている。二人が適当に料理をつまんだり、ワインを手にしたりして場内を歩くうちに、数人が入れ替わりにアキムに声を掛けてきた。アキムの方からも見知った人を見つけると呼び止め、近況などについて会話をした。

そうこうするうちに、アキムはアトリエで審査をしている時にメールを送ってきた審査員のファルゴンに声を掛けられた。

「ぼくの提案に賛成してくれてありがとう！　ことによると明日の年次総会はもめることになるかもしれないけれど、その時は宜しく」

『宜しく』といわれても何の事か、困ることもあるけれど…」とアキムが言おうとすると、ファルゴンはさっさと他の人の所に行ってしまった。

視線を前面のスクリーンの方に向けようとしたとき、見覚えのある顔が目の前に近づいて来た。二年前に別れたというよりも、離婚させられてしまった元の妻のジェニファであった。ジェニファは審査員でもあるミランと連れ立っていた。

「チャーミングなお嬢さんと一緒なんですね」

「ぼくの生徒のサリーだよ」

「そう？　ただの生徒さんのようには見えないけど」ジェニファは皮肉っぽく言った。

「今晩は！　ご活躍のようでなによりですね」ミランは気まずそうにアキムに挨拶した。
「君がミランと友達だなんてちっとも知らなかったよ。それはともかく、ラミエはどう、元気にしているかなぁ～」
「そうねぇ～元気よ。でも最近ずいぶん生意気になってきたわよ。私に意見したりするんだから」
脇でサリーは目を皿のようにしてジェニファを見つめながら、アキムとジェニファの会話を聞いていた。

×　×　×

ホログラフィはホテルを映し出している。
その晩、アキムとサリーは『ハイパーハウス』の話に出てきたような『民宿』ではなく、イベントホールの近くにあるホテルに泊まった。
ホテルの部屋の浴室で、サリーがアキムの背中の汗を流しながら言った。
「元の奥さんて勝気そうな人ね」
「そうかもしれないけれど、思いやりの深い女性でもあるよ」
「そんな人に何で先生は離婚されてしまったの？」
「一言でいえば性格の違いかな。カウンセラーもそう言っていたよ。ぼくの方は鈍感で性格の違いなんて気にならなかったけど、ジェニファにとってはぼくの性格が耐えがたかったようだよ」

「そうねえ、先生は朴訥なところはあるかもしれないけれど、『耐え難い』なんて信じられませんけどねぇ」

「思いやりが深い人や倫理観が強い人は、周囲の多くの人から慕われることになる。しかし、このような人の中には、他人ならば見過ごせても、身近な人に対しては自分と同じような思いやりや倫理観を要求してしまう人もいる。こういう人にとっては、僕のようにいい加減でテキトーな人間は許し難く思えるのかもしれないよ」

「思いやりの深い人は、誰に対しても寛大なのかと思ってましたけど……私にはよく分からないな」

「違うな。他人にも本心は要求したいのだけれど、他人なのでできないのだと思う。だから表面上は寛大にみえるだけかもしれない。それと、初めは小さな違いに思えても、時間が経つに連れて大きな違いであることに気づくこともあるんじゃないかな」

「たとえば？」

「君とぼくの場合も、やがてそうなるかもしれないよ。初めのうちはセックスが多くの『違い』を覆い隠しているけれど……君はセックスを人生の目的のように考えているよね……ぼくは君のそのような考えがあってもいいし、ぼく自身もそう思うところが無いわけではないんだ。この違いは、初めのうちは小さいように思えるかもしれないけれど、時が経つにつれて大きな違いと思うようになることだってあるんではないかな」

「先生、そんな不吉なこといわないでよ！　譬えが悪すぎるわ。ブスー」とサリーは怒っ

た口調で返答した。
「ごめん」とアキムは謝った。
二人は浴槽で、思い直したようにいつものようにじゃれあって楽しんだ。

×　×　×

翌日、サリーは朝からサブラート市の観光名所巡りに出かけ、アキムは昨日と同じグローバル四次元芸術家協会の年次総会の会場に向った。会場は昨日のイベントホールに併設されている千名の収容能力をもつメインのセミナールームである。グローバル四次元芸術家協会の会員総数は五千人ほどであるが、年次総会には毎年二十％の千人程度しか出席しないとのことである。
ホログラフィは芸術家協会の年次総会の会場を映し出している。
総会では、前年度の収支報告、現在の地域別ジャンル別会員数、Gネットを通じて行われた役員選挙による新役員の紹介などの事務的な報告が行われた。そして来期の常設展示作品の紹介、展覧会や技術セミナーなどの開催予定が発表された。
そのあとで、運営方針に関する質疑応答が行われることになっていた。フーパによると、この質疑応答が組織の大問題に発展するとのことであった。
最初に、懇親会の場でアキムに声を掛けたファルゴンが発言を求めた。
「審査員のファルゴンです。私は、常々展覧会などでの作品審査のあり方に疑問をもってまいりました。今回の展覧会の前に、役員および審査員の方全員にアンケートメールを差し

上げていますが、知らない方もいらっしゃるので紹介させて頂きます。
私の主張は、審査対象作品は無記名で審査すること、審査員制度の廃止とこれに替わる全会員による審査の二点です。
この理由は、作品の作者記名は正当な作品評価を妨げていると思うからです。役員や審査員は優れた作品であるなしに拘わらず毎年何らかの賞を与えられています。これは極めて不自然なことです。審査員は師事した先生や指導した生徒の名前と無関係に評価しているといえるでしょうか。皆さんもご存知のように、このグローバル四次元芸術家協会には様々な派閥があり、これが有形無形の力をもっていて、この力が作品評価を歪ませていると思います。それと審査員というものが本当に必要であるかについてもはなはだ疑問です。審査員は一般会員よりも優れた審美眼を持っているということも断言できません。それ以上に、人脈や派閥の影響の方が大きいのではないかと思う次第です。作品は優れていても、派閥が無いために賞を貰えない人もいます。作品は出来不出来だけが評価の対象であるはずです。
アンケートの結果は、私の考えに賛成の方、反対の方、ご返事を頂けなかった方、それぞれ三分の一でした。私の考えに賛成してくれた審査員の方が過半数に満たないからと言って、私の考えが間違っているとは思いません。賛成者の多い少ないではなく、理念の問題です。私の考えが間違っているか否かご議論頂きたくお願いします」
ファルゴンが着席すると場内のあちらこちらから散発的な拍手が起こった。
真っ先に会長が反論を始めた。

「どんな組織にも派閥や系列といったものはあるものだと思います。本会にも派閥があるのは事実ですが、本会はエポカ世界の理念に則り、役員および審査員の全てを会員の選挙で行っています。派閥や系列が悪いものであるかのように聞こえましたが、これらが悪いものと決めつけるのはどうかと思います。先生と生徒がいて、作風が違えば自然に派閥や系列ができます。それと審査員が歪んだ審査を行っているとのことですが。これは甚だ名誉棄損の発言であると思います」

するとファルゴンが挙手し、再発言を求めた。

「誤解があったようなので補足します。私は派閥が全て悪いものであるとは決して申しあげてはおりません。私の発言が審査員に対する名誉棄損の発言であるとのことですが、作品に記名がある現在の方式では、審査員は派閥を意識して審査せざるをえないということを言っているわけです。審査員の上に得体の知れない派閥内の審査のようなものがあるのも事実かと思います」

ファルゴンに「宜しく」といわれたからではないが、会長の発言内容が、皆が知っている暗黙の事実とあまりにも異なっていることに耐えかねて、アキムが挙手した。

「審査員のアキムです。初めにお断りしておきますが、私は只の一度も派閥を意識して審査したことはありません、ですが…」とアキムがいうと会場から笑い声が起こった。

「先ほど、会長がエポカ世界の理念に基づいて選挙が行われているとのことでしたが、それはそのとおりだと思います。しかし、会員そのものが『人脈』なるものによって、少なか

らず系列化されていると思います。私も『派閥』の存在そのものが悪いものであるとは考えていませんが、現在の作品の審査方式を媒介に形成されている『派閥』もあるように思います。ですから、ファルゴンさんがおっしゃったような審査制度になれば、このような『派閥』は作品審査の際に機能しなくなると思います。機能しない『派閥』はその使命を終えて、健全な人間関係だけになると思います。形の上で公正な選挙や評価が行われているか否かではなく、実際に、優れた作品が低い評価を受け、優れているようには思えない作品が高い評価を与えられてるようなことはないか、皆さんは承知のはずです。この歪みの原因がどこにあるかは自明であると思う次第です。

それと、調べれば分ることですが、ファルゴンさんのような審査方式を採用している芸術団体の方が多いのではないかと思います。話は変わりますが、皆さんもご存知のように、芸術作品のオークションなどでは作者名を伏せることにしていますよね。著名な作者でさえもこの方式に賛成しています。作品の価値を作者のネームバリューでなく、芸術性のみで評価されることを望んでいて、こうすることが芸術のためであると考えているからだと思いますが」

アキムの発言が終了すると、ファルゴンは立ち上がって大きな拍手をした。

「へーえ！　エポカのオークションでは、作者名を伏せたりしているんだ。ぼくらの世界では、作者が誰かが最も重要なことみたいだけどね」

「ホーウ！　カズマの世界では芸術性以上に商品価値が問題になっているからだよ。エポカでは資産の相続制度が無くなっているので、芸術作品の資産価値はあまり問題にされなくなったからね。そんなわけで、芸術的価値そのものが重要視されるようになったんだ。ピカソやミロの絵画のすべて芸術性が高いというわけではないはずさ」

「だけど、名前を伏せたりすると、本物にそっくりな贋物にも同じくらいの『芸術性』があるように見えるから、本物の作者は不利益を被ることになるんじゃないの」

「ホッ、ホホウ！　贋作を売る場合は、売値の一定額を著作権料として本物の作者に渡すことになっているんだ」

その後も賛否両論に分かれて、この問題に関する議論が続いた。渦中の人物であるファルゴンは議論の最中になぜか退席し、しばらくしてから戻ってきた。すると直ちに発言を求め、次のように言った。

「私は今回の審査方式に関して、全会員にアンケート調査をして頂くことを考えていましたが、止めにします。私の提案は反対多数で否決される可能性が高いことが分っているからです。アキムさんが言ったように、悪しき『派閥』の存在によって実質的な民主主義の基礎が歪んでいると思います。従って、私は本日をもって本会を脱会し、新たな四次元アートの団体をつくることを宣言します。

つきましては１７時からこのホールの〇〇セミナールームの予約をとっておきましたので、

新しい組織の結成に賛同される方の出席をお願い致します。都合で出席したくてもできない方は、追ってメールでの連絡をお願いします」

ファルゴンの中途退席は会議室の確保のためであった。発言が終了するとファルゴンはさっそうと退席した。

ことの成り行きから、ばらばらと退席するものが現れ、アキムも退席した。

ひな壇に並んだ役員達はあっけにとられた表情をしている。

×　　×　　×

ホログラフィは収容人数が百人くらいのセミナールームを映し出している。

ファルゴンの退席から二時間程経った夕刻に、小さなセミナールームに数十人が集まっている。

ファルゴンが部屋に入ってくると、部屋にいた全員が大きな拍手でファルゴンを歓迎した。

ファルゴンはアキムの顔を見つけると握手を求め、何度も握った手を上下に振りながら、

「きみのお陰で助かったよ！　ありがとう」と言った。

集まったメンバーに役員はひとりもいなかったが、審査員は数名いるとのことであった。

ジェニファと連れ添っていたミランはいなかった。想定されたことではあったが大半が若いアーティストである。

全員が着席すると、出席者名記入用紙を回覧に出してからファルゴンが挨拶した。

「参集された方々に深くお礼申し上げます。私はひとりでも新しい組織を立ち上げるつも

りでおりましたが、当初から数十人の同志にめぐり合えたことを幸運に思っています。私の基本的考えは既にご存知のことと思いますが、とりあえず私が考えている四次元アートの芸術家組織の理念、新芸術家協会設立に向けての基本方針をお示しします……」などとファルゴンは自らの考えをスクリーンに映して説明した。そのあとで、簡単な質疑応答が交わされた。

ファルゴンは戻ってきた出席者リストを見ながら、

「ところで本日は突然のことでしたので、今日か明日帰宅予定の方がほとんどではないかと思います。それで、とりあえず新しい芸術家協会立ち上げまでの期間の体制をつくっておこうと考えています。皆さんからの異論がなければ、私が準備会長、準備会事務局長をアキムさんにお願いしようと思っています。準備会幹事としてはジャンルを考慮して当面、Aさん、Bさん、Cさん……になって頂こうと思っていますがよろしいでしょうか?」と言った。

アキムは突然に準備会事務局長に指名されて戸惑ったが、雰囲気的に断ることができない状況であった。時間がないこともあったが、こうしてファルゴンはかなり強引に当面の役割分担を行った。

その後、連絡網などについての事務的な打ち合わせや当面の行動方針の確認を行って、新しい芸術家協会の設立に向けての決起集会を散会することになった。

いずれにしても、あっというまの出来事であった。

アキムが帰りかけると、ファルゴンが声を掛けてきた。

「一緒に食事でもしていきませんか」
アキムはイベントホールの近くのレストランでファルゴンと食事をしながら、補足的な事務打ち合わせをし、帰り際にこれから始まる大仕事への健闘を労って別れた。

×　×　×

ホログラフィは再びアキムとサリーが宿泊しているホテルを映し出している。
アキムがホテルに戻ると、待ちわびたように、
「ずいぶんおそかったわねぇ～」と言ってサリーが抱きついてきた。
「市内観光はどうだった」
「昔のお寺とか公園などを見て回ったけど、先生と一緒じゃないと面白くないわ」
「こちらは、成り行きでとんでもないことになってしまったんだよ」
「どういうこと？」怪訝な顔をしてサリーが訊き返した。
「芸術家協会を脱会することになって……それから、新しい四次元アートの団体をつくることになって……その準備会の事務局長にされてしまって……作品の制作どころではなくなってしまったんだ」アキムはぼやくように言った。
「うわぁ～なんかおもしろそぉ～！　ワクワク」
「君は能天気でいいよ」
「へぇ～準備会の事務局長さん！　先生が？」サリーは冷やかし半分に言った。
こんな会話のあとで、アキムはことの顛末のあらすじをサリーに言って聞かせた。

すると、サリーは子供を褒めるように、
「えらーい！　おりこうさん！　イーコ、イーコ」と言ってアキムの頭を撫でた。
アキムは――こんな風にジェニファから褒めてもらうようなことはなかったな――と思った。
そのあとで、アキムは浴槽の中でサリーに背中を洗い流してもらいながら、
「ぼくは元々、グローバル四次元芸術家協会のような芸術団体の審査員なんかをする柄ではないと思っている。組織とは関係なく自分で納得のいく作品をつくりたいだけで、人から自分の作品がどう評価されるかなんてこともあまり関心がない。
ところが、ぼくが師事した先生に入れと言われてあの組織に入会し、いつの間にか成り行きで審査員にさせられちゃったんだ。だから師事した先生には済まないと思っているけれど……ファルゴンがいうように審査なんてものは形骸化されていたから……それで、ついついファルゴンの応援演説をしたら、またまた成り行きでこんなことになってしまったんだ」と言い訳をした。
「きみは、イーコトをしたんだから弁解したり、後悔したりしなくてもいいの」サリーは子供をあやすようにアキムを慰めた。
そして、互いにシャンプーを身体中に塗りたくり、絡まりあって遊んだあとでベッドインした。

カズマのチンポコもだいぶ濡れ場に慣れてきた。

「エポカの世界で、芸術家が芸術団体に入って活動する意味って何かあるんですか？」

「ホホーウ！　エポカの世界では芸術作品の価値は、いかに人に感動を与えることができるかであって、芸術団体のお墨付きや仲介業者の値決めとは関係が無いので、Gネットで自分の作品を公開して、芸術品の愛好家に気に入ってもらえればいいだけかもしれない。けれど、誰しも自分の作品の芸術的価値知ってもらいたい、評価してもらいたいと思っているんではないかな。愛好家の評価というのもあるけれど、愛好家と芸術家とでは視点が異なることがあるし、なによりも芸術家どうしが交流を求めているからではないかな」

「作品の審査結果と収入……授権配当っていうんだっけ……とは関係ないんですか？」

「ホーウ！　もちろん関係あるさ。作品の評価が高ければ、一般の人からは『芸術的価値が高いもの』として購入され、その作者へは『優れた作品を制作した芸術家』ということで投資ポイントが集まるからね」

×　×　×

ホログラフィはアキムのアトリエに移っている。

分裂騒動のあったグローバル四次元芸術家協会の年次総会からアキムとサリーがクズエ市のアトリエに戻ると、アキムにジェニファからのメールが入っていた。連絡が欲しいとのことであった。

アキムがテレビ電話でジェニファを呼び出すと、

「年次総会は大変な事態になったようね。ミランから聞いたんだけど、あなたも脱会したんですって！　ファルゴンの会の準備会事務局長になったらしいって話も聞いたわ」とジェニファが切り出した。

「そのことでメールしてきたわけではないだろう」

「そうなの、懇親会場の場で話してもよかったんだけれど、場所が場所なので帰ってからすぐに連絡しようと思っていたんです。実は、私とミランのことだけど、結婚宣言することになっていたの。それで、今住んでいる家が未だに二人の共有になっているけれど、再婚してもあなたと共有の家に住んでいるのは妙なことなので、あなたの持分を少しずつ支払うことにしますから」

「そんなことはどうでもよいけど、ラミエは了解しているんだろうね？」

「ラミエはもう何度もミランと会っているし、ミランは優しい人だからラミエのことは心配要らないわ」

「君とミランとの相性はどうなの？　ミランのことは良く知らないけれど、カウンセラーとは相談したのかな。『奨励』策に従うならミランは君との間での子供をあきらめなければならないけど」

「そのことは承知しているわ。ミランはとても気配りや思いやりのある人で、私と同じような性格なの。あなたと私のような大きな性格の違いは無いから大丈夫よ。だからカウンセラーとは相談していないわ。それに、二年前のカウンセラーのことだけど、凄く気分が悪い

思いをしたから相談する気になれないの」
「そうかなぁ？　あのカウンセラーは少々強引な感じもしたけど、結構本当のことを言っているように思えたけど。それと、ケチをつけるようなことを言って申しわけないけど、性格が同じだからって相性がよいとは言えないんじゃないかな」
「とにかく私達、今はとても幸せな気持ちでいるの」
「離婚させられた男だからね、ぼくの方からは、おめでとうとはいいにくいな」とアキムが言ってテレビ電話での話は終わった。
テレビ電話でのアキムとジェニファとの会話中、テレビに自分の姿が写らないように避けていたサリーがアキムに近づいて来て、
「そ～う！　前の奥さん再婚するんだ。よかったわねぇ～！」と言った。
「よかったかどうかはしばらく経ってみないと分らないよ」
「少なくとも、私にとってはよいことだな。うん。シメシメ！」
「なんだい。その『シメシメ！』というのは？」
「先生は関係ないの。それより、手伝うこと一杯あるんでしょう！　どしどし申しつけて下さいね」

×　×　×

その後数日間、ファルゴンから矢継ぎ早にメールでの連絡があったり、幹事からの問い合わせがあったりでアキムはドタバタになった。

一週間ほどして、ファルゴンや幹事とのメールやテレビ電話での調整の結果、新しい芸術家協会の名称をオープン四次元芸術家協会とすることになり、次のようなスケジュールが決まった。

- 一カ月後に、Gネットを通じての役員選挙
- 二カ月後に、オフラインでの役員総会とGネットへの法人登録
- 三カ月後に、理念、会則、運営方針の確定
- 四カ月後に、新芸術家協会の旗揚げ集会
- 半年後に、展覧会運営委員会
- 一年後に、展覧会と年次総会

アキムは作品の制作や生徒指導どころではなくなった。アキムは猫の手も借りたい状況であったので、サリーだけでなく他の数人の生徒にも段取りを協力してもらった。

ファルゴンや幹事から送られて来た資料を基に、会員名簿の整理、理念や会則のとりまとめ、Gネットへのグローバル四次元芸術家協会からの脱退理由の掲載、会員の募集、Gネットへの法人登録、投資募集などと寝る間も惜しんで準備活動に奔走した。

一カ月後に、Gネットを通じての役員選挙で、準備会での会長、事務局長および幹事がそのまま選出され、新たに数名の幹事が加わることになった。

「新芸術家協会の事務所というものはないんですか？　それとも、アキムのアトリエが事

務所代わりなんですか」
「ホーウ！　芸術団体は個人を束ねただけの団体だから、一般には事務所なんてものは無いんだ。だからアキムのアトリエも事務所代わりでもなんでもないよ」
「でも、団体であればいろんな事務処理が必要になりますよねぇ。どうするんですか？」
「ホーウ！　Gネットに法人登録すれば、こういった事務仕事はGネットを通じて、皆でアクセスすることで処理されるようになるんだ。カズマの世界でたとえれば、会社の中のひとつの部署がGネットの中につくられたようなものだな」

アキムは外出や外泊することも多くなり、準備に『精』を出し尽くしていため、サリーとの性生活には『精』が出せなくなってしまっていた。
アキムは「欲求不満にならない？」とサリーに訊くこともあったが、
「ときどき、乳房が無性に抱かれたい……とうずくんですけど、こういう組織立ち上げのプロジェクトは妙な緊張感があって楽しくもありますね」と言って、なんとかなっている様子であった。
三カ月ほどかかって、ドタバタ騒ぎが一段落し、一カ月半後に新芸術家協会の旗揚げ集会を迎える準備が整った。幹事団の奔走により登録会員数は千名を超えるまでになっていた。組織運営の授権配当も少なからず集まってきた。

×　×　×

未だ多くの雑用が残ってはいたが、アキムが――一息つけるかな――と思っていた矢先に、朝早く娘のラミエからテレビ電話での呼び出しがあった。
アキムがモニターでラミエの姿を見ると、ラミエは泣いていた。
「これから、お父さんの所に行ってもいい」
「何かあったの？」とアキムが訊いても、ラミエは何も言わず、
「会ってから話すわ」と言ってモニターのウィンドウが閉じた。
昼近くになって、ラミエがアトリエに姿を現した。
「お父さんいますか？」ラミエは事務仕事をしていたサリーに声を掛けた。
アキムが出てきてラミエをテーブルに座らせると、
「お母さんが、ミランさんから離婚宣言されてしまったの……」ラミエは涙を流しながら言った。
「えぇー！　再婚して三カ月しか経っていないのに……もう離婚？」
「お母さんがね、ミランさんに怒鳴られて、『君とはこれ以上やっていけそうもない』って大声でいわれたの」
「それで、お母さんはどうしているの？」
「お母さんはショックで、泣き崩れて、ベッドに入ったままなの。お父さん、助けてくれる」とラミエが訴えた。
娘の話を聞き終わると、

「一寸出かけてきます」とアキムはサリーに言って、ジェニファの所に向った。
サリーはラミエの話の一部始終を聞いていた。

×　×　×

ホログラフィはジェニファの家を映している。
アキムが久しぶりに戻った家の中に入ると、ジェニファは起きていた。
ラミエの姿を見ると、
「お父さんの所に行っていたの？　何処に行っちゃったのかと思ったわ」とジェニファが言った。
ジェニファはすっかり眼を腫らし、髪も梳かさずにいた。
「大丈夫かね？」
「私を哀れみに来たんですか」ジェニファは険のあるいい方をした。
「おかあさぁ――ん、そんなこといわないで、せっかく来てもらったんだから」
「どうしてこんなことになっちゃったんだい？」とアキムがいうと、ジェニファはアキムの胸に泣き崩れた。
アキムはジェニファの背中や肩をさすってやった。ひとしきりおいおいと泣いたあとで、ぽつりぽつりと、ミランとのことをアキムに話し出した。
ジェニファが話したことによると――
二人は初めの一月ほどは非常にうまくいっていた。

ミランはラミエにたいしてとても優しくしてくれた。家の外での愛想も良く、誰に対しても親切であったし、何事につけても気配りのある人だった。人はこのように優しくあらねばならないというイメージを持っている人のようだった。はじめのうちはそのイメージをジェニファも共有しているように思えて、相槌を打てることが愛情を感じることでもあった。

ミランは他人に対しては自分の考えを押し付けるようなことは一切なかったが、ジェニファに対しては少しずつ指図がましくなってきた。そのうち生活上の些細なこと、家具の配置とか掃除のしかたとか、アキムならば全く無関心なことにミランが自分の趣味をジェニファに要求するようになった。

ミランはとても優しくしてはくれたが、他人には要求しないその優しさをもつことをジェニファやラミエには要求しだした。ジェニファの「かくあるべき」とミランの「かくあるべき」が徐々に衝突するようになった。

仕事のことで女性からしばしばミランに電話があり、長い時間をかけて事細かな話をしていた。ジェニファが『ずいぶん親切なのね』と皮肉っぽく言うと、アキムならば多分『俺もちょっとはもてるんだとか』とか言ってはぐらかしていたかもしれない。生真面目に受け取る必要もないのに、ミランはひどく不機嫌になった。

ジェニファが『結婚してみて初めて分かったんだけれど、私とアキムの性格って全然違うわね』と言った時、アキムは『性格が違うならば、違いを強調するのではなく補いあえばいいんじゃない』と受け流した。ミランに『私たちの結婚ちょっと間違っていたかもしれない

わね』と言うと、ミランは『君がそう思うなら別れてもいいよ』と言った。
　そのうちラミエの教育のことでミランが考えを述べた。ジェニファが『ラミエは私の子供だから私の考えでやらせて下さい』と言うと『君にとってぼくは一体何なんだ！』とミランが言い出した。ジェニファは鬱積していた怒りが爆発し、言い返して罵りあいなった。
　アキムは決してジェニファに、『別れてもいいよ』と返事したり、怒鳴ったりしたことは無かったのに、ミランは大声で怒鳴った――といったことのようである。
　たぶんジェニファ自身は気づいていないだろうけれども、ミランがジェニファに対して言ったり、行ったりしてきたことは、怒鳴るということを除けば、ジェニファがアキムに言ったり、行ったりしてきたようなことばかりだな――とアキムは思った。
　そして――ジェニファとミランは同じような性格だと言っていたが……だとすると、性格が同じということはやはり不幸なこともあるものだ――と思った。
　ジェニファはひととおり話し終わると、なんとか落ち着きを取り戻した。時刻は夕方になっていた。ささやかな食事を元の親子三人で済ますと、ラミエがアキムに囁いた。
「お父さん！　今日は泊まっていってくれる。お母さんと添い寝して慰めてやって欲しいんだけど」

「ずいぶんとませたことをいうものですね」
「ホーウ！　そうかねえ」

その夜、アキムはジェニファと一緒にベッドに入り背中を抱えて寝てやった。

アキムは寝ながら考えていた――ジェニファは自分のどこが好きで結婚しようと言ったのだろう。確かに自分の男としての見てくれは悪い方ではない。付き合っている頃から見解の相違というのはよくあったけれど自己主張はしなかったからな。ジェニファは献身的で几帳面な性格なので感心してもいた。自分の方はどちらかと言えばテキトー性格であったので、生活上の主導権は完全にジェニファにあった。子供に言って聞かせるような生活上の細かな決まり事をいくつも提案してきた。少々抵抗があったが、アキムは自分にとって支障のない限りジェニファの言うとおりにしていた。意に沿わない場合は面従腹背で凌いでいた。そのうちジェニファにはアキムの杜撰で気配りのないように見えるイイ加減な性格が段々と我慢できなくなってきたのだろう。

ミランとジェニファの場合には、確かに気性は似たようなものだ。他人や恋人でいるときは、互いに一歩譲って付き合っていたのだろう。その頃は、互いの献身的で几帳面な性格がピッタリの相性に思えたのかもしれない。しかし伴侶になってからは、特に互いの几帳面な性格がぶつかりあうようになっていった。生活上の主導権争いに似たようなことになったのではないか。互いに譲らない性格だから、直ぐに破綻するようなことになったのだろうな――などと分析しているうちに眠りについた。

翌朝になり、ジェニファはだいぶ落ち着きを取り戻しているように見えたし、アキムには

未だやらなければならない仕事があったので、一旦アトリエに戻ることにした。
ジェニファはアキムの帰り際に一言、すまなそうに、
「ありがとう」と言った。
×　×　×
ホログラフィは再びアキムのアトリエを映し出している。
アトリエへ帰ってみるとサリーがいなくなっていた。サリーの荷物もすっかり無くなっていた。
アキムのモニターにサリーのメールがあり――一言「ジェニファさんと子供さんを幸せにして上げて下さい」――と書かれていた。
アキムは――なんだよこれ！　余計な気づかいをして……ここのところセックスがご無沙汰になっていたことも原因しているかな……これから可愛がってやろうと思っていたのに――などと考える一方で、ジェニファやラミエのことをどうしたものかと思案した。
アキムはこの思案ごととは別に、サリーがいなくなったことで、身体に風穴が空いてしまったような気持ちになった。
×　×　×
一日置いて、ラミエがまたアトリエを訪ねてきた。
「一昨日はありがとう！　あれ、この前いたお姉さんいないわね」
「いなくなっちゃたんだよ」アキムが空気の抜けたような返事した。

「お父さん、なにか元気ないみたいね」
「それより、お母さんどう？」
「どうにか気を取り直してきたみたいだけど。それで、今日もお父さんにお願いにきたんです」
「いいけど。私にできることなら、言ってごらん」
「お父さん！　お母さんとやり直して欲しいんだけど」
「そういう願い事か。お父さんの方から離婚したわけではなく、お母さんの方がお父さんを嫌ったわけだからねぇ。お母さんの方から仲直りしたいと言ってくれるのでなければ、できることではないんだよ」
「それは分っているけど。もしもお母さんが、仲直りしてもいいって言ったら仲直りできるかなぁ……ってことなんだけど」
アキムはしばらく返事しなかった。
アキムはいなくなったサリーのことを考えていた。ラミエは悲しそうな顔をしてアキムの返事を待っていた。
「そうだねぇ。お母さんがそう言うなら、ラミエのためでもあるから、仲直りしてもいいよ」ようやくアキムが答えた。
アキムの答えを聞くとラミエの表情が笑顔に戻り、
「お父さん、ありがとう！　お母さんに伝えるね」と言って、ラミエは帰っていった。

ということで、サリーが予想していたような展開になってきた。

×　×　×

しかし、一週間待っても、ジェニファから復縁してもよいという返事は来なかった。

アキムは、その後のジェニファやラミエの様子が気になっていたので、ジェニファの所に行ってみることにした。

ホログラフィはジェニファの家の中を映している。

アキムの眼には、ジェニファの様子は元の状態に戻っているように映った。

「展覧会で出会ったお嬢さんはどうしているの？」

アキムは、サリーのことを気にして返事をできないでいるのかなと考えた。

「あの娘はこの前、アトリエを辞めたかもしれないんだ」

「かもしれないって？」

「突然、いなくなっちゃたんだよ」

「そう！　仲良くしていて、楽しそうに見えたけれどね」

こんな会話のあとで、ジェニファがラミエの様子について報告したり、新しい四次元アートの芸術組織の立ち上げ状況、お互いに最近制作した作品のことなどを話したりしたが、互いに『仲直り』の件については話題にすることを避けた。

アキムはアトリエに戻ったが、その後もジェニファから『仲直り』の件に関する話は無く、ラミエからの連絡も来なかった。

念のため、ラミエにテレビ電話をすると、
「お母さんが、『仲直りするかしないかは私の問題だから、お父さんには勝手に連絡しないで頂戴』と言われているの」とのことであった。
ということで、アキムは以前のようなやもめ暮らしに戻っていた。新芸術組織の事務局長としての雑務が、サリーがいなくなったアキムの寂しさを紛らしていた。

×　×　×

失踪してからおよそ一カ月後に、ひょっこりサリーがアトリエに姿を現した。
「ワーイ！　先生、ジェニファさんの所に戻っていなかったんだ」ドアを開けるなりサリーが言った。
サリーはすっかり日焼けしていた。
アキムは狐につままれたような顔をして、
「何処へ行っていたんだい？」と訊ねた。
「南の島や海面都市で、友達とバカンスを楽しんできたんです」
「ふーん！　暢気なもんだね」アキムは喜んでいる顔の表情とは裏腹に、すねたような言い方をした。
「忙しい時に突然姿を眩ましてしまって、すみませんでした。だって、子供さんに両親の仲直りをせまられて、ジェニファさんから離婚宣言を取り消すとでもいわれたら先生、きっとジェニファさんのところに戻ったでしょう。先生にとっては、私は生徒で、セックス相手

くらいの存在だったでしょうから勝ち目はないし、私が『別れるのは嫌だ』と言って駄々をこねたら、すごーく悩ましい状況になっていたでしょう。私も愛憎ドラマのようなことは演じたくなかったし……、アトリエにいて、やきもきするのも耐えがたかったんで姿を消したんです」

「永遠に戻って来ないんじゃないかと思っていたよ」

「ジェニファさんと縒りを戻すのであれば、そのつもりでしたけど……ジェニファさんは離婚宣言を取り消しそうにないんですか？」

アキムは難しい顔をして返事しなかた。

サリーもしばらく黙っていたが、突然用事を思い出したかのように、

「今日はこれで失礼します」と言って、そそくさと何処かへ行ってしまった。

×　×　×

二日ほどすると、えらく明るい表情でサリーがアトリエに顔を出した。

ひとりの生徒がアキムの指導を受けていた。

「しばらく待っていてね。もうじき終わるから」

サリーは生徒の作品を覗いたり、輪を描くようにゆっくり歩いたりして時間を潰したあとで、コーヒーとショートケーキを丸テーブルの上に二セット置いた。

生徒が帰ってからアキムはテーブルに着き、サリーの顔を見た。

アキムは――こんな笑顔ってあるもんだなぁ――と思った。

するとサリーの表情が突然変わり、
「先生！　先生と『取引』したいんですけれど」と言った。
「君と取引するようなことって、何かあるんだろうか？」
「大ありの、アリババなんです！　結婚宣言しませんか！」
アキムは、サリーから「セックスしてみたいと思ったことありませんか？」といわれた時と同じように、またまたショートケーキをコーヒーカップの上に落としてしまった。
サリーの顔は元の明るい表情に戻っていた。
「取引って、結婚のこと？」アキムが訊きなおした。
「ピンポーン　そうよ！」
「結婚のことを取引とは言わないんじゃない？」
「そのようにいう人も世の中にはいるんです」サリーは断言するように言った。
アキムは――そういえば、二年前に男女問題相談センターのバンスが同じことを言っていたっけ――と思い出した。
「結婚しても僕にはラミエがいるから、君との間で子供をもうけるとなると一人っ子の『奨励』政策とバッティングすることになる。」
「先生が『奨励』を守る必要があるとお考えでしたら。それでもかまいません」
「そんなに簡単に結論をだせる話ではないと思うけど…」
「私は、もう十分に考えた上での結論です。先生、今でも私のこと欲しいと思っています

よね」

「うん」とアキムはうなずいた。

「だけど、娘さんから別れた奥さんとの復縁を哀願されて悩んでらっしゃるのでしょう。そして、ジェニファさんが復縁してもよいと言ってきたらそのつもりでいるんでしょう」とサリーが詰問した。

アキムは今度も返事をしなかった。

「でも、ジェニファさんからの復縁の申し出はありませんよ！」

「どうしてそんなこと分るのかね？」

「ジェニファさんと会って、直接確かめてきましたから」サリーは軽い口調で言った。

アキムは「えぇ～！」と叫んだあとで、

「なんでそんな勝手なことを！」と言葉を荒げて言った。

するとサリーは、ロボットのように頭をガクッと下げ、肩をダラーと落として、

「ショボーン！」と言った。

その仕草があまりに滑稽だったので、アキムはこれ以上怒れなくなってしまった。

サリーはそのままの姿勢で、

「エーン！　エーン！　だって、先生、いつまでもジェニファさんの返事を待つつもりでいるんだからぁ～。シクシク。ブツブツ」と子供のように、手で涙を拭ってしゃくりあげるような仕草をした。

アキムは――サリーには勝てないなぁ～……こんな芸当、何処で覚えたんだろう――と思いながら、

「それで、どんな話をしてきたのかね？」と訊ねた。

アキムの口調にやさしさが戻ると、サリーはガバッと頭を上げた。

「ジェニファさんは『縒りを戻すつもりはありません』って言っていました。『でも、先生はジェニファさんからの離婚宣言の取り消しを待っているようですよ』と言ったんです。そしたら、『それはあの人の勝手でしょう』とおっしゃるんです。『それでも、お子さんのこともあるので、未だにジェニファさんに縛られているようなんです』と言うと、『離婚した相手の自由を縛るなんて理不尽なことができるわけがないでしょう。私への未練とも思えませんけれど……そうね、あなたがいうようにラミエのことじゃないかしら。私が元気になれば、ラミエも『仲直りして欲しい』なんてことは言わなくなりますよ』っておっしゃっていました。『それでは、私が先生を頂いても宜しいんですね』と言うと、『どうぞご勝手に』とおっしゃいました」

アキムはサリーの話をひととおり聞いたあとで、

「ジェニファに離婚宣言を取り消す意志が無いとしても、そのことと私と君が結婚宣言することは別のことだと思うけど」と言った。

「一ヶ月前まで、実質的に結婚状態にあったではないですか……現実を追認するだけのことだと思いますけれど。そうなんだよなー」

「そういうことではなくて、仮に結婚宣言したとして……これからもずーっと仲良くやっていけるかどうかということなんだ。ジェニファの時のようなことを繰り返したくないからね」

「そのご心配は充分承知しています。なんならカウンセラーと相談されてきては如何でしょうか。私の方は、もう相談してきましたけど」

「えぇ～！」とまたアキムはびっくりして言った。

「先生もご存知のバンスさんです。ついでに、バンスさんから先生とジェニファさんとのいきさつも全部聞いてきました」

アキムは――それで、さっき『取引』なんていう言葉を使ったのか――と得心した。

「バンスさんはなんて言っていた？」

「私の口から聞くよりも、直接バンスさんからお訊きになった方が宜しいんではないでしょうか？　バンスさんとの相談のあとで、ジェニファさんのところに行ったのです。バンスさんと話していて、ジェニファさんは先生と復縁する意志が無いとの確信が持てたので……」

「二日前に来たと思ったら、急にいなくなったのはそういうことだったの」

「もうひとつ言うことを忘れていました。念のため、私の両親にも話をして、両親の了解もとっておきましたから」あっけらかんとサリーが言った。

アキムはサリーの綿密、大胆でスピーディな行動に驚かされるばかりであった。

この日、サリーは全てのお膳立てを済ませたあとで『取引』に臨んでいたわけで、アキム

に結論を預けるだけにして姿を消した。
アキムは――放っておくと何をしでかすか分らない娘だな……おかげで、袋小路に追い込まれてしまったような気分だ――と思った。

「エポカの世界では、結婚宣言をしても、しなくても何も変わらないわけですよね。そうすると『結婚宣言』するということはどういう意味があるんでしょうか？」
「ホウ、ホホーウ！　一時的な男女関係ということではなく、互いにこれからずーっと夫婦であろうとすることを誓い合うこと、それと世間の人から夫婦として認知してもらうことかな」

× × ×

アキムはサリーとの会話のあとで、ことの次第を確認するためにジェニファに電話した。
ジェニファは淡々とした口調で、
「あの娘、あなたのアトリエを辞めたみたいだって聞いていたから、突然押しかけてきたんで面食らったわ。姿を消したのは私のことが原因だったみたいね。結構優しいところがあるんだ。……それはそうと、あなたの優しさが少しは理解できたような気がするの。でも私には自信がありません。やはり相性には逆らえないと思うんです。復縁すれば、あなたはこれまでどおり私と生活をできるかもしれませんが、夫婦といよりも共同生活のようなものにしかならないでしょう。たぶん、それは現在のあなたにとって幸福なことではないと思うん

です。

ラミエのことは大丈夫です。私が元気になりさえすれば、私にもあなたにも『復縁して下さい』なんてことは言わなくなるわ。ラミエは私の心の支えになっています。ですから、私のことも心配におよびません。今回、心配して頂けたことは充分あなたには感謝しています。

そういうわけで、サリーさんがあなたに話したことは全て本当です。あの娘は世間の常識と違う感性をもっているみたいですね。私にはあの娘のようにあなたを愛する自信がありません。あなたのような朴念仁には意外にあっているのかもしれないですね」と言った。

朴念仁か……相変わらずだな。ということは、ジェニファは大丈夫のようだな――とアキムは思った。

×　×　×

ホログラフィは男女問題相談センターになっている。

翌日の朝、アキムはバンスを訪ねた。

アキムの顔をみるなりカウンセラーのバンスは、

「来ると思っていましたよ。今度のあなたのお相手は痛快な娘さんですね」と挨拶代わりに言った。

「相談の趣旨はお察しのとおりかと思いますが……私の懸念は、歳の若いセックスを人生の目的にしているような女性と一生うまく連れ添っていけるものかどうか……ということなんですが？」

「人生の目的が性交渉……というのは、何か問題ですか？　一番楽しいことが人生の目的と素直に言っているだけのことではないでしょうか。性交渉を敬遠するようなカップルは破綻するケースが多いものなので、結構なことかと思いますけれど。もちろん、性交渉が人生の全てでは無いことぐらい彼女だって分っていますよ。彼女は、言葉とは裏腹に、分析データで見る限り、『愛』をやたら口にする人よりも遥かにやさしさやおもいやりのある娘ですよ」

アキムは――そうかもしれないな――と思った。

「ＤＮＡの目的は子孫を残すことで、ＤＮＡはそのために人間の意識に絶えず性交渉を希求させているわけなので、『セックスが人生の目的』と言っても少しもおかしくないし、彼女のいうことは間違っていないと思いますけれど。それとセックスが好きなことと、浮気性であることや淫乱であることとは別の話ですよね。事実、彼女には浮気性と思えるような男性遍歴はありませんが」

「そうなんですか」予想外の話にアキムは驚いた。

今までサリーに彼女の男性遍歴については訊ねたこともなかったが、彼女のようなチャーミングな女の子にたいした男性遍歴が無いというのは信じ難いことであった。

「ボディラブは最高の喜びの表現です。感情のプールに満足感や安らぎを与えます。ボディラブは性交渉自体による満足感よりも年齢とともに姿形を変えて長続きするものです。それと彼女は軽々しく意味不明な『愛』という言葉を使うのが私と同様に嫌いのようですね。けっこう理性的な性格で、感情に素直な性格ですよ。感情に嘘をつけない性格ともいえ

ますね。……能天気に見えるから、誤解される方が多いと思いますけど。あなたは感情的には彼女のことを理解しているようですが、私には、あなたがまだまだ固定観念からご自身の感情を素直に認めようとしていないように思えますけど」

「言われてみれば、そのとおりかもしれませんね」

「彼女と付き合っていて、あなた自身何か変わったなと思われるようなことはありませんか？」

「彼女といると、とても心的にも性的にも何ともいえぬ充足感を覚えます……性的な満足感というよりも動物的な満足感という類のものでしょうか。それと、眠っていた子供時代の無邪気な感性が呼び覚まされたというか……感性が解放されたような気がしますけど」

「そうでしょう！　私の『愛やセックス』についての考えと彼女の考えは同じです。彼女は数少ない私の考えの賛同者です」

アキムの脳裏には、今までのサリーに関して思い描いていた姿――単なるセックス好きの快活な女の子――とは全く違うイメージのサリーの女性像が形成されつつあった。

バンスにいわれて、アキムは――とんだ思い違いをしていた……すっかりあんな小娘にしてやられるとは……女というのは魔性だな――と思った。

魔性の本来の意味とは異なっていたが、アキムにとっては『魔性』という言葉がサリーにはピッタリのように思えた。そしてアキムはサリーのことを無性にいとおしく思った。

「久しぶりに巡り合った最高のカップルですよ！」バンスが太鼓判を押した。

アキムはバンスに深々と礼を述べて、男女問題相談センターを立ち去った。

「アキムがサリーのことを『魔性』と思った意味がわからないんだけど」

「ホホ、ホーウ！　軽薄に見えたサリーの思いがけない本性に気付いて『魔性』と思ったのか、小悪魔のように可愛いと思ったのか、そのような想いが入り混じった意味ではないかな」

×　×　×

午後になって、アトリエではサリーが鼻歌交じりで部屋のドアや天井に花飾りをつけていた。

部屋には、他にも十八歳くらいのナタルという男子生徒がいて作品制作を行っていたが、サリーの何時にない浮かれた所作や花飾りを見て、

「今日、これから何かあるんですか？」とサリーに訊ねた。

「うん！　たぶんね」

「たぶんのために準備しているんですか？」

「たぶんじゃなくて、ぜったいだな……うん、うん。そんなわけで、今日の午後、先生は忙しくて君のことかまっていられないと思うから、さっさと帰った方が君の身のためだと思うよ」とサリーは言って、これから起きる事態を予想して邪魔になる生徒を追い返そうとした。

サリーはアキムの帰りを今や遅しと待ち構えていた。
ようやくアキムがアトリエに戻って来た。サリーの意に反してナタルは未だ部屋にいた。
花飾りのドアを開けるなり、アキムは、
「君の『取引』に応じることにしたよ。バンスさんが『最高のカップル』だって言っていたよ」と告げた。
サリーは競泳の飛び込みのときのように両膝を曲げ、両手を斜め後ろに突っ張った姿勢になって、
「でしょ！　でしょ！」と言ったあとで、アキムの胸に飛び込んでいった。
ナタルはサリーが言ったことの意味を遅まきながら理解し、あたふたと片づけをした。
そして、抱き合ったままの二人の横をすり抜けるとき、
「おめでとうございます」とバツが悪そうに言って出ていった。
生徒が帰ると、二人だけの記念すべき一大イベントが、アトリエ内をところ狭しと展開された。
イベントのあとで、アキムはサリーとの結婚宣言をGネットに掲載した。

×　×　×

アキムとサリーの結婚宣言の三日後に、オープン四次元芸術家協会の発足式を迎えることになっていた。発足式の場所は、グローバル四次元芸術家協会が毎年展覧会や年次総会を行っているサブラート市のホテルであった。

ホログラフィはサブラート市に移動している。
アキムはサリーをつれて、発足式の前日に、会場準備のため式場のあるサブラート市のパンダムホテル向った。
オープン四次元芸術家協会の発足式は、分裂騒ぎのあった芸術団体を離脱した新芸術家協会の旗揚げ集会ということでマスコミの注目も浴び、芸術関連の報道陣も詰め掛けていた。
事務局長であるアキムはサリーと連れ立って出席した。
発足式では、アキムの司会により役員の紹介と挨拶が行われ、次いで理念、会則、役員、年間運営方針などが再確認され、会員数は千五百人に達したことなどが報告された。
理念の核となる展覧会などでの作品審査方法として、会員の全員がそれぞれの所属するジャンル毎に、次のように作品評価することが発表された。

- 評価点として個々の作品に一から百の得点を与えるものとし、得点の平均点を評価値とする。
- 作品から受けた印象、作品のどのような点を評価したか、作品の改善点などをコメントする。
- 会員以外の作品も受け入れるが、会員以外の人は審査することはできない。

また、初めての展覧会および年次総会をグローバル四次元芸術家協会と同じ日の同じ場所で行い、エポカ世界の審判を受けるという方針が発表され、グローバル四次元芸術家協会への挑戦状を突きつけることが決められた。

会長のファルゴンは「新しい芸術家協会をつくっても優れた作品が集まらなければ組織の存在意義がなくなるので、展覧会までに残された日数は少ないが、全ての会員が作品づくりに専念するよう」呼びかけた。

発足式の終了直前に、会長のファルゴンが祝賀会・懇親会で特別企画を準備していると告げた。

アキムは近くの席に座っていた幹事から、

「特別企画ってなんですか？」と訊かれた。

アキムは「いや、聞いていないけど」と答えると、

「事務局長が何も聞いていないなんて、問題あるんじゃないですか」と言われてしまった。

アキムは――ファルゴンお得意の独断専行の企画かな――と思った。

発足式が終了し、アキムとサリーが式場の部屋から出ようとするとファルゴンが呼び止めた。

「特別企画というのは君たちの結婚祝いのことさ！　君たち結婚宣言したんだろう。Gネットで見たよ。準備はぼくがしておいたので、こっちに来てくれないか」

「特別企画ってそのことだったんですか」

「粋な計らいですね……ありがとうございます。ビックリ！」とサリーが言った。

×　×　×

ホログラフィは結婚式の支度部屋らしき場所に移動した。

二人がファルゴンについて行き、支度部屋のような小部屋に入ると、ホテルの支配人らしい人とアシスタントとおぼしき人が待っていた。そこにはウェディングドレスと派手なスーツが並べられている。

その傍らに、アキムとサリーの両親が座っていた。

「あれー！　お父さんとお母さん来ていたんですか」サリーが言った。

「お待たせして済みませんでした。わざわざ、お越し頂いてありがとうございました」ファルゴンがアキムとサリーの両親に挨拶した。

「ファルゴンさんから連絡があってね、お前たちの結婚祝賀会をやるから、よかったら来て下さいってことだったんだよ」アキムの母親が二人に言った。

アキムとサリーが初対面の互いの両親に挨拶を済ますと、

「時間があまりないんで、さっさと着替えして準備して欲しいんだけど」とファルゴンが言った。

「ありがとう。だけどこういうフォーマルな衣装っていうのは苦手なんだ。ぼくの柄ではないよ」

「私もウェディングドレスって柄ではないけど……私のイメージってどんな感じ、先生は芸術家だから何かイメージもっているわよね」

「そうねぇ、君は魔性だからなぁ……」

「魔性？　うん、それとってもいい。魔女がいいわ！」

「それでは、ぼくのイメージは？」
「う――――ん　そう、ピエロかな？」
「ピエロ？　なんか意味がわかんないけど、いいかもしれないな」
「お前たち、なんという馬鹿なことを考えているの…魔女とかピエロとかサーカスでもあるまいに」アキムの母親が言った。
「私達はお前の晴れ姿を見たいと思って、わざわざやってきたんだよ」今度はサリーの母親が言った。
「魔女とピエロの結婚式なんて、前代未聞のことだと思いますけれど……」ホテルの支配人が呆れ顔で言った。
「前代未聞？　いいですねぇ」
「本当にそれでいいんですか？」支配人が念を押すと、
「いいんです！」とアキムとサリーが声を合わせて語気強く返事した。
「面白いかもしれませんよ。芸術家の集まりですから、きっと受けると思いますよ」とフアルゴンが言って、アキムとサリーの両親をなだめた。
「ところで、魔女とピエロの衣装はあるんでしょうねぇ」
「私どものホテルの劇場に無い衣装はありません。ご心配にはおよびません。すぐに適当なものを数点とってこさせますから」

×　×　×

ホログラフィは舞台のある大きなホールになっている。
発足式の一時間後に祝賀会・懇親会が始まった。来賓の挨拶など型どおりの祝辞が述べられてから懇親会になった。
しばらくの歓談の後に司会者が、
「今回の組織の立ち上げに最も尽力頂いた事務局長のアキムさんと新婦のサリーさんですが、このお二人は三日程前に結婚宣言をされました。この場を借りてお二人の結婚祝賀会を行いたいと思います」と言った。
場内から一斉に拍手が起こった。
すると、ファルゴンがステージの脇から司会者を手招きし、なにやら耳打ちした。
司会者はステージの中央に戻ってくると、
「えー！　お二人は自己紹介を兼ねて即興の寸劇を披露したいとのことなので……どんなことになりますやらご観覧下さい」と言った。
会場の拍手が鳴り止むと、音楽が流れ、ステージに魔女とピエロの装束の二人が現れた。
アキムもサリーも幼児期や子供の時に学芸会のような場で芝居をしたことがあるがそれ以外に特別な演劇の経験があるわけではなかった。寸劇というのは、いつもアキムとサリーがアトリエで実演していることであった。コスチュームに見合ったことをしないわけにはいかないということで、いつもやっているようなことを魔女とピエロの衣装でやってみたら面白いのではというサリーのアイデアであった。ある場面を決めて繰り返すだけのことなので稽

古の必要などなかった。

寸劇は――魔女がピエロを誘惑しようとする……魔女の誘いから逃げ惑うピエロを魔女が追いかけて捕らえる……ピエロに魔法を掛けて、いいなりにさせる……魔女はピエロに絡まりついたあとでピエロの性器を取り出してむしゃぶる……こらえきれなくなったピエロは魔女を押し倒して、魔女のドレスを剥ぎ取り……腰を前後に振ってファックし……魔女が喘ぎ……ピエロが思いを遂げさせられると絶叫して悶絶する――というコメディであった。

演技は実演という訓練を重ねた末の結果だったので真に迫ったものであり、魔女とピエロが絡まりあう姿や体位にはアクロバットな芸術性もあり、サリーの大袈裟で滑稽な仕草も大いに受けた。うろたえながら演じるピエロのぶざまな姿も面白く映った。最後のファックシーンやピエロの悶絶シーンでは会場の全員が抱腹絶倒して笑い転げた。

――シモネタっていうのはいつの世も受けるものだなぁ――

アキムやサリーの両親は、「なんというあきれ果てた人達なんでしょうね！」と言ってはいるものの、笑いをこらえられずにいた。

寸劇が終わって、アキムとサリーは一旦楽屋裏に引っ込み、顔のメイクを落として再びステージに姿を現すと会場の喝采を浴びた。

アキムがステージから降りると、二人は囲まれて頭を殴られるや背中を小突かれるやらの

手荒い歓迎を受けた。手荒い歓迎が一段落すると、幹事のひとりが寄ってきて、「君たちの夫婦生活は楽しそうだねぇ～」と声を掛けた。

アキムが、「時には苦痛に思うこともあるけどね」と返事すると、その幹事は「苦痛！　羨ましい限りだね！」と言ってアキムをからかった。別の幹事が、「生真面目そうに見える君にこんな芸当ができるなんて思ってもみなかったよ」と言った。

アキムは――自分が人前でこんな馬鹿げたことができる人間とは考えてもみなかったが、サリーと一緒であればどんな愚かしいことも自然にできそうに――思った。バンスに『最高のカップルですよ！』といわれた意味が少し分ったような気がした。そして確かに、自分はサリーがイメージしたような、サリーという魔女に魔法をかけられたピエロのような存在かもしれないなと――思わずにはいられなかった。

会長のファルゴンが祝辞を述べ、展覧会の運営委員長が祝杯の音頭をとってはいたが、フォーマルな挨拶や美辞麗句などが全く意味をなさない乱痴気騒ぎの結婚祝賀会になってしまっていた。

アキムやサリーの両親が司会進行係らしい人に、「一言ずつでも、挨拶をお願いします」と言われたが、両親達は――紋切り型の挨拶ができるような雰囲気ではなかったし……場を白けさせてしまう恐れもあり……親と子を横並びに見られたくない気恥ずかしさもあって――丁重に断った。

×　　×　　×

ホログラフィはアキムのアトリエに切り替わっている。

展覧会の準備は、主として展覧会の運営幹事達が行うことになっていたので、アキムとサリーは暫しぶりに好きな作品づくりに専念できることになった。

二人は結婚記念に共同制作を行うことにした。

アキムは感情を形や動きによってどのように表現するかについて日頃から腐心していたが、サリーと共同制作することになって、これまでの自分には無い何か、これまでの自分の殻を破れそうな予感がしていた。サリーの自然で奔放な感情表現が、アキムに大きな影響を与えていた。アキムはサリーの技術指導をしながら、サリーから多くのものを学んでいるように感じた。

アキムとサリーの作品づくりは順調に進み、展覧会の一カ月前に完成した。

二人は作品制作用のコンピュータに接続された４Ｄビューアでホログラフィにして作品の出来栄えを確認した。４Ｄビューアの中で、小さな男女が絡んだり、離れたり、溶け込んだりしていた。

「先生、これでも充分素敵だと思うけど……等身大に映し出されたものを見てみたいですね」

作品が完成すると、アキムはオープン四次元芸術家協会の展覧会用応募作品のサーバーにアップロードした。応募期限が近づくとサーバーには、続々と応募作品がアップロードされてきた。

アキムのアトリエでは、サリーや新しく会員になった生徒達もアトリエのモニターとにらめっこをして、評価したりコメントを書いたりすることになった。

こうして、初めてのオープン四次元芸術家協会の展覧会を迎えることになった。

×　　×　　×

グローバル四次元芸術家協会の展覧会から一年後に、新旧の四次元芸術家協会の展覧会が同じ場所で同時開催された。このことは、四次元アートの芸術家や愛好家にとっては誠に好都合なことであった。旅費や時間の節約になるだけでなく、両団体の作品を比較閲覧できるからである。

ということで、オープン四次元芸術家協会の展示作品数はグローバル四次元芸術家協会より遥かに少なかったが、同時開催であったため来客はほぼ同数であった。

出品された作品の質であるが、後日のアーティスト・ギルド（『発明家』の部屋にでてきた）の報道によると――新四次元芸術家協会の展覧会には荒削りではあっても意欲的で斬新な作品が数多く登場した。これに対して、グローバル四次元芸術家協会の展覧会の作品は老若を問わず意欲的な芸術家が抜け出たこともあって、技術的には優れていてもマンネリ化した作品が大半を占めていた――とのことであった。

オープン四次元芸術家協会の発足式後の懇親会での寸劇以来、サリーはすっかり人気者になっていた。二人は、仲間との挨拶の際には「ピエロのアキムです」とか「魔女のサリーです」と言うようになっていた。

人物部門のギャラリーでは、『絡まり合う男女』というアキムとサリーの作品が、ギャラリー中央の部屋で大型のホログラフィになって、アイスダンスのように――離れ……絡み……交わり……溶け込み……オーロラのように――変幻自在に、優雅で官能的な舞いを奔放に舞っていた。

オープン四次元芸術家協会の年次総会は、会員数では劣っているものの一年目にして多くの会員を獲得し、質の高い作品を多数展示できたことで、会長のファルゴンがグローバル四次元芸術家協会に対する勝利宣言を行って閉幕した。

ここでホログラフィは消えていった。

×　×　×

「カウンセラーは『結婚は取引』というし、サリーも『男女間の愛』というものに疑問を持っているようでしたね。たしかに、ぼくらは『愛』という言葉を安易に使っているのかもしれませんね」

「ホホーウ！　バンスやサリーは、『愛』というものがどのようなものであるかを吟味することなく、『愛』が人間関係の全ての解決策のように言われたり、自分の欲望でしかないものにまで『愛』という言葉が使われたりしていることに異議を唱えているんではないかな。『愛』をもっと崇高なものと考えているのかもしれないね」

「……すると、彼らにとっての『愛』というのは一体何なんでしょうね？」

「ホーウ！　たぶん、利害打算や自分自身の欲望のためではない、他人からは自己犠牲の

ように見える、人や人々への献身的行為のようなものを『愛』と考えているのではないかと思うんだけれど」

待合室　動く島

「ホウ、ホホーウ！　そろそろ、カズマとのお別れの時間が近づいてきたようだねぇ」
「そうか……やっと帰れるんだね。……もっと観てみたい気持ちもあるけど」
「ホーウ！　でもちょっと待っていてくれないか。帰りの準備にちょっとだけ時間がかかるんだ。それまでの間、待合室で海面都市のホログラフィでも観ていたらどうかな」
フーパはカズマを玄関ドームに連絡している隣のドームに案内した。
ドーム内の部屋に入ると、フーパはどこかに姿をくらましてしまった。

×　×　×

待合室のホログラフィには広大な海に島がポツンと映っていて、映像に合わせて解説が流れている。
例によって、鳥の目で島の遠景を映していた。太陽が雲間から見え隠れしている。島は平たい円形になっていた。島に近づくと島の周囲に砂浜らしいものがあり、港風の施設には船が停泊していた。地上に道や畑、椰子の木などの南国風の樹木が見えてきた。島の上には建物らしいものは何もなく、人影も見あたらなかった。

――人工の無人島なのかなぁ――

今度は、ホログラフィが島を真上から映している。よくみると、島は無数の大小様々な四角形のセルに区切られていた。個々のセルは透明なガラスのようなものや黒く見えるもので覆われたりしている。そうこうするうちに、鳥の目が島に降り立った。セルの中を覗きこむと人影が見え、セルが大きな部屋になっていることが分った。

――この島もそうなんだ、陸上の都市が上から見るとフラットな緑にしか見えなかったと同じで、建物は下にあるんだ……それと、フーパがエポカの世界はフラットな社会とか言っていたけれど、エポカの人は何でも『フラット』が好きなんだ――

空から黒く見えたのはブラインドシャッターであった。天井が窓になっていたのである。

「この惑星の陸地は表面積の三十％に過ぎません。残り七十％は海です。この海面都市は、海洋の資源開発、漁業資源の確保、増大する陸上人口の受け入れ先として開発されました。この海面都市は同じ場所に留まっているのではなく、魚と同じように海洋を回遊しています。エポカ世界は長年にわたり、砂漠のオアシス化とこの海面都市を開発してきました。この海面都市は、陸上の都市とは構造が大きく異なっています。海面都市はその名とおり、海中にあるのでも海底にあるのでもなく、海面を浮遊しています。エポカには、一万人から十万

人くらいの人々が住むこのような海面都市が数百あります。

海面都市は四角形のユニットの集合体で、ユニットの外壁は腐食しない材料で作られています。ユニットは島の構造物を支える浮き袋の機能も果たしています。浮力によってユニットが海上に突起しないように、ユニットの底にあるタンクに海水を入れたり出したりすることで一定の高さになるように調節されています。これらのユニットを多数接合することで、小さな島や大きな島にすることができるのです」とホログラフィの説明が続いた。

家や建物はいわば竪穴住居のようなもので、天井が窓になっていて、ブラインドシャッターを開ければ青空が見え、窓を開ければ外気を取り入れることができるようになっていた。

当然、地上にユニットからの出入り口があり、エレベーターで地下（海面下）の家や建物に出入りできるようになっている。家は吹き抜け構造になっていて、地下数階あるようだった。家や建物は容器といった方が適切かもしれない。ブラインドが無いときは地上から建物の中が丸見えであった。家の中にはソファ、食卓やベッドが置いてあり、その間を縫うように人の頭が動いていた。

――これではプライバシーも何もあったものではないな。しかし、フーパが「エポカの世界は秘密の無い社会」と言っていたから、信じられないことだけど住んでいる人達は丸見えでも気にしないんだろうな。地下何階もあるのならベッドは地下二階にでも置けばいいのに。でも夜空の星を見ながら夫婦で寝ることができたら幸せな気分になれるんだろうなぁ～――

「ホ、ホホーウ！　変なこと想像しているんじゃぁないの」
いつの間にかフーパが戻っていた。
図星だったので、カズマは顔を赤らめた。
「ホッ、ホーウ！　エポカの世界では、自分のベッドシーンを人に見られたからといって、プライバシーの侵害だなどと騒ぎ立てる人は少ないんだ。見られることが嫌な人は、見られないようにしているよ。カズマの世界でも映画などにベッドシーンがでてきたりするよね」
「でも、映画のベッドシーンを観るのと自分のベッドシーンを覗かれるのとでは、全然意味が違うんではないの」
「ホーウ！　最近では、キスシーンを見られることを恥ずかしいと思わないカップルが大勢いるよね。キスシーンをベッドシーンに置き換えて考えてみればいいんだよ」
「どう考えたって無理だよ。置き換えなんかできることではないよ」
「ホホーウ！　そうだねぇ……生まれたときから染み込んだ宗教や慣習は一種のトラウマのようなものだから、無理かもしれない。しかし、人間の羞恥心なんてものは後天的なもので、文化が違えば羞恥心も違うものなんだ。イスラムの世界では、未だに女性が顔まで覆った黒づくめの装束をしている。カズマの社会でも、ほんの一昔前までは街頭で男女が手をつないで歩くことさえ憚られることではなかったっけ。犬や猿は仲間の目を気にせず交尾をする。自分がセックスしている場面を人に見られて恥ずかしいなんていうのは、人類の歴史でみれば階級社会が出現して以降のほんの一時のことではないかな。性風俗なんてものは時代

によって全然違うのさ」

「そうすると……エポカの世界では、覗きなんかは犯罪じゃないんだ」

「ホーウ！　そうとは限らないさ。エポカのルールブックには、共通の迷惑行為と個人的な迷惑行為というのがある。共通の迷惑行為というは誰に対しても行ってはならないことで、個人的な迷惑行為というのは『他の人は迷惑と思わなくても、自分にとっては迷惑な行為』のことで、各人がGネットに登録してあるのさ。嫌煙家と愛煙家では、喫煙に関する反応が違う。だから、嫌がっているのに覗く場合には、犯罪なる。覗きであれなんであれ、人が嫌がることをするのは罪なことだと思うけど」

「でも、嫌がるような人は少ないんでしょう。すると、素っ裸を見られることを恥ずかしいと思う人も少ないんだよね」

「ホウ！　当然のことさ！　全裸でいる方が快適な時は、そうしている人もいるよ」

「でも、あいつのオチンチンはでっかいとかちっちゃいとか……」

「ホッ、ホッ、ホウ！　そんなものは……足が長いとか短いとか、太いとか細いとか……いうのと代わりないんだけど」

「そんな風にはとっても思えないけどねぇ」

ホログラフィはユニットの中に入っていった。シャッターを開けると青天井の空から燦燦と輝く太陽の光が差し込んで、部屋の中が眩しく映った。この黒いブラインドシャッターは

ソーラーパネルでもあった。熱は電気に変換されてユニットの底にあるバッテリーに蓄えられるとのことであり、海面都市のエネルギーはこの太陽電池によって賄っているとのことである。窓は、カメラのレンズを開閉するような仕掛けになっていた。室内の空気を外気と交換する際に開き、閉じているときは直射日光の量を調整できるようになっていて、カーテンとしての機能も持っていた。

ユニットの側面のドアを開けると、隣のユニットを結ぶ通路があった。海面下にはセルのユニット相互を連絡する道路が張り巡らされているとのことである。

島の中にはユニットの無い場所、水槽や運河のように見える場所が要所にあった。この運河に面したユニットの壁面は透明になっていたり、壁に窓があったりして、魚が泳ぐ姿を観ることができ、まるで水族館そのものであった。

海面都市は巨大な漁礁でもあった。水槽や運河には海草が茂り、魚が群れている。このため人々は、昼は魚が泳ぐ光景を観たり、日光が差込むリビングで寛いだり、夜は満天にきらめく星の下で睡眠することができるようになっていた。

海面都市では、エネルギーは太陽から、水は雨水からの供給を受け、食料は地表の畑、海中の海草や魚から調達し、屎尿は一定の処理をしたあとで樹木の肥料や魚の餌として利用するなど、資源の自給自足やリサイクルを図っていた。島の周囲の人工海浜ではレジャーとしての海洋スポーツも盛んであるとのことであった。

人々は、日差しが強い日中は地上にはほとんど出て来ないが、夕方ともなると涼を求めて

島の周囲の人口海浜などに出かけ、若いカップルが恋を語りあったり、親子で遊んだりするとのことであった。

×　×　×

場面が替わって、ホログラフィは大荒れの海を映している。海面都市は海洋を自走するための駆動力を備えていて、天候不順の海域や台風などが通過する海域を避けて回遊することになっているとのことであった。巨大な筏のような船である海面都市の速度は決して速いものではないようである。

台風の襲来が避けられないと分った時点で、海面都市はいつにない動きを開始した。全てのセルの窓が閉じられ、地上にあった樹木、公園、畑の全てが地表面から下がっていって見えなくなった。地表にあったものが潜ってできた穴には蓋が架かり、やがて地表面が全て閉鎖された。

港にいた舟は避難のため、港を出航し台風の通過経路の外に向かった。そして、カズマが驚いたことに、海面都市は静かに沈み始めたのである。しばらくすると、人口五万人の海面都市が完全に姿を隠してしまった。海上は大荒れでも、海面から三十メートルも潜ってしまえば、海は穏やかなものである。台風が通り過ぎると、再び海面都市はゆっくりと浮上してきた。

台風一過の雲一つない青空になっている。海面都市の砂浜からの景色が映し出されている。景色のキャンバスの上と下は真っ青、水平線のあたりには水蒸気の白いグラディエーション

が上下に掛っていて、どこまでが海でどこからが空なのか判別できない連続した色の眩い絵になっている。

「まるでエポカのような境界のない世界のようですね」

「ホッ、ホウ！　境界線のない風景でも見ながら、『境界線のないフラットでオープンな社会』のおさらいでもしておくかな。疲れていたら聞き流してもいいけど…。

憲法などで自由、平等、博愛などといった立派な政治目的や精神を掲げても、社会の仕組みに欠陥があれば、貧困、犯罪、差別、争いが無くなることはない。これらは結果なのであって原因となる仕組みを改革する以外に根本的に問題を解決することはできないからね。逆に適切なシステムが容易されれば、がんじがらめの法律などに頼ることなく自ずから問題は解消されていく。

問題の根本にあるのは国、組織、宗教、親と子、男と女、人種などの間にあるさまざまな境界線だ。これらの境界線を取り払えば、数多の争いの原因となる利害の対立、排他性や差別はなくなり、秘密などを持つ必要もなくなる。

政治的な境界線を取り除く方法が『市長の選挙』にでてきたような選挙制度で、経済的な境界線を取り除く方法が『配当というお金』で説明された経済の仕組みになる。外部経済化されてきた自然との境界線を取り払って内部経済化して、有限な地球の資源と環境を保全するためのものが地球資源の利用料になる。敵味方に分かれるような組織間の境界線を取り除

く方法が『ハイパーハウス』などいろいろな話にでてきたオープンな組織ルールということになるな。

　対人関係の重要な部分を占める親子関係では、親による子供の支配・虐待を救済するために配当システムが子供を経済的に支えるとともに子供に育ての親の選択権が与えられている。人への思いやりの涵養、人の心身の痛みを理解したりいじめを防止したりするために立場置換トレーニングのような制度も用意されている。人と人との支配関係、上下関係を維持するのための壁や境界線をすべて取り除こうというわけさ。

　境界線の無いオープンな世界では、犯罪を行う理由、虚偽の動機、隠さなければならない秘密、形ばかりの虚礼の要請などが無くなるので、社会規範はカズマ君の社会とは全く異なったものになる。このような世界では、自分が多くの人と異なる趣味や考えをもっていたとしても、そのことで他の人に迷惑をかけるのでなければ、他人の目を気にする必要などなくなる。

　特定の人たちが理想的と考えるユートピアは、特定の価値観や生き方の強制になることがあるので多くの人にとってデストピアになってしまうようなことになる。だからユートピアというのはさまざまな生き方が選択できる多数のユートピアの存在が許されるような枠組みを意味することになるかな。枠組みの選択や移動は自由で、国、地方自治体、宗教、会社はもとよりすべての団体・組織はこのような枠組みのひとつであって、内部の人を統制したり、外部の世界との間に壁を設けたりするようなものであってはならない。エポカの世界の仕組

みはそのようなものなんだ」

× × ×

フーパの独り言のような『おさらい』が終わりになるとホログラフィが夕方の海面都市の表面を映していた。昼間の強い紫外線を避け、ユニットの中に閉じこもっていた人達がぞろぞろと島の上に這い出してきた。こんなにも人がいたのかというほど多くの人が出てきた。人々は椅子や敷物、飲み物や軽食を携えていた。この日は花火大会があるとのことである。島はフラットだったので何処にいても花火を観ることが出来る。太陽が沈むと大小様々な花火が繰り返し夜空に咲いては散った。花火大会が終盤に近づいた時、島の中央の公園にセットされた大掛かりな仕掛け花火が、竜のように燃え広がり、のたうちまわり、島全体が炎にのみこまれたかのように輝いた。最後に特大の大輪の花が開いて花火大会はおしまいになった。

ホログラフィは終了していたが、カズマはリラックスして夢心地であった。

カズマが海面都市にいるような気分に浸っていると、

「ホウ、ホホーウ！　待たせたね、準備が整ったようだよ」とフーパの声がした。

フーパの言葉で、カズマは夢から覚めたような気持ちになった。

「ホーウ！　ヘルメットはもう用済みだね。それでは帰るとしようか。海水浴場の浜に近づいたら、もう一人のカズマが待っている手筈になっているからね」

エピローグ

フーパに案内されて、玄関のあるドームに通じる回廊を歩きながら、カズマが言った。
「ぼくの身代わりのカズマは、お父さんやお母さんにばれずにすんだかなぁ」
「ホーウ！　ずーと、ご両親と一緒にいたわけではないから、たぶん大丈夫だったと思うよ」
「ことによると、ぼくの他にも身代わりになっているようなアンドロイドが外にもいるんじゃないですか？」
「ホホーウ！　さあどうかな。けれども、エポカの世界のようなものの考え方をもった人達は、きっと大勢いると思うよ」
海底基地に到着した時のドームの上の部屋に来ると、マリンキャップの天井から突き出た棒の上にある椅子がカズマを待っていた。椅子に座るとエレベーターのように下がり、足が床に着くと停止した。溺れた時と同様、フーパもマリンキャップの中に飛び込んできた。
マリンキャップの天井が閉じられると、玄関の部屋に海水が流れこんできた。部屋中が海水で満たされるとドームのゲートが空き、マリンキャップが動きだした。動きだすと同時にカズマは睡魔に襲われて、眠り込んでしまった。いろんなことを見聞きしてきたので、いつ

もならば、頭のなかを見聞きした残像が夢になって駆け巡るはずなのだが、ただただ眠りこけた。

マリンキャップはカズマの眠りには頓着せず、元来た曲がりくねった長い洞穴を足早に進んでいき、淀んだような暗黒の海溝に出た。

海溝の底から勢いよく上昇を続けていくと、暫くしてかすかに光が感じられるようになり、次第に明るさが増し、やがて多くの魚が群れて泳ぐ姿が見られるようになってきた。

すると、フーパはおもむろに、カズマの背中をこつんこつんとつつきだした。

カズマがまぶたをこすりながら、寝ぼけ眼のままにうっすらと眼を開けると、

「ホウ、ホホーウ！　いよいよお別れだね」フーパが名残惜しそうに言った。

「もう着いたの、まるで深海の奥底から海面近くまで瞬間移動したみたいだな」

「ホホーウ！　そうだね、脳味噌がだいぶ疲れていたようだからすっかり寝込んでいたからね、後でまたゆっくり休むといいよ」

「うーん！　けっこう面白かったから、今度はぼくが誘拐の手引きをしてもいいよ」

「ホーウ！　ありがとう。それよりも、大人になったら見聞きしたことを、本にしてくれると有難いな」

「うん、ぼくに文才なんかあるとは思えないけど。気にとめておくよ」

「ホホーウ！　頑張ってね！　ヒロタカズマ君」

カズマは、別れ際に初めてフルネームで呼ばれたので、違和感を覚えてドキッとした。

海面に近づくと、フーパは周辺に船や遊泳する人影がないことを確認しているようであった。

しばらくすると、マリンキャップは一挙に海水面にまで浮上した。

天井が開き、最初にフーパが飛び立っていった。すると、カズマが座っていた椅子が押し上げられ、カズマの身体は天井からポーンと外に弾き出された。カズマは、一旦水しぶきと一緒に海中に潜り、再び海面の上に顔を出すと、海水浴場の砂浜が遠くに見えた。

日没寸前であった。茜色の空と黒く見える雲が織りなしていた。海岸付近の大小さまざまな建物には既にあかりが灯っている。海岸の真ん中付近に提灯のぶら下がった櫓があって太鼓の音と盆踊りの音楽が聞こえてくる。周りには黒く小さな人影が動いている。海風の涼をとりにきたような人影も見える。まだ砂浜まで百m以上あるだろう。砂浜の左隅の方で海に向かって旗を振っている人がいる。背は大きくなさそうだ。何の旗なのか色も暗くてわからない。暫くすると、その人影は旗を砂浜に真っ直ぐに立て、衣服を脱いで海に入ってきた。泳ぎ出したようだが、波しぶきは見えない。こちらに向かってきている姿が、魚が背びれを見せて一直線に泳ぐ様に似ている。速い！　五十mくらい手前で海中に潜ったようで姿が見えなくなった。暫くすると黒い影のようなものがカズマの脇をとおり過ぎ、下から何やら浮かんできた。見ると見覚えのあるカズマの海水パンツだ。するとあの黒い影がもう一人のカズマだったのか。海水パンツを取り上げ、足を延ばすと、砂浜が足裏にあった。おもむろにカズマは濡れた海水パンツにはき替え、海水をかき分け砂浜目指して歩いていった。

赤黒く見える海ふくろうがカズマを見送るように、空高く舞っている。

おわりに

「ユートピア」はトマス・モアの考えた理想郷で、「どこにも無い」という意味の造語のようです。「エポカ」はラテン語で「新紀元」を意味します。「エポカ」は「ユートピア」とは異なり、「国」ではなく未来の「世界」を想定しています。

ところで、ある人にとってのユートピアは別の人にとってはデストピア（反ユートピア）である場合があります。トマス・モアのユートピアはキリスト教の戒律厳しい社会であり、著者にとってはデストピア（奴隷、旅行の許可制、離婚禁止、全裸見合いなどがある）以外のなにものでもありません。ユートピアのつもりで造られた社会がデストピアになってしまった社会主義のような社会もあります。希望のユーロはギリシャにとって悪夢のユーロになってしまいました。

人間は種の意図に反して不良長寿に向かう道を歩んでいます。一人一人にとっては望ましいことでも人類全体にとって望ましくない事態になることもあります。この不老長寿社会はそれこそ下手をするとデストピアになる恐れさえあります。この問題に関してはエポカでも答えが見出されていません。

ユートピアとしての未来社会は全ての人にとって自由で楽しいものでなければならないで

しょう。その楽しさは人によって異なっています。したがって、エポカは単一のユートピアではなく、様々なユートピアの存在を許すような共通基盤ともいうべきフレームワークを想定しています。様々なユートピアがあり、人はそれらを自由に移動できる（何時でも参加、退出できる）ことが条件になります。このフレームとしての条件は、実質的な生存権、民主主義、選択の自由、機会均等などが保障されており、階級制・身分制、規則（法律、規制、罰則、戒律）が可能な限り少ないこと、思想や宗教の強要がないことなどではないかと思います。思想の是非ではなく社会や経済の仕組みの是非こそが最も重要であると考えています。思想や社会規範といったものは自然にこのようなフレームに見合ったものになるのだと思います。

著者は、この本で描いたような未来世界が、その姿形は少なからず異なったものになるかもしれませんが、資本主義社会が行き着くところまで行き着いたその先で、その限界を打破するものとして、必然性をもって到来すると考えています。すでに商業銀行が発行する利子貨幣をベースとした資本主義経済システムは度重なる危機にみまわれており、租税や国債を財源とする世界主要国の財政は危機的状況にあります。地球環境・資源の破壊は進む一方で歯止めのかからない状態になっています。

自然科学の驚くべき進歩とは裏腹に、経済学のメインストリームは進むべき方向を誤り、世界を混乱に陥れ、時代錯誤の学問と化しています。経済は語源からして本来、経世済民であるべきものであるにも拘わらず、現在の経済と財政のシステムは全ての人に不必要な競争

を強要し、持たざる人や社会的弱者には不幸の約束しかできなくなっています。人間的で自然な経済システムに基づく社会システムの展望が今ほど必要な時代はないと思います。

確かにリアリティのある理想的な世界の姿やそこに至るプロセスを思い描くことができたとしても、その実現は容易なことではありません。しかし、賛同する人が多ければ実現を早めることができるかもしれません。少なくとも、議論になることだけでも、その実現の第一歩になるのではないかと思います。

ところで、人間は宇宙に生命の存在しそうな星を探索し、もう少しで発見できるかもしれないところまで来ています。人間は知的生命体と自負し、宇宙の他の知的生命体との交信の試みなども行っています。しかし、現在の地球上で行われている数限りない醜い争いや愚かな行為の基になっている様々な仕組みは、知的生命体らしからぬ極めてお粗末な代物です。科学技術だけでなく、社会システムも知的生命体を自称するに相応しいものになって欲しいものです。

最後になりますが、『配当というお金』に関する著書を紹介しておきます。貨幣システムの改革や市民所得（ベーシックインカム）については近年多数の著書が出版されていますが、社会・経済のシステムとして広い視野から展開されているジェームズ・ロバートソンの邦訳本をお勧めします。

- 『未来の仕事』（勁草書房　小池和子訳　一九八八年発行）
- 『二十一世紀の経済システム展望』（日本経済評論社　一九九九年発行）

● 『新しい貨幣の創造』（ジョセフ・フーバーとの共著　日本経済評論社　二〇〇一年発行）

著者略歴

廣田和夫

昭和二十年生まれ　横浜市在住

都市計画や地理情報システムなどの仕事に従事したのち、五十五歳でサラリーマン生活に終止符を打つ。その後六十五歳までＳＯＨＯでコンサルタント業を行う。

現在はテニス三昧の生活の傍らパソコン指導などを行っている。

関連ホームページ

未来社会（ＢＬＯＧ）　http://plaza.rakuten.co.jp/epocha/

打楽人生　https://kazumamirai.wixsite.com/darakujinsei

パソコン deアート　https://miraisyakai.wixsite.com/pcart